

東京大学大学院

総合文化研究科言語情報科学専攻

平成 23 年度博士論文



ペルシャ語児の使役構文の習得
ー使用依拠アプローチの観点からー

The Acquisition of Persian Causative Constructions
- A Usage-based Approach-

指導教員 大堀壽夫 准教授

学生証番号 31-087021

ギャーイー レイラー

Ghiaee Leyla

目次

略号一覧.....	4
第1章：問題提起及び研究の概要.....	5
1.1. 問題提起、本研究の背景と目的.....	5
1.2. 本稿の構成.....	6
1.3. Farsi (現代ペルシャ語) についての予備的考察	7
1.4. 使役構文の定義.....	9
1.5. Farsi の使役構文の種類及びその考察.....	10
1.6. 他の言語の使役動詞の習得に関する主な先行研究と本研究の位置づけ	17
1.7. ペルシャ語児の動詞の習得に関する先行研究.....	23
1.7.1. Rouhbakhsh-Tayarani (1991).....	23
1.8. 使用データの紹介	25
1.8.1. 横断的発話データ	25
1.8.2. 縦断的自然発話データ	27
第2章：CHILDES(MacWhinney2000) における5人の縦断的自然発話データの考察	28
2.1. CHILDES のペルシャ語児5人の3種類の使役動詞(語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞) の出現年齢、誤用の頻度、誤用の減少年齢.....	28
2.1.1. Minu (4;1.12~4;7.21, 女児)	28
2.1.2. Faeze (2;4~3;2, 女児).....	36
2.1.3. Mahdi (2;2~3;0, 男児).....	40
2.1.4. Sharzad (1;8~1;10, 女児)	44
2.1.5. Lilia (1;11.21~2;0.23, 女児).....	45
2.2. CHILDES データの考察から見えた事実	51
第3章：ペルシャ語児98人(男児41、女児57人)の横断的発話データ	53
3.1. 2;0.12~2;9.18 児10人(男児5人、女児5人)	53
3.1.1. 2;0.12~2;9.18 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無	53
3.1.2. 2;0.12~2;9.18 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無	57
3.1.3. 2;0.12~2;9.18 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無	61
3.2. 3;0.0~3;10.2 児22人(男児9人、女児13人)	65
3.2.1. 3;0.0~3;10.2 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無	65
3.2.2. 3;0.0~3;10.2 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無	70
3.2.3. 3;0.0~3;10.2 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無	74
3.3. 4;0.0~4;10.19 児25人(男児11人、女児14人)	79
3.3.1. 4;0.0~4;10.19 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無	79
3.3.2. 4;0.0~4;10.19 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無	84
3.3.3. 4;0.0~4;10.19 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無	88
3.4. 5;0.3~5;11.6 児30人(男児14人、女児16人)	93

3.4.1. 5;0.3~5;11.6 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無	93
3.4.2. 5;0.3~5;11.6 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無	99
3.4.3. 5;0.3~5;11.6 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無	104
3.5. 6;0.2~6;11.19 児 11 人 (男児 2 人、女児 9 人)	110
3.5.1. 6;0.2~6;11.19 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無	110
3.5.2. 6;0.2~6;11.19 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無	112
3.5.3. 6;0.2~6;11.19 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無	114
3.6. まとめ.....	116
第 4 章： CHILDES のデータと横断的発話データから見える事実	118
4.1. 今井と針生(2007)	118
4.2. K. Murasugi <i>et al.</i> (2007)	120
4.3. CHILDES データと横断的発話データにおける使役動詞全般の誤用パターン	124
4.3.1. 語彙的使役動詞	124
4.3.2. 形態的使役動詞	134
4.3.3. 助動詞使役動詞	142
4.4. 考察	148
第 5 章： 発達段階ごとのストラテジー及び「使役」概念のカテゴリー化	150
5.1. 発達段階ごとのストラテジー	150
5.1.1. 描写的ジェスチャー+ <i>injuri kaerdaen</i> 'like this do =do like this'及び新規な擬態語+ <i>kaerdaen</i> 'do'	150
5.1.2. (使役構文の道具/形容詞/語彙的使役動詞の過去分詞形)+ <i>kaerdaen</i> 'do'	156
5.1.3. 使役動詞の代わりに自動詞そのままの発話	157
5.1.4. 適切な語彙的使役動詞や助動詞使役動詞の生産的な発話	159
5.1.5. 形態的使役動詞の代わりに語彙的使役動詞や助動詞使役動詞の発話	159
5.1.6. 場面に適した形態的使役動詞の発話	160
5.2. 語彙的アスペクトの定義及び動詞の獲得におけるその必要性	160
5.3. 幼児の動詞の誤用を除去する制約	166
5.3.1. Preemption (先取り)	168
5.3.2. 動詞の意味上の下位分類形成 (意味カテゴリーの形成)	169
5.3.3. Entrenchment (定着)	170
5.4. まとめ	170
第 6 章： 結論	172
参考文献	174
付録 I： 実験で使ったムービーサンプル	181
付録 II： 実験方法のサンプル	182
付録 III： 絵のサンプル	183
謝辞	184

略号一覧

本論において使われる記号及び省略文字は以下のとおりである。

acc	対格(accurative)
c	子音(consonant)
dat	与格(dative)
DO	直接目的語(direct object)
DUR	進行態(durative)
Ez	ezafe、言い換えれば、属格に相当するもの(genitival construction)
IMP	命令法(imperative)
IMPF	未完了時制(imperfective)
INF	不定詞(infinitive)
IO	間接目的語(indirect object)
nom	主格(nominative)
NOM	名詞化、名詞化変形、名詞化(形)(nominalization)
oo	斜格目的語(oblique object)
part	分詞(participle)
PAST	過去形(past form)
PL	複数(plural)
pp	前置詞句(prepositional phrase)
s	文(sentence)
SG	単数(singular)
SUB	仮定法(subjunctive)
subj	主語 (subject)
v	母音 (vowel)
PP	過去分詞形

第1章：問題提起及び研究の概要

1.1. 問題提起、本研究の背景と目的

幼児は、その母語を問わず、ある段階で使役の概念とそれを表す言語的手段を習得する。使役動詞の意味を理解するためには、使役イベントを分解し、ある特定の部分（行為）のみの類似性の有無に注目し、物体の類似性を無視しなければいけないので、物体を表す名詞的概念に比べて習得プロセスが複雑であることが予測される。したがって、母語とする言語に関係なく、「使役」の概念を理解するのは、幼児にとっては非常に困難であると言える。それにもかかわらず、就学前の幼児は、「使役」の概念を言語によって描写できるようになる。

日本語児をはじめ、使役動詞の習得に関する研究が数多く存在する一方、ペルシャ語児の動詞の習得の研究自体は殆どない状態に近く、研究の余地が多く残されている。

こうした問題を踏まえつつ、本論文では、ペルシャ語児は、言語習得が進む初期の段階で「使役」の概念を描写するときは、どのような描写方法を利用するのかについて論じ、次に幼児がある程度「使役動詞」を獲得した上で、「使役」の様態を描写するときは、どのような誤用を犯してしまうのか、そしてそのような誤用はなぜ起きるのかを考察する。幼児は、各グループの使役動詞の抽象化の低いスキーマを形成した後、本来ならば大人の言語とは全く違う動詞が発話される場合でも、自分特有の抽象度の低いスキーマを過剰一般化し、大人の言語にもない新規な動詞を発話してしまう。本研究では、ペルシャ語児の年齢ごとの使役動詞の誤用パターンについて論じ、使役動詞の獲得を使用依拠アプローチから考察していく。

Bowerman (1974) は、英語を母語とする子供が最初に習得する使役のタイプは語彙的使役であると述べている。英語児の使役に関する誤用例は、生産的使役（迂言的使役、例：*make, get* など）を習得した段階で急に増加する。この段階で、子供は直接使役を *manipulative* 又は *directive* を問わず、とにかく語彙的使役に割り当てたがっている。従って、子供は通常 *make* で表される *directive* な使役を語彙的使役によって表すという誤用が見られる。その一方で、Lin (2008) らは、TSM (Taiwan Southern Min) の場合は、形態的使役と迂言的使役の誤用が多いと述べている。TSM は分析的言語なので、使役を形態的や迂言的使役動詞によって表すことが多い。TSM の場合は、語彙的使役動詞の中に CAUSE の意味要素が存在するが、習得が非常に遅い。

これに対し、ペルシャ語の使役動詞の4つの種類¹の中、一番発話頻度が高い使役動詞は、助動詞使役動詞である。これは定着度が高いゆえに、一番最初に出現する使役動詞も、一番早く誤用が無くなる使役動詞のグループもこの種の使役動詞だと予想される。本論においては、ペルシャ語児の横断的発話データ及び縦断的発話データを観察し、子供が最初に習得する使役のタイプは言語全体の中で定着の度合いの高い助動詞使役なのかどうかを考察していく。

更に、論文の第5章においては、7歳までのペルシャ語児の使役動詞の誤用を除去する二つの仮説、つまり Pinker (1989) の意味的な動詞のクラス仮説 (Semantic Verb Class Hypothesis) と Braine & Brooks (1995) や Brooks *et al.* (1999) が提案した定着仮説 (Entrenchment Hypothesis) を考察していき、ペルシャ語児の発話データに関して、誤用を除去する適切な仮説であるかどうかを明らかにする。

本論文の最終的な目的は、幼児がその母語を問わず、「使役」の概念を獲得し、言語化していくためには、普遍文法が必要かどうかを明白にすることである。もちろん、使役の概念を獲得する

¹ 本章の1.5.でそれぞれの種類について詳しく説明する。

ためには、周りの人間（養育者）のインプットが非常に大きな役割を果たしているが、それは全てであるかと言えば、必ずしもそうではない。幼児が「使役」の概念を把握し、表現するためには、認知能力の発達が必要である。幼児は非常に早い段階から自分自身の行動に興味を示し、自分がある物体にどんな変化をさせることが出来るのかに興味深く観察する。次の段階においては、幼児は周りの人間の行動などに注目をするようになる。このような根本的な情報に基づき、幼児は周りの人間の動作を最初に非言語的にカテゴリー化していき、次に周りの大人はそのような動作をどのような動詞によって描写しているかに注目するようになる。つまり、本論文では、生成文法で言われている普遍文法の助けなしで、幼児は身体による知覚と認知能力の発達によって使役の概念を理解し、またそれを言葉によって描写できるようになるかどうかを考察していきたい。

本稿の目的は大きく分けて、次の 5 点にある。

- (I) I. ペルシャ語児の使役動詞の獲得で見られる発達段階を考察すること。
- II. 「使役」の概念が使役動詞によって発話される前の段階における描写方法の重要性を明らかにすること。
- III. ペルシャ語の 3 つの種類の使役動詞のグループでどのグループが最初に発話されるようになり、またどのグループの誤用が最初に無くなるのかを明らかにすること。
- IV. 幼児が使役の概念を描写するときは、使役の「様態」を重視するのかそれとも使役の「物体＝道具」を重視するのかを考察すること。
- V. 「使役」概念の獲得の手がかりになる意味素性の把握、及び使役動詞の誤用を無くす主な制約を明白にすること。

1.2. 本稿の構成

本稿の第 1 章においては、ファールスィー（現代ペルシャ語）の予備的考察を踏まえた上で、使役構文の定義を述べる。その次に先行研究では、ペルシャ語の使役動詞はどのようにカテゴリー化されているのかについて論じる。次に先行研究では、幼児の使役動詞の獲得はどのように扱われてきたかを述べ、それらの研究と本研究の関連について論じる。最後に、本研究で使用する 2 種類のデータ（横断的発話データ、縦断的発話データ）を紹介する。

第 2 章においては、CHILDES(MacWhinney2000) における 5 人(1;8²～4;7.21)の縦断的自然発話データの考察を行い、どの使役動詞の種類が一番最初に発話され、どの使役動詞のグループの誤用数が一番高いのかについて論じる。ペルシャ語児の発話のみではなく、養育者の発話データも同じく考察し、使役動詞の誤用パターンにおけるインプット量の影響も考察していく。最後に、2.2. においては、CHILDES データの考察から見えた事実について述べる。

次に、第 3 章においては、ペルシャ語児 98 人(男児 41 人、女児 57 人)の横断的発話データを年齢ごとに考察していく。98 人を合計 5 つのグループ、(2;0.12～2;9.19 児(10 人)、3;0.0～3;10.2 児(22 人)、4;0.0～4;10.19 児(25 人)、5;0.3～5;11.6 児(30 人)、6;0.2～6;11.19 児(11 人)) に分類し、次にそれぞれの年齢グループの 3 つの種類の使役動詞の誤用パターン及びそこから言える事実について論じる。最後に、3.6.においては、第 3 章のまとめを述べ、98 人のデータから一番多く観

² 「1;8」とは、「生後 1 歳 8 か月の幼児」という意味であり、同じく、「4;7.21」とは、「生後 4 歳 7 か月 21 日の幼児」という意味である。以下同然。

察された誤用パターンについて述べる。

第4章においては、CHILDESで観察した誤用パターンとペルシャ語児98人(男児41人、女児57人)の横断的発話データの誤用パターン等を比較し、誤用の原因について詳しく論じる。今井と針生(2007)の音象徴ブートストラッピング仮説を紹介し、この仮説とペルシャ語児の初期段階の「使役」の概念の関連について論じる。更に、「使役」動詞の主な誤用の一つのパターン、つまり大人の言語には、ある場面を描写するときは、使役動詞が使われるが、幼児は使役動詞の代わりに自動詞をそのまま発話してしまう誤用例について論じる。そこでK. Murasugi *et al.* (2007)の仮説を紹介し、日本語児は、使役動詞を獲得する上で、確実な4つの段階を経ていくことを見てから、ペルシャ語児でも日本児ほどきれいな段階が見られるかどうかについて論じる。その次に、ペルシャ語児の語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞、それぞれの誤用パターンをまとめる。

第5章においては、ペルシャ語児の発達段階ごとの戦略について論じ、一般的考察を述べる。更に、本研究を通じて分かったことをまとめ、ペルシャ語児は、使役の概念をどのように獲得していくことを明らかにしていく。最後に、ペルシャ語児のみならず世界中のどの幼児も「使役」の概念を獲得していく上で、どのような手がかりを利用し、どのように使役動詞の誤用が減少し、やがて無くなるのかについて論じる。

第6章では、本稿を通じて言える結論と今後の課題について論じる。

1.3. Farsi (現代ペルシャ語) についての予備的考察

現代ペルシャ語はインド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派に属している(Payne 1987, Windfuhr 1987)。現代ペルシャ語には様々な方言が存在するが、3つの主要な方言は、イランで話されているファールス語、アフガニスタンで話されているダリー語とタジキスタンで話されているタジク語(タージーキー)である。現代標準ペルシャ語とはイランの首都つまりテヘランの学校教育を受けた人の標準的な言語形態である。本研究は、現代ペルシャ語のテヘラン方言を中心とした考察である。

社会言語的に言えば、イランは完全なモノリンガル社会ではない。現実には、イランでは、ペルシャ語の他にも、11種類の言語が話されている。それは、アゼルバイジャン語、アッシリア現代アラム語、ギラキ語、クルド語、ジーディ語、ソグド語、ソラニー語、トルクメン語、バローチー語、マーザンダラーン語とロル語である。本論の第3章では、本研究で使用する一つのデータ、つまり実験に基づいた横断的発話データを紹介します。そこでペルシャ語児の使役動詞の誤用パターンなどについて述べるが、実験対象の幼児の親の母語まで考察していない。本来ならば、親の母語まで考察する必要があると思われるが、本研究では、親の言語をコントロールしていない。

現代標準ペルシャ語の平叙文での語順は、主語 - 目的語 - 動詞のSOV型であり、主語の実現が随意的である。その例は、以下のとおりである。

- (2) (man) mi-dæv-æm
 I DUR-run-1SG
 'I am running.'

- (3) (mā) mi-dæv-im
we DUR-run-1PL
'We are running.'
- (4) (u) mi-dæv-æd
s/he DUR-run-3SG
'S/he is running.'
- (5) (ānhā) mi-dæv-ænd
they DUR-run-3PL
'They are running.'

以下の表では、現在人称語尾が示されている。

表 1 : 主語一致 (現在形)

	単数	複数
1 人称	<i>-æm</i>	<i>-im</i>
2 人称	<i>-i</i>	<i>-id</i>
3 人称	<i>-e/-d</i>	<i>-æn(d)/-d</i>

表 2 では過去人称語尾が示されている。

表 2 : 主語一致 (過去形)

	単数	複数
1 人称	<i>-æm</i>	<i>-im</i>
2 人称	<i>-i</i>	<i>-id</i>
3 人称	<i>-∅</i>	<i>-æn(d)</i>

動詞は主語の数（単数・複数）、人称（一人称/三人称）に応じて人称変化する。名詞の性は完全に消滅しており、代名詞にも存在しない。例えば、英語の *he/she/it* は、ペルシャ語ではいずれも *u* 'he/she/it' となる。格変化は、ほぼ完全に消滅しており、代名詞にも存在しない。文法関係を表す役割は、語順と前置詞・後置詞 *rā* が果たしている。ペルシャ語には、冠詞がない。ペルシャ語の他動詞には英語と違い、真他動詞しか存在しない。英語の他動詞には真他動詞(6a)と任意項(optional argument)を持つ他動詞(6b)の 2 種類が存在する。

- (6) a. John read a book/the newspaper.
b. John read.

(6)で示したように、英語の他動詞は、任意に補語をとる。しかしながら、ペルシャ語の他動詞

の補語の選択は、強制的である。

- (7) a. æli ketāb / ruznāme xund-Ø
 Ali book/ newspaper read-3SG
 ‘Ali read a book / the newspaper’.
- b. *æli xund-Ø
 Ali read-3SG

1.4. 使役構文の定義

Shibatani(2002:17) は、使役性を「人間の概念化の基本的なカテゴリ」及び「言語普遍性と言語間に見られる差異を研究するための理想的な領域」だと見なしている。中右・西村(1998:120,121) は、使役動詞を述語動詞とする構文を使役構文と定義している。つまりある事態 (X) ともう一つの事態 (Y) との間に、(X) が原因となって(Y) が生じるといふ因果関係が成立し、その関係が動詞によって表される構文を「使役構文」と呼んでいる。

大堀(2002:108[19]) は、日本語の「管理人はドアを開けた」という文の中の「開く」「開ける」「開いている」という自動詞、他動詞と結果状態の交替について以下のような因果連鎖を示している。

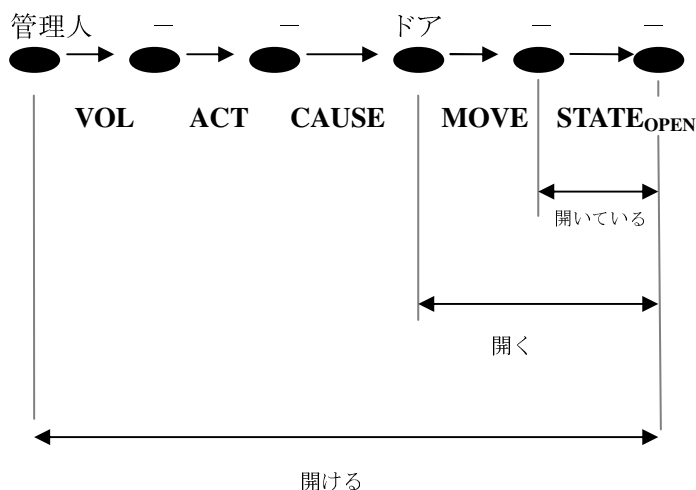


図 1：自他交替の因果連鎖

更に、大堀(2002:109[20]) は、「捜査員が管理人にドアを開けさせた」という日本語の形態的使役構文の因果連鎖を以下のように示している。

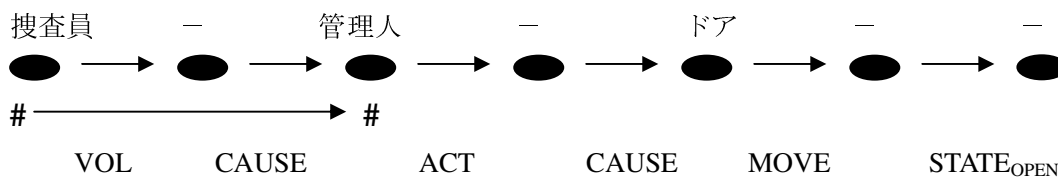


図 2：使役構文の因果連鎖

更に、大堀(2002:174) は、使役構文を「他者にコントロールを及ぼし、それによってある出来事を生じさせる」と定義している。つまり、「本を読む」「テレビを見る」といった構文は、単なる他動詞構文であり、使役構文ではない。なぜなら、「本を読む」ことによって、本に如何なる変化を生じさせないからである。つまり、意味的に、使役性と結果の意味要素が欠けていると言える。

1.5. Farsi の使役構文の種類及びその考察

ペルシャ語の使役構文は大別して 4 種類ある。

- I. 語彙的使役動詞 (Lexical Causative Verbs)
V 語根のみ(root=1) (no extra morpheme)
 - ① 同形：使役交替、プロパー
 - ② 別形：補充法
- II. 形態的使役動詞 (Morphological Causative Verbs)
V 語根＋派生接尾辞(V-root+derive)：派生
- III. 助動詞使役動詞 (Auxiliary Causative Verbs = Complex Predicate)
NP/A 語根＋V 語根（使役）(NP/A)-root+V-root)
- IV. 迂言的使役動詞 (Periphrastic Causative Verbs)

語彙的使役動詞には、意味的に使役性 (CAUSE という意味要素) が含まれているが、使役に相当する分離可能な形態素がその中に含まれていない動詞のグループを指す。語彙的使役動詞は大別して 2 種類ある。

- ① 同形 (使役交替、ゼロ使役)：例：自動詞 *šekæstæn* 'break' 対 他動詞 *šekæstæn* 'break'：
ペルシャ語のこのタイプの使役動詞は、英語のゼロ使役動詞と違い、生産的なものではない。同じ動詞もしくは動詞語幹が自動詞にも他動詞にも用いられる現象は、多くの言語に存在し、「自他交替(transitivity alternation)」と呼ばれている。「自他交替」のうちで、起動を表す自動詞と使役を表す他動詞が交替する現象は「使役起動交替(causative/inchoative alternation)」である。影山(2001:14)は「使役起動交替」を次のように定義している。「他動詞と自動詞が同じ形態 (語幹) を共有し、自動詞用法の主語が他動詞用法の目的語と同じ意味を担うことを『使役起動交替』という。」³。ペルシャ語のこのタイプの使役動詞の数は、非常に限られている。厳密に言えば、*rixten* 'pour', *boriden* 'cut', *gosæstæn* 'tear', *šekæstæn* 'break', *poxtæn* 'cook', *godāxtæn* 'melt', *bāridæn* 'rain,shed' 等といった 10 個の語彙的使役動詞しかペルシャには存在しない。
- ② 別形： *mordæn* 'die' 対 *koštæn* 'kill', *oftādæn* 'fall' 対 *ændāxtæn* 'drop', *ræftæn* 'go' 対 *ferestādæn* 'send'：日本語の「死ぬ」対「殺す」など。日本語の「見る」に対する使役動詞「見せる」は、昔、形態的に出来上がったにもかかわらず、現代日本語では生産的な使役

³ 日本語の「ドアが開いた」に対する「私はドアを開いた」も日本語の使役起動交替として考えられる。

形態素が認定されず、一種の補充法として考えても良い。

形態的使役動詞は、接尾辞 *-ān* が非使役形の現在語幹に付け加えられることによって使役形を形成する。ペルシャ語の動詞は現在語幹の構造に基づいて 2 つのグループに分けられる。一つは規則動詞であり、もう一つは不規則動詞である。規則動詞の現在語幹は、動詞の不定形から不定詞標識 *-æn* 及び過去標識 *-id* 又は *-d* が取り外されることによって形成される⁴。例えば、非使役形 *dæv-id-æn* ‘present stem+PAST+INF = run’ とその使役形 *dæv-ān-(i)d-æn* ‘present stem+ CAUSE+PAST+INF = make run’ または、非使役形 *xor-d-æn* ‘present stem+PAST+INF = eat’ とその使役形 *xor-ān-(i)d-æn* ‘present stem+ CAUSE+PAST+INF = feed’ の間に存在する関係は、規則的現在語幹から形態的使役構文が形成される過程を表している。その一方で、不規則動詞の現在語幹はこのやり方によって形成されない。つまり、不規則動詞の現在語幹はその動詞の過去語幹を基にして様々な形態的余剰規則によって形成される。例えば、*gozæšt-æn* ‘past present+INF = pass’ という非使役形及び *gozær-ān-(i)d-æn* ‘present stem+ CAUSE+PAST+INF = cause to pass’ という使役形 または、*amuxt-æn* ‘past present+INF = learn’ と *amuz-ān-(i)d-æn* ‘present stem+ CAUSE+PAST+INF = teach’ の間に存在する関係は、不規則的現在語幹から形態的使役動詞構文が形成される過程を表している。

助動詞使役は、ペルシャ語の複合動詞の一種であり、ペルシャ語の使役動詞の中で一番生産的なクラスである。ペルシャ語の全ての形容詞は助動詞 *kærdæn* ‘do, make’ と結合することによって、助動詞使役の動詞を生み出す。使役助動詞の *kærdæn* と対立する助動詞は、非使役起動相助動詞の *šodæn* ‘become’ 及び状態相助動詞の *budæn* ‘be’ である。(8) は非使役形 / 助動詞使役形の対立を示す例である。

- (8) a. *æli nārāhæt bud- Ø / šod- Ø*
Ali sad was-3SG /became-3SG
‘Ali was/became sad.’
b. *næsrin æli- rā nārāhæt kærd- Ø*
Nasrin Ali-DO sad made-3SG
‘Nasrin made Ali sad.’

更に、「形容詞 + *kærdæn*」の他に、「NP+別形語彙的使役動詞」も助動詞使役動詞の一種である。日常で使われるペルシャ語の単純動詞の数は非常に限られているが、動詞を作成する他のストラテジーがペルシャ語で非常に活発であると言える。その一つの例は、助動詞使役動詞である。この場合は、名詞句「名詞（又は前置詞 + 名詞）」を別形語彙的使役動詞に付与することによって、一種の使役動詞が出来上がる。例えば、「燃やす」をペルシャ語で表すために、*ātæš* ‘fire’ という名詞を *zædæn* ‘hit’ という動詞に付与しなければいけない。*ātæš zædæn* ‘fire hit = set on fire’ に対する

⁴ ペルシャ語の不定形は、規則動詞の場合は、「現在語幹 + 過去標識(*d/īd*) + 不定標識(*æn*)」という構造を持つ。例を挙げると、*xāb-id-æn* ‘sleep’ という辞書にも載っている不定形の中には、「現在語幹(*xāb*) + 過去標識(*id*) + 不定標識(*æn*)」が含まれている。一方、不規則動詞の不定形は、「過去語幹 + 不定標識(*æn*)」という構造を持つ。例を挙げると、*āmuxt-æn* ‘teach’ という不規則動詞には、「過去語幹(*āmuxt*) + 不定標識(*æn*)」が含まれている。*xāb-id-æn* ‘sleep’ の命令形は、*be-xāb* ‘IMP-sleep’ になるが、*āmuxt-æn* ‘teach’ の命令形は、*bi-āmuz* ‘IMP-teach’ になる。つまり、ペルシャ語の命令接頭辞は、現在語幹にしか付加できなく、不規則動詞の不定形から命令形を形成するには、最初に不定形の中に存在する過去語幹を現在語幹に変え、その後それに命令接頭辞を付加しないとけない。

自動詞は、*ātæš gereftæn* ‘receive fire = catch fire’である。このタイプの使役動詞は、ペルシャ語には非常に豊富であり、様々な概念をこのような使役動詞によって表す。「名詞(又は前置詞＋名詞)＋別形語彙的使役動詞」のいくつかの例を示すと以下のような表になる。

表 3 : 「(名詞(又は前置詞＋名詞))＋別形語彙的使役動詞」の例

非使役動詞	意味	使役動詞	意味
<i>ātæš gereftæn</i>	‘receive fire = catch fire’	<i>ātæš zædæn</i>	‘fire hit = set on fire’
<i>yād gereftæn</i>	‘memory receive = learn’	<i>yād dādæn</i>	‘memory give = teach’
<i>tæqyir yāftæn</i>	‘change find = change’	<i>tæqyir dādæn</i>	‘change give=change’
<i>gul xordæn</i>	‘deceit eat = be cheated’	<i>gul zædæn</i>	‘deciet hit = cheat’
<i>be ræqs āmædæn</i>	‘to dance come = become willing to dance’	<i>be ræqs āværdæn</i>	‘to dance bring = cause to dance’
<i>be tæ?viq oftādæn</i>	‘to delay fall = be postponed’	<i>be tæ?viq ændāxtæn</i>	‘to delay fell = postpone’
<i>obur kærðæn</i>	‘passing do = passs’	<i>obur dādæn</i>	‘passsing give= cause to pass’
<i>didæn</i>	‘see’	<i>nešān dādān</i>	‘sign give = show’

迂言的使役動詞は、二つの節から成っている。主節の中では、使役者が名詞句あるいは節のどちらかのタイプを取り、出来事のきっかけとなる。補文の中には、被使役者と埋め込まれた述語があり、結果として生まれる出来事を表す。原因と結果の事象は迂言的使役動詞によって使役を形成する構文によって因果関係を表すに至る。ペルシャ語の迂言的使役構文における補文は補文標識 *ke* ‘that’によって主節とに境界が明示される。迂言的使役動詞の例を以下で提示する。

- (9) in zæn bāes šod-Ø s[ke æli behtærin dust -æm -rā be-koš-æd],
 this woman cause became-3SG that Ali best friend-my-DO SUB.-kill-3SG
 ‘This woman caused Ali to kill my best friend.’

これらの使役戦略は習得の段階に違いが見られる。次章で示すように、ペルシャ語児にとって動詞の語幹に文法的な形態素が付加する形態的使役動詞の発話は非常に難しく、かなりの年齢にならないと、形態的使役動詞は生産的に発話されていない。助動詞使役動詞も形態的使役動詞と同じく、それ自体がレキシコンに登録されているのではなく、対応する自動詞の語根の部分に使役の意味を持つ別の軽動詞や語彙的使役動詞が付加することによって、項構造に変化がもたらされる。従って、どちらもレキシコンの操作という点では助動詞使役動詞の理解や生産も形態的使役動詞と同じく困難であると予測される。しかしながら、実際ペルシャ語児の発話データを観察してみると、助動詞使役動詞は非常に早い段階から発話され、しかも一番早くエラーが無くなることが分かる。この点は次章以降で考察する。

ペルシャ語の使役を類型論的に取り上げた研究として、Lotfi(2008)がある。Lotfi(2008) は、Song(1996) の機能的・類型論的枠組みにおける研究結果に基づく使役構文の類型論と、Talmy(1985,1988,2000) の *force-dynamic relation* (力動性)⁵の理論を利用し、ペルシャ語の使役構

⁵ Talmyが導入した概念で、それによれば人間は様々な事象を認知するにあたって、主動子(agonist)と拮抗子(antagonist)の間の力関係に基づいて力学的に構造化して捉えて言語表現化しているとされる。使役や法助動詞が典型的なケースであるが、例えば “Mary must accept this decision.” という例では、「この決定を受け入れたくない」というMaryの内在的な傾向性(agonist)があり、一方でその力に対立して「受け入れさせようとする」力(antagonist)が働いているというように分析できる。

文の種類を提示している。Song(1996) は、408ヶ国語の使役構文を分析した結果、3つの種類の使役構文を提案している。それは、「COMPACT-type」、「AND-type」と「PURP-type」である。それぞれの説明は以下のとおりである。

I .COMPACT-type : 語彙的使役と形態的使役動詞のことを指す。[V_{cause}]と[V_{effect}] は、このタイプの使役動詞において、単一の動詞で示されており、[V_{cause}]と[V_{effect}]の間には、如何なる言語要素も介入しない。日本語の形態的使役構文が、その一つの例である。

- (10) Hanako-ga Ziroo-o ik-ase-ta
 Hanako-NOM Ziroo-ACC go-CS-PST
 'Hanako made Ziroo go.' or 'Hanako let Ziroo go.'

Lotfi(2008: 3[1])

(10) において、*ik 'to go'* は、[V_{effect}]であり、*-ase* は[V_{cause}]である。この2つの要素、つまり[V_{effect}]と[V_{cause}] は、英語の語彙的使役動詞交替などによっても表される（例：die→kill）。ペルシャ語の語彙的使役動詞も英語と同様、元となる自動詞に形式的に類似しない。その例は、(11)のとおりである。

- (11) a. ārmin umæd- Ø xune
 Armin came-3SG home
 'Armin came home.'
 b. moælleṃ ārmin-o ferestād- Ø xune
 teacher Armin- DO sent-3SG home
 'The teacher sent Armin home.'

Lotfi(2008: 3[2])

Lotfi(2008) は、ペルシャ語の形態的使役動詞も COMPACT-type の一種として紹介している。その例は、(12) のとおりである。

- (12) a. mæn xænd-id-æm
 I smile-PST-1SG
 'I smiled.'
 b. unā mæn-o xænd-un-d-ænd
 they I- DO smile-CS-PST-3PL
 'They made me smile.'

Lotfi(2008: 3[3])

更に、Lotfi は、ペルシャ語の助動詞使役動詞も COMPACT-type として考えている。その例は、(13) のとおりである。

- (13) a. mā xæste šod-im
 we tired became-1PL
 'We got tired.'
- b. unā mā-ro xæste kærd-ænd
 they we-DO tired made-3PL
 'They tired us.'

Lotfi(2008: 4[4])

しかしながら、COMPACT-type とされる 3 種類の使役には重要な違いがあることを以下の章では見ていく。

II. AND-type : この種類の使役構文において、[S_{cause}]と[S_{effect}] はそれぞれ異なる節によって表される。更に、[S_{cause}]と[S_{effect}] は、常に<[S_{cause}]- [S_{effect}]>という序列で表示される。AND は、顕在的又は潜在的な conjunction の表記である。潜在的に現れる場合は、事象の時間的順序によって使役の意味が伝わる。

- (14) コートジボアールで話される Niger-Congo 語族に属する Vata 語の顕在的な AND-type の使役構文

N gba le yO-O li
 I speak CONJ child-DEF eat
 'I made the child eat.'

Lotfi(2008: 5[6])

- (15) マレクラ島北部とその周辺の島々で話されている Austronesian 語族に属する Atchin 語の潜在的な AND-type の使役構文

Mar kete ni-wat mu tsov
 3PL-PST make stone 3SG-PST fall

Lotfi(2008: 5[7])

Lotfi(2008) は、顕在的な And-type 使役構文も潜在的な AND-type 使役構文もペルシャ語には存在すると主張している。しかしながら、ペルシャ語のこのタイプの使役構文は、Song(1996)で AND-type 使役構文のプロトタイプとして紹介されている構文とは異なると述べている。なぜなら、Song(1996) は、AND-type 使役構文の[S_{cause}]の動詞が、Vata 語、Miyanmin 語（パプア・ニューギニアで話される言語）と Waskia 語（パプア・ニューギニアで話され、コワン語族に属する）等の *tell*, *order* と *make* の意味を持つ形態素でなければいけないと主張しているからである。一方、ペルシャ語の AND-type 使役構文の[S_{cause}]の動詞 は、このような限られた意味機能をもった形態素ではなく、原因的に（同時に時間的に）[S_{effect}]の直前に生じ得る全ての事象である。擬似使役構文と呼ぶべき AND-type の使役構文の例は、以下のとおりである。

(16) ペルシャ語の顕在的又は潜在的な And-type 擬似使役構文の例：

a. (mæn) goft-æm (o) (un) mæšq-āš-o nevešt- Ø
 I told-1SG and s/he homework-his/her- DO wrote-3SG
 'I made him/her do his/her homework.'

b. ārmin færyād-kešid- Ø (o) æli tærsid- Ø
 Armin shouted-3SG and Ali feared-3SG
 'Armin frightened Ali with his shout.'

c. mæhsul xoškid- Ø (o) rustāiyā gorosne mund-ænd
 crops dried-3SG and villagers hungry stayed-3PL
 'The crops died, and the village went hungry.'

Lotfi(2008: 5[8])

Lotfi(2008) は、(16a)の使役者と違い、(16b)と(16c)の使役者は非意図的な使役者であることを主張している。更に、Lotfi は、顕在的 AND-type 擬似使役構文においては、 S_1 を[S_{cause}]としてではなく、即時性を現す時間副詞節として考えられることについても論じている。つまりその意味は、‘as soon as S_1 , S_s ’となるが、 S_1 は即時性を伴う AND-type 擬似使役構文であり、即時性のみを表す構造ではないことを主張している。しかしながら、筆者は、結果的に使役の意味を持つ使役と統語的に使役のマーカータを持つ構文を、同一の枠で論じることがあまり好ましくないことを主張したい。もちろんペルシャ語にも、複文的使役動詞（迂言的使役動詞）が存在する。(9)に示したように、複文的使役動詞は並列構造ではなく補文を取る述語であり、それゆえにこの構文は二つの節から成る。更に、補文は必ず以下のような主要な特徴を持っている。

(17) a.時制を持っている節である。

b.補文の動詞が補文の主語の人称または数に影響を受ける。

c.補文が叙想法(subjunctive mood)である。

この3つの中では、a 及び b がペルシャ語の文法の一般的な特徴であるのに対して、c はペルシャ語の使役構文とそれ以外の他のいくつかの構文に限られた特徴である。このタイプはむしろ第三の PURP-type に近い。直接的あるいは間接的な操作動詞(manipulative verbs)に関する先行研究(Karttunen(1971); Givón(1973), (1975), (1980))では、複文的使役動詞が含意性という基準によって3つのタイプに分けられた。その3つのグループは以下のとおりである。

(18) a.肯定含意複文的使役動詞(positive implicative bi-clausal causative verbs)

b.否定含意複文的使役動詞(negative-implicative bi-clausal causative verbs)

c.非含意複文的使役動詞(non-implicative bi-clausal causative verbs)

肯定含意複文的使役動詞は「補文節の命題が真であることを含意する動詞」のことである(19

を参照)。その一方、否定含意複文的使役動詞は「補文節の命題が偽であることを含意する動詞」のことである(20 を参照)。更に、非含意複文的使役動詞は「補文節の命題が真又は偽のどちらも含意しない動詞」のことである(21 を参照)。

(19) John caused Mary to leave the town.

(20) John prevented Mary from leaving the town.

(21) John ordered Mary to leave the town.

含意複文的使役動詞が、肯定又は否定を問わず、成功した操作を表しているのに対して、非含意複文的使役動詞は未遂の操作を伝えるのみである。上述した 3 つのタイプをペルシャ語に応用すれば、以下のようなグループが生み出される。

(22) a. **肯定含意複文的使役動詞**

<i>bāes</i>	<i>šodæn</i>	‘cause become = cause’
<i>gozāštæn</i>		‘let’
<i>vādār</i>	<i>kardan</i>	‘make do = make’
<i>mæʔbur</i>	<i>kærdæn</i>	‘force do = force’

b. **否定含意複文的使役動詞**

<i>jelowgiri</i>	<i>kærdæn</i>	‘stop do=stop from’
<i>bāz</i>	<i>dāštæn</i>	‘open have = prevent’

c. **非含意複文的使役動詞**

<i>goftæn</i>		‘tell’
<i>xāheš</i>	<i>kærdæn</i>	‘request do = desire, ask’
<i>ejāze</i>	<i>dādæn</i>	‘permission give = allow’
<i>næsihaet</i>	<i>kærdæn</i>	‘advice do = advise’
<i>dæstur</i>	<i>dādæn</i>	‘order give = order’

Lotfi(2008) に従って、ペルシャ語の *goftæn* ‘tell’ を使役動詞の一種として考える場合は、[S_{effect}] の動詞は叙想法でないといけなし、補文標識 *ke* ‘that’ の出現は必須である。しかし(16a)はそのような構造をとっていない。つまり、(16a)の文は、あくまでも「私は、彼（彼女に）宿題を書くように言って、その結果、彼（彼女）は自分の宿題をやった。」となり、使役構文として考えるのは、好ましくない。(16a)の非含意複文的使役構文は、以下のとおりである。

- (23) S_{cause}[(mæn) goft-æm] S_{effect}[ke (un) mæšq-āš-o be-nevis-e]
I told-1SG that s/he homework- his/her- DO SUB-write-3SG
‘I told him/her to do his/her homework.’

更に、(16b)の場面を描写するためには、以下のような形態的使役構文の方が自然である。

- (24) *færyād-e ārmin æli-ro tærs-un-d- Ø*
 shout-Ez Armin Ali- DO fear- CAUSE-PST-3SG
 'Armin's shout terrified Ali.'

つまり、(16b) はあくまでも並列文にしか考えられない。更に、(16c)も非常に不自然な文であり、自然な言い方は以下のとおりである。

- (25) *Scause[xošksāli bāes šod-Ø] Seffect[ke rustāiyān gorosne be-mun-ænd]*
 drought cause became-3SG that villagers hungry SUB-stay-3PL
 'Drought caused villagers to get hungry. '

要するに、(16)の Lotfi の作例は、単なる並列文であり、AND-type の使役構文という独立したカテゴリーとしては考え難い。ペルシャ語には、AND-type の使役構文が元々存在しないと思われる。

III. PURP-type: Song(1996:49) は "The event denoted by [*S_{effect}*] is no more than a goal or purpose yet to be realised by means of the event denoted by [*S_{cause}*]" と述べている。このタイプの使役構文は、COMPACT-type と AND-type と違い、従属節構造をとって非含意的使役を表す。Song(1996) は、PURP-type の [*S_{effect}*] の動詞は叙想法、未来時制、非現実相や未完了相のどちらかの標識を持たないといけなく述べている。Lotfi(2008) は、ペルシャ語の PURP-type の使役構文の例を以下のように示している。Lotfi は、ペルシャ語の PURP-type の使役構文の [*S_{effect}*] の動詞は、常に叙想法の形を取ると述べている。

- (26) (*mæn*) *goft-æm* (*unā*) *be-r-æn*
 I told-1SG they SUB-go-3PL
 'I told them to go.'

Lotfi(2008: 7[10])

Lotfi(2008) は、ペルシャ語の PURP-type の使役構文の [*S_{cause}*] の動詞として、*goftæn*'tell' のみを紹介している。(22)で紹介した他の使役動詞を用いた構文のあるものは PURP-type と見なすことができるが、Lotfi はそのようなものとして一切述べていない。

以上見たように、Lotfi(2008)の枠組みは類型論的視点に立ったものだが、ペルシャ語の使役構文を分析するためには、本節冒頭で示した枠組みの方が適切であると考えられる。

1.6. 他の言語の使役動詞の習得に関する主な先行研究と本研究の位置づけ

1960 年代から 1970 年代には、生成文法などの大人の言語モデルが母語習得の分野に適用されて研究が進められた。しかしながら、その問題点として取り上げられるのは、子供の実際の発話はこの言語モデルには当てはまらず、子供が大人と同一の文法を用いているとする証拠が弱いこ

とである。その後の言語習得研究は、子供中心の観点に回帰する動向が生まれた。その一つが、意味関係を重視した研究 (Brown, Slobin, Schlesinger, Bloom, Braine など) である。Piaget (1952) による「基本的な統語関係は sensory-motor cognition により得られるカテゴリーと一致する」という考えに基づき、子供は、動作主、行為、物体、所有者、所有物のような因果関係を非言語的に知っていて、それを言語へ当てはめると考えられた。また一方では、1980 年代以降、GB や LFG など、大人の言語モデルが言語習得研究に再び適用されてきた。Pinker (1984) は学習可能性の問題を連続性仮説によって説明した。つまり、子供は大人と同じ文法の原理を備えており、すべての文法的規則が、生まれたときから既に子供にとって利用可能な状態になっていると仮定した。

使用依拠アプローチの観点では、語、複雑な言語表現、及び構文の習得の基本的なプロセスは同じであると考えられる。子供は世界の中の出来事を見て、それぞれの言語シンボルにはどのような伝達意図が含まれているのかを見分けることによって習得していく。子供はインプットに基づいて、ゆっくりとかつ不均等に、しかし最終的には適切な一般化を行うと考える。それは成人の母語話者と同じメカニズムであるが、より具体的で、抽象化のレベルが低い。なぜなら、子供は言語経験が豊富ではなく、抽象化の能力も十分に発達していないからである。使用依拠アプローチでは、言語構文それ自体を意味のある言語記号として考えるので、子供は項目依拠的な幼児語の構文から抽象的な成人母語話者の構文にたどり着くことができる。子供が習得の過程で使用する認知的・社会的能力は、生成文法で考えられていたものよりかなり強力である。更に、成人母語話者の文法という到達点は正に構造化された構文目録によって成り立っているため、子供にとって達成しやすい目標である。言語の生得性及び学習メカニズムに関するこのような考え方に立ち、Tomasello (1992, 2003)らの研究では、子供の言語習得は大人の言語の抽象的な文法規則をあらかじめ決められた形式として獲得するのではなく、言語使用においてある語彙項目に特化された具体的な構文を軸に項目別に進むことが示されている。言語習得には、項目ごとにケースバイケースで習得するプロセスと、広く一般に通用する規則性・抽象性を習得するプロセスの両方が必要である。Tomasello が習得研究の拠り所として求めた言語理論は、構文概念を軸にする理論、つまり使用依拠モデルや構文文法である。

本論文で主張していきたいのは、幼児が使役の概念を理解し、動詞によって使役の概念を描写するときは、均一で機械的に年齢の経過とともに発達段階を経ていくのではなく、幼児によって、また動詞によって、一つまたそれ以上の段階を経過しない場合もある。われわれ大人の目から同じ意味グループに属する動詞の場合でも、幼児にとっては全く違う概念を描写する動詞という可能性があり、全ての使役動詞が同じ発達段階を経過すると考える必然性はない。つまり、トマセロが言うように、全ての動詞が項目依拠的にボトムアップ的に獲得していき、どの使役動詞が最初に幼児の発話の中に出現してくるのかを合理的に予測することは、不可能である。

英語児や日本語児をはじめ、動詞の獲得全般の研究が数多く存在する。トルコ語児の使役動詞の習得に関する主要な研究として、Aksu-Koç & Slobin (1985)がある。Aksu-Koç & Slobin はトルコ語児の二重使役化の誤用について論じている。彼らは、トルコ語児は元々他動詞 (使役動詞) であるものに誤って使役形態素を結合することについて述べている。その例は、以下のとおりである。

(27) Adult: kim kes -ti onu?

who cut PAST it+ACC
 ‘Who cut it?’

Child (2; 3): *ben kes -tir -di -m
 I cut CAUS PAST 1SG
 Intended meaning: ‘I cut (it).’
 Literal meaning: ‘I had (someone) cut (it).’

Aksu-Koç & Slobin (1985:846)

このような二重使役化の誤用は、トルコ語児以外の幼児で報告されておらず、実に興味深い。本論文においては、ペルシャ語児の発話データの中にも、二重使役化の誤用が見られるかどうかについて論じる。この誤用に非常に似ているケースは、ペルシャ語児の場合でも見られる。本稿の第3章で示すように、ペルシャ語児の中には、語彙的使役動詞 *bæstæn* ‘close’ を二重使役化する幼児も存在する。つまり、「軽動詞 *kærdæn* ‘make’ を形容詞/名詞/動詞の過去分詞形に結合すると、使役動詞が出来上がる」というスキーマが形成すると、ペルシャ語児は *bæstæn* ‘close’ の過去分詞形 *bæste* ‘closed’ に *kærdæn* ‘make’ を結合し、大人の言語にもない使役動詞を作り出してしまふ。Aksu-Koç はトルコ語児の二重使役化の誤用の理由を、トルコ語児にとってどの動詞が形態的使役を持ち、どの動詞が生産的使役を持つかを決定することは非常に困難であるという点にもとめている。

英語の使役動詞の獲得の重要な先行研究は、Bowerman(1974)である。Bowerman (1974) の研究で明白になったのは、英語児が最初に習得する使役のタイプは、語彙的使役であるということである。本論文の第2章と第3章においては、ペルシャ語児が最初に習得する使役動詞のタイプは、英語児と同じく語彙的使役動詞なのか、それとも定着の度合の高い助動詞使役動詞なのかどうかを考察していく。

英語については、Akhtar & Tomasello (1997) もまた本論文と関連する。Akhtar & Tomasello (1997) は数回にわたって、他動詞的な行為を子供に教えた上で、子供が良く知っているキャラクターを使用し、他動詞構文が産出できるかどうかを検証している。この研究で証明されたことは、英語児は3歳半にならないと、他動詞構文の一般化が不可能である一方、自動詞構文の一般化に関しては、2歳半ごろになるともう既に可能であるということである。英語児の場合は、他動詞構文より自動詞構文の方が一般化の時期が早いので、自動詞が他動詞として発話されてしまう誤用の方がその逆より多いことは当然であると Akhtar & Tomasello は述べている。

英語児の使役動詞の誤用を除去する制約について使用依拠アプローチの観点から考察を行っているのは、Bowerman & Croft (2008) である。子供はどのようにして独自の抽象的構文に制約を与え、さらにそれがやがて言語共同体の中で慣習的な範囲に収まり、それ以上に拡張しないかという疑問に対して、Bowerman & Croft (2008) は、最初に否定証拠を提案し、否定証拠に対して、以下のような疑問点を提示している。

- (28) I. 否定証拠は広範にわたって利用可能であるか？
- II. 子供の過剰一般化の誤りを正す十分な影響力を持つか？

Ⅲ. 子供は否定証拠に敏感であるか？

Bowerman & Croft は、子供の過剰一般化が否定証拠の助けなしで（肯定証拠のみで：大人の発話者がある出来事について話す方法）、減少し、無くなるという結論を示唆している。Bowerman & Croft は、子供の項構造の過剰一般化を制限するメカニズムを言語生得説と言語学習説の両方の立場から観察している。言語生得説は、子供の抽象化に制約を与える基本戦略として普遍文法(UG)を提供している。この考え方に基づいて、生得的な普遍文法が生まれたときから子供の過剰一般化を除去する。従って、子供は否定証拠の助けなしで、つまり生得的な普遍文法の力だけで過剰一般化を除去することができることになる。一方、言語学習説は、子供がある言語を習得する際、過剰一般化をし、必要な場合、人間の一般的認知メカニズム（例えばタイプ頻度とトークン頻度がスキーマ化あるいはある言語形式の定着とその活性化強度にどのように影響するか、というメカニズム）によって、過剰一般化の過ちを取り除くと捉えている。Bowerman & Croft は、2人の英語児（Bowerman 自身の2人の娘：CとE:1歳から3歳までの縦断的発話データ（録音＋日記式質問紙）、特定の構文について12歳まで）の使役交替の過剰一般化を観察し、子供の使役交替の過剰一般化を制限するメカニズムとして2つの言語習得のモデルを試している。それは、Pinker(1989)の生得的モデルと使用依拠モデルである。結論として、CとEの使役交替の誤用の場合は、Pinkerの生得説の広域規則(Broad-Range Rules)や狭域規則(Narrow-Range Rules)も、使用依拠モデルで議論されてきた先取り(preemption)と動詞の意味の下位分類も無関係であったことが支持されている。本研究の第5章においてペルシャ語児の使役動詞の誤用を除去する制約について詳細に論じる。

使役動詞の獲得を「統語立ち上げ仮説(syntactic bootstrapping hypothesis)」によって説明しようとする重要な試みは、Bunger & Lidz(2004,2006)である。Bunger & Lidz は、統語立ち上げの概念を使用し、使役事象(causative events)について述べている。それまでの研究の中には、子供がどのように動詞を習得するのかについて数多くの研究が存在するが、子供が動詞に割り当てる意味は、どの程度精密かについて殆ど研究がなされていなかった。Bunger らは、二つの実験を通して、2歳児が動詞の意味を推測する際、その動詞が使用される統語的フレームを参照することを示した。更に、子供は、使役事象の原因の下位分類の変化に対しても結果の下位分類の変化に対しても柔軟性を示すが、新規動詞の意味を必ず使役事象として表示することが分かった。しかしながら、統語立ち上げ仮説は、英語児の場合に適切であったとしても、項の省略が可能で、語順が自由である日本語やペルシャ語の場合には適切ではないと思われる。本研究の第5章では、ジェスチャーや擬態語が語彙獲得が増大する前の段階でも見られることから、これらが一種の意味的ブートストラッピングになっているのではないかという仮説を提案する。

日本語児の他動詞の習得に関する重要な研究は、伊藤(1990)である。伊藤(1990)の観察によれば、日本語児は、他動詞を習得する際、以下のような段階を経ていくという。

(29) I. 第1段階：自動詞的表現で他動詞の意味を表す

あついからさめるんだ（さますんだ）	(3;0)
いす どいて（どけて）	(3;9)
(ブランコ) とまって（とめて）	(3;11)

II. 第2段階：使役化辞の「サセ（シ）」が付く

とまさして（とめて） (3;6)

靴をはけさせて（はかせて） (4;0)

おりさせて（おろして） (4;0)

III. 第3段階：使役化辞の「サセ」の「サ」が脱落する

僕のりんごたべして（たべさせて）あげる (3;10)

まげして（まげて） (3;11)

（ビンのふたを）あかせて（あけて） (5;4)

IV. 第4段階：正しい形を習得する

伊藤は、日本語児が他動詞的な意味で自動詞を使ってしまう用例の殆どは、*-te* という要求を表す命令形であると述べている。より一般的に言うと、使役を表す動詞は殆どが命令形の形態素を伴う。伊藤（1990）は、日本語児の形態的使役（*-sase* 使役）の13個の誤用例を示し、その13個の誤用例のうち、8個は依頼形の*-te*を伴うということを示している。本論文の第5章においては、ペルシャ語児の場合でも日本語児と同じく明確な発達段階をもった使役動詞の描写方法が見られるかどうかについて論じていきたい。

日本語児の使役動詞の習得の発達段階を明らかにするもう一つの研究は、Murasugi, Hashimoto & Kato (2003)である。Murasugi *et al.*は、日本語児の使役構文の発達の過程を以下のように示唆している。

(30) I. 「させ」なしの使役動詞

II. non-agentive causee の使役: ditransitive の一種：被使役者が agentive ではなく、goal として機能

III. agentive causee を持つ使役: 5歳以上になると agentive の被使役者を持つ使役構文が現れる

Murasugi *et al.*の研究から分かるように、日本語児の場合は、5歳以上にならないと、agentive の被使役者を持つ使役構文が描写されない。

日本語児の使役動詞の習得に関する使用基盤アプローチからの重要な先行研究は、Shirai *et al.*(2001)である。Shirai *et al.* は、Allen(1996,1998)やNomura&Shirai(1997)で示されていること、つまり北カナダで話されるエスキモー語族のイヌクティトゥット語児と日本語児は、使役動詞を習得し始めるときに、最初に発話する使役形態素が間接使役の意味をもち、常に命令形の形態素を伴う理由について詳しく述べる。Shibatani(1976) は日本語の形態的使役によって、直接的使役も間接的使役も表されると述べている。イヌクティトゥット語の場合も同様である。しかしながら、子供の初期段階の*-sase* 使役のデータを実際見てみると、形態的使役動詞は、主に assistive(補助)/permissive(許容)の意味を持つ間接的使役を表すことが分かる。そこで、なぜ日本語児は、形態的使役動詞に非常に狭い意味を割り当ててしまうのかという質問が浮かび上がる。これはClark(1987)が提案したブリエンプションによって説明される。つまり、子供は同義語を避けるので、語彙的使役動詞によって直接的使役が表されることを知っていれば、新たに習得していく形態的使役動詞に、間接的な意味のみを割り当ててしまう。更に、子供のこの制限されたマッピング

グは、インプットや非言語的文脈にも影響を受ける。Shirai *et al.* は、親の横断的データを検察し、*-sase* 使役の全てのトークンは、*assistive/permissive* であったこと、また、これはインプットの影響であることを明らかにしている。更に、非言語的文脈の影響について考えると、この年齢の子供は自分の力でいかなることもできず、常に周りの人の許可や手伝いを求めないといけないので、初期段階の*-sase* 使役の全ては、「テ」を伴うと説明している。したがって、日本語児の初期段階の*-sase* 使役は、間接的使役の意味のみを持つと指示している。更に、日本語の使役動詞の習得のために、以下のような発達段階を想定している。

(31) I. 語彙的使役動詞を習得する（他動性に関する誤用例が現れる）。

II. 間接的使役動詞（*assistive/permissive*）は、「テ」を伴う依頼文によって表される。

III. 大人の発話者同様、*-sase* 使役に直接的な意味を付与する。

日本語には、英語のようなゼロ派生（*The door opened* → *he opened the door*）が数多く存在しないし、インプットの中でも、「させ」が間接的使役のみを表すので、日本語児は、初期段階で、直接的使役の意味で「させ」を使用しない。

日本語児の初期段階の使役動詞は常に依頼の「テ」を伴う理由について論じるもう一つの研究は、鈴木(2002)である。鈴木(2002: 24) は、「何かをやってもらいたくて働きかけるのが使役の基本だから、命令形になるのが普通であろうということである。この時期は使役イコール命令で、この 2 つは未分化かもしれない。具体的には、この時期の命令の形態素そのものが使役の意味(CAUSE)を包含していると考えることができる。これを使役命令仮説と呼ぶことにしよう」と指摘している。鈴木は、使役の意味を自動詞で表現する方法を「ゼロ使役」と呼び、それは 2 歳 3 ヶ月を皮切りに頻繁に見られ、3 歳になってからは急速に頻度が減り、3 歳 6 ヶ月になると殆ど見られなくなると述べている。日本語児の場合は、3 歳半になると、「ゼロ使役」が殆ど見られなくなると鈴木が指摘しているが、本稿の第 2～4 章で示すように、ペルシャ語児は、6 歳になってからもこの種の誤用を犯していることが分かる。

上述したとおり、日本語児をはじめ、使役構文の習得段階と誤用パターン、及びそこで考えられる根拠について数多くの研究が存在する。しかしながら、ペルシャ語児の言語習得の研究は殆ど存在しない分野であり、ましてペルシャ語児の使役構文の過剰一般化を含む誤用とそれを制限するメカニズムについては、今まで研究がされておらず、研究の余地が多く存在すると考えられる。

先行研究の概観をまとめるにあたり、重要な点を指摘したい。使役動詞の習得の研究の殆どは、年齢の経過と伴う使役形態素の現れ方やそこで見られる誤用パターンについてである。日本語児の使役動詞の研究の中でも、「擬態語+する」を「使役」概念の初期段階の現れ方だと想定する本格的な研究は存在しない（鈴木(2008)など）。まして擬態語の出現の前の段階で見られる「ジェスチャー+こうする」という構文を使役構文として捉えている研究は一切存在しない。日本語児の使役動詞の習得の研究の殆どは、具体的にいつになると「サセ」という使役形態素が出現するのか、またはその後の「させ使役」のスキーマの過剰一般化パターンについてである。本論文の第一次的な目的は、使役形態素の産出年齢や誤用パターンを明らかにすることであるが、それに止まらず、使役形態素が言葉に現れる前の段階の「使役」概念の描写方法や、幼児がその母語を問

わず、「使役」の概念を獲得する上で、どのような手がかりを利用するのかを明らかにすることも考察していく。擬態語やジェスチャーへの注目は、そうした問題を解き明かすための手がかりとなる。

1.7. ペルシャ語児の動詞の習得に関する先行研究

筆者が調べた限り、ペルシャ語児の言語習得の研究の殆どは、ペルシャ語と英語のバイリンガルの子供の研究で、両親がペルシャ語母語話者の家庭で、子供は社会で英語を習得する段階で、どのような過剰一般化のパターンを示すか等といった研究である。ペルシャ語児の母語習得に関する唯一の本格的な研究は、ペルシャ語で書かれている Rouhbakhsh-Tayarani(1991)の研究である。以下においては、Rouhbakhsh-Tayarani(1991)の簡単な概要のみを記載しておく。

1.7.1. Rouhbakhsh-Tayarani (1991)

Rouhbakhsh-Tayarani(1991) は、3歳のペルシャ語児2人と4歳のペルシャ語児2人の自宅と幼稚園の生活の中での総発話数 300 発話を書き起こし、その中で特に2つの動詞 *duxtaen* ‘sew’ と *suxtaen* ‘burn’ の過去形を検討したところ、ペルシャ語児も英語児と同様、過去形の過剰一般化を起こしていることが分かった。上述した2つの動詞の過剰一般化の例は、以下の表のとおりである。

表4：3歳児2人と4歳児2人の *duxtaen* “sew” と *suxtaen* “burn” の過去形の誤用パターン

名前	年齢	1ヶ月間で <i>suxtaen</i> “burn” の過去形の誤用が起こされた回数	1ヶ月間で <i>duxtaen</i> “sew” の過去形の誤用が起こされた回数
Maryam	3	* <i>suzid-æm</i> , 4回	* <i>duxid- Ø</i> , * <i>duxid-e</i> , 5回
Reza	3	* <i>suxid-e</i> , 3回	* <i>duzid- Ø</i> , 1回
Mona	4	* <i>suzid-e</i> , 2回	* <i>duzid-e</i> , 3回
Mohsen	4	* <i>suxid-æm</i> , 2回	-

Rouhbakhsh-Tayarani(1991:139)

Rouhbakhsh-Tayarani(1991) は、子供が決して上述した誤用の動詞を周りの人から聞いておらず、全てを自分特有の規則によって作っていると述べている。これは、子供はある特別な動詞のスキーマを別の動詞の過去形にも拡張して当てはめてしまうものと考えられる。

更に、Rouhbakhsh-Tayarani(1991:155) は、ペルシャ語児10人のデータに基づいて、動詞の活用の出現順序を以下のように示しているが、特に使役について注目すべき議論はない。

- I. 不完全な命令形：Rouhbakhsh-Tayarani(1991:155) は、ペルシャ語の動詞の語根に一番近い動詞は、命令形であるので、最初に子供が自分の意図を表すために、様々な場面において、命令形を使ってしまうと述べている。しかしながら、これは他の言語の幼児のケースとまったく同じ傾向で、大人が子供に対し、常に命令形を使っていることにも由来していると思われる。不完全な命令の例として、Rouhbakhsh-Tayarani は、次

のような発話を示している。

- (32) Amir(2 歳児) : *māmā æmi xor
mom mamma(baby talk for food) eat

この場合、「マンマを食べさせてくれ」とお母さんをお願いする代わりに、「マンマ食べて」と発話してしまう。ペルシャ語の命令形は、動詞の語根の前に *b* という接頭辞を付与することによって、出来上がる。つまり、「食べなさい」という命令形は、ペルシャ語で、*boxor*⁶となる。しかしながら、ペルシャ語児は、*boxor* の代わりに、語根のみを発話してしまう。

- II. 完全な命令形：命令形の完全な形が発話できるようになる。しかしながら、Rouhbakhsh-Tayarani は、完全な命令形の出現年齢について述べていない。
- III. 単純現在形の出現：Rouhbakhsh-Tayarani(1991:158) は、子供が僅かな動詞の単純現在形それも単数 1 人称と単数 3 人称しか発話できないと示唆している。
- IV. 単純過去形の出現：子供が最初に発話できるようになる単純過去形の動詞は、単数 3 人称である。Rouhbakhsh-Tayarani(1991:160) は、単純現在形の発話頻度の方が単純過去形の発話頻度を遥かに上回っていると述べている。Rouhbakhsh-Tayarani は、3 歳ペルシャ語児 5 人の 200 発話の中の動詞の 75 パーセントは単純現在形であったという。単純過去のスキーマを形成し始めてから、ペルシャ語児の単純現在形の動詞のエラーが増加する。
- V. 仮定法現在形：仮定法現在形は、大人の発話では、驚き、願望、疑いや条件などを表すのに対して、3~4 歳児の接続法現在形には、これらの意味が含意されていない。しかしながら、4 歳を超えると、上述した意味要素も動詞の中には含まれるようになる。その例は、以下のとおりである。

- (33) Elham(5 歳児) māmān mi-ge- Ø æge šæb ziyād toxme bo-xor-im
Mom DUR-say-3SG if night too much seed SUB-eat-3PL
deldærd mi-gir-im
stomachache IMPF-get-3PL
"Mom says if we eat too much seed at night, we will get stomachache."

- VI. 過去進行形、未完了過去形の出現：Rouhbakhsh-Tayarani は、3 歳ペルシャ語児 3 人が進行過去や過去完了の動詞が要求された場合、単純過去を発話してしまったと述べている。年齢が上がるにつれ、これらの動詞も子供の発話の中には出現するようになる。

⁶ 命令形の接頭辞の後に来る動詞の現在語幹の母音によって、以下のような母音交替が生じる。動詞の現在語幹の中には、「e,u,i,æ」が存在する場合は、「b」に「e」が付与するが、語根の母音が「o」の場合は、「bo」となり、「ā」の場合は、「i」となる。そのいくつかの例は、以下のとおりになる。
be-keš"hit", be-šur"wash", be-riz"pour,drop", be-zæn"hit"
bo-xor"eat", bo-koš"kill", bo-do"run", bo-ro"go away"
bi-ā"come", bi-ār"bring"

1.8.使用データの紹介

1.8.1.横断的発話データ

本研究のパイロット段階では、ペルシャ語児の使役動詞の誤用パターンを把握するために、The International Picture Naming Project⁷に存在する様々な使役行為の絵をもとに自分で画像を足して在日ペルシャ語児5人で試してみた⁸(白黒の画像は、The International Picture Naming Project から、それ以外はインターネット上の画像から)。しかしながら、殆どの絵では、使役の行為が行われた後の結果の状態しか反映されず、子供に「この人は被使役者（被使役物）に何をしたか（何をしているか?）」と尋ねても、自動詞構文しか発話してくれなかった。使役構文を子供たちに言うってもらうためには、最初は使役行為が行われる前の被使役者（被使役物）の状態の絵を子供たちに見せ、次に、使役行為が行われた結果、被使役者（被使役物）がどのように変化してきたかという絵を子供たちに見せる必要がある。しかしながら、実験で使った絵の全てが、使役行為の結果、出来上がった状態のみを示していた。更に、7歳以下の子供は、その母語を問わず、集中力が持続せず、子供の注意を長時間にわたり絵の方にひきつけることは非常に困難であることが分かった。実験で使った絵の一つの例は以下の図3のとおりである。

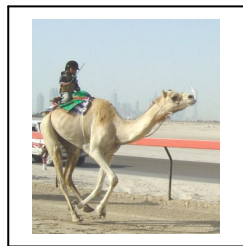


図3 : *dævāndæn* 'make run'

例を挙げると、「この人がラクダに何している?」をペルシャ語児5人に訊いたところ、全員、「ラクダが走っている」と答えた。さらに、「ドアを開ける」のカードを幼児に見せ、「この人は、ドアに何している?」と訊いたとき、「ドアが開いている」というふうに返事した。このように、ペルシャ語児5人によるパイロットでは、使役動詞が発話可能かどうか確認するために、絵の実験は、効果的ではなかったので、実験方法を変え、画像の代わりに動画（ムービー）を作成し、使役動詞全体の誤用のパターンを明らかにする実験を行った。ムービーは画像と比べ、使役行為が行われる前の被使役者（被使役物）の状態が動画の最初の方に写っており、使役行為が行われた結果、被使役者（被使役物）の状態も変わってくることを数秒の間で子供たちに見せることが出来るので、動画を実験道具として利用することにした。同時に、動画には子供の注意が持続するというメリットもある。

大人のペルシャ語の語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞（合計で29個の動作）の表す行為が含まれる動画を作成し、一ヶ月間にわたって実験を行った⁹。動詞の選択は、子供も理解しやすいという基準によった。実験では、ムービーがコンピュータのスクリーン上にランダムに表示された。作成した動画を男児41人、女児57人（2;0.12~6;11.19）に見せ、ペルシャ語の

⁷ <http://crl.ucsd.edu/experiments/ipnp/>を参照。

⁸ 「付録Ⅲ」を参照。

⁹ 迂言的使役動詞については今回の実験では扱っていない。これは、ペルシャ語の迂言的使役動詞が会話の中であまり使われていないため、動画にするのは、適切ではないと思われるからである。

使役動詞の習得発達を分析した。子供を実験の方法に慣れさせるために、最初の 4 つの動画では、予備実験として場面に対応する動詞のすべてを自動詞及び使役の意味を伴わない他動詞に設定し、その後の 29 個の動詞を使役動詞にした。更に、その動画に出演する 2 人の女兒の名前を子供たちに覚えさせ、その後に「Tolu ちゃんが Taravat ちゃんに何をしたか」と尋ね、使役動詞が言えるかどうかを調査した。

実際、被験者の子供たちにどのように質問すれば、一番多く使役動詞を発話してもらうのかを予測するのは、かなり困難であった。なぜかという、例えば、「どうなったか（どうなりましたか）？」と幼児らに尋ねると、殆どの場合は、使役動詞ではなく、自動詞構文あるいは使役の意味を持たない普通の他動詞構文が発話されてしまうからである。例を挙げると、「お母さんは小さい子供に靴を履かせた」という動画をペルシャ語児に見せ、「どうなりましたか？」と尋ねると、「靴を履いた」と幼児らは発話してしまう。しかしながら、この場合は、実際、子供たちが使役動詞をまだ完全に獲得していないことにならず、あくまでも「どうなりましたか？」の自然な回答は、使役構文ではなく、使役の意味を持たない普通の他動詞構文であることに由来する。7 歳以下の幼児のみならず、大人の発話者にも、同じ動画を見せ、「どうなりましたか？」と尋ねると、全く同じ結果になるかもしれない。

動画で使った最初の予備実験用の 4 つの場面は「音楽を聴く、歌を歌う、ボールで遊ぶ、テレビを見る」といった自動詞及び使役の意味を持たない普通の他動詞であった。本実験で使った動画の中で行われている動作に対応する使役動詞は以下のとおりである。子どもの産出語は録画され、その後書き起こされた。

表 5：実験で使った 29 個の使役動詞

使役動詞	意味	使役動詞	意味
<i>ændāxtæn</i>	‘drop’	<i>pāre kærden</i>	‘ragged do = tear’
<i>bæstæn</i>	‘close’	<i>pært kærden</i>	‘thrown down make = throw’
<i>bāz kærden</i>	‘open do = open’	<i>pušāndæn</i>	‘foot do = to put on or wear (on the feet), dress’
<i>bidār kærden</i>	‘awake make = awaken’	<i>pust kændæn</i>	‘skin peel = peel, pare’
<i>bolænd kærden</i>	‘high make = to lift, raise’	<i>rixten</i>	‘to pour’
<i>boridæn</i>	‘cut, slice’	<i>šekāndæn</i>	‘break’
<i>čærxāndæn</i>	‘turn’	<i>šekæstæn</i>	‘break’
<i>čæsbāndæn</i>	‘to stick, to paste up’	<i>šut kærden</i>	‘shoot do = shoot, to kick a ball’
<i>dærāværdæn</i>	‘clothes take off = take off one’s clothes’	<i>tæmiz kærden</i>	‘clean make = to clean’
<i>fut kærden</i>	‘puff do = to blow out’	<i>terekāndæn</i>	‘cause to burst, explode’
<i>hol dādæn</i>	‘push give = to push’	<i>xābāndæn</i>	‘put to sleep’
<i>kešidæn</i>	‘pull’	<i>xāmuš kærden</i>	‘silent, off make = blow out, extinguish’
<i>kubidæn</i>	‘to knock, hammer’	<i>xændāndæn</i>	‘make laugh’
<i>nešān dādæn</i>	‘sign give = show’	<i>xorāndæn</i>	‘feed’
		<i>xord kærden</i>	‘small make = chop, cut’

最初は、*tærsāndæn* ‘scare’や *geryāndæn* ‘make somebody cry’等といった使役者が被使役者の心理状態に間接的に力を及ぼし、変化をもたらせるというような使役動詞も動画に入れたが、7 歳以下の子供は、元々それほど複雑な事態をあまり理解しておらず、子供の発話には、そのような使役動詞が出現してこなかった。従って、実験対象からこれらの動詞を外した。これらの使役動詞が

使用しなかったもう一つの理由は、元々被使役者の心理状態に力を及ぼし、変化させるのを動画にするのは、非常に困難なことだからである。

以上の 29 個の動詞の中には、語彙的使役動詞が 11 個、形態的使役動詞が 8 個と助動詞使役動詞が 10 個存在する。

1.8.2. 縦断的自然発話データ

CHILDES(MacWhinney, 2000)のデータベースの中にはペルシャ語を母語とする子供 5 人 (1;8~4;7.21) のデータが存在する。CHILDES のペルシャ語児のデータは限られた年齢のデータであるし、データの量も非常に少ないので、使役動詞の習得の発達を分析するには必ずしも適切なデータではないと考えられる。しかしながら、実際ペルシャ語児の縦断的発話データは、著者が調べた限りでは、CHILDES しか存在しない。CHILDES のデータの長所は、幼児のみではなく、養育者の発話もデータの中には存在することである。したがって、誤用パターンを考察する上で、インプット量の影響も観察できる。

実際、CHILDES のデータの中で、主に考察していく動詞は、実験でも使用した動詞である。つまり、29 個の使役動詞の出現の年齢、過剰一般化のパターン、どのタイプの使役動詞の過剰一般化数が一番多いのか、過剰一般化の減少年齢とそこで考えられる減少の理由となるメカニズムなどについて考察していく。

第2章：CHILDES(MacWhinney2000)における5人の縦断的自然発話データの考察

CHILDES におけるペルシャ語児 5 人のデータの量は、CHILDES における他の言語の幼児の発話量に比べ、非常に貧しく、調査期間が非常に限られている幼児もいるし、そうではない幼児もいて、データの分布には、非常に大きな差が見られる。しかしながら、ペルシャ語児の縦断的自然発話データは他に存在しない。本章は限られたデータに基づくものではあるが、全体的な傾向を推測するために利用する。CHILDES のペルシャ語児のデータに存在する子供の名と年齢は、それぞれ以下のとおりである。

表 6：CHILDES におけるペルシャ語児 5 人の名前及び年齢

Shahzad (1;8~1;10, 女児)	Lilia (1;11.21 ¹⁰ ~2;0.23, 女児)	Mahdi (2;2~3;0, 男児)	Faeze (2;4~3;2, 女児)	Minu (4;1.12~4;7.21, 女児)
------------------------	---	---------------------	---------------------	--------------------------

本節において、縦断的データから使役動詞の発達順序や過剰一般化の出現について議論する。

2.1. CHILDES のペルシャ語児 5 人の 3 種類の使役動詞(語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞)の出現年齢、誤用の頻度、誤用の減少年齢

本節においては、CHILDES のペルシャ語児のデータの中、特に筆者が実験で使用した 29 個の使役動詞の発達順序等を考察していく。最初に、一番データ量が多かった Minu のデータから始める。

2.1.1. Minu (4;1.12~4;7.21, 女児)

Minu の年齢からすると、もう既に 3 つの使役動詞を発話できるようになっていると思われる。筆者が実験で使用した使役動詞と同一の動詞の発話頻度や誤用例は、以下のとおりである。

表 7：Minu 及びどの養育者のそれぞれの使役動詞の発話数及び誤用の割合

使役動詞	事象 タイプ	発話頻度 (Minu)	発話頻度 (養育者)	誤用の割合
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw' 過去語根: <i>ændāxt</i> 現在語根: <i>ændāz</i> [lex1]	外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞	11 type/token: 7/11	19 type/token: 15/19	1 / 11 = 9.09% Minu55(4;7.21), MLU: 2.211 ¹¹ * <i>dæst-æm-o dærd mi-ndāz-e</i> ¹² hand-my-DO pain IMPF-throw-3SG (instead of: <i>dæst-æm-o dærd</i> hand-my-DO pain <i>mi-ār</i> ^{13-e}) IMPF-bring-3SG) 'It causes pain in my hand.'

¹⁰ 「1;11.21」とは、「1 歳 11 か月 21 日」という意味である。以下同様。

¹¹ MLU 値 (Mean Length of Utterance) とは、対象児の平均発話長を表示する値である。

¹² ペルシャ語では、「何かを落とす」という意味で *ændāxtæn* が使われる他、「NP+別形語彙的使役動詞」という助動詞使役動でも使われる。例を挙げると、*be fekr ændāxtæn* 'to think throw = make sb think about sth'、*be vāhšæt ændāxtæn* 'to fear throw = frighten, scare'、*be dærdæstær ændāxtæn* 'to problem throw = annoy, bother 等といった心理的運動を引き起こす使役動詞が存在する。従って、この子供の場合は、**be dærd ændāxtæn* を *be dærd āværdæn* 'to pain bring = to give pain to, hurt' の代わりに使用してしまったと思われる。

¹³ *ār* は、*āværdæn* 'bring' の現在語根である。

<i>bæstæn</i> 'close' 過去語根 : bæst 現在語根 : bænd [lex2]	外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞	5 type/token: 4/5	12 type/token: 8/12	1/5 = 20% Minu49(4;6.17), MLU:4.469 *dær-o <u>bæste</u> <u>mi-kærd-Ø</u> door-DO closed IMPF-did-3SG (instead of: dær-o bæst- Ø) door-DO closed-3SG 'S/he closed the door.'
<i>bāz kærðæn</i> 'open do = open' 過去語根 : bāz kærð 現在語根 : bāz kon [aux1]	外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞	3 type/token: 3/3	46 type/token: 8/46	0
<i>bidār kærðæn</i> 'awake make = awaken' 過去語根 : bidār kærð 現在語根 : bidār kon [aux2]	外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞	0 0	4 type/token:2/4	× ¹⁴
<i>bolænd kærðæn</i> 'high make = to lift' 過去語根 : bolænd kærð 現在語根 : bolænd kon [aux3]	同上	1 type/token:1/1	1 type/token:1/1	0
<i>boridæn</i> 'cut, slice' 過去語根 : borid 現在語根 : bor [lex3]	同上	0 0	2 type/token:2/2	×
<i>čærxāndæn</i> 'turn' 過去語根 : čærxānd ¹⁵ 現在語根 : čærxun [morph1]	同上	1 type/token: 1/1	0 0	0
<i>čæsbāndæn</i> 'to stick, to paste up' 過去語根 : čæsbānd ¹⁶ 現在語根 : čæsbun [morph2]	同上	12 type/token: 8/12	11 type/token:7/11	2/12 = 16.66% Minu13(4;2.25), MLU:3.460 i: *māmān bebin-Ø <u>čæsbund-e</u> Mom look-3SG glue-CAUS-3SG (instead of: māmān bebin-Ø čæspid-e) Mom look-3SG stick-3SG 'Look Mom! It has stuck.' ----- Minu15(4;3.5), MLU:3.003 ii: *mi-xām ye jādu IMPF-want-1SG one magic konæm ke be dær o divār do-1SG that to door and wall toxmemorqšānsi <u>čæsbund-e</u> <u>bashe</u> surprise egg glue-CAUS-3SG is (instead of: mi-xām ye jādu MPF-want-1SG one magic konæm ke be dær o divār do-1SG that to door and wall toxmemorqšānsi čæsb-id-e be-she) surprise egg stick-PAST-PP SUB-become I want to make a miracle, so that the wall gets full of surprise eggs.'
<i>dærāværdæn</i> 'clothes take off = take off one's clothes' 過去語根 : dærāværd ¹⁷ 現在語根 : dærār [lex4]	同上	1 type/token : 1/1	4 type/token:2/4	0

¹⁴ ×の意味は、元々子供によってこの動詞が発話されていないので、誤用がなかったのは当然であるという意味である。これに対して、「0」は、その動詞が幼児によって発話されたが、誤用されなかったという意味である。以下同様。

¹⁵ 口語では、čærxund となる。

¹⁶ 口語では、čæsbund となる。

¹⁷ 口語では、dærāvord となる。

<i>fut kærðæn</i> 'puff do = to blow out' 過去語根 : fut kærð 現在語根 : fut kon [aux4]	同上	0	1	×
		0	type/token:1/1	
<i>hol dāðæn</i> 'push give = to push' 過去語根 : hol dād 現在語根 : hol de [aux5]	同上	4	0	2/4= 50% Minu03(4;1.17), MLU:2.608 i: *hol-æm push-me (instead of: hol-æm bed-e) push-me give-2SG 'Push me.' 動詞は不完全である。 ----- Minu03(4;1.17), MLU:2.608 ii: * hol-hol- æm push-push-me (instead of: hol-æm bed-e) push-me give-2SG 動詞は不完全である。
		type/token:3/4	0	
<i>kešidæn</i> 'pull' 過去語根 : kešid 現在語根 : keš [lex5]	同上	1	4	0
		type/token:1/1	type/token:2/4	
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' 過去語根 : kubid 現在語根 : kub [lex6]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>nešān dādæn</i> 'sign give = show' 過去語根 : nešān dād 現在語根 : nešān de [aux6]	同上	12	14	0
		type/token:9/12	type/token:8/14	
<i>pāre kærðæn</i> 'piece make= to tear' 過去語根 : pāre kærð 現在語根 : pāre kon [aux7]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>pært kærðæn</i> 'thrown down make = to throw' 過去語根 : pært kærð 現在語根 : pært kon [aux8]	同上	2	3	0
		type/token:2/2	type/token:2/3	
<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' 過去語根 : pušānd ¹⁸ 現在語根 : puš [morph3]	同上	0 ¹⁹	0	×
		0	0	
<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare' 過去語根 : pust kænd 現在語根 : pust kæn [aux9]	同上	0	1	×
		0	type/token:1/1	
<i>rixtæn</i> 'to pour' 過去語根 : rixt 現在語根 : riz [lex7]	同上	23	35	0
		type/token:10/23	type/token:13/35	
<i>šekāndæn</i> 'break' 過去語根 : šekānd ²⁰ 現在語根 : šekæn ²¹ [morph4]	同上	0	0	×
		0	0	

¹⁸ 口語では、*pušund* となる。

¹⁹ Minu のデータの中では、「着せる」という意味で、*tæn kærðæn* 'body do = to put on' が使われている。従って、*pušāndæn* という使役動詞は、幼児語で多く使われていないことが言える。その代わりに、服の場合は、*tæn kærðæn* 'body do = to put on' が使われており、靴や靴下の場合は、*pā kærðæn* 'foot do = to wear or put on' が使われていると考えられる。その例は、以下のとおりである。

Minu: qæbl æz inke to bi-yā-yi be bābā dād-æm ke in lebæs-o tæn-eš kon-e
before from that you IMPF-come-2SG to dad give-PAST-1SG that this clothing-DO body-his/her do-3SG
'I gave this clothes to dad to dress him/her up before you came.'

²⁰ 口語では、*šekund* となる。

²¹ 口語では、*šekun* となる。

<i>šekæstæn</i> 'break' 過去語根: šekæst 現在語根: šekæn ²² [lex8]	同上	0 0	0 0	×
<i>šut kærðæn</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball' 過去語根: šut kærð 現在語根: šut kon [aux10]	同上	0 0	0 0	×
<i>tæmiz kærðæn</i> 'clean make = to clean' 過去語根: tæmiz kærð 現在語根: tæmiz kon [aux11]	同上	2 type/token:2/2	6 type/token:4/6	0
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode' 過去語根: terekānd ²³ 現在語根: terekān [morph5]	同上	1 type/token:1/1	5 type/token:5/5	0
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep' 過去語根: xābānd ²⁴ 現在語根: xābān [morph6]	同上	0 ²⁵ 0	0 0	×
<i>xāmuš kærðæn</i> 'silent, off make = blow out, extinguish' 過去語根: xāmuš kærð 現在語根: xāmuš kon [aux12]	同上	2 type/token:2/2	22 type/token:11/22	0
<i>xændāndæn</i> 'make laugh' 過去語根: xændānd ²⁶ 現在語根: xændān [morph7]	同上	1 type/token:1/1	0 0	1/1= 100% Minu51(4;7.17), MLU:3.988 *væli mæn dæhæn-e un-o but I mouth-Ez s/he-DO xændun mi-kon-æm smiling IMPF-do-1SG *'I'll make his/her mouth smile.' (instead of: væli mæn un-o but I s/he-DO mi-xænd-un-æm IMPF-laugh-CAUSE-1SG 'But I will make him/her laugh.'
<i>xorāndæn</i> 'feed' 過去語根: xorānd ²⁷ 現在語根: xorān [morph8]	同上	0 ²⁸ 0	0 0	×
<i>xord kærðæn</i> 'small make = chop, cut' 過去語根: xord kærð ²⁹ 現在語根: xord kon [aux13]	同上	6 type/token:3/6	2 type/token:2/2	0

²² 口語では、*šekun* となる。

²³ 口語では、*terekund* となる。

²⁴ 口語では、*xābund* となる。

²⁵ Minu は、*xābāndæn* 'put to sleep' の代わりに、**xāb kærðæn* 'sleep do' という大人の母語話者の言語に存在しない助動詞使役動詞を発話している。その例は、以下のとおりである。

Minu: *bābā mæn mi-xā-m ke mæn-o xāb kon-i
daddy I DUR-want-1SG that I-DO sleep make-2SG
'Daddy, I want to make me asleep.'

²⁶ 口語では、*xændund* となる。

²⁷ 口語では、*xorund* となる。

²⁸ Minu は、*xorāndæn* 'feed' という形態的使役動詞の代わりに頻繁に *qæzā dādæn* 'food give= feed' という助動詞使役動詞（「NP+別形語彙的使役動詞」）を使っている。幼児語だけではなく、大人の自然発話データの中にも *xorāndæn* 'feed' という形態的使役動詞の使用頻度が非常に少なく、現代語では、「あまり望ましくない飲み物や毒や薬を被使役者に無理やり食べさせる」という場面でしか使われていないと考えられる。

²⁹ 口語では、*xurd kærðæn* となる。

2.1.1.1. Minu データの考察

Minuの3つの種類の使役動詞のトークン数の図を示すと、図4のようになる³⁰。

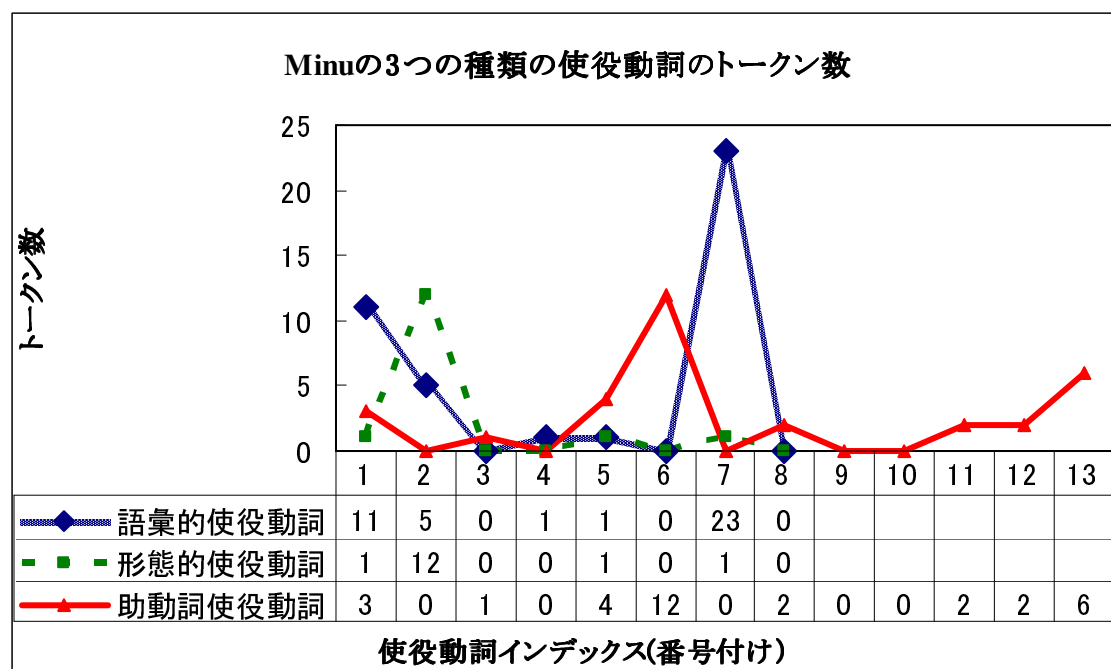


図4：Minuの3つの種類の使役動詞のトークン

表7のデータを考察してみると、3つの種類の使役動詞の中で、明白な誤用が一つもないのは、助動詞使役動詞の種類であることが分かる（誤用認定した*hol dādæn* ‘push’は不完全な発話の例）。このタイプの使役動詞は、他の使役動詞の種類より使用頻度も多く、獲得の早い段階から幼児の発話には現れているので、それなりにエラーも少なくなる。更に、他の種類の使役動詞の中でも、一番多い過剰一般化のパターンというと、大人の自然発話者の言語では、他の種類の使役動詞が使われているにもかかわらず、子供の場合は、助動詞使役動詞のスキーマが過剰一般化され、発話されてしまうタイプである。大人の観点から見ると、「閉める」を意味する語彙的使役動詞*bæstæn* ‘close’の方が「動詞分詞形+*kærdæn*」の獲得より簡単かと思われる。しかし実際は、ペルシャ語児は2歳を越えると、助動詞使役動詞のスキーマが定着した後に、この形を持たない語彙的使役動詞についても、スキーマを拡張して使用しているのだと考えられる。子供は習得初期には、大人が使っているのを聞いて習得した具体的な言語表現を発話するので、それほど多くの誤りを犯さないが、発達していくにつれ、学習中の言語にはないパターン、例えば、ペルシャ語児の場合は、助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、大人の文法には存在しない**bæst-e kærd*を使う間違いを起こしてしまう。表7にはないが、Minuの発話中には、次のような類例が見られる。(33)において子供は、*be-kæn-æm* ‘SUB-pull off-1SG’の代わりに*kænd-e* ‘pull off-PP’という動詞の過去分詞形を*kærdæn*に付与している。

³⁰使役動詞のインデックスとして表示する番号は、それぞれ以下の使役動詞を意味する。以下同様。

①語彙的使役動詞のそれぞれの番号は、以下の動詞を意味する。

1: *ændāxtæn* 2: *bæstæn* 3: *boridæn* 4: *dærværdæn* 5: *kešidæn* 6: *kubidæn* 7: *rixtæn* 8: *šekæstæn*

②形態的使役動詞のそれぞれの番号は、以下の動詞を意味する。

1: *čærxāndæn* 2: *čæspāndæn* 3: *pušāndæn* 4: *šekāndæn* 5: *terekāndæn* 6: *xābāndæn* 7: *xændāndæn* 8: *xorāndæn*

③助動詞使役動詞のそれぞれの番号は、以下の動詞を意味する。

1: *bāz kærdæn* 2: *bidār kærdæn* 3: *bolænd kærdæn* 4: *fut kærdæn* 5: *hol dādæn* 6: *nešān dādæn* 7: *pāre kærdæn*
8: *pært kærdæn* 9: *pust kærdæn* 10: *šut kærdæn* 11: *tæmiz kærdæn* 12: *xāmuš kærdæn* 13: *xord kærdæn*

(34) Minu(4;3, 女兒)

CHI: *kænd-æš³¹ kon-æm?
pull off -it do-subj

更に、もう1つの誤用の例もMinuデータの中では見られる。それは、形態的使役動詞のスキーマが定着した後に、本来ならば自動詞が使われるはずのところで、形態的使役動詞が使われてしまうケースである。*čæsbāndæn* ‘to stick, to paste up’の場合が、そうである。Minuの場合は、自動詞の代わりに使役動詞を使ってしまうエラーが存在しているが、その逆のエラー、つまり、本来ならば使役動詞が必要とされる場合に自動詞が使われてしまうというようなエラーが存在しなかった。Minuの年齢からすると、もう既に動詞の島段階(Tomasello, 1992)が終わり、スキーマ化が進む頃になり、スキーマを本来ならば当てはまらない語にも拡張して当てはめるケースが見られるようになると推測される。実際、データを考察してみても、CHILDESの他の4人の幼児と比べ、Minuの使役動詞のエラー数がかかなり高いことが分かる。Minuの3つの種類の使役動詞（語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞）の誤用の割合のグラフは、以下のとおりである。

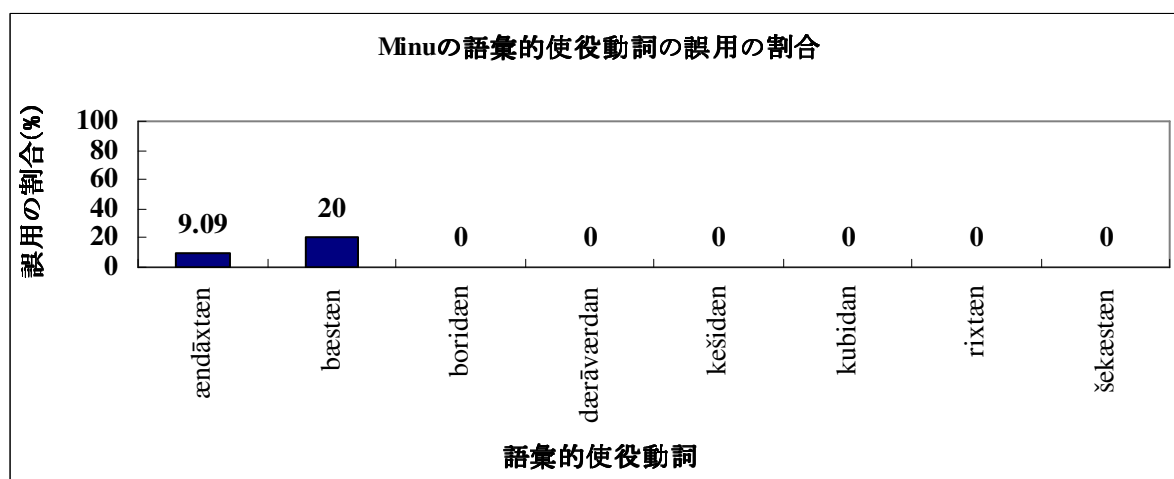


図 5 : Minu の語彙的使役動詞の誤用の割合

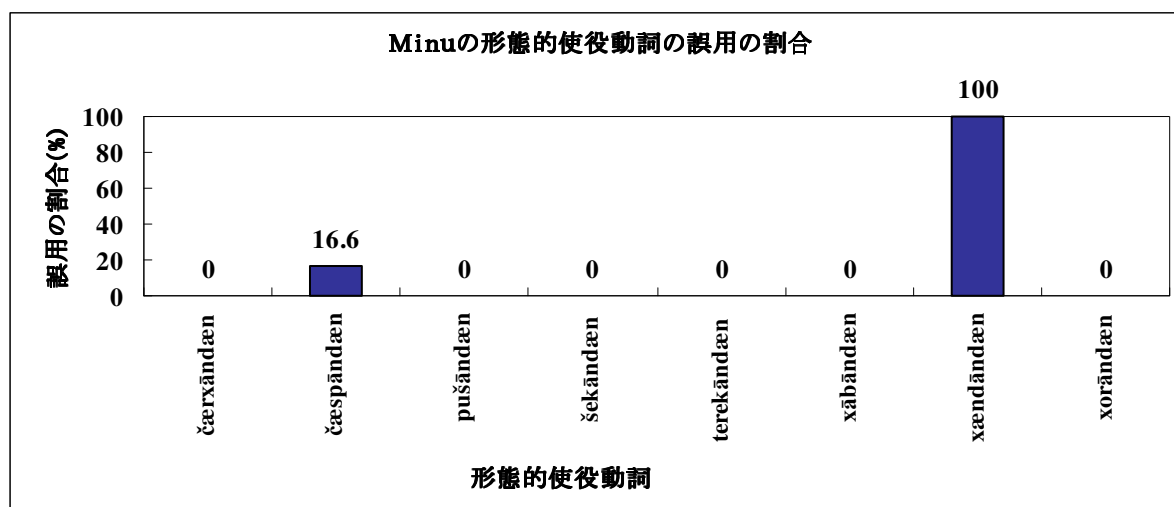


図 6 : Minu の形態的使役動詞の誤用の割合

³¹ *kænd-e* は *kændæn* という動詞の過去分詞形から派生した形容詞である。-æš”という代名詞が付加されることによって語尾の -e は除去されている。

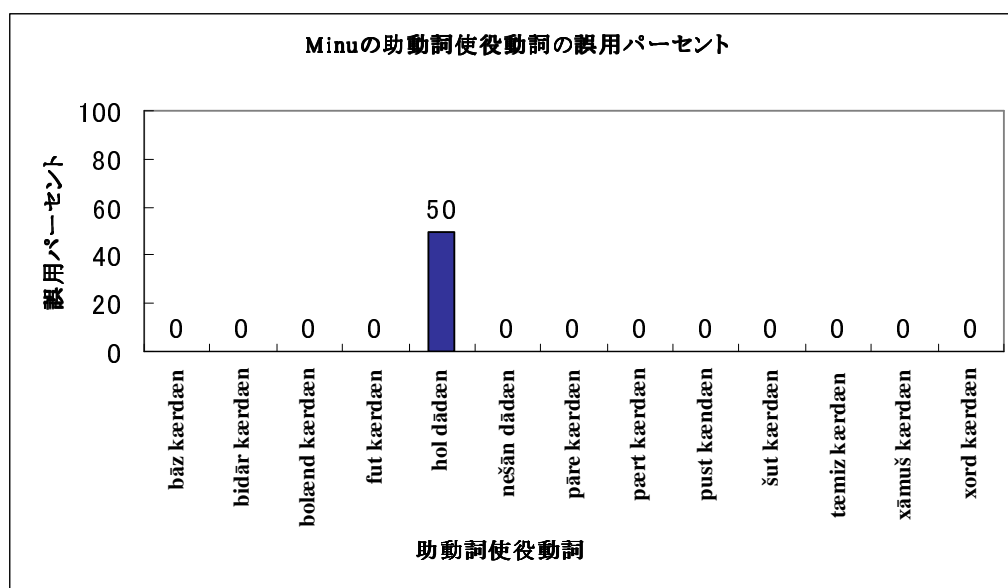


図 7 : Minu の助動詞使役動詞の誤用の割合

上述の図を考察してみると、Minu の場合は、一番エラー率が高い使役動詞の種類は、形態的使役動詞であることが分かる³²。次に多かったのは、語彙的使役動詞で、明らかな別形態の誤用がない使役動詞は、助動詞使役動詞である。これは、1.5.で論じた議論に照らすと問題となる。なぜならば、ペルシャ語の形態的使役動詞（V 語根＋派生接尾辞）と助動詞使役動詞（NP/A 語根＋V 語根（使役））は、V 語根に α （使役接辞または助動詞）が付与するという意味で、構造的に非常に似ていると言える。一方、ペルシャ語の語彙的使役動詞（同形か別形を問わず）は、V 語根のみ（root=1）(no extra morpheme) なので、上述した 2 つの使役動詞と根本的に異なる。従って、ペルシャ語児の形態的使役動詞と助動詞使役動詞は、似たように振舞うと予想される。しかしながら、実際 Minu のデータを考察してみると、形態的使役動詞と語彙的使役動詞の誤用率は高い一方で、助動詞使役動詞のエラー率は低い。Minu の使役動詞の誤用を制限したメカニズムとして考えられるのは、定着仮説（Braine & Brooks(1995)や Brooks *et al.* (1999) が提案した Entrenchment hypothesis: Braine & Brooks: 1995: ある動詞は常に特定の構文、例えば自動詞構文で使用されると、その使用が定着し、他の構文で使用されなくなる）である。なぜならば、一見、助動詞使役動詞も形態的使役動詞と同じく見えるが、幼児の誤用のパターンを決めるのは、動詞の構成の複雑さのみではなく、その動詞の使用頻度でもあるからである。ペルシャ語の助動詞使役動詞は、NP/A 語根＋V 語根（使役）という構造を持ち、その中の全ての V 語根は、軽動詞であり、これらは単独でも非常に早い時期から習得される。従って、そのような V 語根に、既に知っている名詞句や形容詞句を付与するという単純なメカニズムによって、様々な使役行動が描写できる。その結果、助動詞使役動詞の誤用率は、低くなる。

Jespersen(1965)や Cattell(1984)に従えば、軽動詞は、それ自体がほとんど意味内容及び述語として機能できる十分な thematic force を持たない動詞のカテゴリーを指す。ペルシャ語の軽動詞は意

³² どのタイプの使役動詞のエラー率が高いのかを決める際、誤用された動詞の数とエラーのパーセンテージの両方を比較する。

味的に空であると考えられている(Mohammad and Karimi(1992))。従って、複合動詞に項を与えるのは、軽動詞ではなく、軽動詞の前に出現する名詞である。更に、軽動詞の中に相的情報(aspectual information)が含まれている。Vahedi-Langrudi (1996)、Karimi-Doostan (1997, 2001)、Karimi (1997)、Megerdooimian(2000, 2001) はペルシヤ語の軽動詞について述べている。Karimi-Doostan(1997)によると、(34) に示すようにペルシヤ語には 14 個の軽動詞が存在し、使用される頻度順に、以下のようなリストを示している。Minu のデータで考察してきた助動詞使役動詞の全ての V 語根は、(35) に存在することが分かる。

- | | |
|-----------------------------------|--|
| (35) a. <i>kærdæn</i> ‘to do’ | h. <i>kešīdæn</i> ‘to pull, to tolerate’ |
| b. <i>zædæn</i> ‘to beat, to hit’ | i. <i>yāftæn</i> ‘to find, to obtain’ |
| c. <i>dādæn</i> ‘to give’ | j. <i>šodæn</i> ‘to become’ |
| d. <i>dāštæn</i> ‘to have’ | k. <i>ræftæn</i> ‘to go’ |
| e. <i>āmaedæn</i> ‘to come’ | l. <i>gozāštæn</i> ‘to put’ |
| f. <i>āværdæn</i> ‘to bring’ | m. <i>didæn</i> ‘to tolerate, to experience’ |
| g. <i>xordæn</i> ‘to collide’ | n. <i>baxšīdæn</i> ‘to forgive’ |

Karimi-Doostan (1997:92[47])

浅川(2002:5)は、「Goldberg(1995)、Goldberg *et al.* (2004) は、Clark(1978)を中心とする言語習得データを基に、構文の一般化つまり構文における形式とその意味の結合は、軽動詞の構造と意味に基づいて行われるという提案をしている。軽動詞とは *go, do, make, give, put, find, come, take* 等、様態などの付随的な意味を省いて、動作の根幹だけの一般的な意味を持った動詞である。Clark(1978)によると、言語習得初期の子供が使用する動詞の中で最も使用頻度が高いのが軽動詞である。Bates *et al.* (1988)の調査では、移動運動を表わす文型の 53% 以上が動詞 *go* であり、使役運動(caused motion)文型の 38%が動詞 *put* である。なぜ軽動詞が習得初期にこのように頻繁に使用されるかという、その意味する範囲が特定の「場」に固定されず、我々が日常的に経験する多くの「場」に応用可能だからである。」と述べている。

従って、Minu の場合も、助動詞使役動詞の誤用数が低いのは、軽動詞の習得初期からの頻繁な使用に由来すると考えられる。現実には、Minu の発話データには助動詞使役動詞でない軽動詞 *kærdæn* ‘do’のトークン数が 866 で、軽動詞 *zædæn* ‘hit’のトークン数が 70 であるが、これらは誤用が見られず、定着度が高いことが分かる。つまり、軽動詞の習得の利便性は、ここで大きな役割を担っていると言える。Minu の養育者のデータを考察することによって、助動詞使役動詞の使用頻度は、形態的使役動詞よりもずっと高いが、語彙的使役動詞ほどではないことが分かる³³。この点で、インプットの影響は存在するにしても二次的と思われる。以下、Minu の養育者が発話した 3 つの種類の使役動詞のそれぞれのトークン数を比較してみる。

³³ Minu の養育者の語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞のトークン数は順番に 76-16-100 ではあるが、調査した動詞の数が異なるので、これらのトークン数に 13/8 をかけないといけない。そうすると、それぞれの使役動詞のグループのトークン数は、124-26-100 となる。

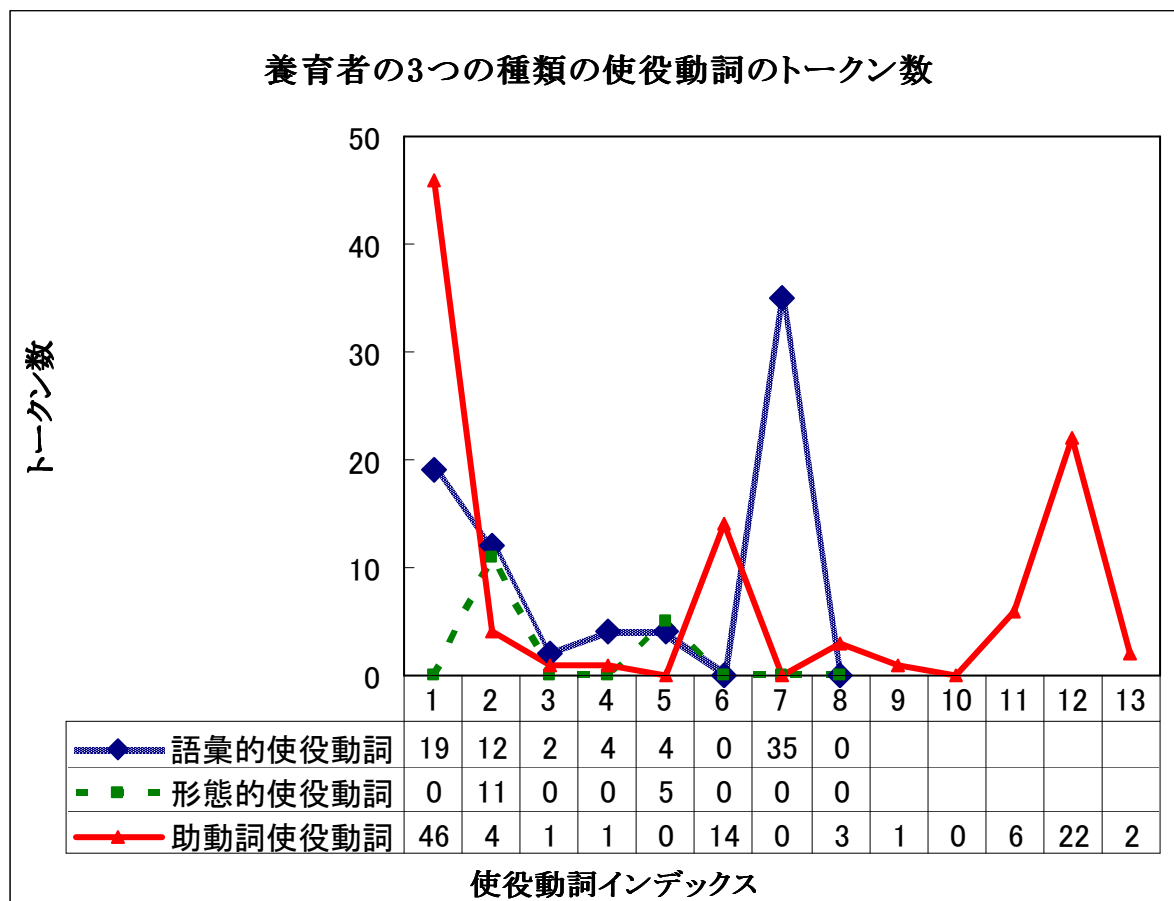


図 8 : Minu の養育者の 3 つの種類の使役動詞のトークン数

2.1.2. Faeze (2;4~3;2, 女兒)

Faeze の 3 種類の使役動詞の使用頻度やエラーパターン等は以下のとおりである。Faeze は年齢的に言語獲得初期なので、大人が使っているのを聞いて習得した具体的な言語表現を発話するので、それほど多くの誤りを犯さないと推測される。実際、データを観察してみても、Faeze の使役動詞の使用は、非常に保守的であることが分かる。

表 8 : Faeze 及びどの養育者のそれぞれの使役動詞の発話数及び誤用の割合

使役動詞	事象 タイプ	発話頻度 (Faeze)	発話頻度(養育者)	誤用パーセント
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw' 過去語根 : <i>ændāxt</i> 現在語根 : <i>ændāz</i> [lex1]	外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞	0	0	×
		0	0	
<i>bæstæn</i> 'close' 過去語根 : <i>bæst</i> 現在語根 : <i>bænd</i> [lex2]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>bāz kærden</i> 'open do = open' 過去語根 : <i>bāz kærð</i> 現在語根 : <i>bāz kon</i> [aux1]	同上	0	0	×
		0	0	

<i>bidār kærden</i> 'awake make = awaken' 過去語根 : bidār kærden 現在語根 : bidār kon [aux2]	同上	0	0	×
<i>bolænd kærden</i> 'high make = to lift' 過去語根 : bolænd kærden 現在語根 : bolænd kon [aux3]	同上	0	1	×
<i>boriden</i> 'cut, slice' 過去語根 : borid 現在語根 : bor [lex3]	同上	9	10	0
<i>čærxānden</i> 'turn' 過去語根 : čærxānd 現在語根 : čærxun [morph1]	同上	0	0	×
<i>čæsbānden</i> 'to stick, to paste up' 過去語根 : čæsbānd 現在語根 : čæsbun [morph2]	同上	2	2	×
<i>dærāværdan</i> 'clothes take off = take off one's clothes' 過去語根 : dærāværd 現在語根 : dærār [lex4]	同上	1	0	×
<i>fut kærden</i> 'puff do = to blow out' 過去語根 : fut kærden 現在語根 : fut kon [aux4]	同上	0	0	×
<i>hol dāden</i> 'push give = to push' 過去語根 : hol dād 現在語根 : hol de [aux5]	同上	0	0	×
<i>kešiden</i> 'pull' 過去語根 : kešid 現在語根 : keš [lex5]	同上	0	3	×
<i>kubiden</i> 'to knock, hammer' 過去語根 : kubid 現在語根 : kub [lex6]	同上	0	0	×
<i>nešān dāden</i> 'sign give = show' 過去語根 : nešān dād 現在語根 : nešān de [aux6]	同上	0	1	×
<i>pāre kærden</i> 'piece make= to tear' 過去語根 : pāre kærden 現在語根 : pāre kon [aux7]	同上	2	0	0
<i>pært kærden</i> 'thrown down make = to throw' 過去語根 : pært kærden 現在語根 : pært kon [aux8]	同上	1	1	0
<i>pušānden</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet),dress' 過去語根 : pušānd 現在語根 : puš [morph3]	同上	0	0	×

<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare' 過去語根 : <i>pust kænd</i> 現在語根 : <i>pust kæn</i> [aux9]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>rixtæn</i> 'to pour' 過去語根 : <i>rix</i> 現在語根 : <i>riz</i> [lex7]	同上	1 ³⁴	5	0
		type/token:1	type/token:3/5	
<i>šekāndæn</i> 'break' 過去語根 : <i>šekānd</i> 現在語根 : <i>šekæn</i> [morph4]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>šekæstæn</i> 'break' 過去語根 : <i>šekæst</i> 現在語根 : <i>šekæn</i> [lex8]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>šut kærðæn</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball' 過去語根 : <i>šut kærð</i> 現在語根 : <i>šut kon</i> [aux10]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>tæmiz kærðæn</i> 'clean make= to clean' 過去語根 : <i>tæmiz kærð</i> 現在語根 : <i>tæmiz kon</i> [aux11]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode' 過去語根 : <i>terekānd</i> 現在語根 : <i>terekān</i> [morph5]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep' 過去語根 : <i>xābānd</i> 現在語根 : <i>xābān</i> [morph6]	同上	1	1	0
		type/token:1/1	type/token:1/1	
<i>xāmuš kærðæn</i> 'silent, off make = blow out, extinguish' 過去語根 : <i>xāmuš kærð</i> 現在語根 : <i>xāmuš kon</i> [aux12]	同上	1	1	0
		type/token:1/1	type/token:1/1	
<i>xændāndæn</i> 'make laugh' 過去語根 : <i>xændānd</i> 現在語根 : <i>xændān</i> [morph7]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>xorāndæn</i> 'feed' 過去語根 : <i>xorānd</i> 現在語根 : <i>xorān</i> [morph8]	同上	0	0	×
		0	0	

³⁴ Faeze は、「お客さんにお茶を入れましょうか?」という場面で、*čāi be-lij-æm* 'tea SUB-pour-1SG = Would you like some tea?' を発話している。この場合は、完全に子音の入れ替わりが生じてと言える。つまり、*faeze* は、*be-riz-æm* の代わりに *be-lij-æm* と発話してしまった。

<i>xord kærden</i> 'small make = chop, cut 過去語根: <i>xord kærð</i> 現在語根: <i>xord kon</i> [aux13]	同上	0	0	×
		0	0	

2.1.2.1. Faeze データの考察

Faeze の MLU 値は非常に低く、殆どの使役動詞が観察されなかった。Faeze の場合は、形態的使役動詞が初めて観察されたのは、2;9 である。このときの発話は、両親の直前の発話の繰り返しではなく、形態的使役動詞のスキーマを拡張して、独創的に *čæsbāndæn* 'to stick, to paste up' を生産していると考えられる。この例を除けば、Faeze の年齢からすると、動詞の島段階は、まだ終わっていない、従って、非常に保守的に、つまり聞いたことのある使役動詞のみを発話すると予測される。実際、Minu と比べても、使役動詞の全体的な使用頻度が、非常に低く、誤用も低いことが言える。Faeze のそれぞれの使役動詞のトークン頻度の比較の図は、以下のとおりである。

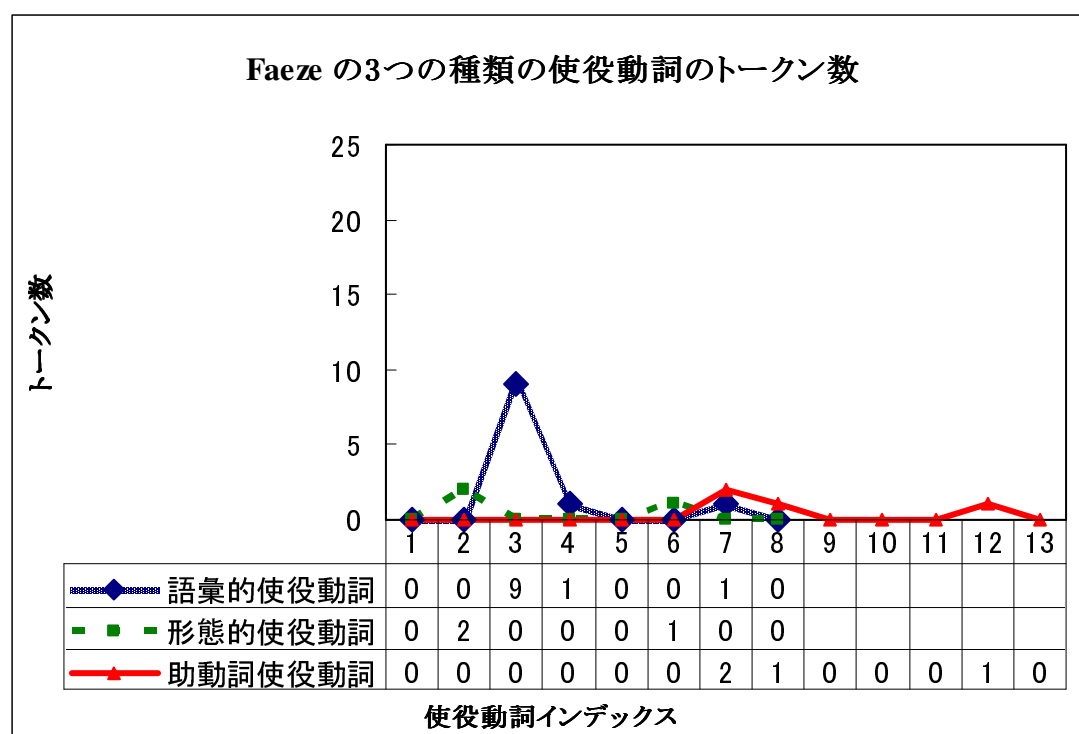


図 9 : Faeze の 3 つの使役動詞のトークン数

図 9 が示すように、Faeze の使役動詞の発話数は全体的に非常に低い。さらに、発話された全ての使役動詞において、誤用がされていない。従って、Faeze のデータを考察したことによって、この年齢のペルシャ語児でも、例は少ないとはいえ、全ての使役動詞の種類が発話出来ることが言えるが、スキーマが習得されているとは言えない。更に、エラーが全く見られていないのは、この年齢の幼児の動詞の使用は、非常に保守的であることに由来する。Faeze の養育者の 3 つの種類の使役動詞の発話トークン数は、以下の図 10 のとおりである。Faeze の養育者の 3 つの種類の中、語彙的使役動詞のトークン数が著しく多い。

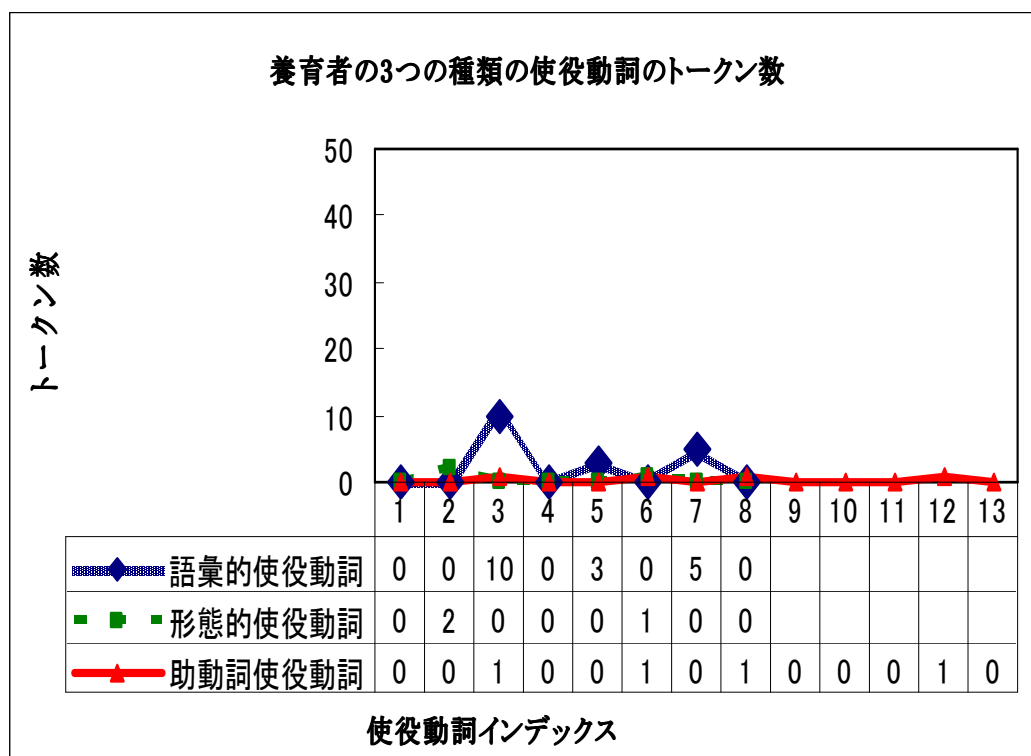


図 10 : Faeze の養育者の 3 つの種類の使役動詞のトークン数

2.1.3. Mahdi (2;2~3;0, 男児)

Mahdiの3種類の使役動詞の発話頻度やエラーパターン等は以下のとおりである。

表 9 : Mahdi 及びどの養育者のそれぞれの使役動詞のトークン数及び誤用の割合

使役動詞	事象 タイプ	発話頻度 (Mahdi)	発話頻度 (養育者)	誤用パーセント
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw' 過去語根: <i>ændāxt</i> 現在語根: <i>ændāz</i> [lex1]	外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞	6 type/token:3/6	0 0	0
<i>bæstæn</i> 'close' 過去語根: <i>bæst</i> 現在語根: <i>bænd</i> [lex2]	同上	0 0	2 type/token:2/2	×
<i>bāz kærden</i> 'open do = open' 過去語根: <i>bāz kærd</i> 現在語根: <i>bāz kon</i> [aux1]	同上	1 type/token:1/1	1 type/token:1/1	0
<i>bidār kærden</i> 'awake make = awaken' 過去語根: <i>bidār kærd</i> 現在語根: <i>bidār kon</i> [aux2]	同上	0 0	0 0	×
<i>bolænd kærden</i> 'high make = to lift' 過去語根: <i>bolænd kærd</i> 現在語根: <i>bolænd kon</i> [aux3]	同上	0 0	1 type/token:1/1	×
<i>boridæn</i> 'cut, slice' 過去語根: <i>borid</i> 現在語根: <i>bor</i> [lex3]	同上	1 type/token:1/1	0 0	0

<i>čærxāndan</i> 'turn' 過去語根 : čærxānd 現在語根 : čærxun [morph1]	同上	0 0	0 0	×
<i>čæsbāndan</i> 'to stick, to paste up' 過去語根 : čæsbānd 現在語根 : čæsbun [morph2]	同上	0 0	0 0	×
<i>dærāvædan</i> 'clothes take off = take off one's clothes' 過去語根 : dærāværd 現在語根 : dærār [lex4]	同上	2 type/token:2/2	2 type/token:1/2	0
<i>fut kærðæn</i> 'puff do = to blow out' 過去語根 : fut kærð 現在語根 : fut kon [aux4]	同上	1 type/token:1/1	2 type/token:1/2	0
<i>hol dāðæn</i> 'push give = to push' 過去語根 : hol dād 現在語根 : hol de [aux5]	同上	0 0	0 0	×
<i>kešidæn</i> 'pull' 過去語根 : kešid 現在語根 : keš [lex5]	同上	2 type/token:1/2	1 type/token:1/1	0
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' 過去語根 : kubid 現在語根 : kub [lex6]	同上	0 0	0 0	×
<i>nešān dādæn</i> 'sign give = show' 過去語根 : nešān dād 現在語根 : nešān de [aux6]	同上	1 type/token:1/1	0 0	0
<i>pāre kærðæn</i> 'piece make = to tear' 過去語根 : pāre kærð 現在語根 : pāre kon [aux7]	同上	2 type/token:2/2	1 type/token:1/1	0
<i>pært kærðæn</i> 'thrown down make = to throw' 過去語根 : pært kærð 現在語根 : pært kon [aux8]	同上	0 0	0 0	×
<i>pušāndan</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' 過去語根 : pušānd 現在語根 : puš [morph3]	同上	0 0	0 0	×
<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare' 過去語根 : pust kænd 現在語根 : pust kæn [aux9]	同上	0 0	0 0	×
<i>rixtæn</i> 'to pour' 過去語根 : rixt 現在語根 : riz [lex7]	同上	2 type/token:2/2	3 type/token:2/3	0
<i>šekāndan</i> 'break' 過去語根 : šekānd 現在語根 : šekæn [morph4]	同上	2 type/token:2/2	4 type/token:3/4	1/2 = 50% Mahdi205(2;5), MLU:1.805 ³⁵ *in kalle-ye man-o be-škæn-e this head-Ez I-DO SUB-break-3SG (instead of: in kalle-ye man-o mi-škæn-e this head-Ez I-DO IMPF-break-3SG 'It will break my head.'

³⁵ この場合は、動詞の相のみのエラーが見られ、使役動詞のエラーとしてはカウントされない。

<i>šekæstæn</i> 'break' 過去語根: šekæst 現在語根: šekæn [lex8]	同上	1 ³⁶ type/token: 1/1	1 type/tokwn: 1/1	0
<i>šut kærden</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball' 過去語根: šut kærð 現在語根: šut kon [aux10]	同上	0 0	0 0	×
<i>tæmiz kærden</i> 'clean make = to clean' 過去語根: tæmiz kærð 現在語根: tæmiz kon [aux11]	同上	0 0	0 0	×
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode' 過去語根: terekānd 現在語根: terekān [morph5]	同上	0 0	0 0	×
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep' 過去語根: xābānd 現在語根: xābān [morph6]	同上	0 0	0 0	×
<i>xāmuš kærden</i> 'silent, off make = blow out, extinguish' 過去語根: xāmuš kærð 現在語根: xāmuš kon [aux12]	同上	0 0	0 0	×
<i>xændāndæn</i> 'make laugh' 過去語根: xændānd 現在語根: xændān [morph7]	同上	0 0	0 0	×
<i>xorāndæn</i> 'feed' 過去語根: xorānd 現在語根: xorān [morph8]	同上	0 0	0 0	×
<i>xord kærden</i> 'small make = chop, cut' 過去語根: xord kærð 現在語根: xord kon [aux13]	同上	0 0	0 0	×

2.1.3.1. Mahdi データの考察

Mahdiの3つの種類の使役動詞の中で発話時期が最も早かったのは、助動詞使役動詞であった。Mahdiは、2歳2ヶ月の時期で、「お母さんがこれを壊したんだよ」という場面で、*māmān xæāb³⁷ kærð- Ø* 'Mom broken did-3SG = Mom broke it.'という助動詞使役動詞を発話する。形態的使役動詞に関しては、*šekāndæn* 'break'以外の形態的使役動詞は出現しなかった。従って、形態的使役動詞の習得時期は他の2種類の使役動詞と比べ、遅れていることが分かる。その一つの理由として、他のCHILDESデータのペルシャ語児と同じく、ペルシャ語を母語とする大人の発話者からのインプットの中にも、そもそも形態的使役動詞の使用頻度が非常に低いことが考えられる。Mahdiの養育者の語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞のトークン数は順番に9-4-5ではあるが、調査した動詞の数が異なるので、これらのトークン数に13/8をかけないといけない。そうすると、それぞれの使役動詞のグループのトークン数は、15-7-9となる。つまり、3つの使役動詞の中では、一番トークン数が低いのは、形態的使役動詞であることが分かる。

エラーに関しては、Mahdiの年齢からすると、上記のFaezeと同じく、まだ動詞の島段階の真っ最中なので、非常に保守的に使役動詞を発話すると推測される。実際、データを考察しても、

³⁶ Mahdiは、*šekæstæn*を**ekæstæn*と発話する。これは、語頭の子音が脱落した結果、生じた語形である。

³⁷ *xæāb*は、*xærāb* 'broken'の代わりに使われ、流音[r]が省略されたと思われる。

使役についてのエラーが全くなかったことが分かる。このことは、この年齢の子供の使役動詞の使用は、非常に項目依拠的な使用であることを裏付ける。そもそも、形態的使役動詞は、1つのケースしかなく、残りの2種類の使役動詞の発話数も Minu と比べ、非常に少ない。つまり、個々の使役動詞はそれらが現れる構文、つまり使役構文から独立したまま、語彙の習得と同じく項目ごとに進む。従って、エラー数も少なくなる。Mahdi の3つの種類の使役動詞のそれぞれのトークン数の比較の図は、図 11 である。図 11 でも明白であるが、Mahdi は殆どの語彙的使役動詞を発話出来るようになっている。

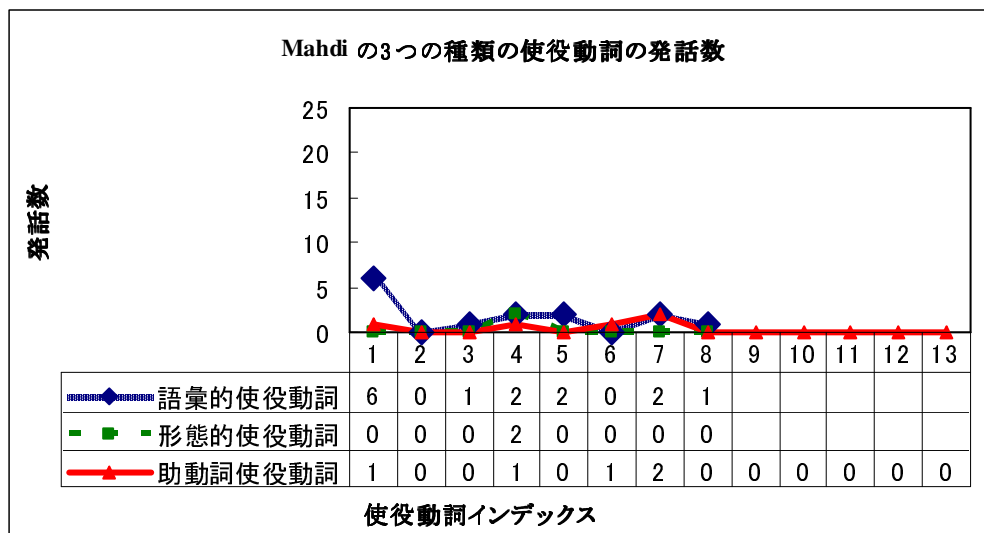


図 11 : Mahdi の 3 つの種類の使役動詞のトークン数

Mahdi の養育者の 3 つの使役動詞のトークン数の比較の図は、図 12 である。

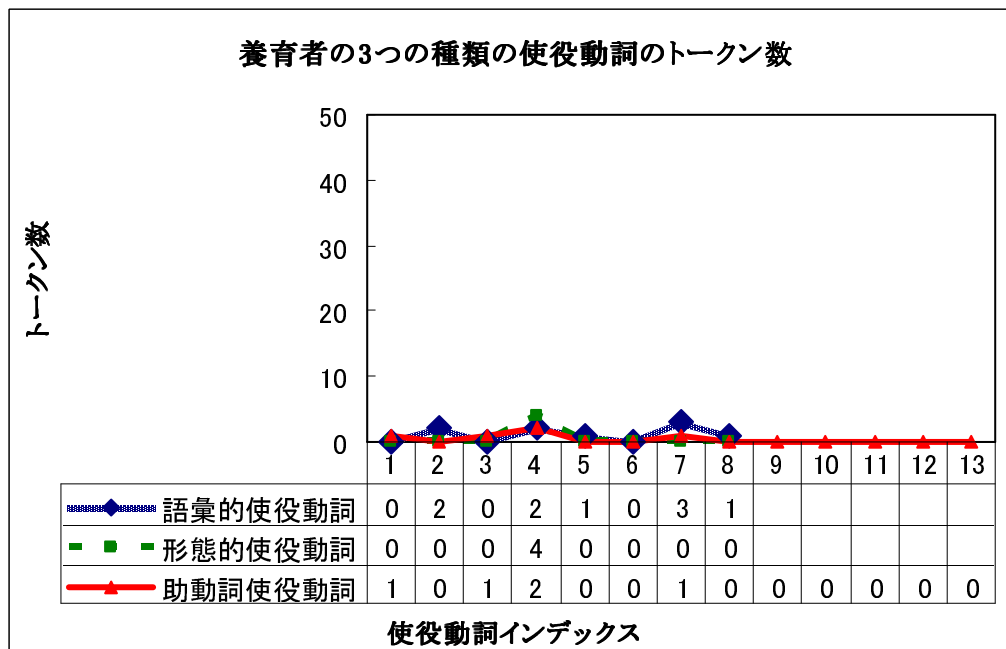


図 12 : Mahdi の養育者の 3 つの種類の使役動詞の発話数

図 11 と図 12 を比較してみると、完全な類似性が見られることが分かる。したがって、Mahdi の場合は、インプットの影響が他のペルシャ語児よりもいっそう完全に見られた。特に、形態的使役動詞の場合は、養育者のデータの中でも、発話されたたった一つの形態的使役動詞は、*šekāndæn* ‘break’ である。この意味で、Mahdi のこの場合の形態的使役動詞の発話は、項目依拠的な使用であると可能性が高い。

2.1.4. Sharzad (1;8~1;10, 女児)

Shahrzad データを観察してみると、*zædæn* ‘hit’ という使役動詞の意味を持たない普通の他動詞しか発話されていないことが分かる。Shahrzad の場合は、数多くの発話は名詞の名前を指す単語で、動詞が抜けている文も多い。従って、1;8~1;10 の時期で、全ての使役動詞はまだ発話不可能であることが言える。一方で、母親の Shahrzad に対して発話する使役動詞の種類及び発話頻度を示すと以下のとおりである。CHILDES のペルシャ語のデータには、1;8~1;10 の他の幼児の発話データが存在しないが、Shahrzad のデータのみを考察する限り、この年齢のペルシャ語児は、まだどの使役動詞も発話出来ていないことが言える。

表 10：Shahrzad 及びどの養育者のそれぞれの使役動詞のトークン数及び誤用の割合

使役動詞	事象タイプ	発話頻度(養育者)
<i>ændāxtæn</i> ‘drop, throw’ 過去語根：ændāxt 現在語根：ændāz	外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞	1 type/token: 1/1
<i>bāz kærdaen</i> ‘open do = open’ 過去語根：bāz kærđ 現在語根：bāz kon	同上	2 type/token: 1/2
<i>nešān dādaen</i> ‘sign give = show’ 過去語根：nešān dād 現在語根：nešān de	同上	1 type/token: 1/1
<i>rixtaen</i> ‘to pour’ 過去語根：rixť 現在語根：riz	同上	3 type/token: 1/3
<i>šekāndaen</i> ‘break’ 過去語根：šekānd 現在語根：šekān	同上	1 type/token: 1/1

2.1.4.1. Shahrzad データの考察

Shahrzad データの中には、2つの記録、つまり 1;8 と 1;10 の記録しか存在しないので、使役動詞の出現の分析のデータとして取り扱うのは、望ましくないと考えられるかもしれないが、このデータを観察することによって、この時期で、どのタイプの使役動詞もまだ発話不可能であることが自分で言えるので、使用するのには、有意義であると考えられる。

動詞獲得の困難さに関しては、Maguire, Hirsh-Pasek and Golinkoff (2006) (Pouline-Dubois and Graham (2007) による) によると、動詞学習の問題は動詞が符号化している基底にある概念を学ぶ

ことにあるよりも、行為や事象の概念に動詞をマップすることにあるようである。Pouline-Dubois and Graham(2007) は、動詞を学習するのに子どもは現在起こっている事象のどの側面が指示されているのかを決定しなければならないと述べている。動詞は動きの様態（歩く／走る）、話者に関係する方向（行く／来る）、必要とされる道具（スプーン／ペダル）、あるいは達せられた結果（一杯／空）等のような沢山の意味的要素から解釈しなければならない。さらに、動詞が事象のどの側面を語彙化しているかを学習するのに加えて、子どもは行為者の意図や話者の意図を解釈しなければならない。このように、動詞は名詞に比べて獲得が難しいことから、なぜShahrzad データの中には、名詞は発話されているが動詞は発話されていないのかの理由が分かる。

最近の語彙獲得の研究において、子どもの初期の語彙には物の名前を表す名詞が多く含まれているのか、行為を表す動詞が多く含まれているのかの議論が盛んである。この議論の焦点は、言語構造の違いや母親の言語入力が語彙の獲得に関係しているのか、人間の語彙獲得の基盤となる概念の獲得は言語構造、言語入力に関係なく、普遍的なものであるのかということである。この議論の元になったGentner(1982)の研究をみてみよう。Gentner(1982) は、英語、ドイツ語、日本語、カルリ語、標準中国語、トルコ語の6ヶ国語の子ども（獲得児）の16名のデータを提出し、初期の子どもの語彙で名詞が優位であるのは普遍的な現象であり、これは子どもに名詞を学習しやすくしている知覚的、認知的過程が基底にあることにより説明されるとしている。Gentner and Boroditsky(2001) は「自然分割仮説（Natural Partition Hypothesis）」と「関係相対性（Relational Relativity）」の2つの仮説から、事物の名前（名詞）は関係を表す語（動詞）より早く獲得されるとした。「自然分割仮説」とは、名詞と述部の区別は、「人や物のような具体的概念」と、「活動、状態の変化、因果関係のような叙述的概念」の間にすでに存在している概念的区別に基づいている。個体的な事物を知覚的に利用する方が容易であり、名詞に対応したカテゴリーは、動詞や他の述部に対応したカテゴリーより、より単純で、より基本的であるという主張である。「関係相対性」は、我々が知覚世界を語彙化する時、関係を表すタームの割り当ては、通言語学的に名詞類より、変動しやすい。述部（Predicate）は概念から語へのいろいろなマッピングがある。事物を語彙化するよりも、互いに密着した事物間の関係を語彙化するのに、言語は自由度を持っている。従って、動詞や他の関係を表すタームに対しては、子供はどのように言語が知覚世界の要素を結合し、語彙化するかを発見しなければならない。以上に述べた仮説から、Gentner (1982) は関係を表す語は、物を指示する語より通言語学的にも変化しやすく、名詞が獲得しやすいとしている。

CHILDESデータベースのShahrzad以外の他のペルシャ語児の場合は、既に動詞が発話出来る年齢になり、そこで問題となるのは、幼児はどの使役動詞を頻繁に発話するか、どのような過剰一般化のパターンが見られるのか等といったものである。しかしながら、Shahrzadの場合は、そうではない。Shahrzadの養育者の発話を考察しても、語彙的使役動詞は2つ、形態的使役動詞は1つと助動詞使役動詞は2つしか発話されなかったことが分かる。従って、この年齢の幼児の養育者もそもそも幼児に話しかけるときに、めったに使役動詞を使わないことが分かる。

2.1.5. Lilia (1;11.21～2;0.23, 女兒)

Liliaの3種類の使役動詞のトークン頻度やエラーパターン等は以下のとおりである。

表 11 : Lilia 及びどの養育者のそれぞれの使役動詞のトークン数及び誤用の割合

使役動詞	事象 タイプ	発話頻度 (Lilia)	発話頻度 (養育者)	誤用パーセント
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw' 過去語根 : <i>ændāxt</i> 現在語根 : <i>ændāz</i> [lex1]	外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞	2 type/token:2/2	6 type/token:4/6	0
<i>bæstæn</i> 'close' 過去語根 : <i>bæst</i> 現在語根 : <i>bænd</i> [lex2]	同上	0 0	5 type/token:3/5	×
<i>bāz kærðæn</i> 'open do = open' 過去語根 : <i>bāz kærð</i> 現在語根 : <i>bāz kon</i> [aux1]	同上	0 0	1 type/token:1/1	×
<i>bidār kærðæn</i> 'awake make = awaken' 過去語根 : <i>bidār kærð</i> 現在語根 : <i>bidār kon</i> [aux2]	同上	0 0	0 0	×
<i>bolænd kærðæn</i> 'high make = to lift' 過去語根 : <i>bolænd kærð</i> 現在語根 : <i>bolænd kon</i> [aux3]	同上	1 type/token:1/1	4 type/token:4/4	1/1 = 100% Lilia12 (2;0.02), MLU:1.557 (「テレビの音を大きくしても 良いですか」という母親の許可を得る場面) CHI: * <i>bālā</i> ³⁸ <i>kon-æm?</i> <i>top do-1sg</i> (instead of: <i>bolænd kon-æm?</i>)
<i>boridæn</i> 'cut, slice' 過去語根 : <i>borid</i> 現在語根 : <i>bor</i> [lex3]	同上	0 0	0 0	×
<i>čærxāndæn</i> 'turn' 過去語根 : <i>čærxānd</i> 現在語根 : <i>čærxun</i> [morph1]	同上	0 0	7 type/token:4/7	×
<i>čæsbandæn</i> 'to stick, to paste up' 過去語根 : <i>čæsband</i> 現在語根 : <i>čæsbum</i> [morph2]	同上	0 0	0 0	×
<i>dærāværdæn</i> 'clothes take off = take off one's clothes' 過去語根 : <i>dærāværd</i> 現在語根 : <i>dærār</i> [lex4]	同上	3 type/token:2/3	4 type/token:4/4	0
<i>fut kærðæn</i> 'puff do = to blow out' 過去語根 : <i>fut kærð</i> 現在語根 : <i>fut kon</i> [aux4]	同上	0 0	4 type/token:3/4	×
<i>hol dāðæn</i> 'push give = to push' 過去語根 : <i>hol dāð</i> 現在語根 : <i>hol de</i> [aux5]	同上	0 0	3 type/token:3/3	×

³⁸ 「物価を上げる」を表す場合は、*bālā'top* という形容詞が使われる。しかしながら、「上げる」という意味を表すために、*bālā'top* と一緒に使われる動詞は、*kærðæn'do* ではなく、*borden'take, carry* である。つまり、「ある物体の物理的な移動変化」を表すという場合は、*bolænd kærðæn* が使われるが、「物価といった概念的な存在の変化」を表すという場合は、*bālā borden* が使われる。「音を大きくする」を描写する動詞は、*bālā borden* ではなく、*bolænd kærðæn* である。この場合は、助動詞使役動詞の形容詞の部分のエラーが見られるが、全体的な使役動詞のエラーとしてカウントされない。

<i>kešidæn</i> 'pull' 過去語根 : kešid 現在語根 : keš [lex5]	同上	0 0	2 type/token:2/2	×
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' 過去語根 : kubid 現在語根 : kub [lex6]	同上	0 0	0 0	×
<i>nešān dādæn</i> 'sign give = show' 過去語根 : nešān dād 現在語根 : nešān de [aux6]	同上	0 0	5 type/token:3/5	×
<i>pāre kærden</i> 'piece make= to tear' 過去語根 : pāre kærden 現在語根 : pāre kon [aux7]	同上	0 0	0 0	×
<i>pært kærden</i> 'thrown down make = to throw' 過去語根 : pært kærden 現在語根 : pært kon [aux8]	同上	0 0	14 type/token:8/14	×
<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' 過去語根 : pušānd 現在語根 : puš [morph3]	同上	0 0	0 0	×
<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare' 過去語根 : pust kænd 現在語根 : pust kæn [aux9]	同上	0 0	0 0	×
<i>rixtæn</i> 'to pour' 過去語根 : rixt 現在語根 : riz [lex7]	同上	2 type/token:2/2	5 type/token:4/5	0
<i>šekāndæn</i> 'break' 過去語根 : šekānd 現在語根 : šekān [morph4]	同上	0 0	0 0	×
<i>šekæstæn</i> 'break' 過去語根 : šekæst 現在語根 : šekān [lex8]	同上	0 0	0 0	×
<i>šut kærden</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball' 過去語根 : šut kærden 現在語根 : šut kon [aux10]	同上	1 type/token:1/1	0 0	0
<i>tæmiz kærden</i> 'clean make = to clean' 過去語根 : tæmiz kærden 現在語根 : tæmiz kon [aux11]	同上	0 0	0 0	×
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode' 過去語根 : terekānd 現在語根 : terekān [morph5]	同上	0 0	0 0	×
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep' 過去語根 : xābānd 現在語根 : xābān [morph6]	同上	0 0	0 0	×

<i>xāmuš kærden</i> 'silent, off make = blow out, extinguish' 過去語根: <i>xāmuš kærđ</i> 現在語根: <i>xāmuš kon</i> [aux12]	同上	1	2	0
		type/token:1/1	type/token:2/2	
<i>xændāndæn</i> 'make laugh' 過去語根: <i>xændānd</i> 現在語根: <i>xændān</i> [morph7]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>xorānden</i> 'feed' 過去語根: <i>xorānd</i> 現在語根: <i>xorān</i> [morph8]	同上	0	0	×
		0	0	
<i>xord kærden</i> 'small make = chop, cut' 過去語根: <i>xord kærđ</i> 現在語根: <i>xord kon</i> [aux13]	同上	0	0	×
		0	0	

2.1.5.1. Lilia データの考察

Liliaの形態的使役動詞の初出は、1;11.21の年齢で、*bærgærdun-im* 'turn back-1PL= Let's turn round (spin) it'という形態的使役動詞である。しかしながら、これは、あくまでも項目依拠的な使用であり、形態的使役動詞のスキーマが形成されているとは言えない。なぜならば、この子は、他の形態的使役動詞がまだ発話出来ていないからである。Mahdiの場合も同じ傾向が見られ、この2名の幼児のデータを総合することによって、ペルシャ語の2歳児 (1;11~3.0) の場合は、形態的使役動詞の使用頻度が非常に少なく、この年頃のペルシャ語児が形態的使役動詞のスキーマを形成していないという推測が成り立つ。ただ養育者や他のインプットの源から特別な形態的使役動詞を頻繁に聞いたことによって、その形態的使役動詞のみを項目依拠的に習得していると考えられる。

助動詞使役動詞に関しては、上記の表に記載されていないものも含めると、Liliaの場合は、助動詞使役動詞は、1;11.21の年齢から出現し、他の使役の種類と比べ、数多く発話されている。例を挙げると、*peidā kærden* 'visible do = find'や*dorost kærden* 'correct do = make'や*seft kærden* 'hard do = harden'等といった助動詞使役動詞が数多く発話されている。更にデータを考察してみると、Liliaは、ジェスチャーを利用し、数多くの使役行為を描写していることが分かる。コミュニケーションの方策としてのジェスチャーの重要性と堅固さは、例えば幼い盲児もコミュニケーションをする際にはジェスチャーを利用するという事実からも裏付けられる(Goldin-Meadow(1997))。Liliaは、まだ使役状態を完全には動詞によって表現できないとしても、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に*intori kærđ* 'like this do = do like this'や*injuri kærđ* 'like that do = do like that'などと発話する。子供は誰かが何かに働きかけ、その結果その対象物が変化することを理解すると、使役動詞を使って発話出来なくても、身振りでその行為をやって見せることで意味が伝わる。つまり、子供も大人も同一の共同注意フレームを共有していることを自覚しているので、その場のコミュニケーションのコンテキストにおいて、話し相手の意図理解を補完する情報源を提供するのは、子供の身振りのみとなっている。子供は日常の生活の中でかなり複雑な場面を描写したり、要求したりしないといけない。しかしながら、子供はまだ複雑な語彙的使役動詞や形態的使役動詞などを習得していない段階でどのようにその行為を描写したり、頼んだりす

ることができるだろうか。本稿で主張したいのは、子供はこのような場合は、最も早い段階でジェスチャーを利用し、使役行為を描写するということである。更に、ある動詞の場合は、適切な使役動詞のスキーマにアクセスし、その場面に合う使役動詞を発話する一方で、別の動詞の場合は、スキーマにアクセスできず、ジェスチャーを利用し、使役行為を描写する場合もある。これは、まさに、言語習得には、項目ごとにケースバイケースで習得するプロセスと、広く一般に通用する規則性・抽象性を習得するプロセスの両方が必要であるという意味である。「ジェスチャー＋軽動詞」の例は、以下のとおりである。Liliaは、「おもちゃを落として！」という語彙的使役動詞が含まれる命令文が要求される場面においては、以下のような発話をしている。

(36) Lilia(2;0, 女兒)

*CHI: dadaši injur-i kon- Ø
 brother like this- INDEF do-subj
 'Do like this....'

この現象は、ペルシャ語幼児のみではなく、CHILDES データの日本語児の場合でも考察されている。例は、以下のとおりである³⁹。

(37) Akifumi, Miyata-Aki データ(2;08.03, 男児)

*CHI: koo shite ne, dotsun to ochita !

(38) Taishoo, Miyata-Tai データ(2;01.02, 男児)

*CHI: +, hashi o watatte +/. <「橋をつなげて」の意⁴⁰>
 *MOT: un .
 *CHI: +, koo shite koo shite +/. <おもちゃの線路をつなげながら>

(39) Jun, Ishii データ(2;02.05, 男児)

*FAT: mieta ka ?
 *CHI: ko tte [: koo shite] +...

< (ブロックでできた) 車の中が見えるように父親が取り外したブロックを再び元に戻す>

従って、Lilia の場合は、適切な使役動詞のスキーマにアクセスできない場合は、ジェスチャーを利用し、使役行為を描写していることが言える。

使役動詞の代わりに、「ジェスチャー＋like this＋軽動詞の *kærdaen* 'do'」という構文が利用されるということは、非常に興味深いことである。幼児にとっては指差しやジェスチャーは単語の発話の前の段階からでも利用可能である。「する」や *kærdaen* 'do' の獲得年齢も非常に早いので、使役動詞の代わりに、「ジェスチャー＋軽動詞」のみの発話の存在も理論上、十分考えられる。しかしながら、ペルシャ語児も日本語児もジェスチャーと軽動詞の間に必ずしも like this を挿入す

³⁹ 日本言語学会第 139 回大会の口頭発表(Ghiaee & 鈴木(2009))を下敷きになっている。

⁴⁰ <> の中に書かれている状況説明は筆者による。

る。大人の発話者の身振りにも常に指示代名詞（英語では *this, that* など）が伴う。したがって、幼児も言葉を話せる段階に達すると、常にジェスチャーや指差しをすると同時に指示代名詞も発話する。

Tomasello(2003:32-36)は、「人の乳児は主に3つのタイプの身振り－儀式化、直示的身振り、記号的身振り－をする。このうち最初のもは記号的ではなく、3番目のものは記号的であり、2番目のものは記号的かもしれないし、そうでないかもしれない。身振りが非記号的なものから記号的なものにわたり、最初の言語的スキルとともに出現するという事実は、子供が記号的にコミュニケーションを行う能力は言語に特化されたものではなく、より根本的な一連の社会・認知的スキルから発生したものであることを示す強い証拠となる。」と述べている。

ペルシャ語児も日本語児も使役動詞の代わりに、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時にペルシャ語の場合は、*intori kærd* ‘like this do = do like this’や *injuri kærd* ‘like that do = do like that’、日本語の場合は、「こうする」や「こうして」などと発話する。上述した身振りの種類から考えると、ペルシャ語児と日本語児の使役動詞の代わりに行われるジェスチャーは、第3番目のグループに、動作の指示は第2番目の直示的グループに属していることが言える。

次に、Lilia データの中では、使役動詞の中で一番発話頻度が高いのは、語彙的使役動詞であることが分かる。語彙的使役動詞は、他の使役動詞（形態的使役動詞や助動詞使役動詞）と比べ、記憶の負担が大きいと思われる。なぜならば、後者の場合は規則に従って派生すればよいからである。記憶の負担を考える場合は、語彙的使役動詞の習得は、他の種類の使役動詞より時間がかかると考えられる。しかしながら、実際、Lilia のデータを考察してみると、非常に早い時期から語彙的使役動詞が発話されていることが分かる。データを考察してみて、もう1つ分かることは、Lilia は非常に保守的に使役動詞を使用していることである。Lilia の年齢からすると、使役動詞を項目依拠的に習得していくことが推測されるので、それなりにエラーの数も少なくなることは当然である。この段階は、まさに、Tomasello が言う動詞の島の段階に当たる。

Lilia のそれぞれの使役動詞のトークン数の比較図は、以下の図13である。

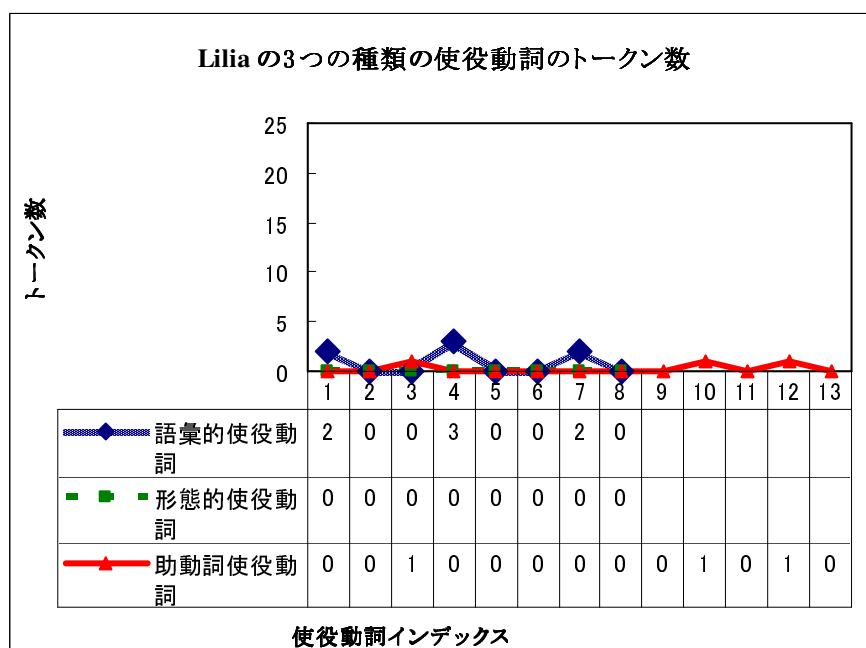


図13 : Lilia の3つの種類の使役動詞のトークン数

Lilia の養育者の 3 つの種類の使役動詞のトークン数の比較の図は、図 14 である。

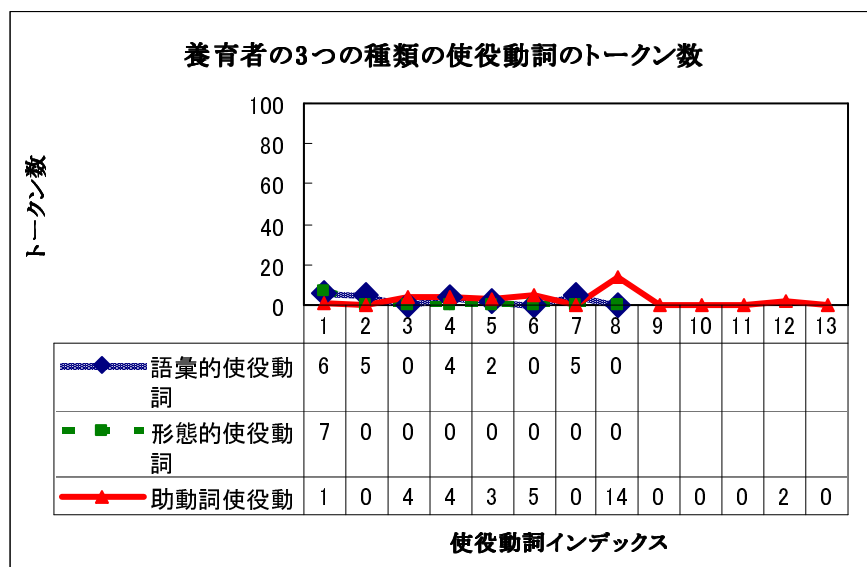


図 14 : Lilia の養育者の 3 つの種類の使役動詞の発話数

2.2. CHILDES データの考察から見えた事実

CHILDESデータの5人のペルシャ語児のデータを考察することによって、子供の初期段階の使役動詞の使用は、非常に項目依拠的であることが言える。Minu (4;1.12~4;7.21)以外の他の4人のペルシャ語児の年齢(1;11.21~3;2)からすると、まだ動詞の島段階であり、使役動詞の使用は、項目依拠的に進んでいる段階である。この4人のペルシャ語児の使役動詞のエラー率が非常に低く、保守的に、聞いたことのある使役動詞のみを発話しているのはそうした理由による。

この4人全員は、形態的使役動詞を未だに生産的には発話出来ず、発話したとしても、一個の形態的使役動詞のみである。従って、36ヶ月以下のペルシャ語児は、形態的使役動詞を完全に習得していないことが分かる。つまり、習得の順序で言うと、一番習得年齢が遅いペルシャ語の使役動詞のグループは、形態的使役動詞であることが言える。

語彙的使役動詞と助動詞使役動詞の習得に関しては、4人の中、一番年齢的に小さい幼児、つまり Shahrzad (1;8~1;10)の場合は、*zæd'hit* という使役動詞の意味を持たない普通の他動詞しか発話していない。更に、数多くの発話は名詞の名前を指す単語で、動詞が抜けている文も多い。従って、1;8~1;10の時期で、全ての使役動詞はまだ発話不可能であることが言える。

次に年齢的に小さい幼児、つまり Lilia(1;11.21~2;0.23) の場合は、1;11.21の年齢で、一番早く発話されたのは、*peidā kærden* 'find' という助動詞使役動詞であった。つまり、助動詞使役動詞と語彙的使役動詞の間では、一番早く、かつ生産的に発話された使役動詞のグループは、助動詞使役動詞であった (最初の語彙的使役動詞は、*ændāxtan* 'drop, throw'(2;0.23)であった。)。もちろん、語彙的使役動詞の使用もその後、増加する一方だが、語彙的使役動詞は、助動詞使役動詞と違い、動詞毎に項目依拠的に1ずつ習得していかないといけない。

Mahdi(2;2~3;0) の場合も、3つの種類の使役動詞の中で発話時期が最も早かったのは、助動詞使役動詞であった。Mahdiは、2歳2ヶ月の時期で、「お母さんがこれを壊したんだよ」という場面

で、*māmān xæāb*⁴¹ *kærd- Ø* 'Mom broken did-3SG = Mom broke it.'という助動詞使役動詞を発話した。最初の語彙的使役動詞は、*ændāxtæn* 'drop, throw' (2;6)であった。

Faeze (2;4~3;2)の場合は、2;4で*boridæn* 'cut'という語彙的使役動詞を他の使役動詞の種類より先に頻繁に発話している。しかしながら、この年齢での語彙的使役動詞の使用は2個の語彙的使役動詞に止まり、スキーマへのアクセスと生産的な発話を意味しない。Faezeは、次に2;7で*surāx kærden* 'hole do = bore a hole'という助動詞使役動詞を高頻度で発話した後に、2;7~3;2の間、11種類の助動詞使役動詞を発話した。従って、一番生産的でしかも時期的にも早かった使役動詞は、助動詞使役動詞であった。

一方、Minu (4;1.12~4;7.21)の年齢からすると、既に動詞の島段階が終わり、3つの使役動詞のスキーマが形成され、過剰一般化が数多く観察されると思われる。実際、データを考察することによっても、この主張が裏付けられた。Minuの場合は、一番エラー率が高い使役動詞の種類は、形態的使役動詞であった。次に、エラーが多かったのは、語彙的使役動詞で、最後に過剰一般化された使役動詞は、助動詞使役動詞であった。これは、まさに、Braine & Brooks (1995)やBrooks *et al.* (1999)が提案した定着仮説に由来する。Minuの過剰一般化を制限したメカニズムとして考えられるのは、定着仮説である。なぜならば、助動詞使役動詞もV語根にαが付与するという意味で、形態的使役動詞と同じく見えるが、幼児の誤用のパターンを決めるのは、動詞の構成の複雑さではなく、その動詞の使用頻度である。ペルシャ語の助動詞使役動詞は、NP/A語根+V語根(使役)という構造を持ち、その中の全てのV語根は、軽動詞であり、非常に早い時期から習得される。従って、非常に早い時期に習得されたV語根に、既に知っている名詞句や形容詞句を付与するという単純なメカニズムによって、様々な使役的な行動が描写される。従って、助動詞使役動詞の誤用率は低くなると考えられる。つまり、軽動詞の習得の利便性は、ここで大きな役割を担っていると言える。

ペルシャ語児5人のデータを全体的に分析したことによって、使役動詞の中で、一番習得時期が遅かったのは、形態的使役動詞であり、また一番エラー率が高かったのも、形態的使役動詞であったことが分かる。語彙的使役動詞と助動詞使役動詞の間でも、習得時期が早く、エラー率が低かったのは、助動詞使役動詞であった。

本章において、CHILDESのペルシャ語児5人のデータしか考察できなかったのも、次章では、ペルシャ語児98人の横断的発話データを考察することによって、同じ傾向が見られるかどうかについて論じる。

⁴¹ *xæāb* は、*xærāb* 'broken'の代わりに使われ、流音[r]が省略されたと思われる。

第3章：ペルシャ語児 98 人(男児 41、女児 57 人) の横断的発話データ

本研究では、前章で紹介した CHILDES における 5 人の縦断的自然発話データの他に、イランで収録した 98 人の横断的発話データを使用する。筆者は 2008 年の 8 月から一ヶ月にわたって、イランの首都であるテヘランにある保育園において、使役動詞全体の誤用のパターンを明らかにする実験を行った。以下では、実験の詳しい内容について述べる。

1.8.1.で示したとおり、ペルシャ語の語彙的使役動詞、形態的使役動詞、助動詞使役動詞（合計で 29 個の動作）の表す行為が含まれる動画を製作し、一ヶ月間にわたって実験を行った⁴²。それぞれの動詞に対応した動作のビデオをペルシャ語児 98 人に見せ、ペルシャ語の使役動詞の習得発達を分析した。子供に実験の方法に慣れさせるために、最初の 4 つの動画では、場面に対応する動詞のすべてを自動詞か使役の意味を伴わない他動詞に設定し（訓化フェーズ）、その後の 29 個の場面を使役動詞で描写できるものにした。更に、その動画に出演する 2 人の女児の名前を子供たちに覚えさせ、刺激提示後は動画の音声を消した上で、「Tolu ちゃんが Taravat ちゃんに何をしたか(tolu *tærāvet-ro* *čikār kerd-ø* ‘Tolu Travat-DO what did-3SG) と尋ね、動作に対応する動詞を産出してもらった。動画で使った最初の 4 つの動詞は「音楽を聴く、歌を歌う、ボールで遊ぶ、テレビを見る」といった動詞であった。実験で使った動画の中で行われている動作に対応する使役動詞は、前章で紹介した 29 個の動詞である。

「A ちゃんが B ちゃんに何をしたか」と訊くことによって、使役動詞が発話不可能な場合、コミュニケーションのプレッシャーの下で、既に知っている形容詞句や名詞句プラス *kærdæn* を発話してしまう恐れがあることは十分考えられる。しかしながら、注目したいのは、全ての年代の子供たちに同じ質問をしたが、使役動詞のスキーマ習得が進んだ年長の子供たちはそれに左右されず、正しい動詞を発話したということである。このことから、質問からの誘導は非常に弱いと思われる。また、ペルシャ語では日本語と同じく、動作を「何」で尋ねられた時に名詞句で答えようとすると、名詞化接辞が必要となり、かえって産出に負担がかかる。したがって、*kærdæn* ‘do, make’を使った使役による答えの場合でも、子供の独自の判断が反映されている可能性が高い。

次節において、98 人のそれぞれの年齢グループの 3 つの使役動詞のエラーパターンやどの年齢でどの使役動詞が既に発話可能であるか等について論じる。

3.1. 2;0.12~2;9.18 児 10 人 (男児 5 人、女児 5 人)

3.1.1. 2;0.12~2;9.18 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

2;0.12~2;9.18 児 10 人のそれぞれの幼児の語彙的使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 12：2;0.12~2;9.18 児の語彙的使役動詞の文法的で場面に合った適切な発話の有無

語彙的使役動詞	Niyayesh	Nima	Amir-Mahdi	Mobina	Diyana	Romina	Amir-Abbas	Fateme	Mohammad-Hossein	Mohammad-Taha
	2;0.12	2;3.3	2;3.12	2;3.27	2;6.8	2;6.14	2;6.18	2;8.7	2;8.26	2;9.18
<i>ændāxtæn</i> ‘drop, throw’	×	×	×	○	○	○	×	×	○	○

⁴² 迂言的使役動詞については今回の実験では扱っていない。これは、ペルシャ語の迂言的使役動詞が会話の中であまり使われていないため、動画にするのは、適切ではないと思われるからである。

<i>bæstæn</i> 'close'	○	×	○	×	○	○	○	○	×	×
<i>boridæn</i> 'cut, slice'	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○
<i>dærāværdæn</i> 'clothes take off = take off one's clothes'	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>kešidæn</i> 'pull'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
<i>rixtæn</i> 'to pour'	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
<i>šekæstæn</i> 'break'	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×

更に、それぞれの幼児の×印によって表示したエラーを表にすると、以下の表13のとおりになる。

表13：2;0.12～2;9.18児のそれぞれの語彙的使役動詞の重要な誤用パターン

Niyayesh 2;0.12 女児	Q: dæftær-o čikār kærð-Θ? note-DO what did-3SG 'What did she do to the note?' A: * dæftær-o oftād- Θ note-DO fell-3SG ændāxtæn 'drop, throw' の代わりに、自動詞 oftādæn 'fall' を発話してしまった。	Q: kākæz-o č čikār kærð-Θ? paper- DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: *kākæz-o boreš kærð-Θ paper- DO cutting did-3SG ----- Q: keik-o č čikār kærð-Θ? cake-DO what did-3SG 'What did she do to the cake?' A: ? keik-o qat? kærð-Θ cake-DO cutting off did-3SG ----- boridæn 'cut, slice' の代わりに、「紙」の場合は、boreš 'cutting' という名詞を使用し、それに kærðæn 'do' を付与することによって、大人の言語にない新しい助動詞使役を作っている。	Q:kāleske-o čikār mi-kon-e? stroller- DO what IMPF-do-3SG 'What is she doing to the storoller?' A: ? ⁴³ dāre mi-ār-e has IMPF-bring-3SG '?She's bringing it.'	Q: mix-o čikār mi-kon-e? nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is she doing to the nail?' A: ?mix-o mi-škun-e nail-DO DUR-break-3SG 'She's breaking the nail.'	
Nima 2;3.3 男児	Q: dæftær-o čikār kærð-Θ? note-DO what did-3SG 'What did she do to the note?' A: ?intori kærð-Θ like this did-3SG '?She did like this.' ----- Nima は、ændāxtæn 'drop' の代わりに、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に intori kærð や "injuri kærð などと発話している。	Nima は、bæstæn 'close' や šekæstæn 'break' の代わりに、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に intori kærð と発話している。	「ケーキ」の場合は、qat?kærðæn 'cutting off' を発話してしまつた。 qat?kærðæn は、「ナイフによって指を切る」や「斧で木を切り落とす」等といった場面で使われる。	Q:lebas-o čikār mi-kon-e? clothes-DO what IMPF-do-3SG 'What is she doing to the clothes?' A: ?bāz mi-kon-e open DUR-do-3SG 'She's opening it.' ----- dærāværdæn 'clothes take off = take off one's clothes' の代わりに、bāz kærðæn 'open' という助動詞使役動詞を発話してしまつた。	kešidæn 'pull'、kubidæn 'to knock, hammer'、rixtæn 'to pour' と šekæstæn 'break' の代わりに、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に intori kærð と発話している。
Amir-Mahdi 2;3.12 男児	Q: dæftær-o čikār kærð-Θ? note-DO what did-3SG 'What did she do to the note?' A: * dæftær-o oftād- eš note-DO fell-3SG ----- Amir-Mahdi も上記の Niyayesh と同様に、ændāxtæn 'drop, throw' の代わりに、自動詞 oftādæn 'fall' を発話してしまった。	Q:lebas-o čikār kærð-Θ ? clothes-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes?' A: *dær-eš umad-Θ off-it came-3SG ----- dærāværdæn 'take off one's clothes' という語彙的使役動詞の助動詞 dærāmæden 'come off' を発話してしまつた。興味深いことには、dær 'off' に目的語、つまり「洋服」を示す -eš 'it' という目的格の人称代名詞を使っているにもかかわらず、複合動詞の「動詞の部分」を自動詞形で発話してしまう。			Q:āb-o čikār kærð-Θ ? water-DO what did-3SG 'What did she do to the water?' A: * :āb-o zæd- Θ water- DO hit-3SG ----- rixtæn 'to pour' という語彙的使役動詞の代わりに、zædæn 'hit' という使役動詞の意味を持たない普通の他動詞を発話している。
Mobina 2;3.27(女児)	bæstæn 'close'、kešidæn 'pull'、kubidæn 'to knock, hammer'、šekæstæn 'break' の代わりに、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に intori kærð や intori intori kærð という反復形を発話している。				

⁴³ 「?」マークは、文法的に問題のない発話だが、意味的におかしい発話であるという意味。

Diyana 2;6.8 女兒	Q: kâqæz-o ċ ċikār kærd-Ø? paper- DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: ?kâqæz-o qeiċi qeiċi kærd-Ø paper- DO scissors scissors did-3SG	Q: kâleske-o ċikār mi-kon-e? stroller- DO what IMPF-do-3SG 'What is she doing to the stroller?' A: ?hol-eš mi-de push-it DUR-give '?She's pushing it.'
<p>日本語の幼児語の動詞の「チョキチョキする」と非常に似ているこの子供独特の動詞であり、大人の母語話者の「ハサミ」の反復形に<i>kærdæn</i>'do'を付与することによって、新動詞を作っている。日本語の場合は、子供へのインプットとして養育者も頻繁に「擬態語+する」を発話するため、日本語児が「擬態語+する」(例えば、チョキチョキする等)を使役動詞として使用するの、それは、それ程珍しいことではないかもしれない。一方で興味深いのは、ペルシャ語の場合にはインプットの中にも存在しないような<i>qeiċi qeiċi kærðæn</i>といった新動詞を子供が自ら発話するという事実である。ペルシャ語の場合を考えると、「形容詞+<i>kærdæn</i>」というスキーマが定着すると、語彙的使役動詞の代わりにこの形を使用する。これは<i>kærdæn</i>を用いた複合動詞の使役スキーマが先行して過剰一般化されるケースと見なすことができる。</p>		
Romina 2;6.14 女兒	Q: kâqæz-o ċ ċikār kærd-Ø? paper- DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: ?kâqæz-o qeiċi qeiċi kærd-Ø paper- DO scissors scissors did-3SG	Q: Q:lebas-o ċikār mi-kon-e? clothes-DO what IMPF-do-3SG 'What is she doing to the clothes?' A: *ævæz kærd-Ø exchange did-3SG '?She change the clothes.'
<p>Diyana と同様</p>		
		<p><i>kešidæn</i> 'pull', <i>kubidæn</i> 'to knock, hammer', <i>rixtæn</i> 'to pour' と<i>šekæstæn</i> 'break'の代わりに、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に <i>intori kærð</i> と発話している。</p>

Amir-Abbas 2;6.18 男児	Q: dæftær-o ċikār kærð-Ø? note-DO what did-3SG 'What did she do to the note?' A: * dæftær-o oftād- Ø note-DO fell-3SG 上記のNiyayesh と同様のパターン	Q: kâqæz-o ċ ċikār kærð-Ø? paper- DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: *kâqæz-o boreš kærð-Ø paper- DO cutting did-3SG 上記のNiyayesh と同様のパターン	<i>kešidæn</i> 'pull'の代わりに、 <i>äværdæn</i> 'bring' という「場」に相応しくない語彙的使役動詞を、 <i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'の代わりに、 <i>šekunden</i> 'break in to pieces' という形態的使役動詞を、 <i>šekæstæn</i> 'break'の代わりに、 <i>kændæn</i> 'pull off' という「場」に相応しくない語彙的使役動詞を使っている。
Fateme 2;8.7 女児	<i>ændäxtæn</i> 'drop, throw' と <i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'の代わりに、使役動詞の意味を持たない普通の他動詞 <i>zæðæn</i> 'hit'を使っている。	Q: kâqæz-o ċikār mi-kon-e? paper- DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the paper?' A: *bā qeiči kâqæz-o mi-kan-e with scissors paper-DO DUR-pull off-3SG Q: keik-o ċ ċikār kærð-Ø? cake-DO what did-3SG 'What did she do to the cake?' A: ?keik-o xurd-eš kærð-Ø cake-DO small-it did-3SG 両方の「場」でも、 <i>boridæn</i> 'cut' という語彙的使役動詞が使えない。	Fateme は、「押す」も「引く」も同じ動詞、つまり <i>hol dādæn</i> 'push' という助動詞使役動詞によって表す。つまり、Fateme の場合は、移動の方向はそれほど重要ではないように見える。 <i>šekæstæn</i> 'break'の代わりに、 <i>kændæn</i> 'pull off' という「場」に相応しくない語彙的使役動詞を使っている。
Mohammad-Hossein 2;8.26 男児	Q: dær-o ċikār kærð-Ø? door-DO what did-3SG 'What did she do to the door?' A: * dær-o bæst-e šod- Ø door-DO c close-part became-3SG <i>bæstæn</i> 'close' という語彙的使役動詞から <i>bæste</i> という過去分詞形を作り、更にそれに <i>šodæn</i> 'become' を付与している。	<i>kešidæn</i> 'pull'の代わりに、 <i>äværdæn</i> 'bring' という「場」に相応しくない語彙的使役動詞を、 <i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'の場合はどんな動詞でも発話されなく、更に、 <i>šekæstæn</i> 'break'の代わりに、 <i>šekānden</i> 'break to pieces' という形態的使役動詞を使っている。	

Mohammad-Taha 2;9.18 男児	<p>Q: dær-o ĕikār kærð-Ø? door-DO what did-3SG 'What did she do to the door?'</p> <p>A: *dær-o bæst-e⁴⁴ kærð-Ø door-DO c closed did-3SG</p> <p>このデータを観察すると、形の上で複雑に見える構文を子供が利用することが分かる。大人の観点から見ると、「閉める」を意味する語彙的使役動詞のほうが「動詞分詞形+kærðæn」の獲得より簡単かと思われる。しかし実際は、ペルシャ語児は2歳を越えると、「形容詞+kærðæn」というスキーマが定着した後に、この形を持たない語彙的使役動詞についても、スキーマを拡張して使用しているのだと考えられる。子供は習得初期には、大人が使っているのを聞いて習得した具体的な言語表現を発話するので、それほど多くの誤りを犯さないが、発達していくにつれ、学習中の言語にはないパターン、例えば、ペルシャ語児の場合は、「形容詞+kærðæn」というスキーマを拡張し、大人の文法には存在しないbæst-e kærðを使う間違いを起こしてしまう。</p>	<p>kubidæn 'to knock, hammer' の代わりに、šekundæn 'break in to pieces' という形態的使役動詞を、kešidæn 'pull' の代わりに、raeftæn 'go' という自動詞を発話している。</p>
-------------------------------	---	--

上記の表13から分かるように、この年齢の幼児は、非常に多くのエラーを犯す。殆どのエラーにおいては、大人の話者が語彙的使役動詞を使うような場面でも助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、大人の言語にもない新しい助動詞使役動詞を産出している。更に、もう一つよく見られたエラーパターンは、インプットの中にも存在しないような *qeiči qeiči kærðæn* 'scissors scissors do' といった新動詞を子供が自ら発話するという事実である。

この点について日本語との比較で考えると、日本語はペルシャ語と比較して擬態語の数が豊富であるため、子供は名前の知らない行為を表すために、「擬態語+する」を使用する（例：ふたを閉めるの意味で「ふたパカンする」と言う。CHILDES では、Miyata-Akiデータ(2:08.24)、Miyata-Taiデータ(1;09.10)、Nojiデータ(1;06)、Ishiiデータ(2;02.20)）。年齢が上がるにつれて、子供は「擬態語+する」の使役動詞の代わりに語彙的使役動詞を使用できるようになる。

しかしながら、ペルシャ語は、日本語と比べ、擬態語の数が非常に少ないので、子供は、「切る」という動詞を知らないか、会話をしている際、「切る」という動詞にアクセスできない場合は、「ハサミ」という既に知っている名詞のみか「ハサミ」という名詞の反復形に習得年齢が非常に早い *kærðæn* を付与することによって、コミュニケーションのプレッシャーから逃れる道を見つけ、自分の意図を聞き手に伝えられる。2;0.12~2;9.18児10人のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合を示すと、以下の図15のとおりになる。

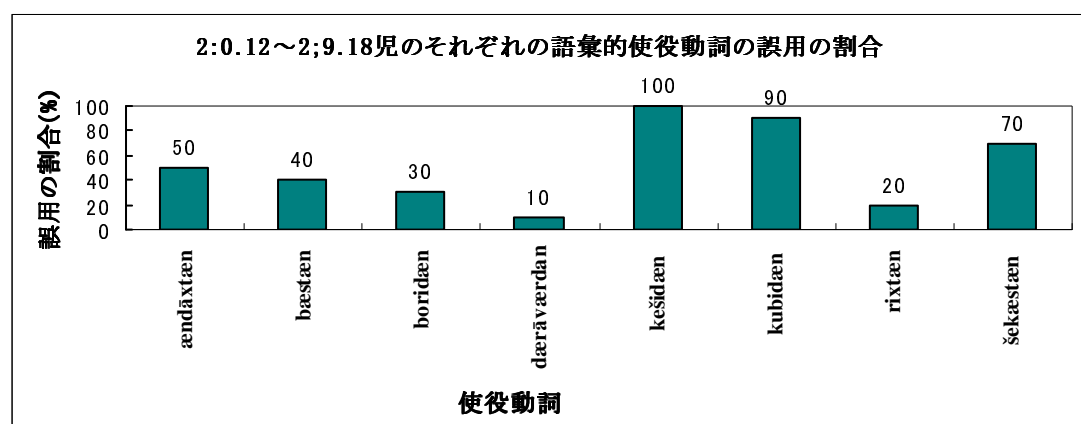


図 15 : 2;0.12~2;9.18 児のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合

⁴⁴ *bæst-e* は、*bæstaæn* という動詞の分詞形から派生した形容詞である。

図 15 から分かるように、この 10 個の語彙的使役動詞の中では、一番誤用の割合が少ない動詞は、*daerāvardan* ‘clothes take off =take off one’s clothes’である。子供は日常の生活の中でかなり複雑な場面を描写したり、要求したりしないといけない。どの子供も、生きていくために、基本的かつ必要不可欠なニーズを何らかの手段によって養育者に要求しないといけないのである。人間の最低限のニーズを述べると、「食事」「衣服」「睡眠」等といったものである。従って、これらの物を手に入れるために、幼児は、非常に早い段階から養育者に対して、如何なる手段（例えば、指差し、泣き声等）によって、要求しないといけない。従って、幼児は、自分の意図を聞き手、つまり養育者に伝えるために、最初のころは、指差しや泣き声によって、時間が立つと共に、言葉を利用していると考えられる。従って、ペルシャ語の *daerāvardan* ‘clothes take off =take off one’s clothes’ という語彙的使役動詞の誤用の割合も、他の動詞の誤用の割合よりかなり少ないのは、子供が非常に早い段階から、養育者に対して、「衣服を着せてくれ」や「衣服を脱がしてくれ」等といった要求を言葉で表現しないといけないからである。つまり、幼児は、動詞を獲得していく上で、項目依拠的に進めていくので、根本的かつ必要不可欠なニーズに関する動詞を非常に早い時期から習得しないといけないのである。従って、大人の自然発話者の立場からすると、*daerāvardan* ‘clothes take off =take off one’s clothes’ も *šekastæn* ‘break’ も同じ語彙的使役動詞のグループに属していても、幼児のニーズからすると、前者の動詞の習得の必要性は、後者の動詞より多い。

もう一つの理由として考えられるのが、動作対象の特定性である。衣服を「脱ぐ」という動作は今回の実験判断に使った他の動作に比べて対象が明確に決まっている。習得初期の幼児が状況依存で言語を習得するという観察に立てば、「脱ぐ」を表す動詞の定着の早さはもっともと言える。

図 15 を考察することによって、この年齢の語彙的使役動詞の誤用の割合は、全体的に高いことが分かる。次に、2;0.12~2;9.18 児のそれぞれの形態的使役動詞の誤用パターン及び考えられる根拠について論じる。

3.1.2. 2;0.12~2;9.18 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無

2;0.12~2;9.18 児のそれぞれの幼児の形態的使役動詞の文法的で場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 14 : 2;0.12~2;9.18 児の形態的使役動詞の文法的で場面に合った適切な発話の有無

形態的使役動詞	Niyayesh	Nima	Amir-Mahdi	Mobina	Diyana	Romina	Amir-Abbas	Fateme	Mohammad-Hosseini	Mohammad-Taha
	2;0.12	2;3.3	2;3.12	2;3.27	2;6.8	2;6.14	2;6.18	2;8.7	2;8.26	2;9.18
<i>čærxāndan</i> ‘turn’	○	×	×	×	×	○	×	×	○	○
<i>česbāndan</i> ‘to stick, to paste up’	×	×	×	×	×	○	×	×	○	○
<i>pušāndan</i> ‘foot do = to put on or wear (on the feet), dress’	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
<i>šekāndan</i> ‘break’	○	×	×	×	×	○	×	○	○	○
<i>terekāndan</i> ‘cause to burst, explode’	×	×	×	×	×	○	×	×	○	○
<i>xābāndan</i> ‘put to sleep’	×	×	×	×	×	○	×	×	○	○
<i>xendāndan</i> ‘make laugh’	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndan</i> ‘feed’	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

表 14 を表 12 と比べてみると、全体的に全ての形態的使役動詞の産出頻度が低いであることが分かる。更に、それぞれの×印の誤用を示すと、以下の表 15 のとおりになる。ここで、2 つの動詞の場合、つまり *pušāndan* 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' と *xorāndan* 'feed' の場合は、年齢が上がっても、上達が見られておらず、CHILDES のデータと一致することが分かる。全ての幼児は、*xorāndan* 'feed' の代わりに、*X mi-de* 'S/he gives something to child' というフレーズを発話し、*pušāndan* 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' の代わりに、*pā mi-kon-e* 'foot DUR-do-3SG = S/he put's on her shoes' というフレーズを発話している。大人の発話者にも、同一の動画を見せた場合は、同じ傾向が見られると思われる。従って、この 2 つの形態的使役動詞は、ペルシャ語に存在するが、実際現代ペルシャ語の話し言葉では使われていないと言える。現代ペルシャ語では、被使役者の意図に反して、「何か美味しくない物や毒や薬等」を誰かに「食べさせる」場合のみ、*xorāndan* 'feed' は、使われる。これは、隠喩の意味を持つ文脈でもよく使われており、実際、イラン・イラク戦争の時も、8 年間の戦争の末、イランの当時の最高指導者、ホメイニ師に、イランの政治家は、戦争の中止を要求したので、「政治家は、ホメイニ師に酒杯にあった毒を食べさせた」⁴⁵ という表現は、よく使われていた。被使役物は、動物の場合も、*xorāndan* 'feed' は使われる。更に、「説教するや宗教上の教え等を誰かに思い込ませる」という状況を描写するためにも、*xorāndan* 'feed' は、使われる。例えば、「イランの学校でイスラム教の教えを無理やり子供たちに思い込ませている」という文章で、*xorāndan* 'feed' は使われる。より正確な議論のためには、ペルシャ語の大人の発話者のこの 2 つの動詞の使用頻度を考察すべきであろう。勿論、この年齢の中には、*pušāndan* 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' の代わりに、*pā mi-kon-e* 'foot DUR-do-3SG = S/he put's on her shoes' ではなく、*pušiden* 'put on' という自動詞を誤って発話している幼児もいる。以下において、それぞれの誤用のパターンを詳しく見ていく。

表15：2;0.12～2;9.18児のそれぞれの形態的使役動詞の重要な誤用パターン

<p>Niyayesh 2;0.12 女児</p>	<p>Q: bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A: ? bādkonæk-o bād-eš kærð-Ø balloon-DO air-it did-3SG 'She blows up the balloon.'</p> <p>なぜ「風船を割る」というシーンを見て、「風船を膨らませた」という発話をしているか、かなり興味深い。</p>	<p>Q: xāle dāre nini-ro ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: ? xāle dāre nini-ro lālā mi-kon-e young lady is baby-DO lullaby DUR-do-3SG</p> <p><i>xābāndan</i> 'put to sleep' の代わりに、「ねんねする」という幼児語をそれも自動詞のまま、発話している。</p>	<p>Q: xāle dāre kærš-hā-š-o ċikār mi-kon-e lady is shoe-PL-her-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to her shoes?' A: * xāle dāre kærš-o mi-puš-e lady is shoe-DO DUR-put on-3SG</p> <p>形態的使役動詞の代わりに、自動詞を使用している。</p>
<p>Nima 2;3.3 男児</p>	<p>Q: bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A: * bādkonæk-o šekæst- Ø balloon-DO broke-3SG *She broke the balloon.'</p> <p><i>terekāndan</i> 'cause to burst, explode' という形態的使役動詞の代わりに、<i>šekæstæn</i> 'break' という語彙的使役動詞を使っている。</p>	<p>Q: šišæ-ro ċikār kærð-Ø? glass-DO what did-3SG 'What did she do to the glass?' A: * šišæ-ro suz-und-eš glass-DO burn-CAUS-3SG *She burnt the glass'</p> <p><i>šekāndan</i> 'break' の代わりに、<i>suzāndan</i> 'set fire to something, burn' という「場」に相応しくない形態的使役動詞を発話している。</p>	<p>他の動詞の場合は、語彙的使役動詞同様、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に <i>intori kærð</i> と発話している。</p>

⁴⁵ 現代ペルシャ語の口語では、「食べる」と「飲む」は区別されておらず、「水を食べる」と発話される。もちろん、ペルシャ語にも *nušiden* 'drink' という普通の他動詞とその形態的使役動詞 *nušāndan* 'give somebody a drink' が存在するが、口語では使用されない。

Amir-Mahdi 2;3.12 男児	Q: bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG A: *bādkonæk-o borid- Ø balloon-DO cut-3SG *She cut off the balloon.'	Q: xāle dāre nini-ro ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: ? xāle dāre nini-ro pišpiš ⁴⁶ -lālā mi-kon-e young lady is baby-DO lullaby DUR-do-3SG	Q: xāle dāre kæfš-hā-š-o ċikār kærð-Ø? lady is shoe-PL-her-DO what did-3SG 'What did the young lady do to her shoes?' A: *kæfš-o pušid- Ø shoe-DO put on-3SG
	この場合は、 <i>terekānden</i> という形態的使役動詞の代わりに「場」に相応しくない語彙的使役動詞 <i>boriden</i> 'cut'が使われている。この子の場合は、 <i>boriden</i> 'cut'の語彙的使役動詞は、使役行為の原因となる道具や行為のやり方に関係なく、かなり幅広い「場」で使われていることが言える。	<i>xābānden</i> 'put to sleep'の代わりに、「ねんねする」という幼児語をそれも自動詞のまま、発話している。	使役動詞の代わりに、自動詞が使われている。
Mobina 2;3.27 女児	Q: bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A: *bādkonæk-o šekæst- Ø balloon-DO broke-3SG *She broke the balloon.'	Q: juje-hā-ro be kākæz ċikār mi-kon-an? chick-PL-DO to paper what DUR-do-3PL 'What are they doing on the chick's stick to the paper?' A: *juje-hā-ro be kākæz mi-čæsp-e chick- PL-DO to paper DUR-stick-3SG	Q: xāle dāre kæfš-hā-š-o ċikār mi-kon-e lady is shoe-PL-her-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to her shoes?' A: * xāle dāre kæfš-hā-š-o mi-puš-e lady is shoe-PL-her-DO DUR-put on-3SG
	形態的使役動詞の代わりに、「場」に相応しくない語彙的使役動詞を使用している。	使役動詞の代わりに自動詞を使用している。	形態的使役動詞の代わりに、自動詞を使用している。
Diyana 2;6.8 女児	Q: bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A: *bādkonæk-o terekid- Ø balloon-DO burst-3SG 形態的使役動詞の代わりに、自動詞をそのまま発話している。	Q: juje-hā-ro be kākæz ċikār mi-kon-an? chick-PL-DO to paper what DUR-do-3PL 'What are they doing on the chick's stick to the paper?' A: *juje-hā-ro be kākæz mi-kār-e chick-PL-DO to paper DUR-plant-3SG 'She plants the chick's stick in the paper.' 「付ける」という動詞の代わりに、なぜ「植える」という動詞を発話しているかかなり興味深い。	Q: xāle dāre nini-ro ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: *derāz derāz mi-d-e long long DUR-give-3SG A: *lālā mi-d-e lullaby DUR-give-3SG Diyanaは、2つの発話をしている。両方も、「擬態語+ <i>dāden</i> 'give'」という構文である。「横になる」という文は、口語では、 <i>derāz kešiden</i> 'lie pull= lie down'になるが、Diyanaは、この発話の中の <i>derāz</i> という部分を取り、 <i>dāden</i> 'give'という軽動詞に付与することによって、自分なりの使役動詞を作っていると考えられる。
Romina 2;6.14 女児	Q: xāle dāre kæfš-hā-š-o ċikār mi-kon-e? lady is shoe-PL-her-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to her shoes?' A: xāle dāre kæfš-hā-š-o pā-š mi-kon-e young lady is shoe-PL-her-DO foot-her DUR-do-3SG Rominaは、 <i>pušānden</i> の代わりに <i>pā kærde</i> 'foot do = put on somebody's shoes on her/his foot'を発話している。しかしながら、 <i>pā kærde</i> は、子供の言語だけではなく、大人の発話者の言語でもかなり頻繁に使われている動詞なので、エラーとして考えられない。	Q: xiyār-o bā čāqu ċikār kærð-Ø? cucumber-DO with knife what did-3SG A: *šekund-eš break-it	Rominaは、 <i>xurd kærden</i> 'mince' という助動詞使役動詞が望まれる「場」で、形態的使役動詞 <i>šekānden</i> 'break'を発話している。「みじん切りにする」と「粉々にする、割る」の意味の間にどういう類似性があるのかは、興味深い。
Amir-Abbas 2;6.18 男児	Q: bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A: ?kučik mi-kon-e little DUR-do-3SG 'She makes the balloon small.'	Q: xāle dāre nini-ro ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: * xāle dāre nini-ro mi-xāb-e young lady is baby-DO DUR-sleep-3SG '*The young lady is sleeping teh baby.'	Q: juje-hā-ro be kākæz ċikār mi-kon-an? chick-PL-DO to paper what DUR-do-3PL 'What are they doing on the chick's stick to the paper?' A: ?juje-hā-ro be kākæz mi-zæn-e chick-PL-DO to paper DUR-attach-3SG 'She attaches the chick's stick to the paper.' <i>čæsbānden</i> という形態的使役動詞の代わりに、ベルシャ語の軽動詞の1つである <i>zæden</i> を使用している。

⁴⁶ *pišpiš* は、「母親が赤ちゃんを寝かせる時に使う」オノマトペである。

Fateme 2;8.7 女兒	Q: bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A: *surāx kærð-Ø hole did-3SG 'She made a hole to the balloon.' ----- terekāndanの代わりに、surāx kærðæn'make a hole'という助動詞 使役動詞を発話している。	Q: xāle dāre nini-ro ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: ? xāle dāre nini-ro lālā mi-kon-e young lady is baby-DO lullaby DUR-do-3SG ----- xābāndan'put to sleep'の代わりに、「ねんねす る」という幼児語をそれも自動詞のまま、発 話している。	Q: færmun-e māšin-o ċikār mi-kon-e? steering wheel-DO car-DO what DUR-do-3SG 'What is she doning to the steering wheel?' A: ?intori mi-kon-e like this DUR-do-3SG ----- 自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャー でやって見せ、同時に intori kærðと発話してい る。
Mohammad- Hossein 2;8.26 男児	Mohammad-Hosseinは、xændāndan'make laugh'のことをqelqelæk dādan'tickle'と発話し、xorāndan'feed'をqæzā dādan'give food = feed'と発話している。この2つの動詞が発話されなかったのは、実験で使われた動画に原因があると考えられる。		
Mohammad- Taha 2;9.18 男児	Q: Q: xāle dāre kærš-hā-š-o ċikār mi-kon-e? lady is shoe-PL-her-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to her shoes?' A: * xāle dāre kærš-hā-š-o tæñ-eš mi-kon-e lady is shoL-her-DO body-her DUR-do-3SG ----- 「服」である場合は、形態的使役動詞pušāndanの他 に、tæn kærðæn'body do =dress up'も使われる。しか しながら、「靴」や「靴下」の場合は、tæn kærðæn'body do =dress up'の代わりにpā kærðænが使われる。'	Mohammad-Tahaの誤用数は、他の幼児より遥かに少ない。しかしながら、この子 も、「笑わせる」や「食べさせる」という形態的使役動詞が発話出来なかった。 原因の1つとして考えられるのは、実験で使われた動画はあまり良くなかったこ とにあると言える。「笑わせる」という動詞は、どの言語でも、間接的かつ精神 的な衝撃による行為を指し、従って、動画で使用したシーン、つまり「1人の女 児の子がもう1人の女の子を直接的に搦って、笑わせる」というシーンは、こ の動詞を発話してもらうために、そもそも相応しくなかったと言える。「食 べさせる」の場合も、子供のみならず、大人の言語でも実際それ程、使われてい ないと言える。この主張を証明するために、大人の自然発話者の動詞の使用 頻度を考察する必要がある。	

興味深いのは、数多くの幼児は、xābāndan'put to sleep'という形態的使役動詞の代わりに、「幼児語lālā（ネンネ）+する/やる/あげる」を使っていることである。日本語の場合も、CHILDESデータの中のIshiiデータのJunの発話を考察してみると、ペルシャ語の幼児と全く同じ傾向が見られる。Junも「寝かせる」という形態的使役動詞が必要な「場」において、「ねんねする」を「寝かせる」という使役動詞の意味で使用している。ペルシャ語児の発話の中には、lālā kærðænという「幼児語+軽動詞」が存在するが、この動詞は自動詞の意味しか持たない。このことをもう既に知っているペルシャ語児は、可能な表現を探し、結果として「lālā+dādan 'give'」を使役動詞として発話してしまう。「*ネンネあげる（やる）」という発話は、ペルシャ語児特有の発話であり、日本語児の発話データには見られない。

2:0.12~2;9.18 児 10 人のそれぞれの形態的使役動詞の誤用パーセント示すと、以下の図 16 のとおりになる。

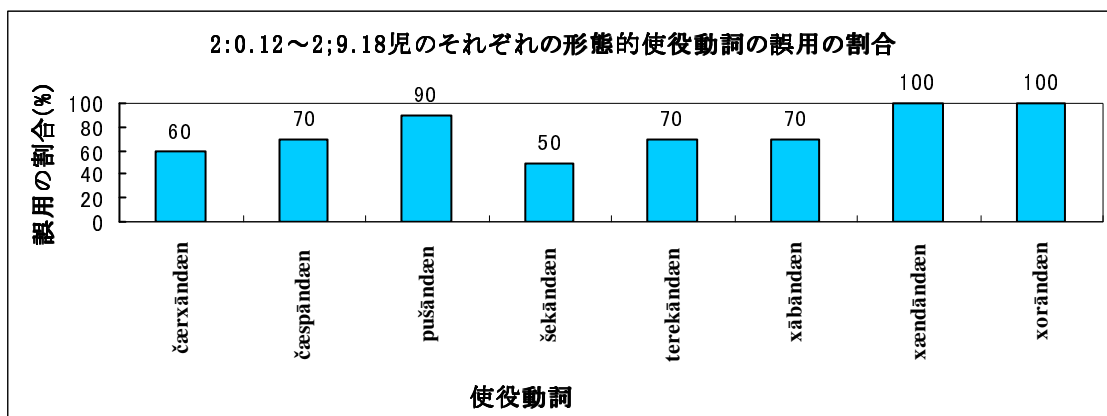


図 16 : 2:0.12~2;9.18 児のそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合

図 15 を図 16 と比べると、全体的に形態的使役動詞の誤用数は、語彙的使役動詞の誤用数より高いことが言える。殆どの形態的使役動詞が発話出来ず、やっと 2;6 以上になる段階でいくつかの形態的使役動詞が発話出来るようになる。これは、CHILDES のデータの傾向と全く一緒である。勿論、ここで例外もある。それは、Niyayesh(2;0.12, 女児)である。Niyayesh の場合は、2 つの形態的使役動詞が発話可能であった。しかしながら、他の幼児の場合は、形態的使役動詞は、未だに発話不可能であり、Niyayesh の場合も、2 つの産出しかないのので、これもまた動詞の習得は、項目依拠的に進んでいくという主張の証である。全ての形態的使役動詞は、発話可能になるのは、2;8 の時期である。次に、2;0.12~2;9.18 児のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用パターン及び考えられる根拠について論じる。

3.1.3. 2;0.12~2;9.18 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

2;0.12~2;9.18 児のそれぞれの幼児の助動詞使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 16 : 2;0.12~2;9.18 児の助動詞使役動詞の文法的で場面に合った適切な発話の有無

助動詞使役動詞	Niyayesh	Nima	Amir-Mahdi	Mobina	Diyana	Romina	Amir-Abbas	Fateme	Mohammad-Hosseini	Mohammad-Taha
	2;0.12	2;3.3	2;3.12	2;3.27	2;6.8	2;6.14	2;6.18	2;8.7	2;8.26	2;9.18
<i>bāz kærden</i> 'open do = open'	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
<i>bidār kærden</i> 'awake make = awaken'	○	×	○	×	×	○	×	○	○	○
<i>bolænd kærden</i> 'high make = to lift'	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
<i>fut kærden</i> 'puff do = to blow out'	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dāden</i> 'push give = to push'	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×
<i>nešān dāden</i> 'sign give = show'	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×
<i>pāre kærden</i> 'piece make = to tear'	○	×	×	×	×	○	×	○	○	○
<i>pært kærden</i> 'thrown down make = to throw'	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×
<i>pust kærden</i> 'skin peel = peel, pare'	×	×	×	○	○	○	○	○	×	×
<i>šut kærden</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball'	○	×	×	×	×	×	○	○	×	×
<i>tæmiz kærden</i> 'clean make = to clean'	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xāmuš kærden</i> 'silent, off make = blow out, extinguish'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xord kærden</i> 'small make = chop, cut'	○	×	○	×	○	×	×	○	○	○

助動詞使役動詞は、語彙的使役動詞や形態的使役動詞と違い、非常に早い時期から、生産的に発話されている。しかしながら、このタイプの使役動詞でも、多少の誤用が生じる。それぞれの幼児の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 17 のとおりになる。

表 17 : 2:0.12~2:9.18 児のそれぞれの助動詞使役動詞の重要な誤用パターン

<p>Niyayesh (2;0.12) 女児</p>	<p>Q:māšin-o čikār kærð-Ø? car-DO what did-3SG 'What did she do to the toy car?' A: ?bālā bord- Ø up take-3SG 文字通りの意味: 'she raised the toy car.'</p> <hr/> <p><i>bālā borden</i>'raise'は、「物価」や「声等」といった対象物の場合は、使用されるが、「ある物体の場所を変える」といった物理的な移動の場合は、使用不可能である。</p>	<p>Q:kiwi-o dāre čikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the Kiwi fruit?' A: *kiwi-ro boreš mi-kon-e kiwi-DO cutting DUR-do-3SG 'She makes cutting to the kiwi.'</p> <hr/> <p>Niyayeshは、幅広く様々な動詞の場合は、<i>boreš kærden</i>という自分独特の助動詞使役動詞を使用している。要するに、<i>pust kænden</i>'skin peel = peel, pare'が望まれる「場」においては、<i>boriden</i>'cut'という語彙的使役動詞を使用したがつているが、<i>boriden</i>'cut'が発話不可能なため、形成した助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、<i>boreš kærden</i>というという大人の自然発話者の言語にもない動詞を形成する。</p>	<p>Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?kāleske-ro mi-bær-e stroller-DO DUR-take-3SG 'She is carrying away the toy stroller.'</p> <hr/> <p><i>hol dādæn</i>'push give = to push'の代わりに、単純に<i>borden</i>という語彙的使役動詞を使っている。</p>
<p>Nima (2;3.3) 男児</p>	<p>Q:kiwi-o dāre čikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the Kiwi fruit?' A: ? dāre mi-bor-re is DUR-cut-3SG 'She is cutting the kiwi.'</p> <hr/> <p><i>pust kænden</i>'skin peel = peel, pare'が望まれる「場」で、<i>boriden</i>'cut'という語彙的使役動詞を発話している。</p>	<p>Nimaは、様々な助動詞使役動詞の代わりに、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に <i>intori kærð</i>と発話している。</p>	
<p>Amir-Mahdi (2;3.12) 男児</p>	<p>Q:dær-ro čikār mi-kon-e door-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the door?' A: * dær-ro bāz mi-d-e door-DO open DUR-give-3SG 文字通りの意味: 'She is giving the door open.'</p> <hr/> <p><i>bāz kærden</i>の<i>kærden</i>の部分で、<i>dādæn</i>'give'という軽動詞と変え、新動詞を作っている。</p>	<p>Q:kāqæz-o čikār kærð-Ø? paper-DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: kāqæz-o borid- Ø paper-DO cut-3SG 'She cut the paper.'</p> <hr/> <p><i>pāre kærden</i>'piece make = to tear' という助動詞使役動詞が望まれる「場」でも、<i>boriden</i>'cut'は使われている。従って、Rominaにとって、「ハサミ」も「手」も全く一緒に、使役行為の道具は、「場」を描写するときに、重要ではないように見える。</p>	
<p>Mobina (2;3.27) 女児</p>	<p>Q:kāqæz-o čikār kærð-Ø? paper-DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: * kāqæz-o kænd-Ø paper-DO pull off-3SG 'She pulled off the paper.'</p> <hr/> <p><i>pāre kærden</i>'piece make = to tear'が望まれる「場」において、<i>kændæn</i>'pull off'という語彙的使役動詞が使われている。</p>	<p>Q: xiyar-o bā čāqu čikār kærð-Ø? cucumber-DO with knife what did-3SG 'What did she do to the cucumber with the knife?' A: intori intori kærð-Ø like this like this did-3SG 'She did like this, like this.'</p> <hr/> <p>自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に <i>intori kærð</i>と発話している。</p>	
<p>Diyana (2;6.8) 女児</p>	<p>Q:kāqæz-o čikār kærð-Ø? paper-DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: intori kærð-Ø like this did-3SG 'She did like this.'</p> <hr/> <p>自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に <i>intori kærð</i>と発話している。</p>	<p>Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-an? stroller-DO is what DUR-do-3PL 'What are they doing to the toy stroller?' A: intori mi-kon-an stroller-DO DUR-do-3PL 'They are doing like this.'</p> <hr/> <p>自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に <i>intori kærð</i>と発話している。</p>	

<p>Romina (2;6.14) 女兒</p>	<p>Q: bā qeīci kākəz-o ċikār kərd-Ø? with scissors paper-DO what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A: * bā qeīci pāre kərd-Ø with scissors ragged did-3SG 'She ragged the paper with the scissors.' ----- <i>boriden</i> 'cut' という語彙的使役動詞が望まれる「場」でも、<i>pāre kərdæn</i> 'piece make = to tear' は使われている。従って、Rominaにとって、「ハサミ」も「手」も全く一緒に、使役行為の道具は、「場」を描写するときに、重要ではないかのように見える。</p>	<p>Q: xiyar-o bā ċāqu ċikār kərd-Ø? cucumber-DO with knife what did-3SG 'What did she do to the cucumber with the knife?' A: * xiyar-o šekund-eš cucumber-DO break-it 文字通りの意味: 'She broke the cucumber.' ----- <i>xord kərdæn</i> 'small make = chop, cut' の代わりに、<i>šəkāndæn</i> 'break' という形態的使役動詞を使用している。</p>
<p>Amir-Abbas (2;6.18) 男児</p>	<p>Q: kākəz-o ċikār kərd-Ø? paper-DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: intori kərd-Ø like this did-3SG 'She did like this.' ----- 自ら表現したい動詞が表す行為を ジェスチャーでやって見せ、同時に <i>intori kərd</i> と発話している。</p>	<p>Q: nini xāhær-eš-o ċikār kərd-Ø? girl sister-her-DO what did-3SG 'What did the girl do to her sister?' A: * xāhær-eš-o bolænd šod-Ø sister-her-DO up became-3S 文字通りの意味: 'She got up her sister.' ----- 自動詞が使われている。</p>
<p>Fateme (2;8.7) 女兒</p>	<p>Q: keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: ?keik-o xurd-eš mi-kon-e cake-DO small-it DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She minced the cake.' ----- <i>boriden</i> 'cut' という語彙的使役動詞が望まれる「場」でも、Fatemeは、助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、誤用を犯している。</p>	<p>Q: ketāb-o dāre be xāhær-eš ċikār mi-kon-e book-DO is to sister-her what DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'What is she doing to the book to her sister?' A: intori mi-kon-e like this DUR-do-3SG 'She is doing like this.' ----- 従って、語彙的使役動詞や形態的使役動詞のみならず、知らない助動詞使役動詞の場合でも、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に <i>intori kərd</i> と発話している。</p>
<p>Mohammad-Hossein (2;8.26) 男児</p>	<p>Q: kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?kāleske-ro mi-bær-e birun stroller-DO DUR-take-3SG out 'She is carrying away the toy stroller.' ----- <i>hol dāden</i> 'push give = to push' の代わりに、単純に <i>borden</i> という語彙的使役動詞を使っている。上記の Niyayesh と全く一緒である。</p>	<p>Q: tupp-o ċikār kərd-Ø? ball-DO what did-3SG 'What did she do to the ball?' A: ændāxt-Ø bærā-ye xāhær-eš throw-3SG dor-Ez sister-her 'She threw the ball to her sister.' ----- <i>pært kərdæn</i> 'thrown down make = to throw' の代わりに、<i>ændāxtæn</i> 'throw' という語彙的使役動詞を使用している。</p>
<p>Mohammad-Taha (2;9.18) 男児</p>	<p>Q: kivi-o dāre ċikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the Kiwi fruit?' A: ? dāre mi-bor-re is DUR-cut-3SG 'She is cutting the kiwi.' ----- <i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare' が望まれる「場」で、<i>boriden</i> 'cut' という語彙的使役動詞を発話している。従って、Mohammad-Taha の場合は、使役行為を引き起こす道具のみが重要で、使役行為の方法はあまり重要ではないことが言える。「皮を剥く」という「場」も「ナイフ」という使役行為の道具となるものは、「ナイフで切る」という「場」と一緒であるので、同一の動詞、つまり <i>boriden</i> 'cut' が使われている。つまり、<i>boriden</i> 'cut' の意味は、Mohammad-Taha の場合は、非常に幅広い。</p>	<p>Q: kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?kāleske-ro mi-bær-e stroller-DO DUR-take-3SG 'She is carrying away the toy stroller.' ----- <i>hol dāden</i> 'push give = to push' の代わりに、単純に <i>borden</i> という語彙的使役動詞を使っている。上記の Niyayesh と全く一緒である。</p>

誤用の中で一番興味深かったのは、Romina (2;6.14) のケースである。Romina は、*xord kərdæn* 'small

make = chop, cut'の代わりに、*šekāndaen* 'break' という形態的使役動詞を使用している。つまり、この子の場合は、「粉々にする」か「みじん切りにする」かは同一の動詞で描写されている。これは今まで見てきた誤用と大きく異なる。なぜならば、多くの幼児は、形態的使役動詞や語彙的使役動詞の代わりに助動詞使役動詞を産出してしまうが、Niyayesh の場合は、その逆の誤用パターンが見られる。2:0.12～2:9.18 児 10 人のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合を示すと、以下の図 17 のとおりになる。

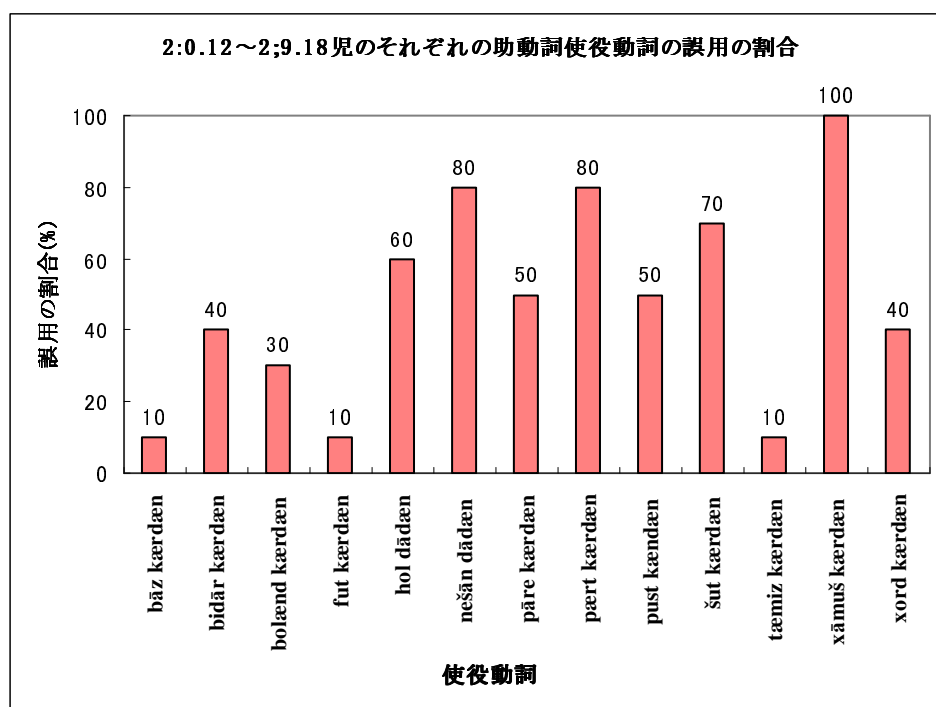


図 17 : 2:0.12～2:9.18 児のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合

図 17 から分かるように、助動詞使役動詞の中で一番エラー率が多かったのは、*xāmuš kærdaen* 'silent, off make = blow out, extinguish' である。全ての幼児は、この動詞の代わりに、*fut kærdaen* 'puff do = to blow out' を発話してしまった。後者の動詞の中では、使役行為の結果の状態は、含意されていない。一方、前者の動詞の方は、結果の状態、つまり「蠟燭の炎が消された状態」は含意されている。つまり、*šæm-o fut kærdaen æmā šæm xāmuš næ-šod-θ* 'candle-DO puffing did-1SG but candle extinguished not-became-3SG' とは言えるが、*šæm-o xāmuš kærdaen æmā šæm xāmuš næ-šod-θ* 'candle-DO distinguished did-1SG but candle extinguished not-became-3SG' とは言えない。要するに、*fut kærdaen* は、ただの「息をふうふうと蠟燭に吹きかける」という意味であるが、*xāmuš kærdaen* は、「蠟燭を吹き消す」という意味である。しかしながら、全ての幼児は、結果の意味を念頭に置かず、全員 *fut kærdaen* 'puff do = puff' を発話している。この動詞を発話してもらうためには、「ケーキの蠟燭の炎を消す」という動画ではなく、「テレビを消す」や「部屋の電気を消す」といった動画の方が、効果的であったかもしれない。本実験では、同一の動画を、2 個の助動詞使役動詞のために使っているため、望ましい結果が出てこなかった。

図 15～17 を比較してみると、2:0.12～2:9.18 児の使役動詞の中で一番エラー率が高かったのは、

形態的使役動詞であることが分かる。語彙的使役動詞と助動詞使役動詞の誤用率の間では、大した差が見られなかった。更に、もう一つ言えるのは、この年齢ゾーンで一番年齢的に小さい幼児、つまり Niyayesh (2;0.12) の場合は、3 つの種類の使役動詞の間で一番発話頻度が多かったのは、助動詞使役動詞であったということである。この幼児の場合は、2 つの形態的使役動詞しか発話されておらず、未だに形態的使役動詞のスキーマは、形成されていないと言える。年齢が 2;6.14 になると、やっと、形態的使役動詞が数個観察された。従って、形態的使役動詞の習得は、他の 2 つの使役動詞と比べ、かなり遅れていると言える。

この年齢の幼児の全てに見られた重要なストラテジーは、名前の知らない使役動詞の場合、必ず自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kerd* と発話しているということである。このような発話には特別な時期等がなく、同じグループの使役動詞に属する他の動詞を発話していると同時にこのような発話もしている。Fateme は、実験で使った殆どの助動詞使役動詞は発話出来たが、一つの助動詞使役動詞、つまり訊かれた動詞を知らないか、質問されたそのときに、コミュニケーションのプレッシャーでその動詞が思い出せない場合は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kerd* と発話している。

3.2. 3;0.0~3;10.2 児 22 人 (男児 9 人、女児 13 人)

3.2.1. 3;0.0~3;10.2 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

3;0.0~3;10.2 児 22 人、それぞれの幼児の語彙的使役動詞の文法的で場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 18 : 3;0.0~3;10.2 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

語彙的 使役動詞	Mohsen	Hannane	Tina	Mahbod	Mehrzad	Nima	Zeinab	Amir- Ali	Amir- Hossein	Negar	Mohaddese
	3;0.0	3;0.8	3;1.27	3;2.10	3;3.1	3;3.8	3;3.17	3;3.17	3;4.5	3;5.2	3;5.11
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw'	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bāstæn</i> 'close'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>boriden</i> 'cut, slice'	○	×	○	×	○	×	○	×	×	○	×
<i>Dārāverdan</i> 'take off one's clothes'	×	×	×	○	×	×	○	○	○	×	○
<i>kešiden</i> 'pull'	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
<i>kubiden</i> 'to knock, hammer'	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>rixten</i> 'to pour'	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
<i>šekāstæn</i> 'break'	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○

語彙的 使役動詞	Mohammad -Hossein	Amir- Salar	Mohammad -Ali	Mona	Mobina	Arash	Erfan	Bahare	Elahe	Melika	Fateme
	3;5.25	3;6.0	3;6.16	3;6.19	3;6.27	3;7.0	3;7.27	3;8.5	3;8.24	3;9.17	3;10.2
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw'	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
<i>bāstæn</i> 'close'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>boriden</i> 'cut, slice'	×	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○
<i>dārāverdan</i> 'clothes take off = take off one's clothes'	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○

<i>kešidæn</i> 'pull'	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
<i>rixtæn</i> 'to pour'	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o
<i>šekæstæn</i> 'break'	o	x	o	o	o	o	o	o	x	o	o

3;0.0～3;10.2 児も 2;0.12～2;9.18 児と全く同じく、1 人の幼児以外は、*kešidæn* 'pull' と *kubidæn* 'to knock, hammer' は、発話出来ていない。それぞれの幼児の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 19 のとおりになる。

表 19 : 3;0.0～3;10.2 児のそれぞれの語彙的使役動詞の重要な誤用パターン

Mohsen 3;0.0 男児	Q: lebās-e arusæk-o čikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: ?loxt-eš kærð-Ø nude-it did-3SG 'She did it nude.'	Q: æmu dāre mix-o čikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: *dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
	<i>dærāværdan</i> 'clothes take off = take off one's clothes' の代わりに、 <i>loxt</i> 'nude' という形容詞に <i>kærðæn</i> 'do' を結合することによって、この「場」を描写している。	<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' の代わりに、形態的使役動詞 <i>šekāndæn</i> 'break' を発話している。
Hannane 3;0.8 女児	Q: lebās-e arusæk-o čikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: ?pušid-Ø 'She wore.'	Q: kākæz-ro bā qeīči čikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A: ?pāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'
	<i>dærāværdan</i> 'clothes take off = take off one's clothes' の代わりに、 <i>pušidæn</i> 'wear' をそのまま自動詞の形で使用している。	
Tina 3;1.27 女児	Q: lebās-e arusæk-o čikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: lebās-eš-o ævæz kærð-Ø clothes-it-DO change did-3SG	Q: āb-o čikār kærð-Ø? water-DO what did-3SG 'What did she do to the water?' A: ?? āb-o ændāxt-Ø ru zæmin water-DO fell-3SG on floor
Mahbod 3;2.10 女児	Q: kākæz-ro bā qeīči čikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A: ?pāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q: kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?mi-bær-e æqæb DUR-take-3SG back 'She takes it back.'
Mehrza 3;3.1 女児	Q: lebās-e arusæk-o čikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: ?loxt-eš kærð-Ø nude-it did-3SG 'She did it nude.'	Q: æmu dāre mix-o čikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: *dāre guškub mi-zæn-e is beetle ⁴⁷ DUR-hit-3SG 文字通りの意味: 'She is hitting it with beetle.'
	<i>dærāværdan</i> 'clothes take off = take off one's clothes' の代わりに、 <i>loxt</i> 'nude' という形容詞に <i>kærðæn</i> 'do' を結合することによって、この「場」を描写している。	質問に「釘に何をしているか?」とちゃんと被使役物も質問に入っているため、 <i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' という答えが期待されているが、「叩く」という使役の意味を持たない軽動詞を発話している。

⁴⁷ 肉をたたきつぶす大槌のこと。

Nima 3;3.8 男児	Q:šišē-ro ċik ār kærð-Ø? glass-DO what did-3SG 'What did she do to the glass?' A:*šekæste kærð-Ø broken did-3SG	Q:kāqæz-ro bā qeiči ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔpāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'
	šekæstæn'break'という語彙的使役動詞の過去分詞をkærðæn'do'に結合することによって、大人の母語話者の言語にも存在しない、全く新しい動詞を形成している。	
Zeinab 3;3.17 女児	kešidæn'pull'とkubidæn'to knock, hammer'は、発話されていない。	
Amir-Ali 3;3.17 男児	Q: Q:kāqæz-ro bā qeiči ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔ qeiči kærð-Ø scissors did-3SG 'She scissored it.'	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:*æqæb mi-kon-e back DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She does ut back.' kešidæn'pull'の代わりに、æqæb'back'という形容詞にkærðæn'do'を結合することによって、大人の母語話者の言語にも存在しない、全く新しい動詞を形成している。
Amir-Hossein 3;4.5 男児	Q:kāqæz-ro bā qeiči ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔpāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q:keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A:ʔkeik-o xurd-eš mi-kon-e cake-DO small-it DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She minced the cake.'
	boridæn'cut'という語彙的使役動詞が望まれる「場」でも、pāre kærðæn'piece make = to tear'は使われている。従って、Amir-Abbasにとって、「ハサミ」も「手」も全く一緒に、使役行為の道具は、「場」を描写するときに、重要ではないかのように見える。	boridæn'cut'という語彙的使役動詞が望まれる「場」でも、Amir-Hosseinは、助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、誤用を犯している。
Negar 3;5.2 女児	Q:lebās-e aruṣæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A:ʔlebās-eš-o værdāšt-Ø clothes-Ez take up-3SG 文字通りの意味: 'She took up its cloths.'	
Mohaddese 3;5.11 女児	Q:kāqæz-ro bā qeiči ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔpāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'
	どうもMohaddeseにとっては、「引く」も「押す」も同じ概念に見えているようである。両方の動詞を「押す」によって、現す。従って、移動動詞の移動の方向に関係なく、1つの動詞が使われている。	
Mohammad-Hossein 3;5.25 男児	Q:kāqæz-ro bā qeiči ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔpāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔmi-bær-e æqæb DUR-take-3SG back 'She takes it back.'
Amir-Salar 3;6.0 (男児)	kešidæn'pull'とkubidæn'to knock, hammer'は、発話されていない。	
Mohammad-Ali 3;6.16(男児)	kešidæn'pull'とkubidæn'to knock, hammer'は、発話されていない。	

Mona 3;6.19 女兒	Q: lebās-e arusæk-o ģikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: lebās-eš-o ævæz kærð-Ø clothes-it-DO change did-3SG	Q: æmu dāre mix-o ģikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: *dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
Mobina 3;6.27 女兒	Q: lebās-e arusæk-o ģikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: lebās-eš-o ævæz kærð-Ø clothes-it-DO change did-3SG	<i>kešiden</i> 'pull' と <i>kubiden</i> 'to knock, hammer' は、 発話されていない。
Arash 3;7.0 男児	Q: kākæz-ro bā qeiči ģikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A: *pāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q: kāleske-ro dāre ģikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: *mi-ār-e æqæb DUR-bring-3SG back 'She brings it back.'
Erfan 3;7.27(男児)	<i>kešiden</i> 'pull' と <i>kubiden</i> 'to knock, hammer' は、発話されていない。	
Bahare 3;8.5 女兒	Q: æmu dāre mix-o ģikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: *dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'	Q: kāleske-ro dāre ģikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: *mi-ād æqæbi DUR-come back 文字通りの意味: 'It's coming back.'
	<i>kubiden</i> 'to knock, hammer' の代わりに、形態的使役動詞 <i>šekānden</i> 'break' を発話している。	<i>kešiden</i> 'pull' の代わりに、完全に文の主語を「ベビーカー」にし、「ベビーカーは、後ろの方向に行っている」というような自動詞構文を発話している。
Elahe 3;8.24 女兒	Q: kākæz-ro bā qeiči ģikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A: *pāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q: dæftær-e-š-o ģikār kærð-Ø? notebook-Ez-her-DO what did 'What did she do to her notebook?' A: *dæftær-e-š-o oftād zæmin notebook-Ez-her-DO fall floor 文字通りの意味: *She fell her notebook on the floor.'
		<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw' の代わりに、 <i>oftāden</i> 'fall' という動詞を発話している。
Melika 3;9.17 女兒	Q: æmu dāre mix-o ģikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: *čækkoš mi-zæn-e hammer DUR-hit-3SG 'She's hammering it.'	Q: kāleske-ro dāre ģikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: *rāh mi-r-e way DUR-go-3SG 'She is walking.'
	質問に「釘に何をしているか?」とちゃんと被使役物も質問入っているのが、 <i>kubiden</i> 'to knock, hammer' という答えが期待されているが、「ハンマー」という名詞を「叩く」という使役の意味を持たない軽動詞と結合することによって、 <i>čækkoš zæden</i> という新動詞を形成している。	「歩く」は、ペルシャ語で <i>rāh ræftæn</i> 'way go = walk' になるが、Melika は、「ベビーカーを後ろに引く」という動画を見せられたときに、単純に「歩いている」というふうに、「場」を描写している。
Fateme 3;10.2 女兒	<i>kešiden</i> 'pull' と <i>kubiden</i> 'to knock, hammer' は、発話されていない	

表19から分かる重要なことの一つは、3;0.0～3;10.2児は2;0.12～2;9.18児と違い、知らない語彙的使役動詞を発話するときに、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せず、同時に *intori kærð* も発話していないということである。つまり、2;0.12～2;9.18児の間では、「ジェス

チャー+intori kærð」は、非常に多く見られるパターンであるが、3;0.0~3;10.2児の間では、見られていない。3;0.0~3;10.2児22人のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合を示すと、以下の図18のとおりになる。

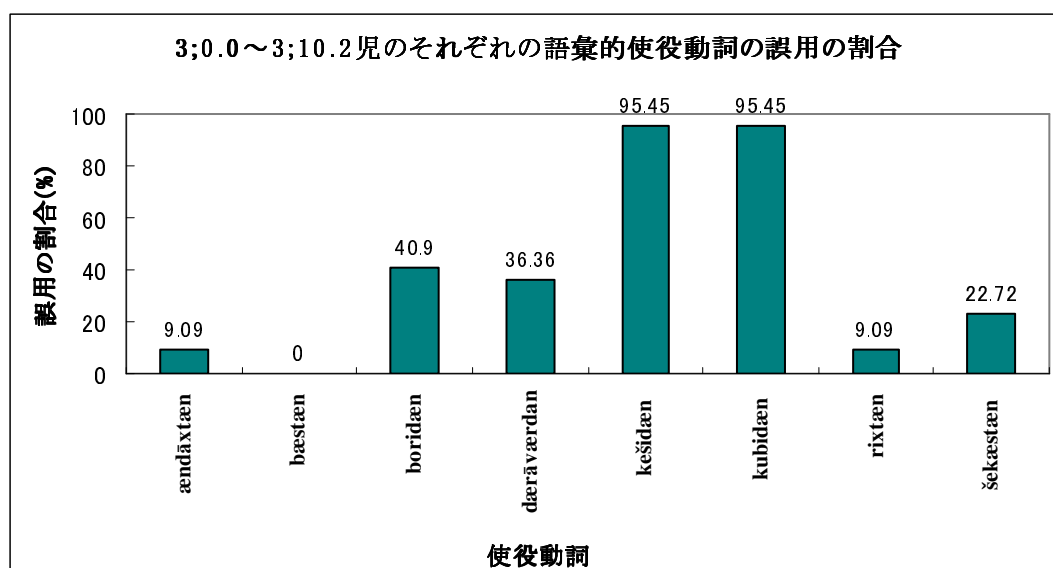


図 18 : 3;0.0~3;10.2 児 22 人のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合

図 15 を図 18 と比べると、3;0.0~3;10.2 児の場合は、語彙的使役動詞 8 個の中、5 個の語彙的使役動詞の誤用パーセントは、2;0.12~2;9.18 児と比べ、減少していることが分かる。ペルシャ語児の場合は、語彙的使役動詞に限っては、2 歳児より 3 歳児の誤用パーセントは、少ないと言える。図 15 と図 18 をもう一度以下において示す。

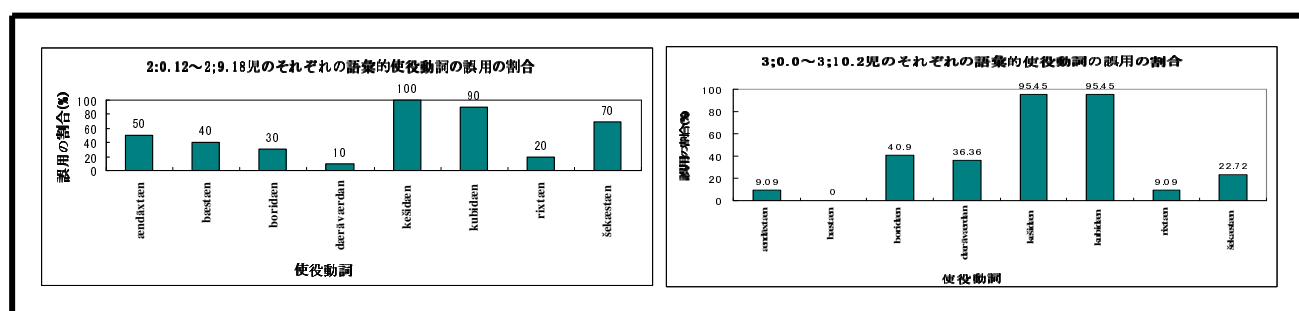


図 19 : 図 15 と図 18 の比較

表 19 の中では、*rixtæn* ‘to pour’の代わりに *ændāxtæn* ‘drop, throw’が発話されてしまった誤用もある。考えてみると、「落とす」と「溢す」という 2 つの動詞の概念は、大体のところでは、同じく、違うのは、刺激によって移動する物体のみである。つまり、エネルギーが加入されることによって、移動される物体は、固体であれば、*ændāxtæn* ‘drop, throw’は使われるが、液体の場合は、*rixtæn* ‘to pour’が使われる。従って、Tina(3;1.27) は、使役者によって動かす物体の性質に関係なく、*ændāxtæn* ‘drop, throw’を使用していると言える。更に、もう一つ興味深い誤用が、Nima(3;3.8)の場合は観察されている。それは、*šekæstæn* ‘break’という語彙的使役動詞が発話されるべき「場」において、「動詞分詞形+kærðæn'do'」、つまり *šekæst-e kærðæn* ‘break-PP do = make broken’

「割れた状態にする」が発話されていることである。大人の観点から見ると、「割る」を意味する語彙的使役動詞の方が「動詞分詞形+*kærdæn*」の獲得より簡単かと思われる。しかし実際は、ペルシャ語児は2歳を越えると、「(形容詞句/名詞句/動詞分詞形) + *kærdæn*」というスキーマが定着した後に、この形を持たない語彙的使役動詞についても、スキーマを拡張して使用しているのだと考えられる。

3.2.2. 3;0.0~3;10.2 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無

3;0.0~3;10.2 児 22 人、それぞれの幼児の形態的使役動詞の文法的で場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 20 : 3;0.0~3;10.2 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無

形態的 使役動詞	Mohsen	Hannane	Tina	Mahbod	Mehrzad	Nima	Zeinab	Amir- Ali	Amir- Hossein	Negar	Mohaddese
	3;0.0	3;0.8	3;1.27	3;2.10	3;3.1	3;3.8	3;3.17	3;3.17	3;4.5	3;5.2	3;5.11
<i>čærxāndæn</i> 'turn'	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○
<i>čæsbāndæn</i> 'to stick, to paste up'	○	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×
<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress'	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
<i>šekāndæn</i> 'break'	○	○	×	○	○	×	○	○	×	×	○
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'	○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep'	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×	○
<i>xændāndæn</i> 'make laugh'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndæn</i> 'feed'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
形態的 使役動詞	Mohammad -Hossein	Amir - Salar	Mohammad -Ali	Mona	Mobina	Arash	Erfan	Bahare	Elahe	Melika	Fateme
	3;5.25	3;6.0	3;6.16	3;6.19	3;6.27	3;7.0	3;7.27	3;8.5	3;8.24	3;9.17	3;10.2
<i>čærxāndæn</i> 'turn'	○	×	○	×	○	○	○	○	×	○	○
<i>čæsbāndæn</i> 'to stick, to paste up'	×	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○
<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress'	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○
<i>šekāndæn</i> 'break'	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep'	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○
<i>xændāndæn</i> 'make laugh'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndæn</i> 'feed'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

2;0.12~2;9.18 児と違い、3;0.0~3;10.2 児は、3;0 から既に形態的使役動詞のスキーマを形成し、生産的に使用し始めている。同時に、数多くの誤用も見られている。3;0.0~3;10.2 児も 2;0.12~

2;9.18 児と全く同じく、*xændāndæn* ‘make laugh’ と *xorāndæn* ‘feed’ を 1 人も発話出来ていない。この 2 つの動詞の中、*xændāndæn* ‘make laugh’ の場合は、実験で使用した動画がこの動詞を発話させるために適しておらず、*xorāndæn* ‘feed’ の場合も、3.1.2. で見たように、この年齢の幼児のみならず、大人の発話者もこのような形態的使役動詞を実際発話していない。3;0.0~3;10.2 児のそれぞれの幼児の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 21 のとおりになる。

表 21 : 3;0.0~3;10.2 児のそれぞれの形態的使役動詞の重要な誤用パターン

Mohsen, 3;0.0(男児)	<i>xændāndæn</i> ‘make laugh’ と <i>xorāndæn</i> ‘feed’ 以外は、全ての動詞を適切に発話している。	
Hannane 3;0.8 女児	Q: xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: ? xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	Q: xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: * xāle dāre nini-o mi-xāb-e young lady is baby-DO DUR-sleep-3SG
	<i>ušāndæn</i> ‘foot do = to put on or wear (on the feet), dress’ の代わりに自動詞形 <i>pušāden</i> ‘put on’ を発話している。	被使役者「赤ちゃん」と対格を発話しているが、動詞は、自動詞形である。
Tina 3;1.27 女児	Q: bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A: * bādkonæk-o terekid- Ø balloon- DO blast-3SG	Q: Q: xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: ? bidār-eš mi-kon-e awakeher DUR-do-3SG
	自動詞形はそのまま使役動詞として使われている。	「赤ちゃんを寝かせる」という動画を見て、「赤ちゃんを起こす」と発話している。
Mahbod 3;2.10 女児	Q: xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: ? xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	
Mehrzad 3;3.1 女児	Q: juje-hā-ro be kāqæz ċikār mi-kon-an? chick-PL-DO to paper what DUR-do-3PL 'What are they doing on the chick's stick to the paper?' A: ? juje-hā-ro be kāqæz mi-zæn-e chick-PL-DO to paper DUR-attach-3SG 'She attaches the chick's stick to the paper.'	Q: xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: ? xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG
	<i>ċæsbāndæn</i> という形態的使役動詞の代わりに、ペルシャ語の軽動詞の 1 つである <i>zæden</i> を使用している。	
Nima 3;3.8 男児	Q: juje-hā-ro be kāqæz ċikār mi-kon-an? chick-PL-DO to paper what DUR-do-3PL 'What are they doing on the chick's stick to the paper?' A: ? pāre kærð-Ø ragged did-3SG	Q: ċub-ro ċikār kærð-Ø? wood-DO what did-3SG 'What did she do to the wood?' A: * šekæste kærð-Ø broken did-3SG
	「くつつける」の代わりに、「破れた」と発話している。	<i>šekæsten</i> ‘break’ という語彙的使役動詞の過去分詞を <i>kærðæn</i> ‘do’ に結合することによって、大人の母語話者の言語にも存在しない、全く新しい動詞を形成している。
Zeinab 3;3.17 女児	Q: xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-hā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	
	<i>pā kærðæn</i> ‘foot do = put on somebody's shoes’ は、決して間違った言い方ではない。大人の言語でも「洋服」の場合は、 <i>tæn kærðæn</i> ‘body do = put on’ は使われていると同じく、「靴や靴下」の場合も、 <i>pā kærðæn</i> は、普通に発話されている。どちらの動詞は、使用頻度が高いのかを考察する必要がある。	

Amir-Ali 3;3.17 男児	Q:pārče-ro dāre ċikār mi-kon-e? cloth-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cloth?' A:*kix-kix mi-kon-e onomatopoeia DUR-do-3SG	Q:xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:* xāle dāre nini-o lālā-š mi-kon-e young lady is baby- DO lullaby-her DUR-do-3SG
	<i>ċerxāndan</i> 'turn' の代わりに <i>kix-kix</i> という全く意味のない擬態語を <i>kærdæn</i> と結合することによって、新動詞を形成している。	<i>xābāndan</i> 'put to sleep' の代わりに、「ねんねする」という幼児語をそれも自動詞のまま、発話している。
Amir-Hossein 3;4.5 男児	Q:juje-hā-ro be kāqæz ċikār kærð -æn? chick-PL-DO to paper what did-3PL 'What did they do on the chick's stick to the paper?' A:*juje-hā-ro be kāqæz ċæspid-ænd chick-PL-DO to paper stick-3PL	Q:ċub-ro ċik ār kærð-Ø? wood-DO what did-3SG 'What did she do to the wood?' A:* ċub-ro terekid- Ø wood-DO burst-3SG
	<i>ċæsbāndan</i> という形態的使役動詞の代わりに、自動詞形は、発話されている。	「場」に相応しくない動詞をそれも自動詞形のまま、発話している。
Negar 3;5.2 女児	Q:bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A:*terik kærð-Ø nonsense did-3SG	Q:xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:* xāle dāre nini-o mi-xāb-e young lady is baby-DO DUR-sleep-3SG
	<i>terekiden</i> 'brust' から意味のない過去分詞を最初に作り、それに <i>kærdæn</i> を結合し、意味のない新動詞を発話している。	被使役者「赤ちゃん」と対格を発話しているが、動詞は、自動詞形である。
Mohaddese 3;5.11 女児	Q:juje-hā-ro be kāqæz ċikār kærð -æn? chick-PL-DO to paper what did-3PL 'What did they do on the chick's stick to the paper?' A:ʔnæqqāši kærð -æn picture did-3PL 'They drew a picture.'	
Mohammad- Hossein 3;5.25 男児	Q:juje-hā-ro be kāqæz ċikār kærð -æn? chick-PL-DO to paper what did-3PL 'What did they do on the chick's stick to the paper?' A:ʔgozāšt-ænd ru kāqæz-hā-šun put-3PL on paper-PL-their 'They put them on theri papers.'	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:pā-hā-š mi-kon-e foot--her DUR-do-3SG
	<i>ċæsbāndan</i> という形態的使役動詞の代わりに、 <i>gozāštæn</i> 'put' という使役の意味を持たない普通の他動詞を発話している。	
Amir-Salar 3;6.0 (男児)	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:ʔ xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	<i>xorāndan</i> 'feed' の代わりに <i>xorðæn</i> 'eat' をそのまま自動詞形で使役動詞として使っている。
Mohammad-Ali 3;6.16(男児)	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:ʔ xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	
Mona 3;6.19 女児	Q:bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A:ʔpāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q:xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:* xāle dāre nini-o xābid-e young lady is baby-DO slept-3SG
	<i>terekāndan</i> 'cause to burst, explode' の代わりに、 <i>pāre kærdæn</i> 'tear' という助動詞使役を使用している。	自動詞形は、そのまま発話されている。

Mobina 3;6.27 女兒	Q:xāle dāre nini-o čikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:* xāle dāre nini-o mi-xāb-e young lady is baby-DO DUR-sleep-3SG
Arash 3;7.0 男兒	Q:bādkonæk-o čikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A:ʔpāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'
	Monaと同様。
Erfan 3;7.27(男兒)	Q:xāle dāre kæfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the shoes?' A:pā-hā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG
Bahare 3;8.5 女兒	<i>xændānden</i> 'make laugh' と <i>xorānden</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を適切に発話している。
Elahe 3;8.24 女兒	<i>xændānden</i> 'make laugh' と <i>xorānden</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を適切に発話している。
Melika 3;9.17 女兒	<i>xændānden</i> 'make laugh' と <i>xorānden</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を適切に発話している。
Fateme 3;10.2 女兒	<i>xændānden</i> 'make laugh' と <i>xorānden</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を適切に発話している。

Nima(3;3.8) は、*šekāsten* 'break' という語彙的使役動詞の過去分詞を *kærden* 'do' に結合することによって、大人の母語話者の言語にも存在しない、全く新しい動詞を形成している。同様のパターンは、Negar(3;5.2)の場合も見られる。Negar は、*terekiden* 'burst' から意味のない過去分詞、つまり大人の自然発話者の言語にも存在しない過去分詞を最初に発話し、それに *kærden* を結合し、新動詞を発話している。更に、多くの幼児は、*terekānden* 'cause to burst, explode' の代わりに、*pāre kærden* 'tear' という助動詞使役を使用している。これらは全て、助動詞使役動詞のスキーマの拡張であると考えられる。つまり、大人の自然発話者は、これらの「場」において、形態的使役動詞を発話するが、この年齢の幼児は、助動詞使役のスキーマを過剰一般化し、大人の発話者の言語にも存在しない全く新しい助動詞使役動詞を発話する。3;0.0~3;10.2 児 22 人のそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合を示すと、以下の図 20 のとおりになる。

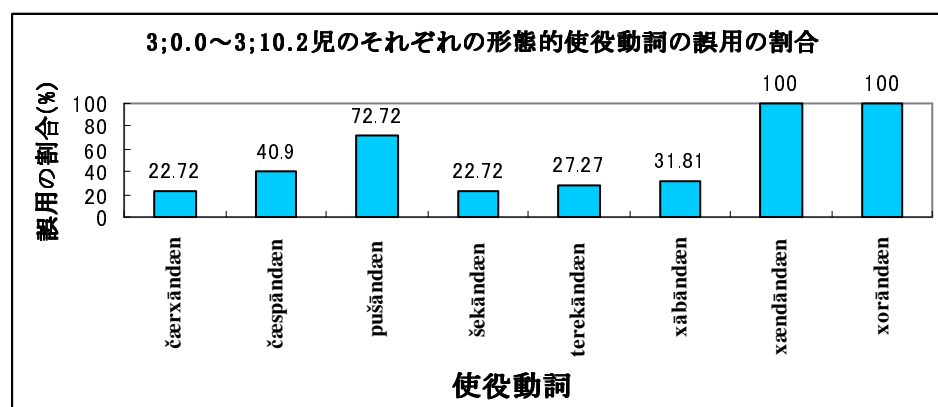


図 20 : 3;0.0~3;10.2 児 22 人のそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合

図 16 を図 20 と比べてみると、*xændāndan* ‘make laugh’ と *xorāndan* ‘feed’ 以外の他の形態的使役動詞の誤用パーセントは、3;0.0～3;10.2 児の場合は、減少していることが分かる。更に、2;0.12～2;9.18 児と違い、3;0.0～3;10.2 児は、自ら表現したい形態的使役動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kerd* と発話していない。つまり、2;0.12～2;9.18 児は、多くの形態的使役動詞の代わりに「ジェスチャー+ *intori kerd*」を使用するが、3;0.0～3;10.2 は、このようなストラテジーを使用していない。

3.2.3. 3;0.0～3;10.2 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

3;0.0～3;10.2 児 22 人、それぞれの幼児の形態的使役動詞の文法的で場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 22 : 3;0.0～3;10.2 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

助動詞 使役動詞	Mohsen	Hannane	Tina	Mahbod	Mehrzad	Nima	Zeinab	Amir- Ali	Amir- Hossein	Negar	Mohaddese
	3;0.0	3;0.8	3;1.27	3;2.10	3;3.1	3;3.8	3;3.17	3;3.17	3;4.5	3;5.2	3;5.11
<i>bāz kerdæn</i> ‘open do = open’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bidār kerdæn</i> ‘awake make = awaken’	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○
<i>bolænd kerdæn</i> ‘high make = to lift’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
<i>fut kerdæn</i> ‘puff do = to blow out’	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dāden</i> ‘push give = to push’	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○
<i>nešān dāden</i> ‘sign give = show’	○	○	○	×	○	×	○	×	○	○	×
<i>pāre kerdæn</i> ‘piece make = to tear’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>pærtkerdæn</i> ‘to throw’	○	○	○	×	×	○	×	○	×	×	×
<i>pust kerdæn</i> ‘skin peel = peel, pare’	○	×	○	○	×	×	○	○	○	○	○
<i>šut kerdæn</i> ‘shoot do = shoot, to kick a ball’	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>tæmiz kerdæn</i> ‘clean make = to clean’	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○
<i>xāmuškerdæn</i> ‘silent , off make = blow out, extinguish’	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xord kerdæn</i> ‘small do = chop, mince’	○	○	×	○	×	×	×	×	○	×	○
助動詞 使役動詞	Mohammad -Hossein	Amir - Salar	Mohammad -Ali	Mona	Mobina	Arash	Erfan	Bahare	Elahe	Melika	Fateme
	3;5.25	3;6.0	3;6.16	3;6.19	3;6.27	3;7.0	3;7.27	3;8.5	3;8.24	3;9.17	3;10.2
<i>bāz kerdæn</i> ‘open do = open’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

<i>bidār kærden</i> 'awaken'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bolænd kærden</i> 'high do = to lift'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>fut kærden</i> 'puff do = to blow out'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dādæn</i> 'push give = to push'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>nešān dādæn</i> 'sign give = show'	○	×	○	×	×	×	×	○	×	○	○
<i>pāre kærden</i> 'piece do = to tear'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>pærtkærden</i> 'thrown down do = to throw'	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×
<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare'	○	×	○	×	○	○	×	×	×	×	○
<i>šut kærden</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball'	×	×	○	×	×	×	○	×	○	○	×
<i>tæmiz kærden</i> 'clean do = to clean'	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
<i>xāmuškærden</i> 'silent , off do = blow out, extinguish'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xord kærden</i> 'small do = chop,mince,shred'	○	×	×	×	×	○	○	×	○	○	○

3;0.0~3;10.2 児 22 人のそれぞれの幼児の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 23 のとおりになる。

表 23 : 3;0.0~3;10.2 児のそれぞれの助動詞使役動詞の重要な誤用パターン

Mohsen, 3;0.0(男児)	Q:tup-po ba pā ċikār kærden-Θ? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po pært kærden-Θ ball-DO thrown did-3SG
	「ボールを手で投げる」の場合は、ペルシヤ語で、 <i>pært kærden</i> 'throw'が使われるが、「ボールを足で蹴る」という場合は、 <i>šut kærden</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball'が使われる。Mohsenにとっては、どうも使役行為の原因になる道具は関係なく、いずれの場合も、 <i>pært kærden</i> 'throwが使われているようである。
Hannane 3;0.8 女児	Q:kiwi-ro dāre ċikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A:* dāre mi-kæn-e is DUR-dig/pull off-3SG
	<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare'は、1つのチャンクで「皮を剥く」という意味になるが、Hannaneは、名詞句なしの動詞のみを発話しているので、「引き抜く」という意味になっている。
Tina 3;1.27 女児	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ ċikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔ dāre mi-bor-re is DUR-cut-3SG
	「みじん切りにする」ということを <i>xord kærden</i> 'small do = chop,mince,shred'というが、Tinaは、「みじん切りにする」のことも「ナイフで切る」という表現によって表現している。

Mahbod 3;2.10 女兒	Q:tup-po ba pā čikār kærð-Θ? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po ændāxt- Θ ball-DO threw-3SG	
	「ボールを手で投げる」の場合は、ペルシャ語で、 <i>pært kærðæn'throw'</i> という助動詞使役動詞か <i>ændāxtæn'throw'</i> という語彙的使役動詞は使われるが、「ボールを足で蹴る」という場合は、 <i>šut kærðæn</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball'が使われる。Mahbodにとっては、どうも使役行為の原因になる道具は関係なく、いずれの場合も、 <i>ændāxtæn'throw'</i> が使われているようである。	
Mehrzad 3;3.1 女兒	<i>pust kærðæn</i> 'skin peel = peel, pare'も <i>xord kærðæn</i> 'small do = chop,mince,shred'も <i>boridæn</i> 'cut'という語彙的使役動詞によって描写されている。Mehrzadの場合は、 <i>boridæn</i> 'cut'の指す概念は非常に幅広く、様々な「場」でも使用されている。	
Nima 3;3.8 男児	Q:Q:kāqæz-ro bā qeči čikār kærð-Θ? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔpāre kærð-Θ ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q:kiwi-ro dāre čikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A:ʔmi-bor-re DUR-cut-3SG
	Nimaの場合は、「ハサミで切る」の代わりに <i>pāre kærðæn</i> 'piece do = to tear'が使われる。従って、Nimaにとって、使役行為の道具の部分はあまり重要ではないようである。	「皮を剥く」の代わりに、「切る」を発話している。「切る」の意味は、非常に幅広い。
Zeinab 3;3.17 女兒	Q:tup-po ba pā čikār kærð-Θ? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po ændāxt- Θ ball-DO threw-3SG	Q:xiyār-ro dāre bā kārð čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔ dāre mi-bor-re is DUR-cut-3SG
	上記のMahbod同様。	上記のTina同様。
Amir-Ali 3;3.17 男児	Q:xāher-eš-o čikār kærð-Θ? sister-her-DO what did-3SG 'What did she do to her sister?' A:*bolænd-eš kærð-Θ high-her did-3SG	Q:xiyār-ro dāre bā kārð čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔ dāre mi-bor-re is DUR-cut-3SG
	「物を持ち上げる」を <i>bolænd kærðæn</i> 'raise,hold up'という。ペルシャ語で「起きる」のことを <i>bidār šodæn</i> 'get up'というが、口語では、 <i>bolænd šodæn</i> 'high become =get up'も使われる。Amir-Aliは、 <i>bolænd šodæn</i> 'high become =get up'から「起こす」の意味を持たない動詞を作り、発話している。 <i>bolænd kærðæn</i> は、あくまでも「荷物を持ち上げる」という意味しかない。	上記のTina同様。
Amir-Hossein 3;4.5 男児	Q:keik-o čikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A:ʔkeik-o xurd mi-kon-e cake-DO small DUR-do-3SG	
	<i>xord kærðæn</i> 'small do = chop,mince,shred'は、過剰一般化され、「ケーキを切る」という場でも、「ケーキをみじん切りにしている」と発話している。	
Negar 3;5.2 女兒	Q:miz-ro dāre čikār mi-kon-e? table-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the table?' A:ʔ dāre mi-šur-e is DUR-wash-3SG	
	<i>tæmiz kærðæn</i> 'clean do = to clean'の代わりに <i>šostæn</i> 'wash'を発話している。「テーブルをきれいにする」の代わりに「洗う」を使用しているのは、Negarにとって、使役道具はあまり重要ではないからである。	

<p>Mohaddese 3;5.11 女兒</p>	<p>Q:šæm-hā-ye keik-ro bā fut čikār kærð-Ø? candle-PL-Ez cake-DO with blowing what did-3SG 'What did she do to the cake's candles with blowing?' A:ʔfut mi-kon-e blowing DUR-do-3SG</p> <p>「蠟燭の炎を吹き消す」の代わりに、単に「蠟燭の炎を吹く」と発話されている。</p>	
<p>Mohammad-Hosseini 3;5.25 男児</p>	<p>Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔkāleske-ro mi-bær-e stroller-DO DUR-take-3SG 'She is carrying away the toy stroller.'</p> <p><i>hol dādæn</i>'push give = to push'の代わりに、単純に<i>bordæn</i>という語彙的使役動詞を使っている。</p>	
<p>Amir-Salar 3;6.0 (男児)</p>	<p>Q:xiyār-ro dāre bā kārð čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔdāre mi-bor-re is DUR-cut-3SG</p> <p>上記のTina同様。</p>	
<p>Mohammad-Ali 3;6.16(男児)</p>	<p>Q:xiyār-ro dāre bā kārð čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔdāre mi-bor-re is DUR-cut-3SG</p> <p>上記のTina同様。</p>	
<p>Mona 3;6.19 女兒</p>	<p>Q:kiwi-ro dāre čikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A:ʔxurd mi-kon-e small DUR-do-3SG</p> <p>「皮を剥く」の代わりに「みじん切りにしている」と発話している。</p>	
<p>Mobina 3;6.27 女兒</p>	<p>Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔrāh mi-ndāz-e way DUR-throw-3SG</p> <p><i>hol dādæn</i>'push give = to push'の代わりに、<i>rāh ændāxtæn</i>'way throw = to set in motion, to start'を発話している。</p>	<p>Q:xiyār-ro dāre bā kārð čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔmi-xor-e DUR-eat-3SG</p> <p>「みじん切りにする」の代わりに、自動詞形の「食べる」をそのまま発話している。</p>
<p>Arash 3;7.0 男児</p>	<p>Q:šæm-hā-ye keik-ro bā fut čikār kærð-Ø? candle-PL-Ez cake-DO with blowing what did-3SG 'What did she do to the cake's candles with blowing?' A:ʔfut mi-kon-e blowing DUR-do-3SG</p> <p>上記のMohaddese同様。</p>	
<p>Erfan 3;7.27(男児)</p>	<p>Q:tup-po ba pā čikār kærð-Ø? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po ændāxt- Ø ball-DO threw-3SG</p> <p>上記のMahbod同様。</p>	

Bahare 3;8.5 女兒	Q:kiwi-ro dāre ċikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A:ʔmi-bor-re DUR-cut-3SG	Q:miz-ro dāre ċikār mi-kon-e? table-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the table?' A:ʔ dāre mi-šur-e is DUR-wash-3SG
	「皮を剥く」の代わりに、「切る」を発話している。「切る」の意味は、非常に幅広い。	
Elahe 3;8.24(女兒)	Elaheは、 <i>pāre kærden</i> 'piece do = to tear' を過剰一般化し、語彙的使役動詞 <i>boriden</i> 'cut' や形態的使役動詞 <i>šekānden</i> 'break' の代わりににも使用している。	
Melika 3;9.17 女兒	Q:kiwi-ro dāre ċikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A:ʔāšqāl-ā-š-ro dāre dær mi-ār-e rubbish-PL-it-DO is out DUR-bring-3SG 文字通りの意味: 'She is bringing out it's waste.'	
	<i>pust kærden</i> 'skin peel = peel, pare' の代わりに、「ゴミ（要らないもの）を取り出す」と発話している。	
Fateme 3;10.2 女兒	Fatemeは、 <i>pāre kærden</i> 'piece do = to tear' を過剰一般化し、語彙的使役動詞 <i>boriden</i> 'cut' や形態的使役動詞 <i>šekānden</i> 'break' の代わりににも使用している。	

表 23 から分かるように、3;0.0～3;10.2 児の多くは、語彙的使役動詞 *boriden* 'cut' を *pust kærden* 'skin peel = peel, pare' や *xord kærden* 'small make = chop, cut' が望まれる「場」でも使用している。つまり、3;0.0～3;10.2 にとっては、*boriden* 'cut' という語彙的使役動詞が描写する概念は、非常に幅広いと言える。ここで考えられる一つの理由は、3 歳児は、使役行為の様態より使役行為で使用されるモノ（道具）の方を重視しているということである。この主張を裏付けるのは、Schaefer(1979)である。Schaefer(1979) は、子どもが *cut* という動詞を用いる際、「刃を用いること」という *cut* の特徴を過剰に重視し、結果として大人が *break* を用いるような場面(例えばガラスのボトルを刃物で叩いて砕くような場面)にも用いてしまったことを報告している。更に、佐治(2010:76) は、「大人は動作を動詞で言い分ける際、モノを持つ様態に注目して動詞を使い分けていたのに対し、子どもは持たれているモノの特徴に注目して動詞を使い分けている傾向があった。子どもが新奇語をどのようにマッピングするかという点に焦点を当ててきた研究は、子どもが教えられた新奇動詞と同じ様態で(違うモノで)動いている動作よりも、同じモノを使って(違う様態で)動いている動作の方にマッピングする傾向があることが報告されてきた(Imai et al., 2005, 2008)。このように、子どもは当初動詞の意味を捉える際、そのモノの特徴に引きずられる傾向があるのだが、時間を経るにつれ、徐々に動詞を用いる際重要視すべき判断基準を学習していくようである。」と述べている。この主張は正にペルシャ語児の場合でも考えられる。言語獲得初期における幼児は、動詞を獲得していく時、使役様態を重視するというより使役行為で使用される道具の特徴に引かずられ、同じ道具で異なる使役行為を見ても、使役道具に一番強く繋がっている動詞を即座に発話してしまう。実験で使用した道具の中には、「ハンマーで釘を打つ」という道具も入っているが、この動画を子供たちに見せると、ほとんど全員が「釘を割っている」と産出してしまった。つまり、言語獲得初期のペルシャ語児にとっては、「釘をハンマーで打つ」と「何かをハンマーで割る」という2つの全く異なる動作は、同じく見えてしまう。つまり、ペルシャ語児は、「ハンマー」を見ると、すぐにも「ハンマー」から「割る」という概念にアクセスしてしまい、使役行為の様態や使役行為の結果、被使役物の状態を無視してしまう。大人の発話者は、行為を

描写する時、モノより使役行為の様態を重視することは知られている。例えば、「パンツを頭にかぶる」という状態について考えてみよう。「パンツを頭に被っている子供」の動画を日本語の大人の発話者に見せると、「パンツを頭に履いている」とはだれも発話しないだろう。つまり、「パンツ」というモノを重視し、「パンツ」と一番概念上繋がっている「履く」という動詞を即時に発話せず、日本語の大人の発話者は様態に注目し、「パンツ」であるにもかかわらず、適切な動詞を発話する。しかしながら、このような注目の仕方は言語獲得初期の幼児には不可能である。つまり、「ナイフ」を見ると、幼児は、一番定着度が高く、また一番適用範囲が広い動詞つまり *boridaen* ‘cut’ を即座に産出してしまふ。更に、「パンツ」を見ると、「履く」という動詞を即座に産出してしまふ。

3;0.0～3;10.2 児 22 人のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合を示すと、以下の図 21 のとおりになる。

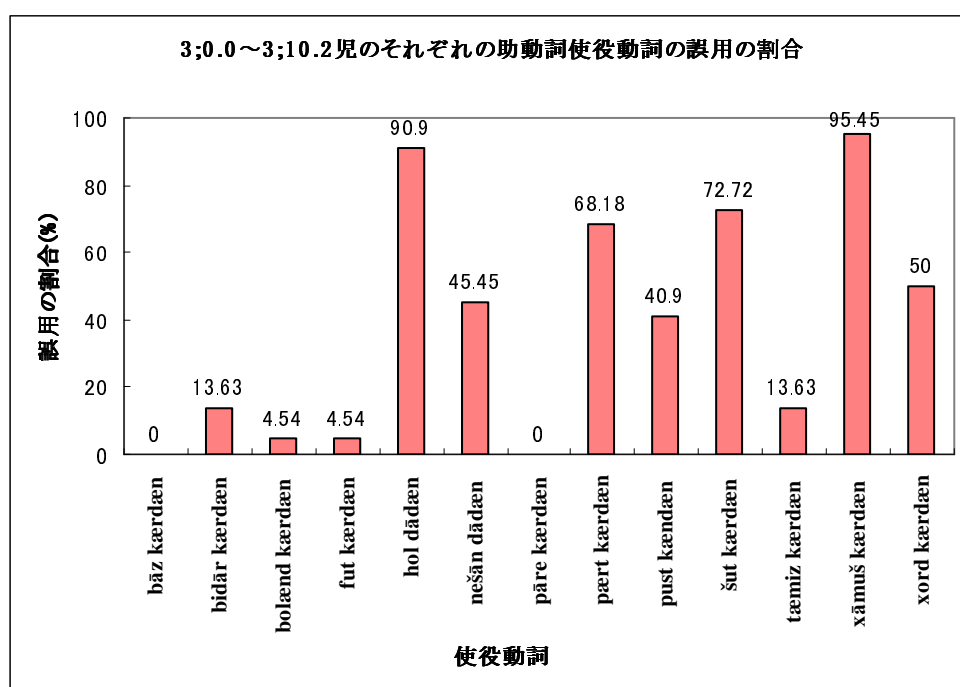


図 21 : 3;0.0～3;10.2 児のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合

図 17 を図 21 と比べると、13 個の助動詞使役の中、9 個の誤用の割合は、3;0.0～3;10.2 児で 2;0.12～2;9.18 児と比べ、減っていることが分かる。更に、2 個の助動詞使役動詞の誤用の割合は、ゼロで、全く誤用がされていないことが分かる。ペルシャ語児の場合は、助動詞使役動詞の場合のみを考える際、2;0.12～2;9.18 児の誤用パーセントは、3;0.0～3;10.2 児より多い。

3.3. 4;0.0～4;10.19 児 25 人 (男児 11 人、女児 14 人)

3.3.1. 4;0.0～4;10.19 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

4;0.0～4;10.19 児 25 人、それぞれの幼児の語彙的使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 24 : 4;0.0~4;10.19 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

語彙的 使役動詞	Arshia	Asal	Matin	Fateme	Rojin	Negar	Hanie	Mohammad -Mahdi	Amir- Mahdi	Mohammad -Matin	Alireza
	4;0.0	4;0.2	4;0.10	4;0.11	4;0.13	4;1.17	4;1.18	4;1.20	4;1.21	4;2.0	4;3.8
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw'	○	○	○	○	×	○	○	×	○	×	○
<i>bæstæn</i> 'close'	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○
<i>boridæn</i> 'cut, slice'	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×
<i>dærāværdæn</i> 'clothes take off =take off one's clothes'	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○
<i>kešidæn</i> 'pull'	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×
<i>rixten</i> 'to pour'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
<i>šekæstæn</i> 'break'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

語彙的 使役動詞	Hasti	Farnaz	Anita	Sajjad	Elham	Seyyed- Mohammad -Hassan	Hasti	Saba	Alireza	Melika	Rosha	Mina
	4;4.0	4;4.12	4;4.26	4;5.8	4;5.10	4;7.1	4;7.3	4;7.8	4;7.15	4;8.19	4;9.5	4;9.15
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bæstæn</i> 'close'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>boridæn</i> 'cut, slice'	×	×	○	×	○	×	○	×	○	○	×	×
<i>dærāværdæn</i> 'clothes take off = take off one's clothes'	×	×	○	○	○	○	×	○	×	○	○	×
<i>kešidæn</i> 'pull'	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
<i>rixten</i> 'to pour'	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×
<i>šekæstæn</i> 'break'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

語彙的 使役動詞	Amir-Hossein	Amir-Mahdi
	4;9.22	4;10.19
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw'	○	○
<i>bæstæn</i> 'close'	○	○
<i>boridæn</i> 'cut, slice'	×	○
<i>dærāværdæn</i> 'clothes take off =take off one's clothes'	○	○
<i>kešidæn</i> 'pull'	×	○
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'	×	×
<i>rixten</i> 'to pour'	○	○
<i>šekæstæn</i> 'break'	○	○

表 24 から分かるように、4;10.19 の年齢になると、1 つの語彙的使役動詞以外は、全ての語彙的使役動詞が誤用なしで発話出来るようになる。4;0.0~4;10.19 児 25 人のそれぞれの幼児の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 25 のとおりになる。

表 25 : 4;0.0~4;10.19 児 25 人のそれぞれの語彙的使役動詞の重要な誤用パターン

Arshia 4;0.0 (男児)	Q:kāqæz-ro bā qeīci ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔpāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'
	<i>boridæn</i> 'cut' という語彙的使役動詞が望まれる「場」でも、 <i>pāre kærðæn</i> 'piece make = to tear' は使われている。従って、Arshia にとって、「ハサミ」も「手」も全く一緒で、使役行為の道具は、「場」を描写するときに、重要ではないかのように見える。	
Asal 4;0.2 (女児)	Q:keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A:*keik-o qeīci mi-kon-e cake-DO scissors DUR-do-3SG	
	「ケーキを包丁で切る」という動画を見、「ケーキをチョキンしている」と発話している。	
Matin 4;0.10 (男児)	Q:keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A:ʔ pāre mi-kon-e ragged DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She ragged the cake.'	
	ペルシャ語の貧しい社会階級の男性の間では、「スイカを包丁で切る」を描写するために、 <i>pāre kærðæn</i> が使われる。つまり、この社会階級の男性は「スイカを包丁で切る」の代わりに「スイカを破れた状態にする」と発話する。しかしながら、この社会階級の男性は、「スイカやメロン」の他の食べ物の場合は、決して <i>pāre kærðæn</i> を使わない。面白いことには、ペルシャ語の幼児は、「ケーキ」の場合でも、 <i>pāre kærðæn</i> を使用している。	
Fateme 4;0.11 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ dāre hol mi-d-e is push DUR-giv	
	上記の Arshia 同様。	
Rojin 4;0.13 (女児)	Q:dæftær-eš-o ċikār kærð-Ø? notebook-her-DO what did-3SG 'What did she do to the notebook?' A:*dæftær-eš-o rixt-Ø notebook-her-3SG pured-3SG	Q:kāqæz-ro bā qeīci ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔxurd mi-kon-e small DUR-do-3SG
	「落とす」の代わりに「注ぐ、溢す」を発話している。前の年齢のグループの幼児の中には、「注ぐ、溢す」の代わりに「落とす」と発話してしまった幼児もいた。Rojin の場合は、逆の傾向が見られているが、結局、使役行為の結果、移動される物体の性質に幼児はあまり敏感ではないようである。	「切る」の代わりに「小さくする」と発話している。つまり、語彙的使役動詞の代わりに「場」に相応しくない助動詞使役動詞を発話している。
Negar 4;1.17 (女児)	Q:lebās-e arusæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A:ʔloxt-eš kærð-Ø nude-it did-3SG 'She did it nude.'	Q:æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
	<i>dærāvērdæn</i> 'clothes take off = take off one's clothes' の代わりに、 <i>loxt</i> 'nude' という形容詞に <i>kærðæn</i> 'do' を結合することによって、この「場」を描写している。	<i>kubiden</i> 'to knock, hammer' の代わりに、形態的使役動詞 <i>šekāndæn</i> 'break' を発話している。

Hanie 4;1.18 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?mi-bær-e æqæb DUR-take-3SG back 'She takes it back.'	「後ろへ引く」の代わりに「後ろへ持っていく」と発話している。
Mohammad-Mahdi 4;1.20 (男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: *æqæb mi-kon-e back DUR-do-3SG	<i>æqæb kærden</i> は、大人の自然発話者の言語には存在しない助動詞使役動詞であり、助動詞使役動詞のスキーマの過剰一般化の結果、発話された動詞だと考えられる。
Amir-Mahdi 4;1.21 (男児)	Q: dær-o ċikār kærð-Ø? door-DO what did-3SG 'What did she do to the door?' A: *dær-o bæst-e kærð-Ø door-DO c closed did-3SG	Q: keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: ?pāre mi-kon-e ragged DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She ragged the cake.'
	学習中の言語にはないパターン、「形容詞+ <i>kærden</i> 」というスキーマを拡張し、大人の文法には存在しない <i>bæst-e kærð</i> を使う間違いを起こしてしまっている。	上記のMatin同様。
Mohammad-Matin 4;2.0 (男児)	<i>šekæstæn</i> 'break' 以外は、全ての語彙的使役動詞は、発話不可能である。	
Alireza 4;3.8 (男児)	Q: keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: *keik-o mi-škun-e cake-DO DUR-break-3SG 文字通りの意味: 'She breaks the cake'	形態的使役動詞を語彙的使役動詞の代わりに使用し間違いを起こしてしまっている。「切る」の代わりに、なぜ「割る」を使っているのかは、非常に興味深い。
Hasti 4;4.0 (女児)	Q: kāqæz-ro bā qeīči ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A: ?pāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q: lebās-e arusæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: ?loxt-eš kærð-Ø nude-it did-3SG 'She did it nude.'
	上記のArshia同様。	上記のNegar同様。
Farnaz 4;4.12 (女児)	<i>boriden</i> 'cut, slice' と <i>derāvērdan</i> 'clothes take off = take off one's clothes' については、上記のHasti同様である。	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: ?mix-o mi-zæn-e nail-DO DUR-hit-3SG
		<i>kubiden</i> 'to knock, hammer' の代わりに、使役の意味を持たない <i>zæden</i> 'hit' を使用し、誤用を犯している。
Anita 4;4.26 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'	上記のArshia同様。
Sajjad 4;5.8 (男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: *mi-r-e æqæb DUR-go-3SG back 'It goes to the back.'	「ベビーカーに何をしているか？」と訊かれ、「後ろへ行っている」と答えている。つまり、自動詞形で「場」を描写している。
Elham 4;5.10 (女児)	<i>kešiden</i> 'pull' と <i>kubiden</i> 'to knock, hammer' 以外は、全ての語彙的使役動詞を適切に発話している。	
Seyyed-Mohammad-Hassan 4;7.1 (男児)	Q: keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: ?čāqu mi-zæn-e knife DUR-stick-3SG	Q: āb-o ċikār mi-kon-e? water-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the water?' A: ?āb-o hædær mi-d-e water-DO waste DUR-give-3SG 'She is wasting water.'
	<i>čāqu zæden</i> 'knife somebody to death' は、「誰かをナイフで刺殺する」という意味しかなく、この幼児は、「ケーキを切る」の代わりに「ケーキをナイフで刺す」と発話している。	「水を注いでいる」動画を見、「水が無駄遣いしている」と発話している。これは、誤用というより、文化の影響で生じた発話だと思われる。

Hasti 4;7.3 (女児)	Q: lebās-e arusæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: lebās-eš-o ævæz kærð-Ø clothes-it-DO change did-3SG	「人形の洋服を脱がせる」という動画を見せられ、「洋服を変えている」と発話している。「脱ぐ」という動詞は、「脱いだ後、新しい洋服に変えた」まで描写していないのに、Hastiは、 <i>ævæz kærðæn</i> 'change' という助動詞使役動詞を発話している。
Saba 4;7.8 (女児)	Q: kâqæz-ro bā qeīci ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A: ?qeīci kærð-Ø scissors did-3SG 'She scissored it.'	「ハサミで紙を切る」ということを、英語では <i>scissor</i> という動詞で表せるが、日本語では、「ハサミする」などが存在しない。ペルシャ語も、「髪の毛」の場合のみ、 <i>qeīci kærðæn</i> は、使われるが、他の被使役物の場合は、使われない。日本語の場合は、「ハサミする」と言わないが、「髪の毛を「チョコチョコキする」と言える。
Alireza 4;7.15 (男児)	Q: lebās-e arusæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: ?vā ⁴⁸ kærð-Ø open did-3SG 'She opened it.'	「洋服を変える」の代わりに、「洋服を開けた」と発話している。
Melika 4;8.19 (女児)	Q: kâleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: *rāh mi-d-e way DUR-give-3SG 文字通りの意味: 'She is giving the way.'	<i>dāden</i> 'give' は、様々な名詞句と結合することによって、使役動詞が形成する。「歩く」のことをペルシャ語で <i>rāh ræftæn</i> 'way go = walk' と言う。Melika は、 <i>rāh ræftæn</i> は、自動詞であれば、「 <i>rāh + dāden</i> 」は、きっと使役動詞になると思い、このような間違いを犯していると思われる。
Rosha 4;9.5 (女児)	Q: keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: ?čāqu mi-kon-e knife DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She knifed the cake.'	<i>čāqu kærðæn</i> 'knife do' は、ペルシャ語には、存在しない動詞である。これは、助動詞使役動詞スキーマの拡張によって、形成した動詞だと思われる。
Mina 4;9.15 (女児)	Q: keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: ?pāre mi-kon-e ragged DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She ragged the cake.' 上記の Matin 同様。	Q: āb-o ċikār mi-kon-e? water-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the water?' A: ?āb-o esrāf mi-kon-e water-DO wasting DUR-do-3SG 'She is wasting water.' 上記の Seyyed-Mohammad-Hassan 同様。
Amir-Hossein 4;9.22 (男児)	Q: keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: ?pāre mi-kon-e ragged DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She ragged the cake.'	上記の Matin 同様。
Amir-Mahdi 4;10.19 (男児)	<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' 以外は、全ての語彙的使役動詞を適切に発話している。	

4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合を示すと、以下の図 22 のとおりになる。

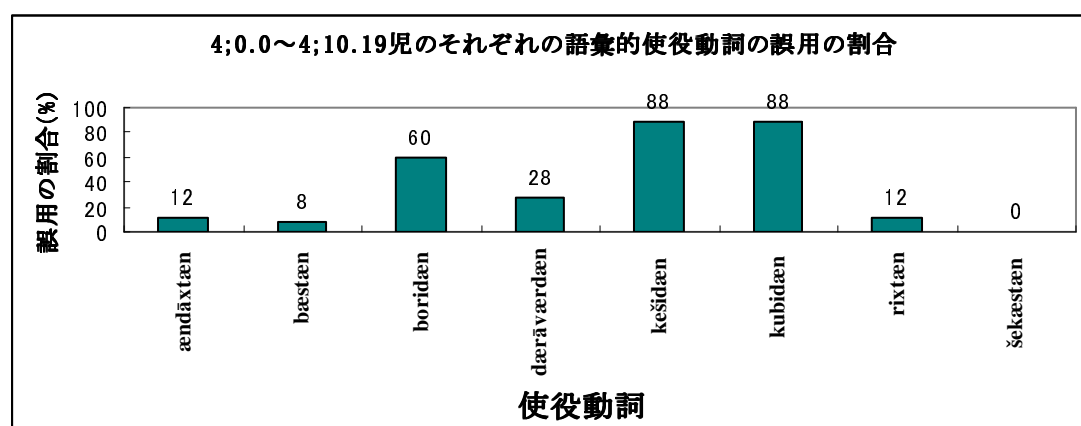


図 22 : 4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合

⁴⁸ vā は、*bāz* 'open' の公用形である。

図 22 を図 15、図 18 と比べると、4;0.0～4;10.19 児の語彙的使役動詞の誤用の割合は、2;0.12～2;9.18 児と比べ、概ね減少していることが分かる。しかしながら、3;0.0～3;10.2 児と比べ、大した変化はなく、減少の変化が見られるのは、*kešidæn*‘pull’と *kubidæn*‘to knock, hammer’のみである。4;0.0～4;10.19 児の語彙的使役動詞の誤用の割合は、未だに高く、特に 3;0.0～3;10.2 児で低かった *boridæn*‘cut, slice’と *dærāvardæn*‘clothes take off =take off one’s clothes’の誤用の割合は、増加の傾向を示している。

3.3.2. 4;0.0～4;10.19 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無

4;0.0～4;10.19 児 25 人、それぞれの幼児の形態的使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである⁴⁹。

表 26 : 4;0.0～4;10.19 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無

形態的 使役動詞	Arshia	Asal	Matin	Fateme	Rojin	Negar	Hanie	Mohammad -Mahdi	Amir- Mahdi	Mohammad -Matin	Alireza
	4;0.0	4;0.2	4;0.10	4;0.11	4;0.13	4;1.17	4;1.18	4;1.20	4;1.21	4;2.0	4;3.8
<i>čærxāndæn</i> ‘turn’	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○
<i>čæsbāndæn</i> ‘to stick’	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○
<i>pušāndæn</i> ‘foot do = to put on or wear (on the feet), dress’	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
<i>šekāndæn</i> ‘break’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>terekāndæn</i> ‘cause to burst, explode’	×	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○
<i>xābāndæn</i> ‘put to sleep’	×	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○
<i>xændāndæn</i> ‘make laugh’	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndæn</i> ‘feed’	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

形態的 使役動詞	Hasti	Farnaz	Anita	Sajjad	Elham	Seyyed- Mohammad -Hassan	Hasti	Saba	Alireza	Melika	Rosha	Mina
	4;4.0	4;4.12	4;4.26	4;5.8	4;5.10	4;7.1	4;7.3	4;7.8	4;7.15	4;8.19	4;9.5	4;9.15
<i>čærxāndæn</i> ‘turn’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>čæsbāndæn</i> ‘to stick, to paste up’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

⁴⁹ ペルシャ語では、「指輪を誰かの指にはめる」ということを、*angoštær angost-e kæsi kærden*‘ring finger-Ez somebody do’と言うし、「スカーフを誰かに被らせる」のことを、*rusæri sær-e kæsi kærden*‘scarf head-Ez somebody do’と言うし、「ブレスレットを誰かの腕につける」のことを、*ælengu dæst-e kæsi kærden*‘bracelet hand-Ez somebody do’と言うし、「誰かの耳にピアスをつける」のことを *gušvære guš-e kæsi kærden*‘pierced earring ear-Ez somebody do’という。従って、ペルシャ語の場合は、様々な動詞は使われておらず、「体の部分 + *kærden*」が使われている。従って、*pušāndæn*‘foot do = to put on or wear (on the feet), dress’の代わりにも、幼児は、*pā kærden*‘foot do’というが、これを誤用として考えるかどうかはかなり困難である。

<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress'	×	○	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×
<i>šekāndæn</i> 'break'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep'	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
<i>xændāndæn</i> 'make laugh'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndæn</i> 'feed'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

形態的 使役動詞	Amir-Hossein	Amir-Mahdi
	4;9.22	4;10.19
<i>čærxāndæn</i> 'turn'	○	○
<i>čæsbāndæn</i> 'to stick, to paste up'	○	○
<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress'	×	○
<i>šekāndæn</i> 'break'	○	○
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'	○	○
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep'	×	○
<i>xændāndæn</i> 'make laugh'	×	×
<i>xorāndæn</i> 'feed'	×	×

表 26 から分かるように、4;0.0～4;10.19 児 25 人も前の年齢グループと同じく、誰も *xændāndæn* 'make laugh' と *xorāndæn* 'feed' は、発話出来なかった。他の動詞の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 27 のとおりになる。

表 27 : 4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの形態的使役動詞の重要な誤用パターン

Arshia 4;0.0 (男児)	Q: xāle dāre kæfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: ? xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	Q: bādkonæk-o čikār kærd-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A: * bādkonæk-o terekid- Ø balloon- DO blast-3SG	Q: xāle dāre nini-o young lady is baby-DO čikār mi-kon-e? waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: xāle dāre nini-o young lady is baby-DO mi-čærx-un-e tā DUR-turn-CAUSE-3SG until xāb-eš be-bær-e sleep-her SUB-take-3SG 'The young lady is turning the baby until she sleeps.'
	被使役者と対格は、発話されているが、動詞は、 使役動詞ではなく、自動詞形のままである。	自動詞は、如何なる変化もなしで そのまま使われている。	「眠りに就くまで、赤ち やんを回し続ける」と 発話している。
Asal 4;0.2 (女児)	Q: xāle dāre kæfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' の代わり に、 <i>pā kærden</i> 'foot do' を発話している。	

Matin 4;0.10 (男児)	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:? xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	自動詞形を如何なる変化もなしで発話している。
Fateme, 4;0.11 (女児)	<i>xəndāndan</i> 'make laugh' と <i>xorāndan</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	
Rojin 4;0.13 (女児)	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:? xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	上記のMatin同様。
Negar 4;1.17 (女児)	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記のAsal同様。
Hanie 4;1.18 (女児)	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:? xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	上記のMatin同様。
Mohammad-Mahdi 4;1.20 (男児)	Q: juje-hā-ro be kāqəz ċikār kærð -æn? chick-PL-DO to paper what did-3PL 'What did they do on the chick's stick to the paper?' A:?xæt kešid-ænd line draw-3PL 'They drew line.'	Q:bādkonæk-o ċikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A:* bādkonæk-o terekid- Ø balloon- DO blast-3SG
	「線を引いた」という全く動画に関係のない発話をしている。	自動詞を如何なる変化もなしで、発話している。
Amir-Mahdi 4;1.21 (男児)	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記のAsal同様。
Mohammad-Matin 4;2.0 (男児)	Q: juje-hā-ro be kāqəz ċikār kærð -æn? chick-PL-DO to paper what did-3PL 'What did they do on the chick's stick to the paper?' A:?čæsp zæð-ænd paste hit-3PL	Q:xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:* xāle dāre nini-o mi-xāb-e young lady is baby-DO DUR-sleep-3SG
	「のりをつけた」と発話している。	自動詞を如何なる変化なしで発話している。
Alireza 4;3.8 (男児)	Q:xāle dāre kæfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記のAsal同様。
Hasti 4;4.0 (女児)	Q:xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:*xāb mi-kon-e sleep DUR-do-3SG	助動詞使役動詞のスキーマの拡張で、 ペルシャ語には存在しない動詞を形成している。 つまり、寝かせるの代わりに「寝ている状態にしている」と 発話している。
Farnaz, 4;4.12 (女児)	<i>xəndāndan</i> 'make laugh' と <i>xorāndan</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	

Anita 4;4.26 (女児)	<i>xəndāndæn</i> 'make laugh' と <i>xorāndæn</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	
Sajjad 4;5.8 (男児)	Q: xāle dāre kəfʃ-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記の Asal 同様。
Elham 4;5.10 (女児)	Q: xāle dāre kəfʃ-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記の Asal 同様。
Seyyed-Mohammad-Hassan 4;7.1 (男児)	<i>xəndāndæn</i> 'make laugh' と <i>xorāndæn</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	
Hasti 4;7.3 (女児)	Q: xāle dāre kəfʃ-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記の Asal 同様。
Saba 4;7.8 (女児)	Q: xāle dāre kəfʃ-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記の Asal 同様。
Alireza 4;7.15 (男児)	Q: xāle dāre kəfʃ-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記の Asal 同様。
Melika 4;8.19 (女児)	<i>xəndāndæn</i> 'make laugh' と <i>xorāndæn</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	
Rosha 4;9.5 (女児)	Q: xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: *lālā mi-kon-e lullaby(onomatopoeia) DUR-do-3SG	「ねんねする」をそのまま、使役動詞として使用している。
Mina 4;9.15 (女児)	Q: xāle dāre kəfʃ-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記の Asal 同様。
Amir-Hosseini 4;9.22 (男児)	Q: xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: *lālā mi-kon-e lullaby(onomatopoeia) DUR-do-3SG	上記の Rosha 同様。
Amir-Mahdi 4;10.19 (男児)	<i>xəndāndæn</i> 'make laugh' と <i>xorāndæn</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	

4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合を示すと、図 23 のとおりになる。

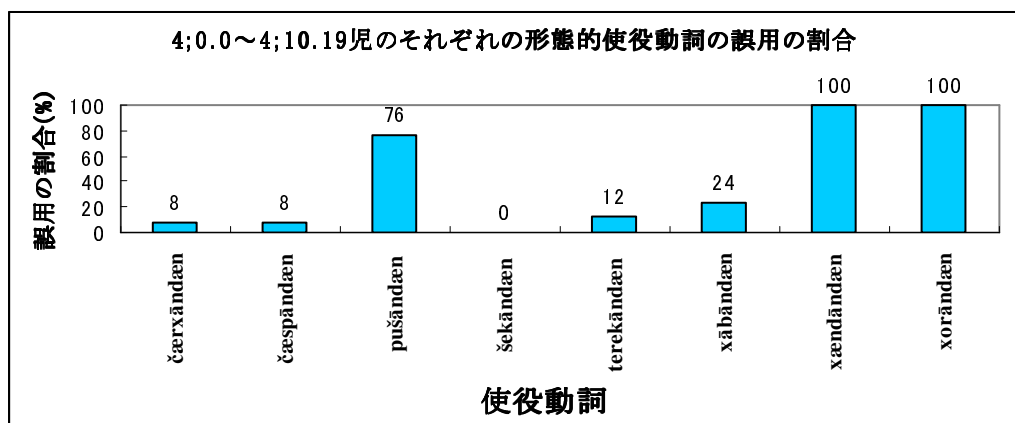


図 23 : 4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合

図 23 を図 16、図 20 と比べると、4;0.0～4;10.19 児の形態的使役動詞の誤用数は、*xāndaen* ‘make laugh’ と *xorāndaen* ‘feed’ 以外の全ての動詞で、遥かに減少していることが分かる。従って、形態的使役動詞の誤用のみについて考えると、年齢が上がるにつれて、減少の傾向が見られると言える。

3.3.3. 4;0.0～4;10.19 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

4;0.0～4;10.19 児の語彙的使役動詞や形態的使役動詞の誤用パターンでよく見られているパターンは、習得していく言語には、語彙的使役動詞や形態的使役動詞が存在するにもかかわらず、助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、誤用を犯すパターンである。本節においては、助動詞使役動詞の誤用パターン等について論じ、この年齢グループの助動詞使役動詞の誤用の割合は、上記の 2 グループより低いか高いか等について考察していく。4;0.0～4;10.19 児 25 人、それぞれの幼児の助動詞使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、表 28 のとおりである。

表 28 : 4;0.0～4;10.19 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

助動詞 使役動詞	Arshia	Asal	Matin	Fateme	Rojin	Negar	Hanie	Mohammad -Mahdi	Amir- Mahdi	Mohammad -Matin	Alireza
	4;0.0	4;0.2	4;0.10	4;0.11	4;0.13	4;1.17	4;1.18	4;1.20	4;1.21	4;2.0	4;3.8
<i>bāzkaerdæn</i> ‘open do = open’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
<i>bidār kaerdæn</i> ‘awake do = awaken’	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×
<i>bolænd kaerdæn</i> ‘high do = to lift’	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○
<i>fut kaerdæn</i> ‘puff do = to blow out’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dādæn</i> ‘push give = to push’	○	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×
<i>nešān dādæn</i> ‘sign give = show’	×	○	○	○	×	×	×	×	○	×	×
<i>pāre kaerdæn</i> ‘piece do = to tear’	○	○	○	○	×	○	○	×	○	×	○

<i>pært kærðæn</i> 'thrown down do = to throw'	○	×	○	×	×	×	○	○	×	×	○
<i>pust kærðæn</i> 'skin peel = peel, pare'	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
<i>šut kærðæn</i> 'shoot do =shoot, to kick a ball'	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×
<i>tæmiz kærðæn</i> 'clean make = to clean'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
<i>xāmuš kærðæn</i> 'silent, off make = blow out, extinguish'	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
<i>xord kærðæn</i> 'small do =chop,mince, shred'	×	○	○	×	○	×	×	×	○	×	×

助動詞 使役動詞	Hasti	Farnaz	Anita	Sajjad	Elham	Seyyed- Mohammad -Hassan	Hasti	Saba	Alireza	Melika	Rosha	Mina
	4;4.0	4;4.12	4;4.26	4;5.8	4;5.10	4;7.1	4;7.3	4;7.8	4;7.15	4;8.19	4;9.5	4;9.15
<i>bāzkærðæn</i> 'open do = open'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bidār kærðæn</i> 'awake do = awaken'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
<i>bolænd kærðæn</i> 'high do = to lift'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>fut kærðæn</i> 'puff do = to blow out'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dāðæn</i> 'push give = to push'	×	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×
<i>nešān dāðæn</i> 'sign give = show'	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×	×	×
<i>pāre kærðæn</i> 'piece do = to tear'	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
<i>pært kærðæn</i> 'thrown down do = to throw'	○	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	○
<i>pust kærðæn</i> 'skin peel = peel, pare'	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○
<i>šut kærðæn</i> 'shoot do =shoot, to kick a ball'	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	×
<i>tæmizkærðæn</i> 'clean make = to clean'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xāmuš kærðæn</i> 'silent, off make = blow out'	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×

<i>xord kærden</i> 'small do =chop,mince, shred'	×	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

助動詞 使役動詞	Amir-Hossein	Amir-Mahdi
	4;9.22	4;10.19
<i>bāzkærden</i> 'open do = open'	○	○
<i>bidār kærden</i> 'awake do =awaken'	○	○
<i>bolænd kærden</i> 'high do = to lift'	○	○
<i>fut kærden</i> 'puff do = to blow out'	○	○
<i>hol dādæn</i> 'push give = to push'	×	○
<i>nešān dādæn</i> 'sign give = show'	○	×
<i>pāre kærden</i> 'piece do = to tear'	○	○
<i>pært kærden</i> 'thrown down do = to throw'	○	○
<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare'	○	○
<i>šut kærden</i> 'shoot do =shoot,to kick a ball'	○	○
<i>tæmiz kærden</i> 'clean make = to clean'	○	○
<i>xāmuš kærden</i> 'silent, off make = blow out, extinguish'	×	×
<i>xord kærden</i> 'small do =chop,mince, shred'	×	○

4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの幼児の助動詞使役動詞の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 29 のとおりになる。

表 29 : 4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの助動詞使役動詞の重要な誤用パターン

Arshia 4;0.0 (男児)	Q:xāhær-eš-o ċikār kærð-Ø? sister-her-DO what did-3SG 'What did she do to her sister?' A:*bidār šod-Ø awake became-3SG	Q:ketāb-o dāre be xāhær-eš ċikār mi-kon-e book-DO is to sister-her what DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'What is she doing to the book to her sister?' A:*mi-bin-e DUR-see-3SG
	自動詞をそのまま、如何なる変化もなしで、 発話している。	「本を見せている」の代わりに、「本を見ている」と 発話している。
Asal 4;0.2 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔvær mi-dār-e up DUR-have-3SG 'She is taking it.'	Q:tup-po ba pā ċikār kærð-Ø? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po ændāxt- Ø ball-DO threw-3SG
	「ベビーカーを押す」の代わりに、「ベビーカー を取る」と発話している。	「ボールを手で投げる」の場合は、ペルシャ語で、 <i>pært kærden</i> 'throw' という助動詞使役動詞が <i>ændāxtæn</i> 'throw' という語彙的使役動詞が使われるが、「ボールを 足で蹴る」という場合は、 <i>šut kærden</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball' しか使われない。Asal にとっては、どうも使役行為の原因 になるからだの部分は関係なく、いずれの場合も、 <i>ændāxtæn</i> 'throw' が使われているようである。
Matin 4;0.10 (男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:rāh mi-bær-e way DUR-carry-3SG 'She is moving it.'	「ベビーカーを押す」の代わりに、 「ベビーカーを動かしている」と発話している。
Fateme, 4;0.11 (女児)	Q:tup-po ba pā ċikār kærð-Ø? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po ændāxt- Ø ball-DO threw-3SG	上記の Asal 同様。

Rojin 4;0.13 (女児)	Q:kāqəz-ro bā dəst čikār kərd-Ø? paper-DO with hand what did-3SG 'What did she do to the paper with her hand?' A:ʔxurd kərd-Ø small did-3SG	「手で紙を破る」の代わりに、「小さくした」と発話している。
Negar 4;1.17 (女児)	Q:tup-po ba pā čikār kərd-Ø? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po hol dād-Ø ball-DO push gave-3SG 'she pushed the ball.'	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔpust mi-kæn-e rind DUR-peel-3SG 'She is peeling the rind.'
	「ボールを足で蹴る」の代わりに「ボールを足で押した」と発話している。	「キュウリをみじん切りにする」の代わりに「キュウリの皮を剥く」と発話している。
Hanie 4;1.18 (女児)	Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔmi-bær-e DUR-carry-3SG 'She is carrying it.'	「ベビーカーを押す」の代わりに、「ベビーカーを持っていく」と発話している。
Mohammad-Mahdi 4;1.20 (男児)	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔmi-borr-e DUR-cut-3SG 'She is cutting it.'	「キュウリをみじん切りにしている」の代わりに、語彙的使役動詞 boridan 'cut'を発話している。Mohammad-Mahdiにとっては、「切る」と言う動詞の指す概念は、非常に幅が広いようである。
Amir-Mahdi 4;1.21 (男児)	Q:xāhær-eš-o čikār kərd-Ø? sister-her-DO what did-3SG 'What did she do to her sister?' A:ʔbidār šod -Ø awake became-3SG 'she got up.'	Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:rāh mi-bær-e way DUR-carry-3SG 'She is moving it.'
	「起こす」の代わりに「起きる」をそのまま如何なる変化もなしで、発話している。	上記のMatin同様。
Mohammad-Matin 4;2.0 (男児)	助動詞使役動詞13個の中、2個しか発話出来ない。残りの動詞の場合、「知らない」と答えている。	
Alireza 4;3.8 (男児)	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔpust mi-kæn-e rind DUR-peel-3SG 'She is peeling the rind.'	上記のNegar同様。
Hasti 4;4.0 (女児)	Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:bāzi mi-kon-e play(game) DUR-do-3SG	「ベビーカーを押す」の代わりに、単純に「遊んでいる」と発話している。
Farnaz 4;4.12 (女児)	Q:tup-po ba pā čikār kərd-Ø? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po ændāxt- Ø ball-DO threw-3SG	「ボールを手で投げる」の場合は、ペルシャ語で、 <i>pært kærđæn</i> 'throw' という助動詞使役動詞か <i>ændāxtæn</i> 'throw' という語彙的使役動詞が使われるが、「ボールを足で蹴る」という場合は、 <i>šut kærđæn</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball' しか使われない。Farnazにとっては、どうも使役行為の原因になるからだの部分は関係なく、いずれの場合も、 <i>ændāxtæn</i> 'throw' が使われているようである。
Anita 4;4.26 (女児)	Q:kiwi-ro dāre čikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A:ʔmi-bor-re DUR-cut-3SG	「皮を剥く」の代わりに、「切っている」と発話している。Anitaにとって、「切る」という動詞が指す概念は、非常に幅が広いようである。
Sajjad, 4;5.8 (男児)	全ての動詞を誤用なしで、発話している。誤用数は、ゼロである。	
Elham 4;5.10 (女児)	Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:bāzi mi-kon-e play(game) DUR-do-3SG	上記のHasti同様。

Seyyed-Mohammad-Hassan 4;7.1 (男児)	Q:tup-po ba pā ċikār kærð-Θ? ball-DO with leg what did-3SG 'What did she do to the ball with her leg?' A:ʔtup-po hol dād-Θ ball-DO push gave-3SG 'she pushed the ball.'	Q:xiyār-ro dāre bā kārð ċikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔpust mi-kæn-e rind DUR-peel-3SG 'She is peeling the rind.'
	上記のNegar同様。	上記のNegar同様。
Hasti 4;7.3 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:*rāh mi-kon-e way DUR-do-3SG	「ベビーカーを押す」の代わりに、ベルシャ語には存在しない助動詞使役動詞を作り、間違いを犯している。Hastiは、「名詞句+ <i>kærðæn</i> 」は、使役の意味を持つならば、「道+ <i>kærðæn</i> 」も必ず「押し動かす」の意味を持っているという推測をしているように見える。
Saba 4;7.8 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: mi-bær-e DUR-carry-3SG 'She is taking it.'	「ベビーカーを押している」の代わりに、「ベビーカーを持っていっている」と語彙的使役動詞を発話している。
Alireza 4;7.15 (男児)	Q:kāqæz-ro bā dæst ċikār kærð-Θ? paper-DO with hand what did-3SG 'What did she do to the paper with her hand?' A:ʔxurd kærð-Θ small did-3SG	「手で紙を破る」の代わりに、「小さくした」と別の助動詞使役動詞を発話している。
Melika 4;8.19 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:*rāh mi-d-e way DUR-give-3SG 文字通りの意味: 'She is giving it way.'	Q:ketāb-o dāre be xāhær-eš ċikār mi-kon-e book-DO is to sister-her what DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'What is she doing to the book to her sister?' A:negah mi-kon-e looking DUR-do-3SG 'She is looking at it.'
	<i>nešān dāðæn</i> 'sign give = show'は、使役動詞の意味を持つならば、「道+ <i>dāðæn</i> 」も使役動詞の意味を持つはずだとMelikaは推測し、間違いを犯しているように見える。	「見せる」の代わりに、「見ている」という自動詞をそのまま、如何なる変化なしで発話している。この誤用に似ている誤用を日本語児も英語児もしているようである。
Rosha 4;9.5 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔmi-čærx-un-e DUR-turn-CAUSE-3SG	「ベビーカーを押している」の代わりに、「ベビーカーを回転している」と発話している。つまり、助動詞使役動詞の代わりに、「場」に相応しくない形態的使役動詞を発話している。
Mina 4;9.15 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔrāh mi-ndāz-e way DUR-drop-3SG	<i>ændāxtæn</i> 'drop'は、使役動詞を作るならば、「道+ <i>ændāxtæn</i> 」もきつと使役動詞の意味を持つに違いないとMinaは、推測し、このような過ちを犯しているように見える。
Amir-Hossein 4;9.22 (男児)	Q:xiyār-ro dāre bā kārð ċikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔ mi-kæn-e DUR-peel-3SG 'She is peeling the rind.'	上記のNegar同様。
Amir-Mahdi 4;10.19 (男児)	Q:ketāb-o dāre be xāhær-eš ċikār mi-kon-e book-DO is to sister-her what DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'What is she doing to the book to her sister?' A:ʔmi-bin-e DUR-see-3SG	「本を姉妹に見せている」の代わりに、「本を姉妹に見ている」と発話している。

4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合を示すと、図 24 のとおりになる。

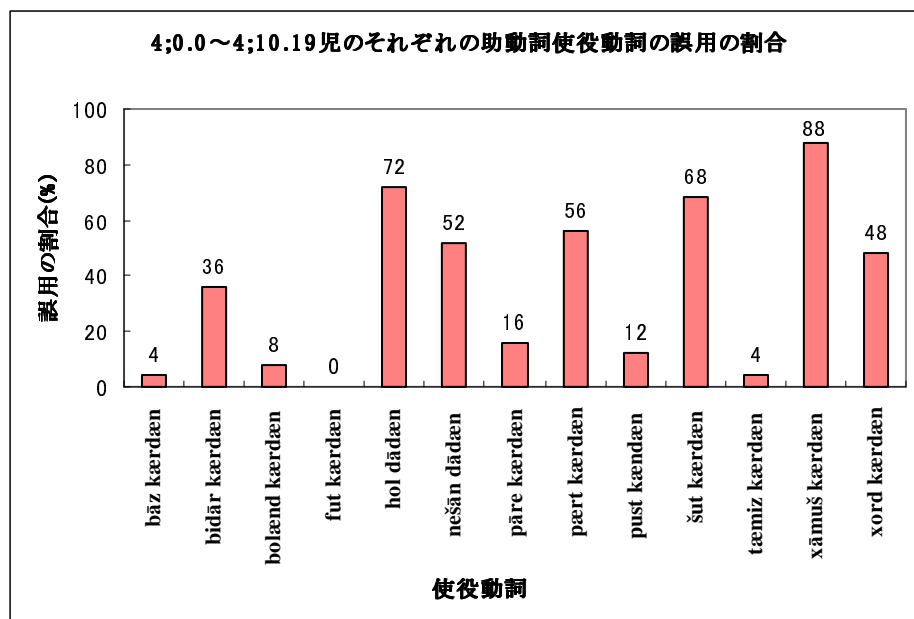


図 24 : 4;0.0～4;10.19 児 25 人のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合

図 24 を図 17 と比べると、誤用の割合は、減少していると言える。一方、図 24 を図 21 と比べると、13 個の動詞の中、7 個の誤用数は、図 24 で増加していることが分かる。つまり、2 歳児と比べ、4 歳児の助動詞使役動詞の誤用数は、減少している一方、3 歳児と比べ、誤用数は、増加していると言える。つまり 2 歳児から 3 歳児へ減少しているが、もう 1 度 4 歳になると、スキーマの拡張は非常に幅広く生じ、習得していく言語には、存在しない助動詞使役動詞を形成し、過ちを犯すので、増加の傾向を示していることが言える。

3.4. 5;0.3～5;11.6 児 30 人（男児 14 人、女児 16 人）

3.4.1. 5;0.3～5;11.6 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

5;0.3～5;11.6 児 30 人、それぞれの幼児の語彙的使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 30 : 5;0.3～5;11.6 児 30 人の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

語彙的 使役動詞	Erfan	Amir- Mahdi	Amir- Mohsen	Ali	Saead	Fateme- Zahra	Puriya	Melika	Mohammad -Ghasem	Amir- Hossein. Zamani	Mahdi
	5;0.3	5;0.5	5;0.19	5;1.2	5;1.3	5;1.3	5;1.12	5;1.22	5;2.2	5;3.12	5;3.13
ændāxtæn 'drop, throw'	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
bæstæn 'close'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
boridæn 'cut'	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×
dærāværdan 'clothes take off =take off one's clothes'	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○

<i>kešidæn</i> ‘pull’	×	×	×	○	○	×	×	○	×	○	×
<i>kubidæn</i> ‘to knock, hammer’	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×
<i>rixtæn</i> ‘to pour’	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
<i>šekæstæn</i> ‘break’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
語彙的 使役動詞	Fateme. J.	Amir- Hossein Zanganeh	Mobina	Mahan		Zahra	Sara	Yeganeh	Marjan	Saba	Maryam
	5;3.15	5;4.27	5;5.8	5;5.9		5;5.19	5;6.3	5;6.10	5;6.18	5;6.22	5;7.8
<i>ændāxtæn</i> ‘drop, throw’	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
<i>bæstæn</i> ‘close’	○	○	○	○		○	○	○	×	○	○
<i>boridæn</i> ‘cut, slice’	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
<i>dærāverdan</i> ‘clothes take off =take off one’s clothes’	○	○	×	×		○	○	○	○	○	×
<i>kešidæn</i> ‘pull’	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×
<i>kubidæn</i> ‘to knock, hammer’	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×
<i>rixtæn</i> ‘to pour’	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
<i>šekæstæn</i> ‘break’	○	×	○	○		○	○	○	○	○	○

語彙的 使役動詞	Negar	Amir- Hossein M.	Elahe	Amir- Hossein.H.	Fateme.Y.	Ghazal Mahmudi	Amir- Hossein.N.	Setare	Reihane
	5;7.8	5;7.29	5;8.11	5;8.21	5;9.4	5;9.9	5;9.12	5;9.21	5;11.6
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bæstæn</i> 'close'	×	○	○	○	○	×	○	○	○
<i>boridæn</i> 'cut, slice'	×	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>dərāværdan</i> 'clothes take off =take off one's clothes'	○	○	×	○	○	○	○	○	○
<i>kešidæn</i> 'pull'	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'	×	×	×	○	×	×	×	×	×
<i>rixtaen</i> 'to pour'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>šekæstæn</i> 'break'	○	○	○	×	○	○	○	○	○

5;0.3～5;11.6 児 30 人のそれぞれの幼児の語彙的使役動詞の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 31 のとおりになる。

表 31 : 5;0.3~5;11.6 児 30 人のそれぞれの語彙的使役動詞の重要な誤用パターン

Erfan 5;0.3(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ? dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: ?mix-o mi-zæn-e nail-DO DUR-hit-3SG
	Erfanにとっては、どうも「引く」も「押す」も同じ概念に見えているようである。両方の動詞を「押す」によって、表す。従って、移動動詞の移動の方向に関係なく、1つの動詞が使われている。	
Amir-Mahdi 5;0.5(男児)	Q:keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: *keik-o qeiči mi-kon-e cake-DO scissors DUR-do-3SG	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: ?bænnāyi mi-kon-e construction work DUR-do-3SG 'He is constructing.'
	「ケーキを包丁で切る」という動画を見、 「ケーキをチョキンしている」と発話している。	<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' の代わりに、「建設している」と発話している。
Amir-Mohsen 5;0.19(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?mi-bær-e æqæb DUR-take-3SG back 'She takes it back.'	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: *dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
	「後ろへ引く」の代わりに「後ろへ持っていく」と発話している。	「釘を割っている」と発話している。つまり、語彙的使役動詞の代わりに、形態的使役動詞を使用している。
Ali 5;1.2(男児)	Q:keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A: ?keik-o xærāb mi-kon-e cake-DO ruin DUR-do-3SG	Q: lebās-e arusæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: lebās-eš-o ævæz kærð-Ø clothes-it-DO change did-3SG
	「ケーキを包丁で切っている」という動画を見て、「ケーキを壊している」と発話している。	「人形の洋服を脱いでいる」という動画を見て、「洋服を変えている」と発話している。「脱いだ後、新しい洋服に変えた」まで見せられていないのに、Aliは、 <i>ævæz kærðæn</i> 'change' という助動詞使役動詞を発話している。
Saad 5;1.3(男児)	誤用なしで全ての動詞を発話している。	
Fateme-Zahra 5;1.3(女児)	Q:dæftær-eš-o ċikār kærð-Ø? notebook-her-DO what did-3SG 'What did she do to the notebook?' A: *dæftær-eš-o päre kærð-Ø notebook-her-3SG rigged did-3SG	Q: āb-o ċikār kærð-Ø? water-DO what did-3SG 'What did she do to the water?' A: ?fešār dād-Ø pressure give-3SG
	「ノートを下ろしている」という動画を見て、「ノートを破れた」と発話している。	「水を溢している」という動画を見て、「水を押した、水に力を入れた」と発話している。
Puriya 5;1.12(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?mi-r-e dændeæqæbi DUR-take-3SG reverse gear	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: *dāre doros-eš mi-kon-e is correct DUR-do-3SG 'He is repairing it.'
	「ベビー車を後ろへ引っ張っている」という動画を見せられ、「後退ギアで後ろへ行っている」と発話している。	「釘を直している」と発話している。「場」に相応しくない助動詞使役動詞を使用している。
Melika, 5;1.22(女児)	誤用なしで全ての動詞を発話している。	

Mohammad-Ghasem 5;2.2(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ æqæbi mi-bær-e back DUR-carry-3SG	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:ʔmix-o mi-zæn-e nail-DO DUR-hit-3SG
	「後ろへ引っ張っている」ではなく、「後ろへ持っていく」という別の語彙的使役動詞を発話している。	<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' の代わりに、使役の意味を持たない <i>zædan</i> 'hit' を使用し、誤用を犯している。
Amir-Hossein-Zamani 5;3.12(男児)	Q:keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A:ʔ pāre mi-kon-e ragged DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She ragged the cake.'	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
	ペルシャ語の貧しい社会階級の男性の間では、「スイカを包丁で切る」を描写するために、 <i>pāre kærden</i> が使われる。つまり、この社会階級の男児性は「スイカを包丁で切る」の代わりに「スイカを破れた状態にする」と発話する。しかしながら、この社会階級の男児性は、「スイカやメロン」の他の食べ物の場合は、決して <i>pāre kærden</i> を使わない。面白いことには、ペルシャ語児は、「ケーキ」の場合でも、 <i>pāre kærden</i> を使用している。	上記の Amir-Mohsen 同様。
Mahdi 5;3.13(男児)	Q:kāqæz-ro bā qeīči ċikār kærð-Ø? paper-DO with scissors what did-3SG 'What did she do to the paper with the scissors?' A:ʔpāre kærð-Ø ragged did-3SG 'She ragged it.'	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'
	<i>boridæn</i> 'cut' という語彙的使役動詞が望まれる「場」でも、 <i>pāre kærden</i> 'piece make = to tear' が使われている。従って、Arshia にとって、「ハサミ」も「手」も全く一緒に、使役行為の道具は、「場」を描写するときに、重要ではないかのように見える。	上記の Erfan 同様。
Fateme.J. 5;3.15(女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ æqæbi mi-bær-e back DUR-carry-3SG	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
	上記の Mohammad-Ghasem 同様。	上記の Amir-Mohsen 同様。
Amir-Hossein-Zanganeh 5;4.27(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ rānændegi mi-kon-e driving DUR-do-3SG 'She is driving.'	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
	「ベビーカーを後ろへ引っ張っている」の代わりに、自動詞形の動詞「運転している」と発話している。	上記の Amir-Mohsen 同様。
Mobina 5;5.8(女児)	Q: lebās-e arusæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A:ʔbāz kærð-Ø open did-3SG 'She opened it.'	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'
	<i>bāz kærden</i> 'open' という助動詞使役動詞を発話している。	上記の Erfan 同様。
Mahan 5;5.9(男児)	Q: lebās-e arusæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A:ʔværdāšt-Ø picked up-3SG	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*čub mi-zæn-e wood-DO DUR-hit-3SG
	「洋服を脱いだ」の代わりに「洋服を取った」と発話している。	ペルシャ語に存在しない助動詞使役動詞 <i>čub zædan</i> 'wood hit' を形成し、発話している。

Zahra 5;5.19(女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔmi-bær-e DUR-take-3SG 'She is carrying it.'	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
	「後ろへ引つ張っている」の代わりに、「持つて行く」と発話している。	上記の Amir-Mohsen 同様。
Sara 5;6.3(女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'
	上記の Erfan 同様。	上記の Amir-Mohsen 同様。
Yeganeh 5;6.10(女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:rā-š mi-bær-e way-it DUR-take-3SG	<i>rāh ræftæn</i> 'way go =walk'の助動詞使役動詞は、 <i>rāh bordæn</i> 'way take =walk,move'である。「ベビーカーを後ろ引つ張っている」ではなく、「動かしている」と発話している。
Marjan 5;6.18(女児)	Q: dær-o ċikār kærð-Ø? door-DO what did-3SG 'What did she do to the door?' A:* dær-o bæst-e kærð-Ø door-DO c closed did-3SG	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:ʔmix-o mi-zæn-e nail-DO DUR-hit-3SG
	学習中の言語にはないパターン、「形容詞+kærðæn」というスキーマを拡張し、大人の文法には存在しない <i>bæst-e kærð</i> を使う間違いを起こしている。	上記の Erfan 同様。
Saba 5;6.22(女児)	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*dāre guškub mi-zæn-e is beetle ⁵⁰ DUR-hit-3SG 文字通りの意味: 'She is hitting it with beetle.'	質問に「釘に何をしているか?」とちゃんと被使役物も質問に入っているので、 <i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'という答えが期待されているが、「叩く」という使役の意味を持たない軽動詞を発話している。
Maryam 5;7.8(女児)	Q: lebās-e aruṣæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: lebās-eš-o ævæz kærð-Ø clothes-it-DO change did-3SG	上記の Ali 同様。
Negar 5;7.8(女児)	Q: dær-o ċikār kærð-Ø? door-DO what did-3SG 'What did she do to the door?' A:* dær-o bæst-e kærð-Ø door-DO c closed did-3SG	Q: keik-o ċikār mi-kon-e? cake-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cake?' A:ʔ pāre mi-kon-e ragged DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'She ragged the cake.'
	上記の Marjan 同様。	上記の Amir-Hossein-Zamani 同様。
Amir-Hossein.M. 5;7.29(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:rā-š mi-bær-e way-it DUR-take-3SG	上記の Yeganeh 同様。
Elahe 5;8.11(女児)	Q: lebās-e aruṣæk-o ċikār kærð-Ø? clothes-Ez doll-DO what did-3SG 'What did she do to the clothes of the doll?' A: lebās-eš-o ævæz kærð-Ø clothes-it-DO change did-3SG	上記の Ali 同様。

⁵⁰ 肉をたたきつづす大槌のこと。

Amir-Hossein-H. 5;8.21(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:*māšin-eš-o sāvāri mi-d-e car-her-DO drive DUR-give-3SG	Q:šišæ-ro ċikār kærð-Θ? glass-DO what did-3SG 'What did she do the glass?' A:*šekæst kærð-Θ failure did-3SG
	<i>nešān dāden</i> 'sign give = show' は、使役動詞の意味を持つならば、「ドライブ + <i>dāden</i> 」も使役動詞の意味を持つはずだと Amir-Hossein は推測し、間違いを犯しているように見える。	<i>šekæstæn</i> 'break' の過去分詞形は、 <i>šekæste</i> 'broken' であるが、Amir-Hossein は、間違った分詞形に <i>kærden</i> 'do' を結合し、ペルシャ語には、存在しない新助動詞使役動詞を発話している。これは、助動詞使役動詞のスキーマの拡張に生じた過ちである。
Fateme.Y. 5;9.4(女児)	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*dāre mi-bor-e is DUR-cut-3SG	「釘を切っている」と発話している。
Ghazal- Mahmudi 5;9.9(女児)	Q: dær-o ċikār kærð-Θ? door-DO what did-3SG 'What did she do to the door?' A:* dær-o bæst-e kærð-Θ door-DO c closed did-3SG	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: ?mix-o mi-zæn-e nail-DO DUR-hit-3SG
	上記の Marjan 同様。	上記の Erfan 同様。
Amir-Hossein-N. 5;9.12(男児)	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:*čub-o mi-sāz-e wood-DO DUR-build-3SG 'He is building the wood.'	「釘を作り上げている」と発話している。
Setare 5;9.21(女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?mi-bær-e dændeæqæbi DUR-take-3SG reverse gear	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: ?mix-o mi-zæn-e nail-DO DUR-hit-3SG
	「後退ギアでベビーカーを後ろへ動かしている」と発話している。	上記の Erfan 同様。
Reihane 5;11.6(女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ? dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'	上記の Erfan 同様。

5;0.3～5;11.6 児 30 人のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合を示すと、図 25 のとおりになる。

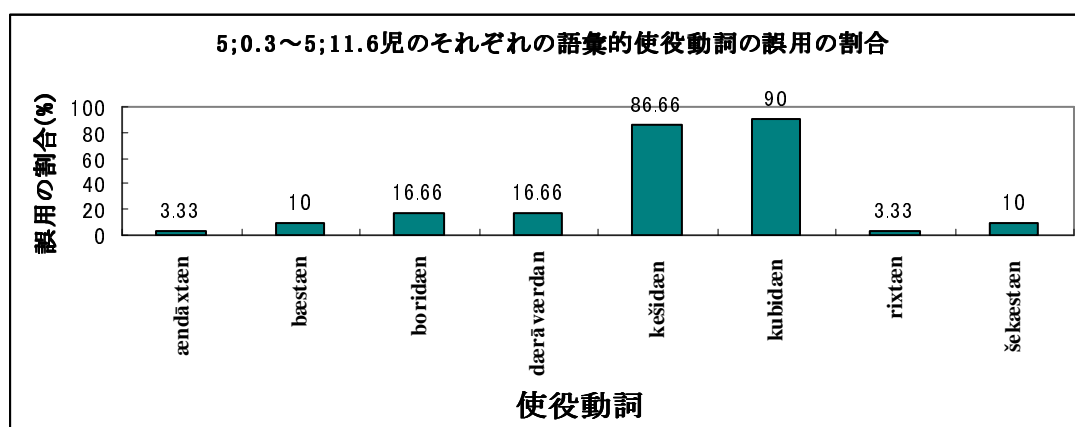


図 25 : 5;0.3～5;11.6 児 30 人のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合

図 25 を図 15 と図 18 と比べると、殆どの動詞の誤用の割合は減少していることが分かる。更に、

図 25 を図 22 と比べても、8 個の動詞の中、5 個の誤用の割合は、図 25 において減少していることが分かる。従って、語彙的使役動詞のみについて考えてみると、年齢が上がるにつれ、誤用の割合も減少していくことが分かる。誤用の割合は、非常に前の年齢グループに類似し、殆どの場合は、習得していく言語には、語彙的使役動詞が存在するにもかかわらず、幼児は、助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、過ちを犯し、間違った助動詞使役動詞を発話してしまう。2 歳児の場合、訊かれた動詞を知らないか、質問されたそのときに、コミュニケーションのプレッシャーの下で、その動詞が思い出せない場合は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærð* と発話している。しかしながら、このストラテジーは、他の年齢グループには、見られなかった。つまり、3~5 歳児は、「場」を適切に描写する使役動詞を知らないときも、「場」に相応しくない同じグループの使役動詞を発話するか、自動詞形を発話するか、又は別の使役グループに属する使役動詞を発話する。つまり、2 歳児の使役動詞の使用は、知らない使役動詞がある場合や使役動詞が思い出せない場合は「とにかく『ジェスチャー+*intori kærð*』を使えば、聞き手もなんとなく自分の意図は分かるだろう」と推測し、このような発話をしている。しかしながら、36 ヶ月を超えると、全ての使役動詞のグループのスキーマはもう既に完成しており、名前の知らない使役動詞がある場合やコミュニケーションの際にその動詞にアクセスできなくなる場合は、「とにかく別の使役動詞やその動詞の自動詞形を使えば、自分の意図が聞き手に伝わるだろう」と推測し、誤用を起こす。

3.4.2. 5;0.3~5;11.6 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無

現代ペルシャ語の形態的使役動詞の数は、残りの 2 つのグループの使役動詞の数より遥かに少ない。日本語の「飲ませる」「食べさせる」「着（さ）せる」等といった、被使役者が人間である形態的使役動詞は、ペルシャ語にも存在するが、実際あまり使われていない。例えば、「食べさせる」は、ペルシャ語で、*xorāndaen'feed'* になるが、現代ペルシャ語では、「被使役者の意図に反して、使役者は被使役者に何かを食べさせる」場合のみ使用される。勿論、食べ物のみではなく、「なにか政治的な考え方や宗教上の教えなどを子供たち等に教え込んで、子供たちを洗脳する」という場合も、*xorāndaen'feed'* は、使われる。現代ペルシャ語の口語では、被使役物が無生物の場合は、形態的使役動詞が使われる。従って、全ての年齢グループにおいて、「食べさせる」や「着（さ）せる」といった被使役者が人間である動詞の発話数は、ゼロかゼロに近い数字を示しても不思議ではない。更に、全ての年齢グループでも、*xændaendaen'make laugh'* の発話数は、ゼロである。その理由として考えられるのは、*xændaendaen'make laugh'* は、あくまでも「使役者は間接的に被使役者の心理状態に影響を及ぼし、笑うようにさせる」という文脈で、例えば、コメディアンは、観客を楽しませ笑いを誘うという場合に使われる。実験で使った動画は、「1 人の女兒は、もう 1 人の女兒を擽って、直接的に笑わせる」という「場」なので、*xændaendaen'make laugh'* は、発話されなくても、全くおかしくない。従って、この動詞に関しては、実験で使った動画はあまり適切ではなかったことが言える。*xændaendaen'make laugh'* という動詞が発話可能かどうかを確認するために、本当は「コメディアンは観客を笑わせている」という動画を流した方が適切であると考えられる。5;0.3~5;11.6 児 30 人、それぞれの幼児の形態的使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 32 : 5;0.3～5;11.6 児 30 人の適切な形態的使役動詞の発話の有無

形態的 使役動詞	Erfan	Amir- Mahdi	Amir- Mohsen	Ali	Saead	Fateme- Zahra	Puriya	Melika	Mohammad -Ghasem	Amir- Hossein. Zamani	Mahdi
	5;0.3	5;0.5	5;0.19	5;1.2	5;1.3	5;1.3	5;1.12	5;1.22	5;2.2	5;3.12	5;3.13
<i>čærxāndæn</i> 'turn'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>čæsbāndæn</i> 'to stick, to paste up'	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress'	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×	×
<i>šekāndæn</i> 'break'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep'	○	×	○	○	○	×	×	○	○	○	×
<i>xændāndæn</i> 'make laugh'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndæn</i> 'feed'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

形態的 使役動詞	Fateme. J.	Amir- Hossein Zanganeh	Mobina	Mahan	Zahra	Sara	Yeganeh	Marjan	Saba	Maryam
	5;3.15	5;4.27	5;5.8	5;5.9	5;5.19	5;6.3	5;6.10	5;6.18	5;6.22	5;7.8
<i>čærxāndæn</i> 'turn'	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
<i>čæsbāndæn</i> 'to stick, to paste up'	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>šekāndæn</i> 'break'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xændāndæn</i> 'make laugh'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndæn</i> 'feed'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

形態的 使役動詞	Negar	Amir- Hossein M.	Elahe	Amir- Hossein.H.	Fateme.Y.	Ghazal Mahmudi	Amir- Hossein.N.	Setare	Reihane
	5;7.8	5;7.29	5;8.11	5;8.21	5;9.4	5;9.9	5;9.12	5;9.21	5;11.6
<i>čærxāndæn</i> 'turn'	○	○	○	○	○	○	×	○	○
<i>čæsbāndæn</i> 'to stick, to paste up'	○	○	×	×	○	○	○	○	○

<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress'	×	×	×	×	×	○	×	×	×
<i>šekāndæn</i> 'break'	○	○	○	×	○	○	○	○	○
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xændāndæn</i> 'make laugh'	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndæn</i> 'feed'	×	×	×	×	×	×	×	×	×

5;0.3～5;11.6 児 30 人のそれぞれの幼児の形態的使役動詞の重要な誤用の割合を示すと、以下の表 33 のとおりになる。

表 33 : 5;0.3～5;11.6 児 30 人のそれぞれの形態的使役動詞の重要な誤用パターン

Erfan 5;03(男児)	Q:xāle dāre kaeš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: ? xāle dāre kaeš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	被使役者と対格は、発話されているが、動詞は、 使役動詞ではなく、自動詞形のままである。
Amir-Mahdi 5;0.5(男児)	Q:xāle dāre nini-ro čikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: *lālā-š mi-d-e lullaby-her DUR-give-3SG	「擬態語+ <i>dāden</i> 'give'」という構文を発話している。「ねんね」という擬態語に <i>dāden</i> 'give'という軽動詞に付与することによって、自分なりの使役動詞を作っていると考えられる。日本語児も「寝かせる」の代わりに「ねんねする」をそのまま使役動詞として使っているが、「ねんねをあげている」は、ペルシャ語児の独特な誤用である。
Amir-Mohsen 5;0.19(男児)	Q: juje-hā-ro be kāqəz čikār kærð -æn? chick-PL-DO to paper what did-3PL 'What did they do on the chick's stick to the paper?' A: ?kešid-ænd drew-3 PL	「雛のステッカーを紙にどうしたか?」という質問に対して、 「ステッカーを描いた」と答えている。
Ali 5;1.2(男児)	Q:xāle dāre kaeš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' の代わりに、 <i>pā kærðæn</i> 'foot do' を発話している。しかしながら、これを誤用として考えるのは、あまり好ましくない。 <i>pā kærðæn</i> 'foot do' の方が、 口語に良く用いられる。
Saead 5;1.3(男児)	Q:nini dāre xāhær-eš-o čikār mi-kon-e? girl is sister-her-DO what DUR-do-3SG 'What is she doing to her sister?' A: ? dāre mi-košet-eš is DUR-kill-her 'She is killing her.'	<i>xændāndæn</i> 'make laugh' の代わりに、語彙的使役動詞 <i>košetæn</i> 'kill' を 発話している。

Fateme-Zahra 5;1.3(女児)	Q:xāle dāre nini-ro čikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: *lālā-š mi-d-e lullaby-her DUR-give-3SG	「赤ちゃんを寝かせている」の代わりに、「子守をあげている」とペルシャ語に存在しない助動詞使役動詞を発話している。	
Puriya 5;1.12(男児)	Q:xāle dāre nini-ro čikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:*xāle dāre nini-ro mi-xāb-e young lady is baby-DO DUR-sleep-3SG	「おねえちゃんは、赤ちゃんを寝ている」と自動詞形をそのまま如何なる変化もなしで、発話している。	
Melika 5;1.22(女児)	Q:xāle dāre nini-ro čikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:*xāle dāre nini-ro mi-xāb-e young lady is baby-DO DUR-sleep-3SG	上記のPuriya同様。	
Mohammad-Ghasem 5;2.2(男児)	xəndānden' make laugh' と xorānden' feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。		
Amir-Hossein-Zamani 5;3.12(男児)	Q:xāle dāre kəfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記のAli同様。	
Mahdi 5;3.13(男児) この幼児は、年齢のわりに非常に誤用数は高い数字を示している。	Q:xāle dāre kəfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:? xāle dāre kəfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG Q:bādkonæk-o čikār kærð-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A:* bādkonæk-o terekid- Ø balloon- DO blast-3SG	Q:xāle dāre nini-o young lady is baby-DO čikār mi-kon-e? waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: xāle dāre nini-o young lady is baby-DO ru pā-š mi-xāb-e on leg-her DUR-sleep-3SG	
	自動詞形はそのまま使われている。	自動詞形はそのまま使われている。	「脚の上で、赤ちゃんを寝ている」と自動詞形をそのまま発話している。
Fateme.J. 5;3.15(女児)	Q:xāle dāre kəfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:? xāle dāre kəfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	上記のMahdi同様。	
Amir-Hossein-Zanganeh 5;4.27(男児)	上記のFateme.J.同様。		
Mobina,5;5.8(女児)	上記のFateme.J.同様。		
Mahan 5;5.9(男児)	Q:færmun-e māšin-o čikār mi-kon-e? steering wheel-DO car-DO what DUR-do-3SG 'What is she doning to the steering wheel?' A: ?invær-unvær mi-kon-e this way and that way DUR-do-3SG 文字通りの意味： 'She is making it this way and that way.'	「ベビーカーのハンドルを回している」の代わりに「あちらこちらにしている」と発話している。	
Zahra 5;5.19(女児)	Q:xāle dāre kəfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:? xāle dāre kəfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	上記のMahdi同様。	
Sara 5;6.3(女児)	Q:xāle dāre kəfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記のAli同様。	
Yeganeh, 5;6.10(女児)	上記のSara同様。		

Marjan, 5;6.18(女児)	上記のSara同様。	
Saba, 5;6.22(女児)	上記のSara同様。	
Maryam 5;7.8(女児)	Q: xāle dāre be nini qæzā-ro čikār mi-kon-e? young lady is to baby food-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing?' A: ? qæzā-ro dæhæn-eš mi-zār-e food-DO mouth-her put-put-3SG 'She is putting the food in the baby's mouth.'	xorāndæn'feed'の代わりに、ただ「口にご飯を置いている」と発話している。
Negar, 5;7.8(女児)	上記のSara同様。	
Amir-Hossein.M. 5;7.29(男児)	上記のSara同様。	
Elahe 5;8.11(女児)	Q: juje-hā-ro be kāqæz čikār kærd -æn? chick-PL-DO to paper what did-3PL 'What did they do on the chick's stick to the paper?' A: ? væsl kærd-ænd joining did-3 PL 'They joined them.'	「雛のステッカーを紙にくっつけた」の代わりに、「雛のステッカーを紙に繋げた」と「場」に相応しくない助動詞使役動詞を発話している。
Amir-Hossein-H. 5;8.21(男児)	Q: juje-hā-ro be kāqæz čikār kærd -æn? chick-PL-DO to paper what did-3PL 'What did they do on the chick's stick to the paper?' A: ? čæsbunæk zæd-ænd nonsense paste-3PL	Q: šišæ-ro čikār kærd-Ø? glass-DO what did-3SG 'What did she do the glass?' A: *šekæst kærd-Ø failure did-3SG
	「糊」のことをčæspというが、そこから新しい名詞を形成し、それに「つける」という意味のzædænを結合し、発話している。	šekæstæn'break'の過去分詞形は、šekæste'broken'であるが、Amir-Hosseinは、間違った分詞形にkærdæn'do'を結合し、ペルシャ語には、存在しない新助動詞使役動詞を発話している。これは助動詞使役動詞のスキーマの拡張に生じた過ちである。
Fateme.Y. 5;9.4(女児)	Q: xāle dāre kæfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: ? xāle dāre kæfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	上記のErfan同様。
Ghazal- Mahmudi 5;9.9(女児)	xændāndæn'make laugh'とxorāndæn'feed'以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	
Amir-Hossein-N. 5;9.12(男児)	Q: pārcē-ro dāre čikār mi-kon-e? cloth-DO is what DUR-do-3SG A: * dāre mi-tekun-e is DUR-shake-3SG 'She is shaking it.'	「布を回している」の代わりにtekāndæn「布を振るい動かしている」と別の形態的使役動詞を発話している。
Setare, 5;9.21(女児)	上記のSara同様。	
Reihane 5;11.6(女児)	上記のFateme.Y.と同様。	

5;0.3～5;11.6 児30人にも前の年齢グループと同様に xændāndæn'make laugh'と xorāndæn'feed'は、発話不可能である。この年齢グループのそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合を示すと、図 26 のとおりになる。

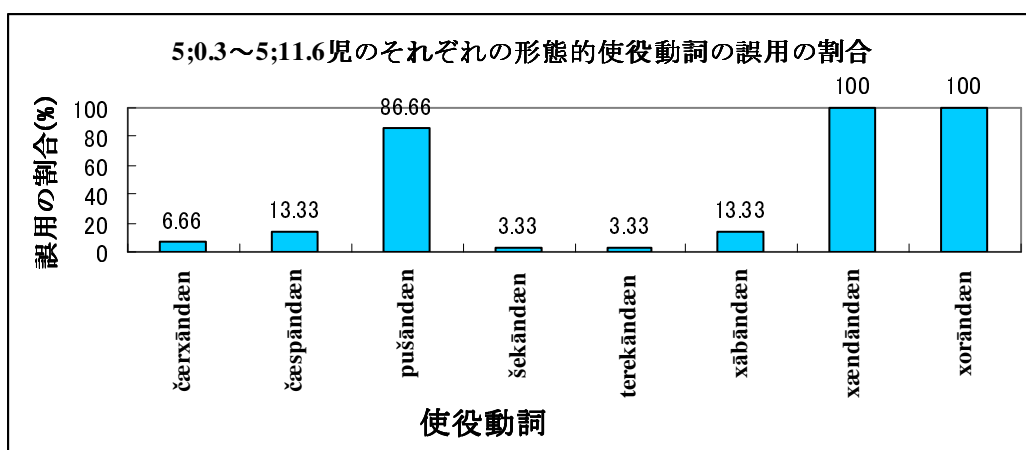


図 26 : 5;0.3~5;11.6 児 30 人のそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合

図 16、20、23 を比較してみると、*xændāndæn* ‘make laugh’ と *xorāndæn* ‘feed’ 以外は、全ての動詞の誤用数は、図 23 において図 16 と図 20 より減少していることが分かる。*xændāndæn* ‘make laugh’ と *xorāndæn* ‘feed’ は、4 つの年齢グループで変化がなく、どの年代でも発話できない。しかしながら、図 26 を図 20 と比べると、*xændāndæn* ‘make laugh’ と *xorāndæn* ‘feed’ 以外の 6 つの動詞の中、半分の誤用数は減少しているが、残りの半分の誤用数は、増加していることが分かる。

3.4.3. 5;0.3~5;11.6 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

5;0.3~5;11.6 児 30 人、それぞれの幼児の助動詞使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 34 : 5;0.3~5;11.6 児 30 人の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

助動詞 使役動詞	Erfan	Amir- Mahdi	Amir- Mohsen	Ali	Saead	Fateme- Zahra	Puriya	Melika	Mohammad -Ghasem	Amir- Hossein. Zamani	Mahdi
	5;0.3	5;0.5	5;0.19	5;1.2	5;1.3	5;1.3	5;1.12	5;1.22	5;2.2	5;3.12	5;3.13
<i>bāzkærdæn</i> ‘open do = open’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bidār kærdæn</i> ‘awake do =awaken’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bolænd kærdæn</i> ‘high do = to lift’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
<i>fut kærdæn</i> ‘puff do = to blow out’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dādæn</i> ‘push give = to push’	○	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○
<i>nešān dādæn</i> ‘sign give = show’	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×
<i>pāre kærdæn</i> ‘piece do = to tear’	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>pært kærdæn</i> ‘thrown down do = to throw’	×	×	○	×	○	×	○	×	○	○	×

<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
<i>šut kændæn</i> 'shoot do=shoot, to kick a ball'	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	×
<i>tæmiz kændæn</i> 'clean make = to clean'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xāmuš kændæn</i> 'silent, off make = blow out, extinguish'	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×
<i>xord kændæn</i> 'small do =chop,mince, shred'	×	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○

助動詞 使役動詞	Fateme. J.	Amir- Hossein Zanganeh	Mobina	Mahan	Zahra	Sara	Yeganeh	Marjan	Saba	Maryam
	5;3.15	5;4.27	5;5.8	5;5.9	5;5.19	5;6.3	5;6.10	5;6.18	5;6.22	5;7.8
<i>bāzkændæn</i> 'open do = open'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bidār kændæn</i> 'awake do =awaken'	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
<i>bolænd kændæn</i> 'high do = to lift'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>fut kændæn</i> 'puff do = to blow out'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dādæn</i> 'push give = to push'	×	×	○	×	×	○	×	×	○	○
<i>nešān dādæn</i> 'sign give = show'	○	×	○	○	○	×	×	○	○	○
<i>pāre kændæn</i> 'piece do = to tear'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
<i>pært kændæn</i> 'thrown down do = to throw'	×	○	○	×	×	×	○	×	○	○
<i>pust kændæn</i> 'skin peel = peel, pare'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>šut kændæn</i> 'shoot do=shoot, to kick a ball'	×	×	○	×	×	○	○	×	○	○
<i>tæmiz kændæn</i> 'clean make = to clean'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xāmuš kændæn</i> 'silent, off make = blow out, extinguish'	×	×	○	×	○	○	○	×	○	×

<i>xord kærðæn</i> 'small do =chop,mince, shred'	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

助動詞 使役動詞	Negar	Amir- Hossein M.	Elahe	Amir- Hossein.H.	Fateme.Y.	Ghazal Mahmudi	Amir- Hossein.N.	Setare	Reihane
	5;7.8	5;7.29	5;8.11	5;8.21	5;9.4	5;9.9	5;9.12	5;9.21	5;11.6
<i>bāzkærðæn</i> 'open do = open'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bidār kærðæn</i> 'awake do =awaken'	○	×	○	○	○	○	○	○	○
<i>bolænd kærðæn</i> 'high do = to lift'	○	○	○	○	○	○	○	○	×
<i>fut kærðæn</i> 'puff do = to blow out'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dādæn</i> 'push give = to push'	○	×	○	×	○	○	×	×	○
<i>nešān dādæn</i> 'sign give = show'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>pāre kærðæn</i> 'piece do = to tear'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>pært kærðæn</i> 'thrown down do = to throw'	○	×	○	×	○	○	○	○	×
<i>pust kærðæn</i> 'skin peel = peel, pare'	○	○	○	×	○	○	○	○	○
<i>šut kærðæn</i> 'shoot do=shoot, to kick a ball'	○	×	○	×	○	○	○	○	×
<i>tæmiz kærðæn</i> 'clean make = to clean'	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xāmuš kærðæn</i> 'silent, off make = blow out, extinguish'	○	×	○	×	×	×	×	×	×
<i>xord kærðæn</i> 'small do =chop, mince, shred'	○	○	○	×	○	○	○	×	○

5;0.3～5;11.6 児 30 人のそれぞれの幼児の助動詞使役動詞の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 35 のとおりになる。殆どの誤用パターンは、「場」に合う適切な助動詞使役動詞の代わりに、「場」に合わない別の助動詞使役動詞を発話しているというパターンか、自動詞をそのまま助動詞使役動詞として発話しているというパターンである。

表 35 : 5;0.3~5;11.6 児 30 人のそれぞれの助動詞使役動詞の重要な誤用パターン

Erfan 5;03(男児)	Q:ketāb-o dāre be xāhær-eš čikār mi-kon-e book-DO is to sister-her what DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'What is she doing to the book to her sister?' A: *negāh mi-kon-e look DUR-do-3SG 'She is looking.'	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A: *mi-borr-e DUR-cut-3SG 'She is cutting it.'
	「絵を姉妹に見せている」という動画を見て、 「絵を見ている」と自動詞形をそのまま発話している。	「皮を剥く」の代わりに、語彙的使役動詞 <i>boriden</i> 'cut'を発話している。Mohammad-Mahdiにとっては、「切る」と言う動詞は指す行為は、非常に幅が広いようである。
Amir-Mahdi 5;0.5(男児)	Amir-Mahdiは、 <i>pært kærden</i> 'thrown down do = to throw' と <i>šut kærden</i> 'shoot do=shoot, to kick a ball' の両方の動詞を、 語彙的使役動詞 <i>ændāxtæn</i> 'drop'によって表現している。	
Amir-Mohsen 5;0.19(男児)	Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?rāh mi-bær-e way DUR-take-3SG 文字通りの意味: 'She is walking it.'	「ベビーカーを押している」の代わりに、「ベビーカーを歩かせる」と発話している。ペルシャ語の <i>rāh borden</i> 'walk'という動詞は、被使役物は、動物、例えば、犬の場合のみ使用可能である。日本語に訳すと、「散歩させる」という文に相当する。
Ali 5;1.2(男児)	Q:ketāb-o dāre be xāhær-eš čikār mi-kon-e book-DO is to sister-her what DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'What is she doing to the book to her sister?' A: *mi-bin-e DUR-see-3SG	「本を見ている」と動詞を自動詞形のまま発話している。
Saeed 5;1.3(男児)	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A: ?rænde mi-kon-e grater DUR-do-3SG 'She is grating it.'	「キュウリを刻んでいる」の代わりに、「キュウリをおろしている」と発話している。
Fateme-Zahra 5;1.3(女児)	Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ?rāh mi-bær-e way DUR-take-3SG 文字通りの意味: 'She is walking it.'	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A: *mi-borr-e DUR-cut-3SG 'She is cutting it.'
	上記のAmir-Mohsen同様。	上記のErfan同様。
Puriya 5;1.12(男児)	上記のErfanと同様に、 <i>xord kærden</i> 'small do = chop,mince, shred'の代わりに、語彙的使役動詞 <i>boriden</i> 'cut'を発話している。 従って、Puriyaにとって、「切る」という動詞は、支配する「場」は、非常に幅が広いことが言える。	
Melika 5;1.22(女児)	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ čikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A: *qārč mi-zæn-e slice DUR-hit-eSG	「何かを薄く1枚切り取る」をペルシャ語で <i>qāč kærden</i> 'slice do = slice'と言うが、この子は、 <i>qāč</i> に <i>zæden</i> 'hit'と言う動詞を結語し、誤用を犯している。 <i>qāč zæden</i> は、ペルシャ語には存在しない動詞である。
Mohammad-Ghasem 5;2.2(男児)	全ての動詞を誤用なしで発話出来た。	
Amir-Hossein-Zamani 5;3.12(男児)	Q:kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: mi-bær-e DUR-carry-3SG 'She is taking it.'	「ベビーカーを押している」の代わりに、「ベビーカーを持っていつている」と語彙的使役動詞を発話している。
Mahdi 5;3.13(男児)	Q:māšin-o čikār kærđ-Ø? car-DO what did-3SG 'What did she do to the toy car?' A: *bālā kærđ - Ø up did-3SG	Q:kiwi-ro dāre čikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A: *dāre pust-eš-ro dær miār-e is peel-its-DO take off-3SG
	<i>bālā</i> 'up'に <i>kærden</i> 'do'を結語し、ペルシャ語には存在しない助動詞使役動詞を形成している。	「皮を剥いている」の代わりに「皮を外している」と発話している

Fateme.J. 5;3.15(女児)	Fateme.J.は、 <i>pært kærðæn</i> 'thrown down do = to throw' と <i>šut kærðæn</i> 'shoot do=shoot,to kick a ball' の両方の動詞を、単純に <i>dādæn</i> 'give' という使役の意味を持たない普通の他動詞によって描写している。	
Amir-Hossein-Zanganeh 5;4.27(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔrāh mi-bær-e way DUR-take-3SG 文字通りの意味: 'She is walking it.'	上記の Amir-Mohsen 同様。
Mobina, 5;5.8(女児)	全ての動詞を誤用なしで発話出来た。	
Mahan 5;5.9(男児)	Q:xāhær-eš-o ċikār kærð-Ø? sister-her-DO what did-3SG 'What did she do to her sister?' A:*bolænd-eš kærð-Ø high-her did-3SG	「物を持ち上げる」を <i>bolænd kærðæn</i> 'raise, hold up' という。ペルシャ語で「起きる」のことを <i>bidār šodæn</i> 'get up' というが、口語では、 <i>bolænd šodæn</i> 'high become = get up' も使われる。Mahan は、 <i>bolænd šodæn</i> 'high become = get up' から「起こす」の意味を持たない動詞を作り、発話している。 <i>bolænd kærðæn</i> は、あくまでも「荷物を持ち上げる」という意味しかない。
Zahra 5;5.19(女児)	Q:xiyār-ro dāre bā kārð ċikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A:ʔmi-borr-e DUR-cut-3SG 'She is cutting it.'	上記の Erfan 同様。
Sara 5;6.3(女児)	Q:ketāb-o dāre be xāhær-eš ċikār mi-kon-e book-DO is to sister-her what DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'What is she doing to the book to her sister?' A:*negāh mi-kon-e look DUR-do-3SG 'She is looking.'	上記の Erfan 同様。
Yeganeh 5;6.10(女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔrāh mi-bær-e way DUR-take-3SG 文字通りの意味: 'She is walking it.'	上記の Amir-Mohsen 同様。
Marjan 5;6.18(女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔrāh mi-bær-e way DUR-take-3SG 文字通りの意味: 'She is walking it.'	上記の Amir-Mohsen 同様。
Saba 5;6.22(女児)	全ての動詞を誤用なしで発話出来た。	
Maryam 5;7.8(女児)	Q:kāqæz-o ċikār kærð-Ø? paper-DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A:kāqæz-o borid-Ø paper-DO cut-3SG 'She cut the paper.'	<i>pāre kærðæn</i> 'piece make = to tear' という助動詞使役動詞が望まれる「場」でも、 <i>boridæn</i> 'cut' は使われている。従って、Maryam にとって、「ハサミ」も「手」も全く一緒で、使役行為の道具は、「場」を描写するときに、重要ではないようである。
Negar, 5;7.8(女児)	全ての動詞を誤用なしで発話出来た。	
Amir-Hossein.M. 5;7.29(男児)	Q:xāhær-eš-o ċikār kærð-Ø? sister-her-DO what did-3SG 'What did she do to her sister?' A:*æz xāb pærund-eš from sleep to cause to fly(fly)-her	「突然目覚める」ということをペルシャ語で、 <i>æz xāb pærindæn</i> 'from sleep fly wake up from the nap' というが、そこから形態的使役動詞を形成し、「場」に相応しくない発話をしている。ペルシャ語では、「爆弾の音が彼を目覚めさせた」といった主語は、無生の場合は、使われるが、Amir-Hossein は、動作主は、有生であるにもかかわらず、 <i>æz xāb pærudæn</i> 'rouse' という形態的使役動詞を使用している。Amir-Hossein は、(無)生物に鈍感なようにみえる。
Elahe, 5;8.11(女児)	全ての動詞を誤用なしで発話出来た。	
Amir-Hossein-H. 5;8.21(男児)	<i>pust kærðæn</i> 'skin peel = peel, pare' と <i>xord kærðæn</i> 'small do = chop, mince, shred' の代わりに、語彙的使役動詞 <i>boridæn</i> 'cut' を発話している。Amir-Hossein は こととしては、「切る」と言う動詞は指す行為は、非常に幅が広いようである。	
Fateme.Y. 5;9.4(女児)	<i>xāmuš kærðæn</i> 'silent, off make = blow out, extinguish' の代わりに、助動詞使役動詞 <i>fut kærðæn</i> 'puff do = to blow out' を発話している。	

Ghazal- Mahmudi 5;9.9(女児)	上記のFateme.Y.同様。	
Amir-Hossein-N. 5;9.12(男児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: mi-bær-e DUR-carry-3SG 'She is taking it.'	「ベビーカーを押している」の代わりに、「ベビーカーを持っていっている」と語彙的使役動詞を発話している。
Setare 5;9.21(女児)	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ ċikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A: ?mi-borr-e DUR-cut-3SG 'She is cutting it.'	上記のErfan同様。
Reihane 5;11.6(女児)	Q:māšin-o ċikār kærđ-Ø? car-DO what did-3SG 'What did she do to the toy car?' A: * :māšin-o bālā ræft- Ø car-DO up went-3SG	「おもちゃの車を上へ上げた」の代わりに、「おもちゃの車を上に行った」という自動詞形を発話している。

5;0.3～5;11.6 児 30 人のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合を示すと、図 27 のとおりになる。

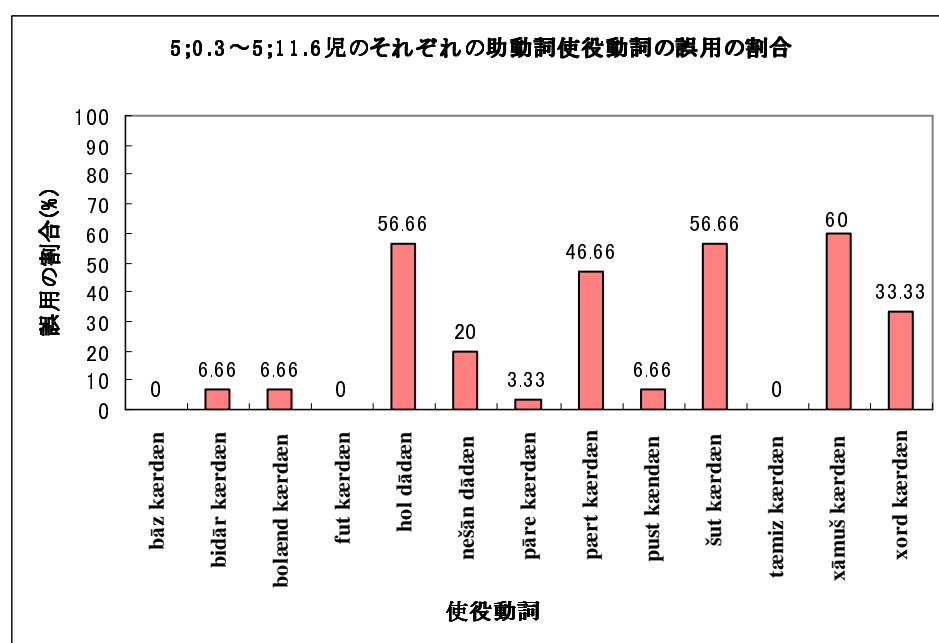


図 27 : 5;0.3～5;11.6 児 30 人のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合

図 27 を図 17、図 21、図 24 と比べると、5;0.3～5;11.6 児 30 人の全ての助動詞使役動詞の誤用の割合は、前の年齢グループと比べ、減少していることが分かる。つまり、助動詞使役動詞の誤用数と幼児の年齢の間には、相互関係が見られたと言える。更に、もう一つ言えるのは、語彙的使役動詞や形態的使役の誤用パターンで一番良く見られたパターンは、大人の自然発話者の言語には、語彙的使役動詞や形態的使役動詞があるにもかかわらず、助動詞使役動詞のスキーマが拡張され、大人の自然発話者の言語にもない助動詞使役動詞は発話されたというパターンであった。しかしながら、助動詞使役動詞の誤用の場合は、よく見られた誤用パターンは、「場」に相応しくない別の助動詞使役動詞が発話されてしまうというタイプだった。更に、2 歳児のみで見られた、

「ジェスチャー+*kærdæn*」は、5 歳児でも見られなかった。

3.5. 6;0.2~6;11.19 児 11 人（男児 2 人、女児 9 人）

3.5.1. 6;0.2~6;11.19 児の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

6;0.2~6;11.19 児 11 人、それぞれの幼児の語彙的使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢は、以下のとおりである。

表 36 : 6;0.2~6;11.19 児 11 人の適切な語彙的使役動詞の発話の有無

語彙的 使役動詞	Amir- Arsalan	Mahla	Zahra	Arash	Hasti- Sadat	Ghazal	Shahrazad	Bitā	Pariya	Anita	Nazanin
	6;0.2	6;0.5	6;0.6	6;0.20	6;5.27	6;6.5	6;6.26	6;7.15	6;9.15	6;11.10	6;11.19
<i>ændāxtæn</i> 'drop, throw'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bæstæn</i> 'close'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>boridæn</i> 'cut, slice'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>dærāværdan</i> 'clothes take off =take off one's clothes'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>kešidæn</i> 'pull'	○	×	○	×	○	×	×	○	○	○	○
<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'	×	×	×	×	○	×	×	○	○	×	×
<i>rixæn</i> 'to pour'	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
<i>šekæstæn</i> 'break'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表 36 から分かるように、6 歳児の語彙的使役動詞の誤用数は、減少していることが分かるが、完全に無くなっているとは言えない。6;0.2~6;11.19 児 11 人のそれぞれの幼児の語彙的使役動詞の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 37 のとおりになる。

表 37 : 6;0.2~6;11.19 児 11 人のそれぞれの語彙的使役動詞の重要な誤用パターン

Amir-Arsalan 6;0.2 (男児)	Q: æmu dāre mix-o čikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: *dāre mix-o mi-škun-e is nail-DO DUR-break-3SG 'He is breaking the nail.'	「釘を割っている」と発話している。つまり、語彙的使役動詞の代わりに、形態的使役動詞 <i>šekāndæn</i> 'break' を使用している。
Mahla 6;0.5 (女児)	Q: kāleske-ro dāre čikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A: ? dāre hol mi-d-e is push DUR-give-3SG 'She's pushing it.'	Mahla にとっては、どうも「引く」も「押す」も同じ概念に見えているようである。両方の動詞を「押す」によって表す。従って、「押し引き」という移動動詞の移動の方向に関係なく、1 つの動詞が使われていることが言える。
Zahra 6;0.6 (女児)	Q: æmu dāre mix-o čikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A: ? mix-o mi-zæn-e nail-DO DUR-hit-3SG	<i>kubidæn</i> 'to knock, hammer' の代わりに、使役の意味を持たない <i>zædæn</i> 'hit' を使用し、誤用を犯している。

Arash, 6;0.20 (男児)	上記のMahla同様。	
Hasti-Sadat 6;5.27 (女児)	全ての動詞を誤用なしで発話している。	
Ghazal 6;6.5 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔ dāre hol mi-d-e æqæb is push DUR-give-3SG back 'She's pushing it back.'	上記のMahla同様。
Shahrazad 6;6.26 (女児)	Q:kāleske-ro dāre ċikār mi-kon-e? stroller-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the toy stroller?' A:ʔdāre mi-bær-e is DUR-take-3SG 'She is carrying it.'	Q: æmu dāre mix-o ċikār mi-kon-e? young man is nail-3SG what IMPF-do-3SG 'What is he doing to the nail?' A:ʔdāre doros-eš mi-kon-e is correct DUR-do-3SG 'He is repairing it.'
	「後ろへ引っ張っている」の代わりに、 「持っていく」「連れて行く」と発話している。	「釘を直している」と発話している。「場」に相応しくない助 動詞使役動詞を使用している。
Bitā, 6;7.15 (女児)	全ての動詞を誤用なしで発話している。	
Pariya 6;9.15 (女児)	上記のZahra同様。	
Anita 6;11.10 (女児)	上記のZahra同様。	
Nazanin 6;11.19 (女児)	上記のZahra同様。	

表 37 から分かるように、6 歳児の誤用数は、前の年齢グループと比べ、遥かに減少している。以下、6 歳児のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合を示す。

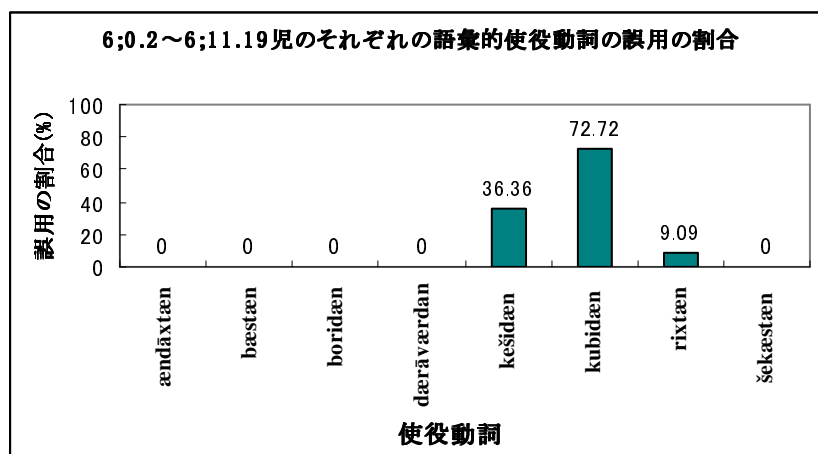


図 28 : 6;0.2～6;11.19 児 11 人のそれぞれの語彙的使役動詞の誤用の割合

図 28 から分かるように、語彙的使役動詞 8 個の中、5 個の動詞の誤用の割合は、ゼロになっている。更に、図 28 を図 18、22、25 と比べると、ゼロになっていない 3 つの動詞の中、2 個の誤用数は、6 歳児で、2～5 歳児と比べ、大幅に減少していることが分かる。*rixtaen* 'to pour' の誤用の

割合は、図 18 と図 22 と比べ、減少しているが、図 25 と比べると、6 歳児では、増加していることが言える。つまり、本実験で、全ての語彙的使役動詞の誤用の割合は、年齢の増加と共に減少していることが分かった。

3.5.2. 6;0.2～6;11.19 児の適切な形態的使役動詞の発話の有無

6 歳児の場合も、前の全年齢グループと同様に、上述した 2 つの動詞は、発話不可能であるか。以下、6;0.2～6;11.19 児 11 人、それぞれの幼児の形態的使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢を示す。

表 38 : 6;0.2～6;11.19 児 11 人の適切な形態的使役動詞の発話の有無

形態的 使役動詞	Amir- Arsalan	Mahla	Zahra	Arash	Hasti- Sadat	Ghazal	Shahrazad	Bitā	Pariya	Anita	Nazanin
	6;0.2	6;0.5	6;0.6	6;0.20	6;5.27	6;6.5	6;6.26	6;7.15	6;9.15	6;11.10	6;11.19
<i>čærxāndæn</i> 'turn'	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
<i>čæsbāndæn</i> 'to stick, to paste up'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress'	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×
<i>šekāndæn</i> 'break'	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○
<i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○
<i>xābāndæn</i> 'put to sleep'	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○
<i>xændāndæn</i> 'make laugh'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>xorāndæn</i> 'feed'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

表 38 を考察してみると、*xorāndæn* 'feed' と *xændāndæn* 'make laugh' という 2 つの形態的使役動詞は、6 歳児でも前の全ての年齢グループと同様に、発話不可能であることが分かる。6;0.2～6;11.19 児 11 人のそれぞれの幼児の形態的使役動詞の重要な誤用パターンを示すと、以下の表 39 のとおりになる。

表 39 : 6;0.2～6;11.19 児 11 人のそれぞれの形態的使役動詞の重要な誤用パターン

Amir-Arsalan 6;0.2 (男児)	Q: xāle dāre kæfš-o čikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A: pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	Q: xāle dāre nini-ro čikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A: *lālāyi mi-d-e lullaby DUR-give-3SG
	<i>pušāndæn</i> 'foot do = to put on or wear (on the feet), dress' の代わりに、 <i>pā kærden</i> 'foot do' を発話している。しかしながら、これを誤用として考えるのは、あまり好ましくない。 <i>pā kærden</i> 'foot do'の方が、口語に良く用いられる。	「擬態語 + <i>dāden</i> 'give'」という構文を発話している。「ねんね」という擬態語に <i>dāden</i> 'give' という軽動詞に付与することによって、自分なりの使役動詞を作っていると考えられる。日本語児も「寝かせる」の代わりに「ねんねする」をそのまま使役動詞として使っているが、「ねんねをあげている」は、ベルシャ語児の独特な誤用パターンである。

Mahla 6;0.5 (女児)	Q:xāle dāre nini-o ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO waht DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:*xāb mi-kon-e sleep DUR-do-3SG	助動詞使役動詞のスキーマの拡張で、 ペルシャ語には存在しない動詞は、形成している。 つまり寝かせるの代わりに「寝ている状態にしている」と 発話している。
Zahra 6;0.6 (女児)	Q:xāle dāre kəfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:pā-š mi-kon-e foot-her DUR-do-3SG	上記のAmir-Arsalan同様。
Arash 6;0.20 (男児)	Q:xāle dāre kəfš-o ċikār mi-kon-e? young lady is shoe-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady to the shoes?' A:ʔ xāle dāre kəfš-o mi-puš-e young lady is shoe-DO DUR-put on-3SG	被使役者と対格は、発話されているが、動詞は、 使役動詞ではなく、自動詞形のままである。
Hasti-Sadat 6;5.27 (女児)	上記のZahra同様。	
Ghazal 6;6.5 (女児)	Q:bādkonæk-o ċikār kərd-Ø? balloon-DO what did-3SG 'What did she do to the balloon?' A:*bādkonæk-o terekid- Ø balloon- DO blast-3SG	自動使役はそのまま発話されている。
Shahrzad 6;6.26 (女児)	上記のZahra同様。	
Bitā 6;7.15 (女児)	<i>xəndāndaen</i> 'make laugh' と <i>xorāndaen</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	
Pariya 6;9.15 (女児)	Q:xāle šīše-o ċikār kərd-Ø? young lady glass-DO what did-3SG 'What did the young lady do to the glass?' A:*čækkoš kərd-Ø hammer did-3SG	Q:xāle dāre nini-ro ċikār mi-kon-e? young lady is baby-DO what DUR-do-3SG 'What is the young lady doing to the baby?' A:*xāle dāre nini-ro mi-xāb-e young lady is baby-DO DUR-sleep-3SG
	「ハンマーガラスを割る」の代わりに、「ハンマー している」というペルシャ語には存在しない助 動詞使役動詞を発話している。これは、助動詞使 役動詞のスキーマの過剰一般化のせいで、出来て しまった動詞である。	「おねえちゃんは、赤ちゃんを寝ている」と自動詞形をそのま ま如何なる変化もなしで、発話している。
Anita 6;11.10 (女児)	<i>xəndāndaen</i> 'make laugh' と <i>xorāndaen</i> 'feed' 以外は、全ての動詞を誤用なしで、発話している。	
Nazanin 6;11.19 (女児)	上記のZahra同様。	

表 39 を考察してみると、Pariya(6;9.15)は、年齢の割には、非常に誤用数は高いことが分かる。Pariya には、1つの形態的使役動詞 *čəsbandaen* 'to stick, to paste up' 以外、全ての形態的使役動詞が発話不可能であった。従って、この子に限っては、6歳になっても、未だに形態的使役動詞のスキーマは、確立していないかのように見える。以下、6歳児のそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合を示す。

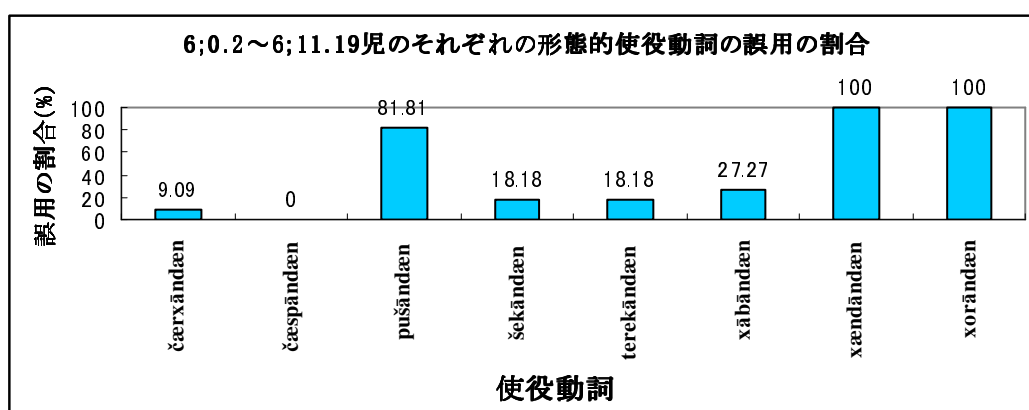


図 29 : 6;0.2～6;11.19 児 11 人のそれぞれの形態的使役動詞の誤用の割合

図 29 を図 16 と 20 と比べると、*xorāndaen* 'feed' と *xaendaendaen* 'make laugh' 以外の形態的使役動詞の誤用の割合は、6 歳児において、2 歳児と 3 歳児と比べ、減少していることが分かる。一方、図 29 を図 23 と比べると、*xorāndaen* 'feed' と *xaendaendaen* 'make laugh' 以外の 6 個の動詞の中、5 個の誤用パーセントは、6 歳児において、4 歳児と比べ、増加していることが分かる。同様に、図 29 を図 26 と比べても、*xorāndaen* 'feed' と *xaendaendaen* 'make laugh' 以外の 6 個の動詞の中、4 個の動詞の誤用の割合は、5 歳児と比べ、6 歳児においては、増加していることが分かる。従って、語彙的使役動詞と違い、形態的使役動詞の誤用の割合の減少と年齢の増加の間には、相関が見られなかった。更に、語彙的使役動詞の誤用の割合は、6 歳児において、非常に少なく、8 個の動詞の中、もう既に 4 個の動詞の誤用の割合は、ゼロとなっているが、形態的使役動詞の場合は、6 歳児でもかなり高い数字を示していることが言える。そこで考えられる理由は、現代ペルシャ語の形態的使役動詞の定着度の低さである。語彙的使役動詞や助動詞使役動詞と比べ、形態的使役動詞の数はそもそも非常に少なく、生産的であると言えない。更に、大人の自然発話データの中にも、このタイプの使役動詞の使用数は、非常に少なく、従って、幼児は、6 歳になっても、未だにこのタイプの使役動詞の場合は、誤用を犯す。以下、6 歳児の助動詞使役動詞誤用パターンを考察していく。

3.5.3. 6;0.2~6;11.19 児の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

以下、6;0.2~6;11.19 児 11 人、それぞれの幼児の助動詞使役動詞の文法的かつ場面に合った適切な発話の有無と正確な年齢を示す。

表 40 : 6;0.2~6;11.19 児 11 人の適切な助動詞使役動詞の発話の有無

助動詞 使役動詞	Amir- Arsalan	Mahla	Zahra	Arash	Hasti- Sadat	Ghazal	Shahrazad	Bitā	Pariya	Anita	Nazanin
	6;0.2	6;0.5	6;0.6	6;0.20	6;5.27	6;6.5	6;6.26	6;7.15	6;9.15	6;11.10	6;11.19
<i>bāzkaēden</i> 'open do = open'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bidār kaēden</i> 'awake do =awaken'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>bolēnd kaēden</i> 'high do = to lift'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>fut kaēden</i> 'puff do = to blow out'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>hol dāden</i> 'push give = to push'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>nešān dāden</i> 'sign give = show'	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
<i>pāre kaēden</i> 'piece do = to tear'	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
<i>pārt kaēden</i> 'thrown down do = to throw'	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○

<i>pust kærden</i> 'skin peel = peel, pare'	×	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○
<i>šut kærden</i> 'shoot do=shoot, to kick a ball'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>tæmiz kærden</i> 'clean make = to clean'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xāmuš kærden</i> 'silent, off make = blow out, extinguish'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<i>xord kærden</i> 'small do =chop,mince, shred'	○	○	×	×	○	×	○	○	○	○	○

表 40 を考察してみると、全体的に 6 歳の場合は、誤用数は、非常に少ないことが分かる。以下において、6 歳児の詳細な誤用パターンを示す。

表 41 : 6;0.2~6;11.19 児 11 人のそれぞれの助動詞使役動詞の重要な誤用パターン

Amir-Arsalan 6;0.2 (男児)	Q:kiwi-ro dāre ċikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A: ?mi-bor-re DUR-cut-3SG	「皮を剥く」の代わりに、「切る」を発話している。「切る」が指す概念は、非常に幅広い。
Mahla ,6;0.5 (女児)	全ての動詞を誤用なしで発話している。	
Zahra 6;0.6 (女児)	Q:xāle dāre xiyār-o bā ċāqu ċikār mi-kon-e young lady is cucumber-DO with knife what DUR-do-3SG 'what is the young lady is doing to the cucumber with knife?' A: ?dāre nesf-nesf-eš mi-kon-e is half-half-it DUR-do-3SG	「半分」は、ペルシャ語で <i>nesf</i> になるが、 <i>zahra</i> は、 <i>nesf</i> を繰り返し発話し、それに <i>kærden</i> 'do' を結語している。つまり、「キュウリをみじん切りにしている」の代わりに、「はんぶんこはんぶんこにしている」と発話している。
Arash 6;0.20 (男児)	Q:kāqæz-o ċikār kærd-Ø? paper-DO what did-3SG 'What did she do to the paper?' A: kāqæz-o borid- Ø paper-DO cut-3SG 'She cut the paper.'	Q:kiwi-ro dāre ċikār mi-kon-e? kiwi-DO is what DUR-do-3SG 'What is she doing to the kiwi fruit?' A: ?mi-bor-re DUR-cut-3SG
	<i>pāre kærden</i> 'piece make = to tear' という助動詞使役動詞が望まれる「場」でも、 <i>boriden</i> 'cut' は使われている。従って、Arash にとって、「ハサミ」も「手」も全く一緒に、使役行為の道具は、「場」を描写するとき、重要ではないように見える。	上記の Amir-Arsalan 同様。
Hasti-Sadat, 6;5.27 (女児)	全ての動詞を誤用なしで発話している。	
Ghazal 6;6.5 (女児)	Q:xiyār-ro dāre bā kārđ ċikār mi-kon-e? cucumber-DO is with knife what DUR-do-3SG 'What is she doing to the cucumber with the knife?' A: ?mi-bor-re DUR-cut-3SG 'She is cutting it.'	「皮を剥く」の代わりに、語彙的使役動詞 <i>boriden</i> 'cut' を発話している。Ghazal にとっては、「切る」と言う動詞は指す行為は、非常に幅広いようである。

Shahrazad, 6;6.26 (女兒)	全ての動詞を誤用なしで発話している。	
Bitā, 6;7.15 (女兒)	全ての動詞を誤用なしで発話している。	
Pariya 6;9.15 (女兒)	Q: ketāb-o dāre be xāhær-eš čikār mi-kon-e book-DO is to sister-her what DUR-do-3SG 文字通りの意味: 'What is she doing to the book to her sister?' A: *mi-bin-e DUR-see-3SG	「本を見ている」と動詞を自動詞形のまま発話している。
Anita, 6;11.10 (女兒)	全ての動詞を誤用なしで発話している。	
Nazanin, 6;11.19 (女兒)	全ての動詞を誤用なしで発話している。	

表 41 を考察してみると、6 歳児 11 人の中、6 人、つまり半分以上の幼児の全ての助動詞使役動詞の誤用数は、ゼロになっていることが分かる。つまり、語彙的使役動詞と同じく、幼児の誤用数と年齢というパラメーターの間には、相互関係が見られた。以下、6 歳児のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合を示す。

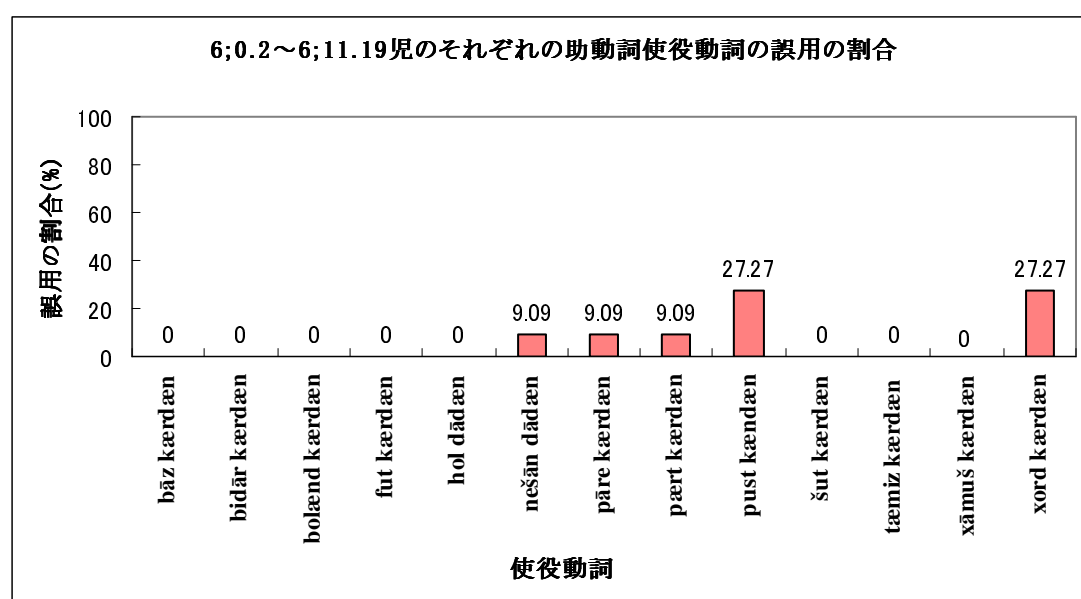


図 30 : 6;0.2～6;11.19 児 11 人のそれぞれの助動詞使役動詞の誤用の割合

図 30 を考察してみると、13 個の助動詞使役動詞の中、8 個の動詞の誤用の割合は、ゼロになっていることが分かる。図 30 を、図 17、図 21、図 24、図 27 と比べると、全ての助動詞使役動詞の誤用数は、大幅に減少していることが分かる。従って、助動詞使役動詞も語彙的使役動詞と同様に、年齢の増加と誤用数の減少の間には、相関が見られていると言える。

3.6. まとめ

本章において、ペルシャ語児98人(男児41、女児57人)の横断的発話データを考察してみた。98

人を5つの年齢グループに分け、次にそれぞれの年齢グループの3つのタイプの使役動詞の誤用パターン等について論じた。

2歳児は、非常に多くのエラーを犯し、殆どの場合は、大人の自然発話者において、語彙的使役動詞や形態的使役動詞が発話されるような場面でも、助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、大人の言語にもない新しい助動詞使役動詞を使用している。例えば、ペルシャ語は、日本語と比べ、擬態語の数が非常に少ないので、子供は、「切る」という動詞を知らないか、会話をしている時間で「切る」という動詞にアクセスできない場合は、「ハサミ」という知っている名詞のみか「ハサミ」という名詞の反復形に習得年齢が非常に早い*kaerdæn*を付与することによって、コミュニケーションのプレッシャーから逃れる道を見つけ、自分の意図を聞き手に伝える。

2歳児において、3つのタイプの使役動詞で一番誤用の割合が高かったのは、形態的使役動詞であった。2歳児は、殆どの形態的使役動詞が発話出来ず、やっと2;6以上になる段階でいくつかの形態的使役動詞が発話出来るようになる。これは、CHILDES のデータの傾向と全く同じ傾向を示している。更に、2歳児のみではなく、全ての年齢グループにおいて、形態的使役動詞の誤用数は、他の使役動詞より遥かに多い。

2歳児全員に見られた戦略は、名前を知らない使役動詞の場合、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kaerd* と発話しているということである。更に、ある動詞の場合は、このような戦略を使用していると同時に、同じグループの使役動詞に属する他の動詞を適切に発話している。従って、このことに基づいて、使役動詞の習得は、ある年齢、つまり36ヶ月までには、項目依拠的に進んでいくことが言える。つまり、例えば、Fateme は、実験で使った殆どの助動詞使役動詞を発話出来たが、一つの助動詞使役動詞、つまり訊かれた動詞を知らないか、質問されたそのときに、コミュニケーションのプレッシャーの下で、その動詞が思い出せない場合は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kaerd* と発話している。しかしながら、この戦略は、他の年齢グループには、見られなかった。つまり、知らないときも、「場」に相応しくない同じグループの使役動詞を発話するか、自動詞形を発話するか、又は別の使役グループに属する使役動詞を発話する。つまり、2歳児の使役動詞の使用は、非常に保守的で、知らない使役動詞がある場合や使役動詞が思い出せない場合は「とにかく『ジェスチャー+*intori kaerd*』を使えば、聞き手もなんとなく自分の意図は分かるでだろう」と推測し、このような発話をしている。しかしながら、36ヶ月を超えると、全ての使役動詞のグループのスキーマはもう既に完成しており、名前の知らない使役動詞がある場合やコミュニケーションの際にその動詞にアクセスできなくなる場合は、「とにかく別の使役動詞やその動詞の自動詞形を使えば、自分の意図が聞き手に伝わるだろう」と推測し、誤用を起こす。

6歳児の場合は、語彙的使役動詞と助動詞使役動詞の殆どの誤用はゼロになっているが、形態的使役動詞は、未だに非常に高い数値を示している。従って、形態的使役動詞の誤用は、6歳の段階でも完全に無くなっていないことが言える。そこで考えられる1つの原因として、幼児のインプットの中の形態的使役動詞の使用頻度の低さ、つまり定着度の低さである。

次節においては、CHILDES で見た誤用パターンとペルシャ語児98人(男児41、女児57人)の横断的発話データの誤用パターン等を比較し、誤用の原因について詳しく論じる。

第4章：CHILDESのデータと横断的発話データから見える事実

4.1. 今井と針生(2007)

今井と針生(2007: 91)は、動詞の獲得プロセスについては、「子供、特に5歳になる前の子供は、動詞の学習においては、名詞の場合と違って、一回それを耳にただけですぐ大胆に般用していくようなことはせずに、もともとその動詞が使われた場面に非常に類似した場面でしかその動詞を使わない。その意味で、幼い子供にとって動詞の意味を学習するとは、一つ一つの動詞を、それが使われた具体的な状況と対応付け、そのような事例を時間をかけて蓄積していき、般用の基準を探っていくようなプロセスと考えた方が良いのだろう。」と述べている。従って、名詞の学習と違い、動詞の学習は、幼児にとっては、非常に困難なものであり、非常に時間がかかると言える。今井と針生(2007: 93,94)は、「Casasola & Cohen (2000)は、車が缶を押して移動する場面を幼児に見せると同時に'lif'という語を聞かせ、同じ車が同じ缶を引っ張って移動するときには、'neem'を聞かせることを繰り返し、これらの場面に対して子供が飽きて、注視時間が十分に短くなったところで、テストで、ラベルと動作の関係をスイッチして、車が缶を押して移動する場面に対して'neem'という語を聞かせた。もしここまで子供が、'lif'には<押す>動作を、'neem'には<引っ張る>動作を対応付けることが出来ていれば、'neem'と言われた車が缶を押して移動するところを見せられて驚くだろう。つまり注視時間は長くなるだろう。こうして調べてみると、18ヶ月児はこのような動作と語とのスイッチに驚いたが、14ヶ月児はそうでもなかった。<押す>とか<引っ張る>といったイベントは、画面の右方向に移動したか、左方向に動いたかを見ていただだけでは区別できず、車と缶との移動時の関係（移動するときにどちらが前に位置しているか）に注目して分類しなければならない。語とモノを結びつけるのは、14ヶ月で可能でも、語と動作を結びつけるのは、18ヶ月にならないとできないのは、このように、目の前のイベントから、語を対応づけるべき側面を切り出すことの難しさが関係しているのだとう。」と述べている。

上述のとおり、18ヶ月にならないと、幼児は、<押す>イベントと<引っ張る>イベントを区別できない。本論の第2章と第3章に述べたように、ペルシャ語児も正に「引っ張る」という動詞が望まれる場面でも、「押す」と発話してしまう。従って、ペルシャ語児は、18ヶ月を超えても、<押す>イベントと<引っ張る>イベントの違いを区別したとしても、発話するときに、全く同じ語によって2つのイベントを描写している。これは、正に、イベントの区別と言葉によってあるイベントを描写することとは、全く違うプロセスであるという証拠である。

更に、今井と針生(2007: 154~156)は、非常に興味深い仮説を定義している。今井と針生は、音象徴ブートストラッピング仮説を提案している。今井らは、「3歳児は、一般動詞を動作と対応づけることが難しいのに、擬態語なら容易に動作と対応づけ、しかも、同じ動作が行われている場面へとこれを般用できることが示された。つまり、擬態語にはたしかに動詞学習を促進する効果があるようなのである。(中略) 大人が子供に対して擬態語を多用してしまうのも実は、大人の直感どおり、子供の語彙獲得においては、非常に意味のあることだったのである。」と述べている。今井らは、次に、日本語ほど豊かな擬態語を持たない言語の子供はどのように擬態語の促進的な役割なしで動詞を覚え、正しく使いこなせるようになっていくかという疑問を投げかけている。

その1つの回答として、今井らは、「擬態語がない言語では大人は動詞を使うときに擬態語に代わる何か別の手がかり（例えばジェスチャーなど）を与えているのだろうか。」と提案している。ペルシャ語は、擬声語は豊富な言語だが、擬態語は日本語ほど豊富ではない言語である。しかしながら、ペルシャ語児でさえ、名前の知らない動詞やコミュニケーションのプレッシャーで語彙的使役動詞や形態的使役動詞にアクセスできない場合は、「擬態語+kærdæn」を発話してしまう。更に、発話してしまう擬態語はいずれも大人の言語には存在せず、その中には個性溢れる新規な擬態語も存在する。従って、擬態語がある言語に豊富であるかないかは別として、更に、養育者が子供に対して、擬態語を多く発話するかしらないかは別として、子供は、「擬態語+kærdæn」を動作を描写する1つのストラテジーとして使っていると言える。更に、今井らが提案しているジェスチャーというストラテジーもペルシャ語児の場合は、非常に大きな力を持ち、3歳児以下の幼児は、幅広く3つの種類の使役動詞の発話が望まれる場面において使役動詞の代わりに自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærð* と発話している。つまり、ペルシャ語の擬態語は、日本語ほど豊富ではないので、ペルシャ語児は、動詞を表現するときに、ジェスチャーを自分の意図を表現するために使い、そのジェスチャーは動作を描写するのを助けるような橋渡しの役割を果たしているのではないだろうか。実験で使った助動詞使役動詞の中には、「擬態語+kærdæn」という動詞もあった。それは、*fut kærðæn* 'puff do = blow'である。日本語の場合も考えてみると、「蠟燭をフーフーする」のようなニュアンスで、この動詞の誤用数を見てみると、全ての年齢ゾーンにおいて非常に低いことが分かる。*fut* と「フーフー」を聞き、すぐにも動作と言葉をマッピングすることが出来るから、子供にとっては、非常に獲得しやすいと考えられる。従って、このような擬態語が動詞の構造に入っている動詞の誤用数は、非常に低くなると言える。

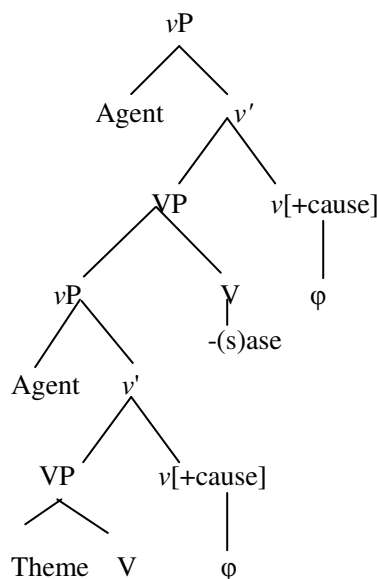
更に、今井と針生(2007: 208,209) は、「語の適用範囲が広いと、概念としてのまとまりが悪くなるというのは、動詞も同じである。例えば日本語の‘する’、英語の‘take’、‘have’、‘make’などは、非常に適用範囲が広い動詞であるが、これらの動詞が指す典型的な場面とはどのようなものかを考えてみても、なかなか具体的なイメージが思い浮かばない。これらは、適用範囲が広く、使用頻度が高いためか、子供が早いうちから産出する語でもある。しかし、子供がこれらの動詞をどのように使っているかを注意深く調べていくと、実はかなりの年齢になるまでこれらの動詞を大人と同じようには使えていないという(Theakston *et al.*, 2002)。つまり、これら適用範囲の広い動詞は、その分よく使われ、子供が耳にする頻度も高いのかもしれないが、同じ動詞が適用される対象があまりにも多様であるために、せつかく多く耳にしても、なかなかその正しい意味理解に達しないということが起こっているのではないか。」と述べている。実際、ペルシャ語児のデータを考察しても、例えば、*boridæn* 'cut' という出現頻度が非常に高く、子供もよく耳にする語彙的使役動詞のケースでも、この動詞の発話が期待される場面において幼児は、*pāre kærðæn* 'piece do =to tear' を発話してしまう。大人からすると、*boridæn* 'cut' という語彙的使役動詞は、*pāre* 'ragged' という形容詞に *kærðæn* 'do' を結合し、誤用を起こすことより容易に見える。一方、ペルシャ語児にとっては、*boridæn* 'cut' の適用範囲は、広いが、適用される対象があまりにも多様であるために、せつか

く多く耳にしても、なかなかその正しい意味理解に達しない。従って、例えば、幼児は、「紙をハサミで切る」という場面で、つまり、被使役物は、「紙」である場面においては、*boridæn'cut'*は発話出来ても、「ケーキを包丁で切る」という場面の「ケーキ」という対象の場合でも、同じ *boridæn'cut'* が使われることは、知らない。従って、大人の中から間違っているようなケースが出現してくる。ペルシャ語の適用範囲が広く、使用頻度が最も高い動詞は、*kærdæn'do'*である。今井と針生の主張からすると、*kærdæn'do'*も様々な事象の記述に用いられるという意味で用法範囲が広いために獲得が難しいと推測されるが、大人の話者と全く同じような意味で *kærdæn'do'*を使えるようになるのは困難だとしても、他の動詞と比べ、初期の段階からの発話頻度が高い故に、定着度も高くなり、大人の話者と同じ意味ではないが、文脈依存度が高い幼児独特の *kærdæn'do'*の産出も他の動詞より多く起きると言える。ペルシャ語児は、*kærdæn'do'*の正確な意味をかなりの年齢にならない限りでは、把握しておらず、*kærdæn'do'*のスキーマに如何なる制約もかけていないため、他の動詞が必要とされる場面でも、*kærdæn'do'*を発話してしまう。*kærdæn'do'*の適用範囲が広く、使用頻度が高いため、子供が初期の段階から産出できるが、かなりの年齢になるまで *kærdæn'do'*を大人の話者と同じようには使えていないことが言える。要するに、*kærdæn'do'*の具体的なイメージが思い浮かばないからといって、この動詞が獲得されにくいことにならず、この動詞の正しい意味理解が困難であるということになる。*kærdæn'do'*のインプット量が他の動詞と比べ、多いゆえに、幼児のこの動詞の産出量も多くなるが、それぞれの *kærdæn'do'*のネットワーク化（上位スキーマ形成）が初期の段階ではされていないため、過剰汎用も起こる。

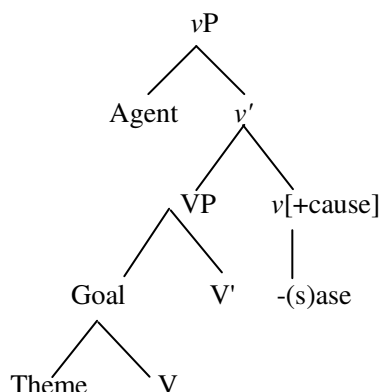
4.2. K. Murasugi et al. (2007)

K. Murasugi et al. (2007) は、Matsumoto (2000) に従って、日本語の「させ使役」を2つの種類、つまり統語的「させ使役」と語彙的「させ使役」に分類し、以下のような樹形図をそれぞれのタイプの「させ使役」のために、提案している。

(40) a. 統語的「させ使役」



b. 語彙的「させ使役」



K. Murasugi et al. (2007: 626, 627 [30a][30b])

K. Murasugi *et al.* (2007) は、(40a) の例として、「太郎が花子に音楽を聞かせた」という文を提示し、(40b) の例として、「母親が生まれたばかりの赤ちゃんに靴を履かせた」という文を提示している。(40a) の樹形図に 2 つの動作主が存在するのは、「太郎が花子に音楽を聞かせた」という文においては、太郎も花子も動作主になり得るということを示唆するためである。つまり、統語的「させ使役」構文は、二通りの解釈が可能である。「太郎が花子に音楽を聞かせた」という文では、「花子」は、動作主にも、使役行為の Goal つまり被使役者にもなり得る。一方、「生まれたばかりの赤ちゃん」は、自分の力で何も出来ないもので、使役行為の Goal でしかない。つまり、意味上の曖昧性が消えていく。次に、K. Murasugi *et al.* は、(40) で示した樹形図に基づいて、日本語児は、使役動詞を獲得するとき、4 つの段階を経ていくと述べている。K. Murasugi *et al.* が提案している 4 つの段階を示すと、以下の (41) のとおりになる。

(41) ステージ I : *v* は、*tiyu*、*tiya*、*tite*⁵¹である段階

ステージ II : *v* は、空っぽである段階

ステージ III : 普通の他動詞と語彙的「させ使役」の獲得の始まりの段階

ステージ IV : 統語的「させ使役」の獲得の始まりの段階

K. Murasugi *et al.* (2007: 627 [31])

K. Murasugi *et al.* は、2 歳の日本語児は、動詞なしの以下のような発話をしていると述べている。

(42) Akkun(2;1) a. *motto koe buubu φ*
 more this water
 '(I will give) more water to this.'

Akkun (2;0) b. *koe papa hai doozyo φ*
 this daddy yes please
 'This one. (I want give it.) to dday.'
 φ = *suru*(do)

K. Murasugi *et al.* (2007: 628 [32])

K. Murasugi *et al.* は、ステージ I は、Akkun の場合は、2;5 で始まり、2;9 で終わると述べている。この段階においては、Akkun は、非常に生産的に「オノマトペ+する」を使役動詞として発話している。いくつかの例を示すと、以下のとおりである。

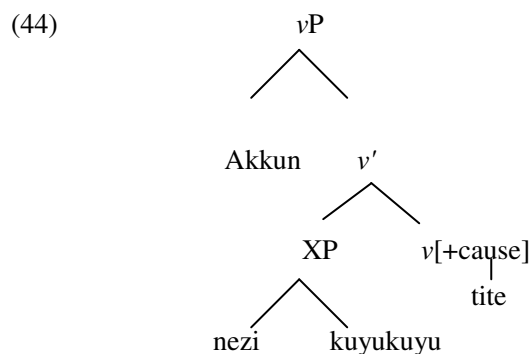
(43) a. Akkun (2;7) *mama Akkun paku tiyu*
 Mommy Akkun onomatopoeia do
 'Mommy, please make Akkun (/me) eat this.'

b. Akkun (2;9) *Akkun nezi kuyukuyu tite, konoko syabeyu*
 Akkun screw turn around doing this one talk
 'When Akkun(/I) will wind this one around, it will talk.'

K. Murasugi *et al.* (2007: 628 [33b][33c])

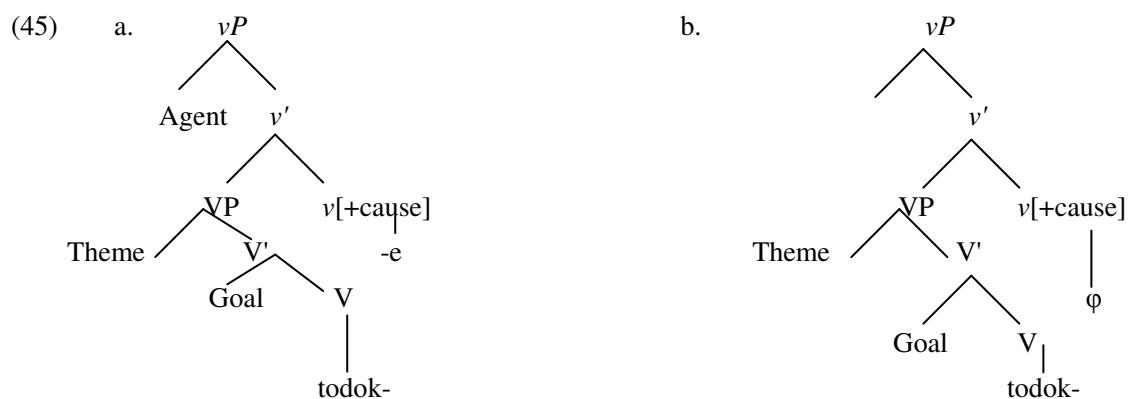
⁵¹ *tiyu*、*tiya*、*tite* は、日本語の「する、した、して」の幼児語である。

K. Murasugi *et al.* は、ステージ I においては、「する」の前に、擬態語が出現すると述べている。彼らは、段階 I は、2;5 に始まり、2;9 で完全に終わると主張している。彼らは、2 歳児は、「する」を「特定の状態変化をもたらす使役動詞」として使用していると述べている。Murasugi *et al.* は、(43b)の文のために、(44)のような樹形図を提示している。



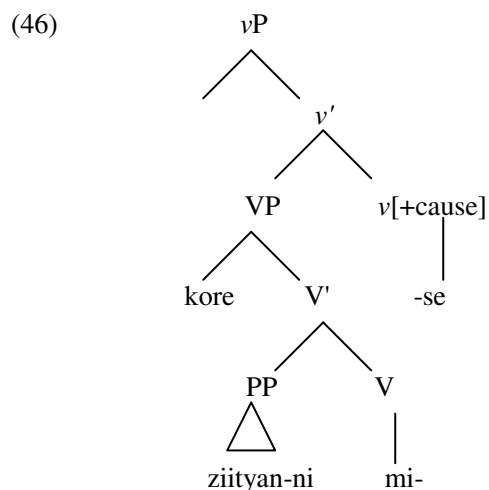
K. Murasugi *et al.* (2007: 629 [34])

(44)においては、*tite* は、*Akkun* に動作主の意味役割を割り当てる。ステージ II は、2;9 に始まり、4;8 まで続くと K. Murasugi *et al.* は、主張している。彼らは、この段階で、幼児は、他動詞の代わりに自動詞を発話し、誤用を犯していると述べている。例えば、「見せる」の代わりに、「見る」という自動詞を発話するなどといった誤用は、多く見られると述べている。彼らは、これらの誤用の根拠を次のように述べている。日本語児は、2;9~4;8 においては、*v[+cause]* をゼロだと想定するので、誤用を犯してしまう。K. Murasugi *et al.* は、他動詞 *todokeru* と非対格動詞 *todoku* の樹形図を以下のように示している。



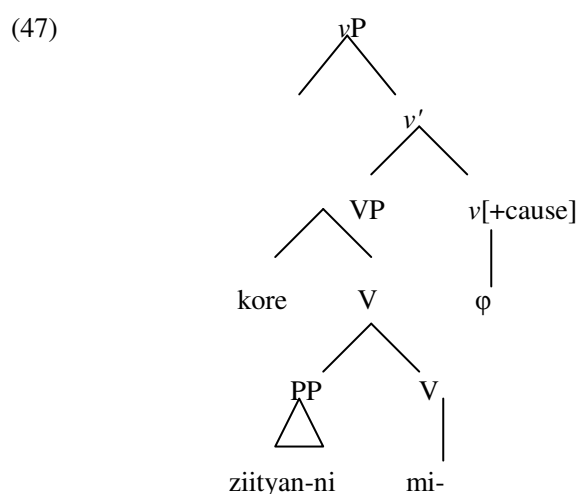
K. Murasugi *et al.* (2007: 631 [38a][38b])

上記の(45b)においては、*v* は、音形を持っていない。更に、彼らは、他動詞 *miseru* の樹形図も以下のように示し、日本語児も、他動詞の代わりに自動詞を発話してしまうということは、*v* の音形をゼロだと捉えているからだ述べている。他動詞の文は、「これじいちゃんに見せる」という文である。



K. Murasugi *et al.* (2007: 632 [40])

しかしながら、Akkun は、[+cause]*v* の値としてゼロを割り当ててしまうから、他動詞の意味を表現したがるが、結局大人の目から見ると間違いである非対格動詞が発話されている。つまり、以下のような樹形図は、考えられる。

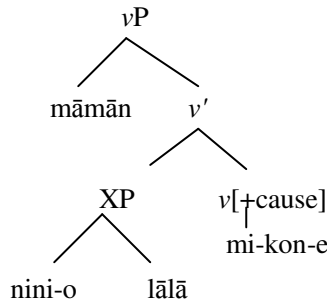


K. Murasugi *et al.* (2007: 632 [41])

K. Murasugi *et al.* は、3;5 になると、やっと語彙的「させ使役」は、出現すると述べている。一方、統語的「させ使役」は、5 歳にならないと、出現しないと述べている。

ペルシャ語児の誤用について K. Murasugi *et al.* が提案した VP-shell 分析に基づいて考えてみると、例えば、ペルシャ語児は、*māmān dāre nini-o mi-xāb-un-e'* Mommy is baby-DO DUR-sleep-CAUSE-3SG = Mommy is making the baby sleep.' の代わりに、*māmān nini-o lālā mi-kon-e'* Mommy baby-DO lullaby DUR-do- 3SG 'を発話してしまうような場面においては、以下のような樹形図を頭に描いているから、そのような誤用を犯している。

(48)



つまり、*māmān*に動作主の意味役割を割り当てているのは、*kærdæn*である。K. Murasugi *et al.* は、日本語児の場合は、このような段階は、はっきりと 2;5 に始まり、2;9 で終わると主張している。しかしながら、ペルシャ語児のデータを実際観察してみたところでは、このようなはっきりとした段階が存在しないし、むしろ子供は、1 つの使役動詞のグループの一方の動詞の場合は、誤用を犯してしまう一方で、全く同じ年齢で別の動詞の場合は、大人の目から見ても全くおかしくない適切な使役動詞を発話している。従って、ペルシャ語児の動詞の獲得は、正に項目依拠的に進んでいき、必ずしも K. Murasugi *et al.* が提案している段階を経ているわけではない。更に、K. Murasugi *et al.* は、使役動詞の代わりに自動詞を発話してしまう誤用に関しては、子供は、*v*の音形をゼロだと捉えているからだとして述べている。ペルシャ語の3つの使役の種類の中では、非対格使役動詞と使役動詞の語幹が同じである唯一の使役動詞は、形態的使役動詞である。実際、ペルシャ語児のデータを考察してみても、例えば、*bādkonæk-o terek-un-d 'balloon burst-CAUSE-3SG =S/he burst a balloon'*の代わりに、*bādkonæk-o terek-i-d '*と発話してしまった幼児は、数多く存在した。この場 K. Murasugi *et al.*に従えば、幼児は*v*の音形をゼロだと捉えているから、このような誤用が犯されたと言うかもしれない。仮に、形態的使役動詞に関しては、存在したとしても、使役動詞と非対格動詞の語根が全く違う語彙的使役動詞の場合は、なぜ幼児は使役動詞の代わりに自動詞形を発話してしまうかが説明できなくなる。以下においては、本論の第2章と第3章で考察してきたデータの分析を比較し、ペルシャ語児の使役動詞の誤用パターンについて論じる。

4.3. CHILDES データと横断的発話データにおける使役動詞全般の誤用パターン

4.3.1. 語彙的使役動詞

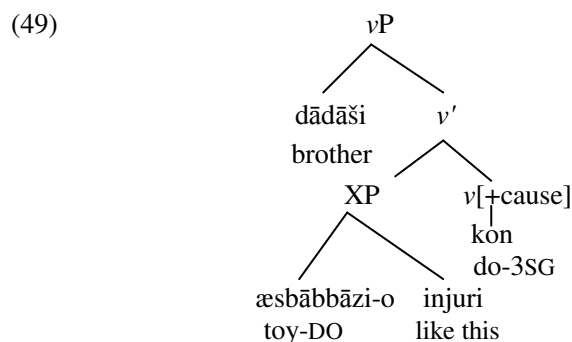
本論の第2章においては、CHILDESにおけるペルシャ語児5人の3種類の使役動詞の誤用パターンを考察した。5人の中、年齢的に一番小さい幼児は、Shahzad(女児, 1;8~1;10)である。Shahzad は、*zæd'hit'*という使役の意味を持たない普通の他動詞しか発話出来ず、数多くの発話は、物の名前を表す名詞だった。この幼児の場合は、動詞が抜けている文も多かった。従って、1;8から1;10までのペルシャ語児にとっては、全ての使役動詞は、発話不可能であると分かった。これは、正にGentner(1982)の主張と一致している。Gentner は、英語、ドイツ語、日本語、カルリ語、標準中国語、トルコ語の6ヶ国語の子ども(獲得児)の16人のデータを提出し、初期の子どもの語彙で名詞が優位であるのは普遍的な現象であり、これは子どもに名詞を学習しやすくしている知覚的、認知的過程が基底にあることにより説明されるとしている。更に、Shahzadの養育者の発話データも考察してみても、そもそも語彙的使役動詞は2つ、形態的使役動詞は1つ、助動詞使役動詞は2つしか発話されなかったことが分かった。従って、2歳以下のペルシャ語児を相手に、養育者もそ

もそも物の名前の方を頻繁に口にしていることが分かった。つまり、ペルシャ語児と養育者のデータを考察することによって、言語の入力の役割を重視する立場（言語入力依存仮説）が裏付けられたと言える。しかしながら、今井と針生(2007: 203～205) は、「言語入力依存仮説によると、子供が動詞をより多く耳にする可能性のある言語においては、名詞より動詞の獲得が先行している可能性もある。この立場からすれば、日本語は、主語の省略が可能で、動詞が文の最後の目立つ位置に出てくる。つまり、動詞の出現頻度、目立ちやすさ、どちらの面から考えても動詞の学習に有利だと考えられる。しかし、その日本語を学習する子供たちでも、動詞を即時マッピングができるようになる時期は、名詞を即時マッピングできるようになる時期より遅かったのである。

（中略）ここでは、子供がどのような種類の語をより容易に学習するかは、子供がどれだけその種類の語彙に接するかといったことだけで説明しきれないことが示唆されたのである。（中略）名詞/動詞の出現頻度と、それぞれの学習しやすさ、という問題について考えてみると、名詞、特にモノの名前が提示する「基本レベルのカテゴリー」と、動詞が指示する「モノとモノの間にある関係」では、概念としてのアクセスのしやすさが大きく異なる。本書で何度となく述べてきたように、基本レベルのカテゴリーは、形の類似性の高いモノ同士の集合であるが、このような基準でモノの分類は3、4ヶ月の子供でも可能である(例えばEimas & Quinn, 1994)。それに対して、動詞が指示する「関係」は、語が使われた場面から切り出すのも難しくければ、語を使うべき場面でそのような「関係」を見つけ出すことも難しい。また、そもそも多くの動詞が指す「関係」は、その関係を構成するモノが何かということと切っても切れない関係にある。たとえば、対象を手で二つの物体に分割するといった動作も、その対象が紙なら「破る」となり、クッキーなら、「割る」となる。このように関係を構成するものが定まらなないと、その動詞がどのような関係を指しているかも絞りきれない。このように動詞の意味は、モノについての理解を前提としたものだといえるかもしれない(Bowerman, 2005)。このように考えるなら、子供にとっての学習しやすさを予測するにあたっては、名詞/動詞を耳にする頻度に加えて、というより、それ以上に、このような概念の性質を考慮する必要があるといえるだろう。」と述べている。従って、Shahrazadの場合も、養育者のデータにも、動詞より名詞の出現頻度が高かったので、使役動詞の出現頻度はゼロになっているといった言語入力依存仮説的な説明ではなく、動詞と名詞の概念の性質の違いにも理由があったというような説明の方が良いと思われる。

Shahrazad の次に、年齢的に小さい幼児は、Lilia(女児, 1;11.21～2;0.23)である。Lilia データを考察してみると、3 つの使役動詞のグループの中で一番出現頻度が高かったのは、語彙的使役動詞であることが分かる。語彙的使役動詞は、他の 2 種類の使役動詞と比べ、獲得されにくいと思われる。なぜならば、たとえばペルシャ語の形態的使役動詞は、接尾辞-*ān* を非使役形の現在語幹に付与すれば、簡単に使役動詞が表せる。更に、助動詞使役動の場合も、もし(NP/A-root + V_iroot)を知っていれば、(V_iroot)を(V_rroot)に変えるだけで、助動詞使役動詞が表せる。一方、語彙的使役動詞の場合は、CAUSE という意味要素が動詞の中に含まれるので、非使役形と全く異なる動詞を獲得しないといけない。従って、記憶の負担が大きいと推測されるが、Lilia の場合は、語彙的使役動詞の出現頻度が実際かなり高い。実際、養育者の語彙的使役動詞の出現非度を考察してみると、このタイプの使役動詞の出現頻度が高いであることが分かった。従って、Lilia の場合は、言語入力の影響がかなり高いと言える。更に、Lilia の語彙的使役動詞の発話を考察することによってもう一つ分かったのは、この幼児は、ジェスチャーを利用し、数多くの語彙的使役動詞を描写して

いることである。Lilia は、まだ使役状態を完全には動詞によって表現できないとしても、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærd* や *injuri kærd* などと発話する。子供は誰かが何かに働きかけ、その結果その対象物が変化することを理解すると、使役動詞を使って発話出来なくても、身振りでその行為をやって見せることで意味が伝わる。つまり、子供も大人も自分と同一の共同注意フレームを共有していることを自覚しているので、その場のコミュニケーションのコンテキストにおいて、話し相手の意図理解を補完する情報源を提供するのは、子供の身振りのみとなっている。更に、ある動詞の場合は、適切な使役動詞のスキーマにアクセスし、その場面に合うような使役動詞を発話すると同時に別の動詞の場合は、スキーマにアクセスできず、ジェスチャーを利用し、使役行為を描写する場合もある。これは、まさに、言語習得には、項目ごとにケースバイケースで習得するプロセスと、広く一般に通用する規則性・抽象性を習得するプロセスの両方が必要であるという意味である。つまり、ペルシャ語の 2 歳児以下の幼児は、名前を知っている語彙の使役動詞の場合は、その動詞を発話し、知らない場合は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærd* や *injuri kærd* などと発話する。Lilia は、兄弟に対して、「お兄ちゃん、おもちゃを落として」と言いたがっているが、実は *ændāxtæn'throw'* という語彙の使役動詞にアクセスできないので、自ら表現したい動詞 *ændāxtæn'throw'* が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kon'do like this'* と発話してしまう。K. Murasugi *et al.* が提案した VP-shell 分析に基づいて考えてみると、本論の第 2 章の(35)の例の図形図を以下のように示すことが出来る。K. Murasugi *et al.* は、XP の下に、直接目的語とオノマトペがあると想定している。しかしながら、Lilia の場合は、XP の下には、直接目的語と「このように」が含まれている。



つまり、*dādāši* 'brother' に動作主の意味役割を割り当てているのは、*kærden* である。K. Murasugi *et al.* は、日本語児の場合は、このような段階は、はっきりと 2;5 に始まり、2;9 で終わると主張している。ペルシャ語児の場合は、「ジェスチャー+*intori kærd*」という構文が 2;0~2;8 で観察された。

Lilia の次に、年齢的に小さい幼児は、Mahdi (男児, 2;2~3;0) である。Mahdi の語彙的使役動詞の最初の産出は、2;4 のときだった。Mahdi の場合は、上記の Lilia と同じストラテジー「ジェスチャー+*intori kærd*」は、観察されなかった。エラーに関しては、Mahdi はまだ島段階の真っ最中であつたため、使役動詞の使用も非常に保守的になされ、誤用パーセントもその理由で低い。

Mahdi の次に、年齢的に小さい幼児は、Faeze (女児, 2;4~3;2) である。Faeze の MLU 値は、非常

に低く、実際殆どの使役動詞が発話されていない。発話された数少ない動詞では、誤用が観察されず、適切に使われていることが分かる。考えられる理由は、**Faeze** は、まだ動詞の島段階にいるため、ここの動詞を項目依拠的に習得していくということである。つまり、まだそれぞれの使役動詞のスキーマは、完全に形成されていないため、**Faeze** もスキーマを過剰一般化し、実際大人の言語には存在しない動詞を形成していない。

5 人の中で、一番年齢的に大きいのは、**Minu**(女児,4;1.12~4;7.21)である。**Minu** の年齢からすると、もう既に全ての使役動詞のスキーマが完成し、過剰一般化も盛んにされていると推測される。実際、データを考察してみても、上述した幼児 4 人より誤用の数が多いことが分かる。語彙的使役動詞の場合は、よく見られている誤用パターンは、大人の発話者の言語には、「場面」に合った語彙的使役動詞があるにもかかわらず、助動詞使役動詞のスキーマを拡張され、獲得している言語にもない新奇な助動詞使役動詞が発話されてしまうというパターンである。例えば、**Minu** は、4;6.17 の年齢で、*bæstæn'close'* という語彙的使役動詞の代わりに、非常に不気味な新奇助動詞使役動詞 *bæste kærden'closed do'* を発話してしまった。**Minu** の語彙的使役動詞の誤用パターンの中には、**Lilia** で観察された「ジェスチャー+*intori kærden*」が一切なかった。つまり、全ての動詞のスキーマが完成していない 2 歳児は、「名前を知らない語彙的使役動詞があれば、とにかく『ジェスチャー+*intori kærden*』を使えば、聞き手に自分の発話意図が伝わるだろう」と推測し、このようなストラテジーを利用するが、4 歳児の場合は、動詞の島段階が終わり、全ての使役動詞のスキーマが完成しているため、知らない動詞が必要とされる場面に接すると、とにかく知っている他の種類の使役動詞のスキーマを拡張し、新奇な使役動詞を発話してしまう。**CHILDES** のデータのペルシャ語児 5 人の語彙的使役動詞の使用を観察することによって、ペルシャ語児は、語彙的使役動詞を獲得するに当たって、以下のような段階を経ていくことが分かる。

(50) 段階Ⅰ：動詞なしの発話の段階(1;8~1;10)

段階Ⅱ：数が限られた語彙的使役動詞を発話し始めると同時に、名前の知らない語彙的使役動詞の場合は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærden* や *injuri kærden* などと発話する段階(1;11~2;0)：ペルシャ語の擬態語は、日本語ほど豊富ではないので、ペルシャ語児は、動詞を表現するときに、ジェスチャーを自分の意図を表現するために使い、そのジェスチャーは動作を描写するのを助けるような橋渡しの役割を果たしている。

段階Ⅲ：3 歳を超えると、助動詞使役動詞のスキーマが過剰一般化され、適切な語彙的使役動詞の代わりに、新奇な助動詞使役動詞が発話されてしまう段階(3;0~)

ペルシャ語児が語彙的使役動詞を獲得していくとき、上述したような 3 つの段階を経ていくが、注意していただきたいのは、この 3 つの段階は、決して全ての幼児の場合には、見られているわけではなく、年齢の割には、全ての語彙的使役動詞を誤用なしで発話している幼児もいる。つまり、**K. Murasugi et al.** が提案している確実な 4 つの段階は、ペルシャ語児の場合もあるが、幼児によって、また動詞によって上述した 3 つの段階に従わないケースも多く見られる。これは正に、動詞の習得は、項目依拠的に進んでいく証であり、1 つの使役動詞のグループの中で、(50)の全ての段階を経ていく幼児もいるし、そうではない幼児もいる。また 1 人の幼児で考えた場合でも、

日常の生活でよく耳にする語彙的使役動詞を非常に早い段階から習得し、又はそれを大人と同じようなやり方で適切に発話している動詞もある。従って、ここで主張したいのは、動詞の獲得は、3歳までに、名詞の獲得と同じく、項目依拠的に進んでおり、3歳を超えると、各グループの使役動詞のスキーマが形成され、過剰一般化の数も増えていくということである。

本論の第3章においては、ペルシャ語児98人(男児41人、女児57人)の横断的発話データを見てきた。3.1.1. においては、2;0.12~2;9.18 児10人(男児5人、女児5人)の語彙的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。この年齢においてよく観察された誤用パターンは、使役動詞の代わりに、使役動詞に対応する自動詞形をそのまま何の変化もなしで、発話してしまうという誤用パターンであった。なぜ、子供がこのような誤用を犯すかという点、幼児は、「使役動詞というのは、自動詞形に CAUSE という意味要素が付加されたというものである。使役動詞が思い出せないとき、自動詞形をそのまま発話すれば、聞き手がなんとなく私の発話意図が分かるだろう。」と推測しているからではないだろうか。例をあげると、「ノートをどうしたか?」という質問に対して、Niyayesh (女児, 2;0.12) は、「ノートを落した」という大人の観点から見ると、間違っているような発話をしてしまった。しかしながら、Niyayesh からすると、「『落とす』という使役動詞は、(「落ちる」+CAUSE) であるので、『落とす』という使役動詞にアクセスできない場合は、とりあえず自動詞『落ちる』を発話すれば、聞き手に私の意図が何となく伝わるだろう」と推測し、誤用を犯す。次によく見られた誤用パターンは、名前の知らない語彙的使役動詞の場合は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kaerd* や *injuri kaerd* などと発話する。このような発話は、2;6 を境にで終わる。つまり、ペルシャ語児は、2歳半まで、名前の知らない語彙的使役動詞を描写するために、「ジェスチャー+*intori kaerd* や *injuri kaerd*」を頻繁に利用している。ペルシャ語の擬態語は、日本語ほど豊富ではないので、ペルシャ語児は、動詞を表現するときに、ジェスチャーを自分の意図を表現するために使い、そのジェスチャーは動作を描写するのを助けるような橋渡しの役割を果たしている。更に、この年齢の幼児は、大人の言語には、語彙的使役動詞があるにもかかわらず、「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/語彙的使役動詞から作られた名詞+*kaerdæn*」をよく発話している。2;0.12~2;9.18 児10人の語彙的使役動詞の誤用パターンを示すと、(51) のようになる。

- (51) I. 自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kaerd* や *injuri kaerd* などと発話する誤用：この誤用は、2;6 を超えると、無くなる。
- II. 語彙的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：*ændāxtæn'drop'* の代わりに、*oftādæn'fall* を発話してしまうような誤用
- III. 語彙的使役動詞の代わりに「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/語彙的使役動詞から作られた名詞+*kaerdæn*」を発話してしまう誤用：*boridæn'cut'* の代わりに、*boridæn'cut'* から派生した名詞 *boreš'cutting'* に *kaerdæn* を結合し、「切れしている」のような発話をし、誤用を犯す。更に、*boridæn'cut'* の代わりに、*geiči geiči kaerdæn'scissors scissors do'* と発話してしまう幼児もいる。日本語児は、「ハサミで紙を切る」という場面を「紙をチョキンチョキンしている」と発話するが、ペルシャ語には、チョキンというオノマトペが存在しないため、ペルシャ語児は、ハサミの反復形に *kaerdæn* を結合することによって、使役行為を描写する。更に、*bæstæn'close'* という語彙的使

役動詞の過去分詞形を派生し、それに *kaerdaen* を結合し、大人の観点から見ると、誤用であるような発話をしてしまう。大人の観点から見ると、「閉める」を意味する語彙的使役動詞の方が「動詞分詞形+*kaerdaen*」の獲得より簡単かと思われる。しかし実際は、ペルシャ語児は2歳を越えると、助動詞使役動詞のスキーマが定着した後に、この形を持たない語彙的使役動詞についても、スキーマを拡張して使用しているのだと考えられる。

今井と針生(2007: 154~156) は、「日本語ほど豊かな擬態語を持たない言語の子供はどのように擬態語の促進的な役割なしで動詞を覚え、正しく使いこなせるようになっていくか」という疑問を投げかけている。その1つの理由として、「擬態語がない言語では大人は動詞を使うときに擬態語に代わる何か別の手がかり（例えばジェスチャーなど）を与えているのだろうか。」を提案している。日本語ほど豊かな擬態語を持たないペルシャ語児は、名前を知らない語彙的使役動詞の場合は、ジェスチャーの他に、「使役行為の道具+*kaerdaen*」を使っていることが分かる。例えば、「切る」という動詞が思い出せない場合は、「ハサミ/ハサミハサミ+する」を発話してしまう。このような動詞は、大人の言語には存在しないが、話し手の意図が非常によく聞き手に伝わっていく。従って、擬態語なしでも、ペルシャ語児は、自分の意図を聞き手に伝えられることが分かる。

2歳児の横断的発話データを考察することによってもう1つ分かったのは、語彙的使役動詞8つの中、一番誤用の割合が低かったのは、*daer āvardaen* 'take off one's clothes'であったということである。大人の観点から見ると、*daer āvardaen* 'take off one's clothes'も *baestaen* 'close'も同じ語彙的使役動詞のカテゴリーに属しているように見えるが、子供のデータを考察して見ると、前者の誤用数は、少ないが、後者の誤用数は多い。従って、動詞の習得は、Tomasello がいうように、最初の頃、項目依拠的に行われ、決して1つのスキーマがあり、そこから様々な動詞が生まれてくるというわけではない。子供が日常生活でよく耳にし、その動詞を必ず覚えなさいといけなさいというような動詞は、早く習得され、誤用数も少なくなる。

次に、3.2.1. においては、3;0.0~3;10.2 児 22 人(男児 9 人、女児 13 人) の語彙的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。図 19 で示したように、語彙的使役動詞8つの中、5つの誤用数は、この年齢グループで前の年齢グループより減少していることが分かる。この年齢グループでよく見られた誤用パターンは、場面に合った適切な語彙的使役動詞の代わりに、場面に合わない別の語彙的使役動詞や助動詞使役動詞が発話されてしまったという誤用である。例をあげると、*rixtaen* 'to pour' の代わりに *aendāxtaen* 'drop, throw' が発話されてしまった誤用や *kešidaen* 'pull' の代わりに、*hol dādaen* 'push' と発話してしまったという誤用である。これは、正に Casasola & Cohen (2000) の主張と一致している。Casasola & Cohen (2000) は、18ヶ月前の幼児は、＜押す＞イベントと＜引っ張る＞イベントの違いを区別できていないと主張している。ペルシャ語児の3歳児は、＜押す＞と＜引っ張る＞を全く同じ動詞によって描写し、大抵の場合は、＜引っ張る＞の代わりに＜押す＞と発話してしまい、その逆の誤用は見られていない。従ってペルシャ語児は、3歳になっても、＜押す＞と＜引っ張る＞のイベントの違いを区別できても、言葉でそれらのイベントを描写するとき、同じ動詞によって2つのイベントを描写してしまうことが言える。

3;0.0 ~3;10.2 児 22 人のデータを考察することによって、もう1つ分かったのは、2歳児で見ら

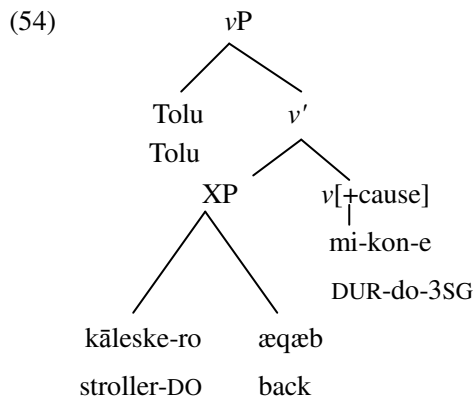
れた「ジェスチャー+ *intori kærð* や *injuri kærð*」というストラテジーは、3 歳児で見られていないということである。つまり、3 歳児は、ジェスチャーの助けなしで、使役動詞を描写している。3 歳児の語彙的使役動詞の誤用パターンを示すと、(52) のようになる。

- (52) I. 語彙的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：*dærāværdæn* 'take off one's clothes' の代わりに、*pušiden* 'waer' を自動詞形で発話している。つまり、「服を脱ぐ」の代わりに「服を着る」という全く逆の動詞、それも自動詞形のまま発話されている。
- II. 語彙的使役動詞の代わりに「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/語彙的使役動詞から作られた名詞+*kærðæn*」を発話してしまう誤用：「おもちゃのベビーカーを後へ引っ張る」の代わりに、「後ろしている」という大人の言語にもない助動詞使役動詞を発話してしまう。*æqæb kærðæn* 'back do' は、非常に構造的に *qeiči kærðæn* 'scissors do' に似ている。つまり、幼児が「『知っている名詞+*kærðæn*』を発話すれば、自分の意図が聞き手に伝わっていくだろう」と判断し、大人の観点から見ると、誤用であるよう発話をしてしまう。更に、「おもちゃの服を脱ぐ」の代わりに、「『裸+*kærðæn*』を発話すれば、意図が聞き手に伝わっていくだろう」と推測し、誤用を犯す。次によく見られた誤用は、*boriden* 'cut' の代わりに、*pāre kærðæn* 'piece make= to tear' を発話してしまうという誤用である。つまり、因果連鎖の中で、どうも 3 歳児にとって、被使役物の性質（固体、液体等）や使役道具（手、ハサミ等）という要素は、あまり重要ではないようである。「過去分詞+*kærðæn*」の誤用の例は、*šekaeste kærðæn* 'broken do' である。Nima (男児, 3;3.8) は、「ガラスを割る」の代わりに、「ガラスを割れた状態にする」と発話してしまった。

本論の 3.3.1. においては、4;0.0~4;10.19 児 25 人(男児 11 人、女児 14 人) の語彙的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。この年齢グループの誤用パターンを示すと、(53) のようになる。

- (53) I. 語彙的使役動詞の代わりに、自動詞をそのまま発話してしまう：この種の誤用は、4;0.0~4;10.19 児では、2 歳児と 3 歳児と比べ、大幅に減少している。従って、語彙的使役動詞の代わりに、自動詞をそのまま発話してしまうという誤用は、年齢と共に減少する一方であると言える。
- II. 語彙的使役動詞の代わりに「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/語彙的使役動詞から作られた名詞+*kærðæn*」を発話してしまう誤用：この種の誤用は、4 歳児で非常に多く見られるパターンであり、耳を疑うような興味深い誤用も中には存在した。例をあげると、「ケーキにナイフで何をしているか？」と尋ねると、「ケーキをハサミしている」と発話してしまう幼児もいた。この幼児にとっては、どうも「切る」という適用範囲が非常に幅広い動詞のことを「ハサミする」という新奇な助動詞使役動詞と発話し、したがって、「ケーキをナイフで切っている」の代わりに「ケーキをハサミしている」と発話し、誤用を犯しているようである。更に、Matin (男児, 4;0.10) は、「ケーキを切っている」の代わりに「ケーキを破れた状態にしている」と発話してしまった。ペルシャ語の貧しい社会階級の男性の間では、「スイカを包丁で切る」と

いう場面を描写するために、*pāre kærdaen'ragged do'*という助動詞使役動詞が使われる。つまり、この社会階級の男性は「スイカを包丁で切る」の代わりに「スイカを破っている」と発話する。しかしながら、この社会階級の男性は、「スイカやメロン」以外の他の食べ物の場合は、決して *pāre kærdaen* を使わない。面白いことには、ペルシャ語児は、「ケーキ」の場合でも、*pāre kærdaen* を使用している。更に、別の幼児は、「ケーキをナイフしている」と発話してしまい、もう1人の幼児は、「ケーキをナイフで刺している」と発話してしまった。つまり、これらの幼児は、*boridaen'cut'*という語彙的使役動詞をよく耳にしている、非常に早い段階からそれを獲得しているが、ペルシャ語の *boriden'cut'*は、非常に適用範囲が広いので、どうも4歳児は、全ての被使役物を同じ *boriden'cut'*で描写することがあまり気が進まず、個々の被使役物に対して、新奇な助動詞使役動詞を発話しているようである。つまり、「紙をハサミで切る」という場面を描写するためには、*boridaen'cut'*が発話可能であっても、「ケーキをナイフで切る」という場面を描写するためにも同じ *boridaen'cut'*が発話可能であるとペルシャ語の4歳児は把握していないようである。つまり、ここでは過剰一般ではなく、ある意味では過少一般化が見られている。つまり、幼児は、特別な使役道具（モノ）に限って、*boriden'cut'*を発話している。モノが変わってくると、別の動詞を発話してしまう。これは、ペルシャ語児も言語獲得初期においては、使役行為の様態というより被使役物の方を重視しているという証である。要するに、ペルシャ語の4歳児は、*boridaen'cut'*という語彙的使役動詞を未だにに獲得していないのではなく、*boriden'cut'*の適用範囲を完全に獲得していないということである。更に、「ベビーカーを引っ張っている」の代わりに、「後ろしている」と発話してしまった幼児もいる。K. Murasugi *et al.* は、XPの下に、直接目的語とオノマトペがあると想定している。一方ペルシャ語の4歳児の発話を考察してみると、オノマトペだけではなく、動詞の過去分詞形も、語彙的使役動詞から作られた名詞も、形容詞もXPの下に出現できることが分かる。「ベビーカーを後ろしている」という無意味な発話の樹形図をK. Murasugi *et al.*のように描けば、(54)のとおりになる。



- III. 語彙的使役動詞の代わりに、形態的使役動詞が発話されてしまう：この種の誤用は、4歳児の間で、非常に稀な誤用パターンであり、実際「ケーキを切る」の代わりに、「ケー

キを割る」という形態的使役動詞 *šekāndaen'break* を発話してしまった幼児のケースのみである。今井と針生(2007: 197) は、「投げる」は、動作の主体が手で持ち上げられるものなら殆どどのようなモノでも「投げる」対象になれる。しかし、「破る」、「割る」、「砕く」、「潰す」、「曲げる」、「折る」などのいわゆるモノに力を加えてモノの形状を変化させる一連の動詞は、動作の対象になるモノ（つまり項になれる名詞）を強く限定する。」と述べている。つまり、被使役物の性質によって、使える動詞も違ってくる場合がある。これを覚えた幼児は、今度は逆方向の誤用、つまり様々な適用範囲が広い動詞の場合も、大人の言語にはない動詞をわざわざ作ってしまい、大人の観点から見ると、誤用を犯してしまう。この種の誤用は、ペルシャ語の4歳児の間では、非常に盛んになされている。つまり、過少般用が行なわれ、*boridaen'cut* は、「紙」という被使役物の場合に限って発話される。子供は、過剰般用と過少般用を同時に行なっているようである。佐治(2010:46) は、「Ameel *et al.*(2008) は5歳から14歳に至る英語話者の子どもが様々な種類の「容器」の名前をどのように理解するのかを実験的に調査した。彼女らの研究によれば、子どもはやはり新しい語を学ぶことにより既知の語の意味を再編成していくのだが、興味深いことにそこには過剰般用と過少般用の双方が観察された。それまでの研究では、子どもの語意の再編成が過剰般用的に進むのか過少般用的に進むのかは競合的な関係にあると捉えられていたのだが(e.g. Clark, 1973a; Dromi, 1987; Mervis, 1987; Nelson, 1974)、アミールらの報告は、これらの関係は競合的というよりもむしろ相補的であり、ある語が過剰般用的に用いられれば、他の似たような語は過少般用的に用いられる関係になる場合があることを示した。」と述べている。従って、*boridaen'cut* という語彙的使役動詞の使用は、過少般用の傾向を示している、意味は非常に類似している *pāre kardaen'ragged do* の使用は、過剰般用の傾向を示していると言える。

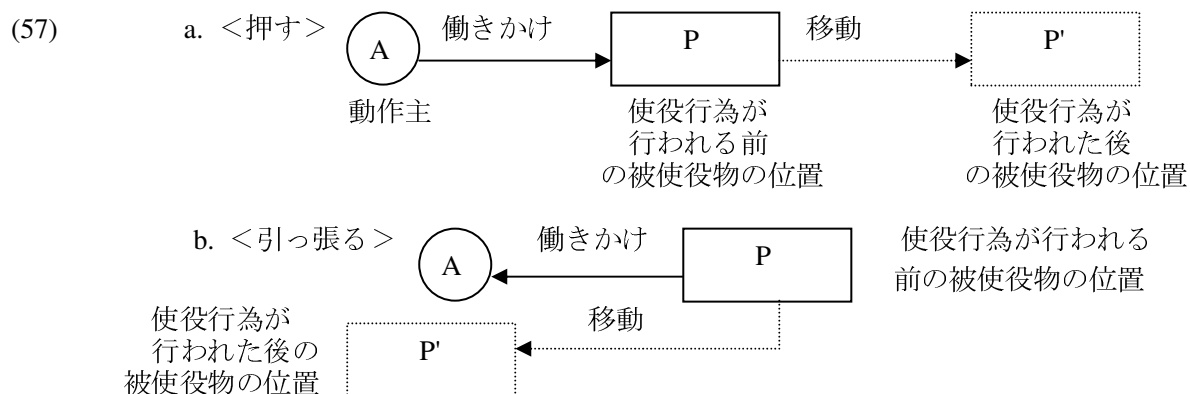
本論の3.4.1. においては、5;0.3～5;11.6 児 30 人(男児 14 人、女児 16 人) の語彙的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。30 人の中、2 人は、全ての語彙的使役動詞を誤用なしで発話している。このグループの誤用パターンを示すと、(55) のようになる。

- (55) I. 語彙的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：この種の誤用パターンは、4歳児と同じく非常に稀で、実際、幼児2人でしか見られていない。
- II. 語彙的使役動詞の代わりに「(擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/語彙的使役動詞から作られた名詞/形容詞) +*kardaen*」を発話してしまう誤用：4歳児と同じく、「ケーキを切っている」の代わりに、「ケーキをハサミしている」と発話してしまった幼児がいる。この幼児は、「紙をハサミで切る」という場面だけではなく、非常に幅広く「切る」の代わりに「ハサミしている」を使っているようである。更に、幼児の中には、語彙的使役動詞 *šekaestaen'break* の代わりに、**šekaest kardaen'break do* という二重使役を発話してしまった幼児もいる。おそらく、この幼児は、*šekaestaen'break* の過去分詞形は、*šekaest* ではなく、*šekaeste* であるということをもまだ獲得せず、誤った過去分詞形に *kardaen'do* を付与することによって、大人の観点から見ると、誤用であるような発話をしてしまったと思われる。

- Ⅲ. 語彙的使役動詞の代わりに、形態的使役動詞が発話されてしまう：*kubidæn*'hammer'に限って、多くの5歳児は、*kubidæn*の代わりに、*šekāndaen*を発話してしまった。5歳児のこの種の誤用は、1つの語彙的使役動詞に限って、起こっているもので、決して一般的な過剰一般化と言えない。ペルシャ語の5歳児は、「ハンマー」を見ると、即座に*šekāndaen* 'break'という形態的使役動詞に即時マッピングをし、「ハンマーで釘を打つ」の代わりに、「ハンマーで釘を割っている」と発話してしまう。つまり、5歳になっても、動詞によって未だに使役の様態というよりモノを重視している幼児もいる。つまり決してこれらの幼児は、*kubidæn*'hammer'という動詞を未だに獲得していないと言い切れない。むしろ、*kubidæn*'hammer'をもう既に獲得したとしても、「ハンマー」という使役の道具を見ると、即座に「ハンマー」を「打つ」間いいう動詞ではなく、「割る」という動詞にマッピングしてしまう。

本論の3.5.1.においては、6;0.2~6;11.19児11人（男児2人、女児9人）の語彙的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。第3章の図28から分かるように、6歳児の語彙的使役動詞の誤用数は、2~5歳児の語彙的使役動詞の誤用数より遥かに減少している。語彙的使役動詞8つの中、もう既に5つは、誤用せずに発話されている。このグループの誤用パターンを示すと、(56)のようになる。

- (56) I. 語彙的使役動詞の代わりに、助動詞使役動詞を発話してしまう誤用：僅かであるが、誤用はされている。5歳児の中には、未だに、「後ろへ引っ張っている」の代わりに「後ろへ押している」と発話してしまう幼児もいる。Casasola & Cohen (2000) は、18ヶ月児は、＜押す＞イベントと＜引っ張る＞イベントを区別できると主張している。しかしながら、幼児は、＜押す＞と＜引っ張る＞イベントを実際、概念化できても、言葉でこの2つのイベントを描写するときは、困難を抱えるようである。興味深いことに、＜押す＞と＜引っ張る＞イベントを描写するとき、誤用を犯した全ての2~5歳児は、*kešidæn*'pull'の代わりに、*hol dādaen*'push'と発話し、一人もその逆の誤用を犯していない。この2つの動詞のイメージスキーマを画けば、(57)のとおりになる。



- Ⅱ. 語彙的使役動詞 *kubidæn*'to knock, hammer'の代わりに形態的使役動詞 *šekāndaen*'break'

は、発話されている。しかしながら、この種の誤用パターンは、1つの動詞でしか見られておらず、一般的な誤用パターンと言えない。今井と針生(2007: 197)は、「破る’、割る’、砕く’、潰す’、曲げる’、折る’などのいわゆるモノに力を加えてモノの形状を変化させる一連の動詞は、動作の対象になるモノ（つまり項になれる名詞）を強く限定する。」と述べている。つまり、被使役物の性質によって、使える動詞も違ってくる場合がある。ペルシャ語の5歳児の発話データを考察してみると、5歳児は、未だに動作の対象になるモノ（被使役物）の性質にあまり敏感ではないように見える。つまり、5歳児は、釘に力を加え、釘の形状を変化させても、「釘は割れない」のは、未だに理解していないようである。理解したとしても、言葉の面では、うまく反映されていない。

以上2～6歳児98人の語彙的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを考察してきた。年齢ごとの語彙的使役動詞の誤用パターンをまとめると、以下のとおりになる。

- (58) I. 自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kaerd* や *injuri kaerd* などと発話する誤用：(1;11～2;6)
- II. 語彙的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：(2;0～5;4)：この誤用パターンは、2歳児で一番盛んに犯され、年齢が上がるにつれ、減少する一方である。
- III. 語彙的使役動詞の代わりに「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/語彙的使役動詞から作られた名詞+*kaerdæn*」を発話してしまう誤用：(2;0～6;11)
- IV. 語彙的使役動詞の代わりに、形態的使役動詞が発話されてしまう：(4;1～6;0)：「ケーキを切る」と「釘を打つ」という2つの場面で、形態的使役動詞 *šekāndæn* 'break' が発話されている。しかしながら、この種の誤用パターンは、限られた動詞でしか見られておらず、さらに、限られた年齢でしか見られていないので、上述したI～IIIのように、幅広い動詞でそれも幅広い年齢で犯されているとは言えない。

(58)を(50)と比較してみると、(50)のIの段階以外に、他の段階は、横断的発話データでも観察されたことが分かる。従って、(50)のIの段階を(58)に加えると、ペルシャ語児の語彙的使役動詞の獲得順序と犯される誤用パターンを示唆することができる。

4.3.2.形態的使役動詞

本節においては、最初に CHILDES のペルシャ語児5人の形態的使役動詞の初出の年齢及び誤用パターンを考察していく。

ペルシャ語児5人中、形態的使役動詞の初出は、Lilia(1;11.21)で見られた。発話された形態的使役動詞は、横断的発話データの中でも考察してきた形態的使役動詞のリストに入っていない。Liliaは、1;11.21で *bærgærdun-im* 'turn back-1PL= Let's turn round (spin) it' という別の形態的使役動詞を発話している。しかしながら、これは、あくまでも項目依拠的な使用であり、決して形態的使役動詞のスキーマが形成しているとは言えない。なぜならば、この子は、他の形態的使役動詞がまだ発話出来ないからである。次に観察された形態的使役動詞は、Mahdi(2;5)のケースであった。

Mahdi は、2;5 で *šekāndaen* 'break' という形態的使役動詞を発話している。しかしながら、Mahdi のケースでも、*šekāndaen* 'break' 以外の他の形態的使役動詞は発話されていない。従って、語彙的使役動詞と違って、2;5 の時点でも、未だに形態的使役動詞のスキーマが形成されているとは言えない。

形態的使役動詞の生産的な発話は、Faeze(2;4~3,2) が 2;9 になった段階でやっと観察されている。Faeze は、2;9 を超えると、いくつかの形態的使役動詞を発話できるようになり、それも養育者の直前の発話の模倣ではなく、創造的に作られた形態的使役動詞であった。

Minu (4;1.12~4;7.21)の年齢から考えると、もう既に形態的使役動詞を生産的に発話し、更に、形態的使役動詞のスキーマが形成されているので、他の種類の使役動詞が望まれる場面でも、形態的使役動詞のスキーマを拡張し、誤用を犯していると予測される。実際、Minu の長期的発話データを考察してみても、Minu は、もう既に形態的使役動詞を生産的に発話し、自動詞形が発話されるはずの場面でも、自動詞形の代わりに、形態的使役動詞を発話し、誤用を犯していることが分かる。Minu は、*xābāndaen* 'put to sleep' の代わりに、**xāb kārdaen* 'sleep do' という大人の母語話者の言語に存在しない助動詞使役動詞を発話している。従って、語彙的使役動詞の場合だけではなく、ペルシャ語幼児は、形態的使役動詞の代わりに、助動詞使役動詞のスキーマを拡張し、誤用を犯していることが分かる。CHILDES データを考察することによって、形態的使役動詞の生産的な発話は、2;9 から始まることが分かった。しかしながら、CHILDES のペルシャ語児 5 人の中、3 人の年齢が 3 歳以下であり、Faeze(2;4~3,2)の場合も、3 歳以上のデータの量は、非常に少ないであるので、形態的使役動詞の獲得の順序を考察するには、不十分である。従って、以下においては、ペルシャ語児 98 人の横断的発話データの中の形態的使役動詞の習得順序を考察していく。

本論の 3.1.2. においては、2;0.12~2;9.18 児 10 人(男児 5 人、女児 5 人) の形態的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。Niyayesh(2;0.12) には、2 つの形態的使役動詞は、発話可能であるが、残りの形態的使役動詞は、発話不可能である。2;0.12~2;6.8 の幼児 5 人(Niyayesh 以外) にとっては、全ての形態的使役動詞が発話不可能である。従って、2;6 を超えないと、形態的使役動詞が発話できないと分かる。全体的に全ての形態的使役動詞の誤用パーセントは、非常に高い数字を示している。この年齢グループの形態的使役動詞の誤用パターンを示すと、(59)のようになる。

- (59) I. 自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærđ* や *injuri kærđ* などと発話する誤用(2;0.12~2;8.7)
- II. 形態的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：例を挙げると、Niyayesh(2;0.12) は、*pušāndaen* 'to put on or wear (on the feet), dress' の代わりに、自動詞形 *pušidaen* 'put on' をそのまま発話している。勿論、被使役者及び対格も発話に入っているが、動詞は、使役形ではなく、自動詞形である。
- III. 形態的使役動詞の代わりに、語彙的使役動詞を発話してしまう誤用：例を挙げると、幼児 2 人は、*terekāndaen* 'cause to burst, explode' という形態的使役動詞の代わりに、*šekastaen* 'break' という語彙的使役動詞を発話してしまった。さらに、もう 1 人の幼児は、*terekāndaen* という形態的使役動詞の代わりに「場」に相応しくない語彙的使役

動詞 *boridæn'cut* を発話してしまった。つまり、今井と針生(2007: 197)が言うとおりに、‘破る’、‘割る’、‘砕く’、‘潰す’、‘曲げる’、‘折る’などのいわゆるモノに力を加えてモノの形状を変化させる一連の動詞は、動作の対象になるモノ（つまり項になれる名詞）を強く限定する。しかしながら、ペルシャ語の2歳児にとっては、被使役物の性質に関係なく、1つの動詞の適用範囲が広い。よく考えてみると、日本語の「ガラスを割る」と「風船を割る」という全く違う性質の被使役物に力を加え、一瞬でその被使役物の形が変えられる場面は、同一の動詞‘割る’によって描写されている。従って、日本語母語話者にとって、「風船を爆発させる」ではなく、むしろ「風船を割る」の方が、自然に聞こえる。従って、言語によって、同じ使役行為のラベル化は、全く異なってくる。つまり、日本語とペルシャ語の概念の切り方は、2つの異なる性質を持つ対象物（風船、ガラス）では、異なる。今井と針生(2007: 231,232) は、言葉が先か概念が先かという問題について、「モノの基礎レベルのカテゴリーは、世界の構造が既にそのようなものになっているという部分も少なくなく、その意味で、カテゴリーが言語によって作られるというより、言語が既に存在するカテゴリーに対応づけられると考えた方がよさそうである。他方、モノ同士の関係を指示する概念は、基礎レベルのカテゴリーのような強力な知覚的よりどころがなく、カテゴリーの認識に言語（ラベル）が及ぼす影響も大きくならざるを得ない。つまり、どちらの見方が正しいかというより、概念の性質によって、どちらが優勢になるかが変わることなのだろう。しかし、いずれの場合も、言葉の学習には何らかの普遍的かつ原始的概念は前提として必要であると思われる。この場合の『概念』とは、世界から与えられる『概念』ではなく、子供の側でもつ、内的な概念である。（中略）学習された概念はまた、言葉の学習の制約として用いられ、語意の推論は更に正確な、精緻なものになっていく。」と述べている。ペルシャ語の2歳児は、「風船を爆発させる」のではなく、ペルシャ語の大人の発話者の観点から見て、誤用である「風船を割る」と発話してしまったのは、日本語児とペルシャ語児の内的な概念は元々一緒であったが、ペルシャ語母語話者は、対象物の性質や使役行為の後の対象物の状態によって、同一の概念を描写するために2つの違う動詞を使い、区別をしているので、そもそも1つであった概念も区別されるようになってくるのだろうか。この問題に関しては、第6章で、詳しく議論していく。

- IV. 形態的使役動詞の代わりに「擬態語/ 形容詞+(*kærdæn'do'dādæn'give*)」を発話してしまう誤用：I～IVで一番よく見られた誤用パターンである。例を挙げると、*terekāndæn'cause to burst, explode* の代わりに、*kučik kærdæn'small do = make small* と発話してしまった幼児もいれば、*surāx kærdæn'hole do = make a hole* と発話してしまった幼児もいる。一番誤用数が多かったのは、*xābāndæn'make sleep* という形態的使役動詞であり、殆どの2歳児は、*xābāndæn* の代わりに、*lālā kærdæn'lullaby do = make sleep* という「擬態語+*kærdæn*」を発話してしまった。*lālā kærdæn* は、あくまでも「ネンネする」と同じく、自動詞であるが、2歳児は、この動詞を使役動詞として発話している。更に、Diyana(2;6.8)は、*xābāndæn'make sleep* の代わりに、二通りの発話をしている。1つ目は、*lālā dādæn'lullaby give* であり、2つ目は、*derāz derāz dādæn'onomatopoeia*

give'である。「横になる」という文は、ペルシャ語の口語では、*derāz kešīdæn*'lie pull= lie down' になるが、Diyana は、この発話から *derāz* 'long' という部分を取り、*dādæn*'give' という軽動詞に付与することによって、自分なりの新奇的な助動詞使役動詞を作っていると考えられる。

本論の 3.2.2. においては、3;0.0~3;10.2 児 22 人(男児 9 人、女児 13 人)の形態的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。3 歳児の場合は、形態的使役動詞のスキーマが形成され、数多くの誤用も見られている。22 人の中、5 人が *xændāndæn*'make laugh' と *xorāndæn*'feed' 以外は、全ての形態的使役動詞を適切に発話している。*xændāndæn*'make laugh' と *xorāndæn*'feed' に関しては、3 歳児のみならず、7 歳児までにも発話されておらず、この 2 つの形態的使役動詞は、現代ペルシャ語の口語においては、使われていないことが分かった。語彙的使役動詞と同様に、3 歳児は、自分の知らない形態的使役動詞を描写するために、「自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærđ* や *injuri kærđ* などと発話する」という戦略を使っていないことが分かる。つまり、3 歳になると、子供の身振りの機能が伝達意図の主要な担い手から補助的な機能へと変化してくる。3 歳児の形態的使役動詞の誤用パターンを示すと、(60)のようになる。

- (60) I. 形態的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：例をあげると、Hannaneh(3;0.8) は、*xābāndæn*'put to sleep'の代わりに、*xābīdæn*'sleep'をそのまま自動詞形で発話している。(3;0.8~3;7.27)
- II. 形態的使役動詞の代わりに「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/形容詞 +*kærđæn*」を発話してしまう誤用：3 歳児のこの種の誤用パターンは、殆ど「新奇的な擬態語 + *kærđæn*」である。Nima(3;3.8)は、形態的使役動詞 *šekāndæn*'break'の代わりに、語彙的使役動詞 *šekāstæn*'break'の過去分詞形 *šekāste*'broken'に *kærđæn* を付与し、習得していく言語にも存在しない助動詞使役動詞 *šekāste kærđæn* を発話している。更に、Amir-Ali(3;3.17)は、*čærxāndæn*'turn'の代わりに、新奇的な擬態語 *kix-kix* を発話し、それに *kærđæn* を結合している。今井と針生(2007)は、音象徴ブートストラッピング仮説を提案し、日本語母語話者が子供を相手に擬態語を多用するのは、擬態語の動詞の習得の助けになる可能性に根拠があると主張している。ペルシャ語は、擬声語が豊富な言語であるが、擬態語はゼロに近い状態である。従って、養育者は、子供と喋るときに、擬態語を一切使っていないにも関わらず、幼児は生産的に上述したような擬態語を発話し、それに *kærđæn* を付与することによって、新奇的な助動詞使役動詞を作っている。今井ら(2007:155)は、「既存の擬態語（‘ばたばた’）の一部を変化させて作った新しい擬態語（‘バトバト’）がある状態（手を大きく上げ下げして振りながら走る様子）とうまく「対応している」といった感覚は、日本人の大人だけでなく、まだ 2 歳半の子供にも、さらには日本語を全く知らないイギリスの大人にも、ある程度共有されるものだった。このように確かに擬態語の音には、まだ多くの語を知らない子供が始めて耳にしても、どのような状態を指しているのかが何となく分かる、そのような性質が備わっているようである。そこで、このような擬態語の分かりやすさ

は、子供にとって1つの難関である動詞の学習を助けているのだろうか、という問いについて検討した。(中略) 実際、動詞と動作との対応づけがまだ不安定な3歳児には、動詞が擬態語で言われれば、すぐにその動詞を動作に対応づけられるといった、擬態語の動詞学習に対応する促進効果が見出された。つまり、大人が子供に対して擬態語を多用してしまうのも実は、大人の直感どおり、子供の語意獲得においては、非常に意味のあることだったのである。」と述べている。興味深いことには、擬態語が日本語ほど豊富ではないペルシャ語児は、周囲の大人の発話者から擬態語を聞いていないにも関わらず、新奇な擬態語(殆どの場合は、大人には、その意味が推測不可能な擬態語)を発話し、それに *kærdæn* を付与することによって、一応自分の意図を相手に伝えることができる。従って、擬態語の動詞の獲得における助けの役割は、周りの大人からどれほど多くの擬態語をインプットされるかに関係なく、動詞の初期の獲得段階に大きい役割を果たしているように見える。Negar(3;5.2)も、自動詞 *terekiden*'burst'から新奇な擬態語 *terik* を形成し、それに *kærdæn* を付与することによって、自分の意図を聞き手に伝えようとしている。

本論の3.3.2. においては、4;0.0~4;10.19 児 25 人(男児 11 人、女児 14 人)の形態的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。25 人の中、6 人が *xændāndæn*'make laugh'と *xorāndæn*'feed'以外は、全ての形態的使役動詞を適切に発話している。4 歳児の形態的使役動詞の誤用パターンを示すと、(61)のようになる。

- (61) I. 形態的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：非常に多く見られている。
- II. 形態的使役動詞の代わりに「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/形容詞 +*kærdæn*」を発話してしまう誤用：例をあげると、4 歳児の中には、*xābāndæn*'put to sleep'の代わりに、獲得していく言語にはない助動詞使役動詞 *xāb kærdæn*'asleep do'や「幼児語+*kærdæn*」*lālā kærdæn*'lullabydo'を発話してしまった幼児が数多くいる。これは、非常に日本語児の「ネンネする」の使用に類似している。日本語児も使役動詞の意味「寝かせる」の意味で「ネンネする」をそのまま発話している。養育者は、多くの場合は、子供に対して命令形を使い、日本語では、「テ形」を使い、「ネンネして」と発話し、ペルシャ語の場合も *lālā kon*'lullaby(bye-bye) do'を発話する。幼児は、常に命令形を耳にし、眠りにつくので、いつの間にか「ネンネして」や *lālā kon* は、被使役者に力を及ぼし、被使役者の状態を変化させる使役動詞として勘違いして捉えるようになる。従って、「誰かを寝かせる」という状態を今度描写するときには、「自分が常に言われてきた動詞をそのまま発話すれば、意図が伝わっていくだろう」と推測し、誤用を犯す。Dale & Carain-Thoreson(1993) は、代名詞逆転エラー(I/me の代わりに you が発話されてしまうエラー)に関して実験をし、I/me の代わりに you を発話してしまった誤用は、その逆のエラーの4倍であると述べている。例えば、英語児は、「抱っこして欲しい」場合は、エラーを起こし、**Pick you up* を発話してしまう。なぜなら、親は、常に子供に対して二人称代名詞 *you* を使うので、子供も自分のことを指すときに、つ

い二人称代名詞を発話してしまう。つまり、幼児は、大人の発話を模倣するだけで、適切な発話は出来なく、常に役割交替のことも考慮しないといけない。ペルシャ語児も日本語児も「寝かせる」という意味で、「ネンネする」や *lālā kærdaen* を発話してしまう誤用も、言葉の面においては、幼児は役割交替は未だによくマスターしていない証であるのではないだろうか。

本論の 3.4.2. においては、5;0.3~5;11.6 児 30 人(男児 14 人、女児 16 人)の形態的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。30 人中、2 人が *xændāndaen* 'make laugh' と *xorāndaen* 'feed' 以外は、全ての形態的使役動詞を適切に発話している。5 歳児の形態的使役動詞の誤用パーセントは、未だに高い数字を示している。5 歳児の形態的使役動詞の誤用パターンを示すと、(62)のようになる。

- (62) I. 形態的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：非常に多く見られている。30 人中、3 人は、*xābāndaen* 'put to sleep' の代わりに、自動詞 *xabidaen* 'sleep' を発話し、5 人は、*pušāndaen* 'to put on or wear (on the feet), dress' の代わりに、自動詞形 *pušidaen* 'put on' をそのまま発話している。自動詞形の誤用は、前の年齢グループと比べ、決して減少していない。
- II. 形態的使役動詞の代わりに「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/形容詞 +*kærdaen*」を発話してしまう誤用：例をあげると、*čærxāndaen* 'turn' の代わりに、*invær unvær kærdaen* 'this side that side do' と発話してしまった幼児もいる。つまり、「ベビーカーのハンドルを回している」の代わりに、「ベビーカーのハンドルをあっちこっちしている」とかなり創造性に溢れる発話をしている。これも、助動詞使役動詞のスキーマの過剰一般化のせいで出来上がった発話だと考えられる。

本論の 3.5.2. においては、6;0.2~6;11.19 児 11 人(男児 2 人、女児 9 人)の形態的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。11 人中、2 人が *xændāndaen* 'make laugh' と *xorāndaen* 'feed' 以外は、全ての形態的使役動詞を適切に発話している。全ての形態的使役動詞の誤用の割合は、6 歳児において、2 歳児と 3 歳児と比べ、減少していることが分かる。一方、6 歳児を 4 歳児と比較すれば、不変の *xorāndaen* 'feed' と *xændāndaen* 'make laugh' 以外の 6 個の動詞の中、5 個の誤用パーセントは、6 歳児において、増加していることが分かる。同様に、不変の *xorāndaen* 'feed' と *xændāndaen* 'make laugh' 以外の 6 個の動詞の中、4 個の動詞の誤用の割合は、6 歳児においては、5 歳児と比べ、増加していることが分かる。従って、語彙的使役動詞と違い、形態的使役動詞の誤用の割合の減少と年齢の増加の間には、相関が見られなかった。更に、語彙的使役動詞の誤用の割合は、6 歳児において、非常に低く、8 個の動詞の中、もう既に 4 個の動詞の誤用パーセントは、ゼロとなっているが、形態的使役動詞の場合は、6 歳児でもかなり高い数字を示していることが言える。6 歳児の形態的使役動詞の誤用パターンを示すと、(63)のようになる。

- (63) I. 形態的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう：形態的使役動詞の代わりに、自動詞が発話されてしまう誤用は、3 つのケースしかなかった。この種の

誤用は、2～5 歳児と比べ、6 においては、明らかに減少している。

II. 形態的使役動詞の代わりに「擬態語/語彙的使役動詞の過去分詞形/形容詞/使役

行為の道具/名詞+*kærdæn* / *dādaen*」を発話してしまう誤用：この種の誤用は、6 歳児においては、非常に盛んに犯されている。従って、助動詞使役動詞のスキーマの拡張に基づく発話される誤用は、6 歳児においても、未だに行われていると言える。

Amir-Arsalan (6;0.2)は、「寝かせる」の代わりに、**lālāyi mi-de'lullaby* DUR-give-3SG' と発話してしまう。つまり、「寝かせている」の代わりに、「子守唄をあげている」と発話している。これは、助動詞使役動詞のスキーマの過剰一般化である。更に、Pariya(6;9.15, 女児)は、「ガラスをハンマーで割った」の代わりに、「ハンマーした」と発話してしまった。この発話は、英語の動詞 *hammer* に非常に類似している。つまり、どうも Pariya は、「『使役行為のきっかけになる道具+*kærdæn*』を発話すれば、使役動詞の意味になるだろう」と勘違いしているようである。実は、英語においては、*hammer*、*scissors*、*paper*、*garden*、*smoke*、*milk*、*leather*、*butter*、*fax*、*telephone*、*pedal*、*boots*、*jacket*、*scarf*、*knife* 等といった使役行為の道具は、そのまま使役動詞として伝わるケースが多く見られる。これらの動詞の習得の負担もそれなりに少ないと思われる。なぜならば、英語児は、もう既に習得している名詞をそのまま発話すれば、使役行為も描写できるからである。一方、日本語の場合は、「電話する」、「ファクスする」、「e-mail する」等といった非常に限られた場面のみでは、「使役行為で使われる道具+する」を発話すれば、使役行為を描写することができるが、「はさみする」や「ハンマーする」などといったありとあらゆる名詞を「する」に付与することによって、使役動詞が出来上がるわけではなく、もしある日本語児が「はさみする」といった発話をしたら、誤用として考えられる。同様に、現代ペルシャ語でも、「(fāks/telefon/imeil)+ *kærdæn*/zædaen」や *čærm kærdæn*'leather do = leather'、*dereil kærdæn*'drill do = drill'という使役動詞は、存在するが、*čækkoš kærdæn*'hammer do = hammer'という使役動詞は、ペルシャ語には、存在しない。なぜペルシャ語の 6 歳児は、このような誤用パターンを示したかという理由について考えてみると、「『使役動詞の道具+*kærdæn*』を発話すれば、聞き手も何となく私の意図を理解するだろう」という幼児の推測に由来していることが分かる。「道具」型名詞転換動詞は、言うまでもなく英語には、非常に数多く存在する。従って英語圏から引用された道具の名前に *kærdæn* を結合すれば、使役動詞になる。しかしながら、元々ペルシャ語には存在した名詞に *kærdæn* を結合することによって、使役行為を描写することはできない。ペルシャ語の 6 歳児は、未だにこのような制限を助動詞使役動詞のスキーマにかけておらず、このような誤用を犯してしまう。杉岡(1999:92) は、「名詞から接辞なしで派生する名詞転換動詞 (denominal verbs) には様々なタイプの動詞があることが分かっているが(Clark & Clark 1979)、ベースとなる名詞の意味機能によって、異なったテンプレートの異なった位置に編入されると分析できる(Kageyama 1997)。」と述べ、名詞転換動詞を以下の 4 つのカテゴリーに分類している。

- (64) a. 道具 (to fork, bicycle, mop): [X ACT with-N]
 b. 状態 (to boss, butcher, nurse) : [X ACT in-manner-of-N]
 c. 場所 (to jail, ground, center) : [X ACT] CAUSE [y BECOME [y BE at-in/on-N]]
 d. 対象 (to butter, oil, salt) : [X ACT] CAUSE [y BECOME [y B with-N]]

杉岡(1999 :92[2])

杉岡(1999:92)は、「日本語では、「曇る」のように名詞に「～る」をつけた形が、英語の名詞転換動詞に最も近い語形成と考えられるが、用例が少なく、「グチる」「メモる」のようなくだけたスタイルの造語に偏っている。日本語では、むしろ動詞連用形を含む複語によって同種の動詞を派生する傾向がある(杉岡 1998): 「to pen → 鉛筆書き, to bottle → 瓶詰め」など。」と述べている。Goodluck(1991 :52) は、以下のような誤用を示している。これらの誤用は全て、大人の言語に存在しない名詞転換動詞を英語児が発話してしまったという誤用である。

- (65) a. *You have to scale it first. (= to weigh)
 b. *I broomed her. (= hit her with a broom)
 c. *Is it all needled? (= is it all mended?)
 d. *Mummy trousers me. (= put my trousers on)
 e. *I'm crackering my soup. (= put crackers...)
 f. *Will you chocolate my milk? (= put chocolate...)

(Goodluck(1991): 52)

つまり、名詞から接辞なしで派生する名詞転換動詞の獲得は、ある意味英語児にとっては、容易に見えるが、一方、名詞転換動詞のスキーマは形成すると、そのスキーマを拡張し、英語母語話者の言語にはない動詞を発話してしまう。ペルシャ語児は、名詞から接辞なしで派生する名詞転換動詞はそもそも存在しないが、ペルシャ語児は、「『名詞+*kærdæn*』を発話することによって、使役行為が描写できる」というスキーマを形成すると、今度は、大人の言語には存在しない *čækkoš kærdæn'hammer do = hammer'* のような動詞を発話してしまう。この幼児は、周りの養育者より *čækkoš kærdæn'hammer do = hammer'* という動詞は、ペルシャ語には存在しないという制限を受けない限り、このような過剰一般化を続けていくと思われる。誤用がなくなるに当たって、「先取り」の役割は、非常に大きい。つまり、大人が「ガラスをハンマーで割る」という場面を *čækkoš kærdæn'hammer do = hammer'd* ではなく、形態的使役動詞 *šekāndaen'break'* によって描写するという発話をペルシャ語児は耳にすることによって、*čækkoš kærdæn'hammer do = hammer'* の先取り（競合）相手が出現し、それで幼児は、助動詞使役動詞のスキーマの一般化による発話は間違っていることに気づくことになる。

以上、2～6 歳児 98 人の形態的使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを考察してきた。年齢ごとの形態的使役動詞の誤用パターンをまとめると、以下のとおりになる。

- (66) I. 自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærð* や *injuri kærð* などと発話する誤用(2;0.12~2;8.7)
- II. 形態的使役動詞の代わりに、語彙的使役動詞を発話してしまう誤用(2;0.12~2;9.18)
- III. 形態的使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう誤用(2;0.12~6;11.1) : この種の誤用は、年齢の増加につれ、減少の傾向を示している。
- IV. 形態的使役動詞の代わりに「擬態語/ 形容詞/語彙的使役動詞の過去分詞形/使役行為の道具/名詞+(*kærðæn'do'dāðæn'give'*)」を発話してしまう誤用(2;0.12~6;11.1) : この種の誤用は、年齢の増加と共に減少の傾向を示していない。つまり、助動詞使役動詞のスキーマの拡張による誤用は、年齢の増加にも関係なく、7歳以下のペルシャ語児の幅広い年齢で見られる。

4.3.3.助動詞使役動詞

4.3.1 及び 4.3.2 において示したように、ペルシャ語児の語彙的使役動詞や形態的使役動詞の誤用パターンの中で最後(6;11.1)まで残された誤用パターンは、大人の言語では、ある場面を語彙的使役動詞や形態的使役動詞によって描写するにもかかわらず、幼児は、助動詞使役動詞のスキーマを過剰一般化し、誤用を犯してしまうというパターンである。本節においては、助動詞使役動詞の初出及びこの動詞の発話に見られる誤用パターンを年齢ごとに考察していく。

本論の第2章においては、CHILDES データにおけるペルシャ語児5人の助動詞使役動詞の初出及びこの種独特の誤用パターンを考察してきた。年齢的に一番小さい幼児、つまり Shahrzad(1;8~1;10) にとっては、語彙的使役動詞及び形態的使役動詞と同様に助動詞使役動詞も発話不可能であった。

次に年齢的に小さい幼児は、Lilia(1;11.21~2;0.23)である。助動詞使役動詞は、1;11.21の年齢から出現し、他の使役の種類と比べ、数多く発話されている。例を挙げると、*peidā kærðæn'visible do =find'*や *dorost kærðæn'correct do = make'*や *seft kærðæn'hard do =harden'*等といった助動詞使役動詞が数多く発話されている。Lilia は、語彙的使役動詞や形態的使役動詞を描写するために、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærð* や *injuri kærð* などと発話しているが、助動詞使役動詞の場合は、このようなストラテジーは見られなかった。

3番目に小さい幼児は、Mahdi(2;2~3;0)である。Mahdi の3つの種類の使役動詞の中では、発話時期が最も早かったのは、助動詞使役動詞であった。Mahdi は、2歳2ヶ月の時期で、「お母さんがこれを壊したんだよ」という場面で、*māmān xæāb kærð- Ø 'Mom broken did-3sg = Mom broke it.'* という助動詞使役動詞を発話している。Mahdi は、まだ動詞の島段階の段階にいて、動詞を非常に保守的に発話し、誤用もなされていない。Mahdi の場合は、Lilia 同様、名前の知らない助動詞の場合は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærð* や *injuri kærð* などと発話していない。

次に、本論の2.1.2.において、Faeze(2;4~3;2)の発話データを考察してきた。Faeze の助動詞使役動詞においても、誤用は見られなかった。

年齢的に一番大きい幼児は、Minu (4;1.12~4;7.21)である。年齢的に、もう動詞の島段階が終わり、それなりに誤用が観察できると推測される。実際、発話データも観察してみると、数多くの誤用が観察された。3つの使役動詞の中で一番誤用が少なかったのは、助動詞使役動詞であった。

唯一誤用されたのは、*hol dādaen'pushing give = push'*であった。この動詞の場合は、動詞抜きの名詞句 *hol 'pushing'* のみ発話されている。つまり、ある意味 *Minu* は、名詞句にどのような軽動詞を結合すれば良いのかに迷っているように見える。助動詞使役動詞の誤用数が少なかったのは、軽動詞の習得初期からの頻繁な使用に由来すると考えられる。つまり、軽動詞の習得の利便性は、ここで大きな役割を担っていると言える。更に、養育者のデータを考察しても、助動詞使役動詞の使用頻度は、他の 2 種類の使役動詞よりかなり高い数値を示していることが分かる。従って、*Minu* の助動詞使役動詞の使用においては、インプットの影響も著しく見える。以下においては、2～6 歳児 98 人の助動詞使役動詞の誤用について論じる。

本論の 3.1.3.においては、2;0.12～2;9.18 児 10 人(男児 5 人、女児 5 人)の助動詞使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。一番小さい幼児 *Niyayesh(2;0.12)* は、13 個の助動詞使役動詞の中、8 個を発話できた。つまり、語彙的使役動詞や形態的使役動詞と違い、助動詞使役動詞は、かなり早い段階から生産的に発話されている。2;0.12～2;9.18 児 10 人の誤用の大きな種類は、以下のとおりである。

- (67) I. 自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kaerd* や *injuri kaerd* などと発話する誤用(2;0.12～2;8.7):CHILDES でこのような発話は見られていないが、実際、2 歳児は、助動詞使役動詞を発話するときは、このようなストラテジーを利用している。
- II. 助動詞使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう誤用：この種の誤用は、1 人の幼児でしか観察されなかった。つまり、語彙的使役動詞や形態的使役動詞と違い、この種の誤用パターンは、2 歳児で盛んではない。
- III. 助動詞使役動詞の代わりに、語彙的使役動詞を発話してしまう誤用：非常に大きく見られた。例をあげると、数多くの幼児は、「手で紙を破る」の代わりに、語彙的使役動詞 *boridaen'cut'* を発話している。つまり、これらの幼児は、使役行為の道具によって、既に習得している語彙的使役動詞 *boridaen'cut'* に未だに制限をかけていないようである。幼児は、もう少し大きくなると、紙が切られるという使役行為の道具は、ハサミではなく、手である場合は、大人は、*pāre kaerdæn'rigged do- to tear'* を発話するのを耳にすると、今までの自分の一般化は間違っていることに気づき、このような場面での *boridaen'cut'* の発話は、なくなる。更に、数多くの幼児は、「みじん切りにする」の代わりに、*boridaen'cut'* という語彙的使役動詞を発話してしまった。つまり、ある意味で、幼児は、最初の段階で習得する動詞の意味は非常に幅広く、様々な場面において発話し、後に大人から別の競合相手を聞くことによって、自分の今までの発話は間違っていたことに気づき、誤用は、消えていく。
- IV. 助動詞使役動詞の代わりに、形態的使役動詞を発話してしまう誤用：これもまた、1 人の幼児でしか観察されなかった。従って、この種の誤用も、一般的な誤用であると言えない。*Romina(2;6.14)* は、「キュウリをナイフでカットする」の代わりに、「キュウリをナイフで割っている」つまり形態的使役動詞 *šekāndaen'break'* を発話してしまった。これもまた *šekāndaen'break'* が指す概念は、最初のころ、非常に幅広く、年齢を重ねることによって、周りの人間は、キュウリをナイフで小さくする場合は、*šekāndaen'break'* ではな

く、助動詞使役動詞 *xurd kærdaen'small do = chop*'を発話するのを耳にすると、「*šekāndaen'break*'という形態的使役動詞は、使役行為の対象の性質及び結果状態によって使われない場合もある」と気づき、*šekāndaen'break*'は発話されなくなる。

- V. 適切な助動詞使役動詞の代わりに、「場」に相応しくない助動詞使役動詞や大人の言語にもない助動詞使役動詞を発話してしまう誤用：例をあげると、Niyayesh(2;0.12)は、幅広く様々な動詞の場合は、*boreš kærdaen 'cutting do'*という自分独特の助動詞使役動詞を使用している。要するに、*pust kærdaen'skin peel = peel, pare'*が望まれる「場」において *boridaen'cut'*という語彙的使役動詞の過去分詞形に *kærdaen'do'*を結合し、大人の言語にも存在しない助動詞使役動詞を *boreš kærdaen* 発話してしまう。この幼児もまた *pust kærdaen'skin peel = peel, pare'*という助動詞使役動詞を多く耳にしない限り、このような過剰一般化を続けるが、競合相手 *pust kærdaen'skin peel = peel, pare'*に気づくと、自分の一般化は、間違っていたことが分かり、誤用は消えていく。更に、Amir-Mahdi(2,3.12)は、「ドアを開ける」というシーンを描写するとき、*bāz kærdaen'open do =open'*ではなく、**bāz dādaen'open give'*という新奇かつ無意味な助動詞使役動詞を発話してしまった。つまり、ペルシャ語児は、*nešān dādaen'show'*という助動詞使役動詞を耳にすると、今度は、「開いている」にも *dādaen'give'*を結合することによって、使役動詞になると推測し、誤用を犯してしまう。助動詞使役動詞は、3つの使役動詞の中、一番生産的に発話される動詞であり、定着度が高いので、他の2種類の使役動詞と比べ、誤用は少ないが、「名詞句/形容詞句+*kærdaen*」というスキーマがあると同時に、助動詞使役動詞によって「名詞句/形容詞句+*dādaen*」というスキーマもある。従って、幼児には、「名詞句/形容詞句+*dādaen*」というスキーマが形成した後に、今度、本来ならば「名詞句/形容詞句+*kærdaen*」というスキーマにアクセスしないといけない場合においても、「名詞句/形容詞句+*dādaen*」というスキーマにアクセスし、誤用を犯してしまう。出来上がったスキーマに制限をかけない限り、このような誤用を犯し続ける。

次に、本論の3.2.3.においては、3;0.0~3;10.2 児 22人(男児9人、女児13人)の助動詞使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。3;0.0~3;10.2 児 22人の誤用の大きな種類は、以下のとおりである。

- (68) I. 助動詞使役動詞の代わりに、語彙的使役動詞を発話してしまう誤用：数多くの幼児が「皮を剥く」の代わりに、*boridaen'cut'*を発話している。つまり、これらの幼児は、使役の様態より使役の道具を重視していると考えられる。つまり、「ナイフ」を見る時、実際「剥く」という動詞ではなく、「剥く」という動詞を即座に発話してしまう。
- II. 適切な助動詞使役動詞の代わりに、「場」に相応しくない助動詞使役動詞や大人の言語にもない助動詞使役動詞を発話してしまう誤用：Iの誤用と違い、非常に少なく観察された。例をあげると、「物を持ち上げる」のことを *bolænd kærdaen'raise, hold up'*という。ペルシャ語で「起きる」のことを *bidār šodaen'get up'*というが、口語では、*bolænd šodaen'high become =get up'*も使われる。Amir-Ali(3;3.17)は、*bolænd šodaen'high become =get up'*から「起こす」の意味を持たない動詞を作り、発話してい

る。*bolænd kærdæn* は、あくまでも「荷物を持ち上げる」という意味しかない。

13 個の助動詞使役の中、9 個の誤用パーセントは、3;0.0~3;10.2 児で 2;0.12~2;9.18 児と比べ、減っていることが分かる。更に、2 個の助動詞使役動詞の誤用パーセントは、ゼロで、全く誤用がされていないことが分かる。更に、誤用パターンも 2 歳児においては、5 つのタイプに分けられるが、3 歳児においては 2 通りの誤用パターンしか存在しない。

本論の 3.3.3.においては、4;0.0~4;10.19 児 25 人(男児 11 人、女児 14 人) の助動詞使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。4;0.0~4;10.19 児 25 人の誤用の大きな種類は、以下のとおりである。

- (69) I. 助動詞使役動詞の代わりに、語彙的使役動詞を発話してしまう誤用：例えば、「キュウリをカットしている」の代わりに、*boridæn'cut*を発話してしまう幼児が数多くいる。
- II. 助動詞使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう誤用：この誤用は、3 歳児で見られなかったが、4 歳児では数多く観察された。例をあげると、数多くの幼児が助動詞使役動詞 *nešān dārdæn'look give = show* の代わりに、単純自動詞 *didæn'look* 及び複合自動詞 *negāh kærdæn'look do = look* を発話している。
- III. 適切な助動詞使役動詞の代わりに、「場」に相応しくない助動詞使役動詞や大人の言語にもない助動詞使役動詞を発話してしまう誤用：この種の誤用では、「擬態語 + *kærdæn*」という誤用は観察されなかった。この種の誤用の例をあげると、*Rojin*(4;0.13) は、*pāre kærdæn'rigged do- to tear* の代わりに、*xurd kærdæn'small do = chop, mince, make small* を発話してしまった。つまり、「紙を手で破る」の代わりに、「紙をみじん切りにしている」と発話してしまった。今井と針生(2007:209)は、「動詞が特定の物体を使用した限定された動作のみを指すのなら頻度が低くても学習は容易かもしれない。英語では *'hammer'* という動詞があり、ハンマーを使って釘などを打つことに使う。このような場合、少ない頻度でも容易に学習ができるのではないか。しかし、このように対象物に限定的な動詞はごく稀で、大抵はもう少し適用範囲が広く、上述の＜壊す＞領域の動詞群のように、動詞の意味によって制約されるなかで対象物は可変である。それでも＜壊す＞群の動詞のような、対象物と強く結びついた動詞は、‘投げる’のような（対象物の範囲が広めである）動詞に比べれば、動作が具体的で学習しやすいだろうか。」と述べている。ペルシャ語児は、＜壊す＞領域の動詞群の学習では、多くの問題を抱えているようである。つまり、全ての年齢、更に 3 種類の動詞を考察することによって、ペルシャ語児の一番多く誤用が見られる動詞群は、＜壊す＞領域の動詞群であることが分かる。更に、4 歳児の中には、2 人も「ボールを足で蹴る」の代わりに、「ボールを足で押す」と *hol dārdæn'push* という「場」に相応しくない助動詞使役動詞を発話してしまった。今井と針生は、‘投げる’という動詞の対象物になり得る物体の範囲が広めであると言うが、実際考えてみると、‘何かを投げる’という概念も、使役行為の道具（手か足か）によって、違う動詞によって描写される。例をあげると、「ボールを足で投げる」とはペルシャ語でも日本語でも言えなく、必ず別の動詞(日本語の場

合は、‘蹴る’、ペルシャ語の場合は、*šut kærdaen*'shoot do = kick')を発話しないといけない。動詞は動きの様態（歩く／走る）、話者に関係する方向（行く／来る）、必要とされる道具（スプーン／ペダル）、あるいは達せられた結果（一杯／空）などのような沢山の意味的要素から解釈しなければならない。さらに、動詞が指示するどの側面が意味と融合しているかを学習するのに加えて、子どもは行為者の意図や話者が意味する意図を解釈しなければならない。別の誤用例をあげると、Hasti(4;7.3) は、*hol dādaen*'pushing do = push'を発話しないといけない「場」においては、**rāh kærdaen*'way do'という新奇かつ意味のない発話をしている。ペルシャ語では、‘歩く’のことを *rāh ræftaen*'way go = walk'と言う。Hasti は、「*rāh ræftaen* は自動詞であれば、その中の名詞句 *rāh*'way'に *kærdaen* を結合すれば、きっと使役動詞の意味になるだろう」と推測し、誤用を犯しているように見える。つまり、これもあくまでも、助動詞使役動詞のスキーマの過剰一般化として考えられる。同じく、Melika(4;8.19)は、*hol dādaen*'pushing do = push'の代わりに *rāh dādaen*'way give = to allow one to pass, to make way (to someone)'を発話してしまった。勿論このような助動詞使役動詞は、ペルシャ語には存在するが、意味は違う。従って、子供は動詞の意味を間違っているからこのような間違いをしているわけではなく、助動詞使役動詞のスキーマを過剰一般化し、誤用を犯している。この幼児は、頻繁に *hol dādaen*'pushing do = push'を耳にすることによって、自分の一般化が間違っていたことに気づき、やがて誤用は消えていく。

本論の 3.4.3.においては、5;0.3～5;11.6 児 30 人(男児 14 人、女児 16 人) の助動詞使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。5 歳児の助動詞使役動詞の誤用パーセントを示す図 25 を考察してみると、全ての助動詞使役動詞の誤用パーセントは、5 歳児においては、2～4 歳児と比べ、減少していることが分かる。5;0.3～5;11.6 児 30 人の誤用の大きな種類は、以下のとおりである。

- (70) I. 助動詞使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう誤用：例をあげると、*nešān dādaen*'look give = show'の代わりに、単純自動詞 *dādaen*'look'及び複合自動詞 *negāh kærdaen*'look do = look'を発話している。
- II. 助動詞使役動詞の代わりに、語彙的使役動詞を発話してしまう誤用：例をあげると、「キュウリをカットしている」の代わりに、*boridaen*'cut'を発話してしまう幼児が数多くいる。
- III. 「場」に相応しい助動詞使役動詞の代わりに「場」に相応しくない大人の言語に存在する別の助動詞使役動詞や助動詞使役動詞のスキーマの過剰一般化のせいで出来上がった新奇な助動詞使役動詞を発話してしまう誤用：この種の誤用は、I～IIIの中、1 番多く観察された誤用パターンである。例をあげると、Saeed(5;1.3)は、「キュウリを刻んでいる(カットしている)」の代わりに *rænde kærdaen*'grater do = grate'を発話している。「おろし金でモノをおろす」という意味の *rænde kærdaen*'grater do = grate'は、特定の物体を使用した限定された動作のみを指す動詞であり、使用頻度が低くても、学習は容易であるようである。この動詞の使用頻度は低い、適用範囲は非常に狭いので、早い

段階から習得され、幼児は更にこの動詞を別の「場面」にも拡張していく。

本論の 3.5.3.においては、6;0.2～6;11.19 児 11 人(男児 2 人、女児 9 人) の助動詞使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを観察してみた。6 歳児 11 人の中、6 人、つまり半分以上の幼児の全ての助動詞使役動詞の誤用数は、ゼロになっていることが分かる。つまり、語彙的使役動詞と同じく、幼児の誤用数と年齢というパラメーターの間には、相互関係が存在することが言える。6;0.2～6;11.19 児 11 人の誤用の大きな種類は、以下のとおりである。

- (71) I. 助動詞使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう誤用：この種の誤用は、1 人の幼児でしか観察されなかった。従って、使役動詞の代わりに自動詞を如何なる変化もなしでそのまま発話してしまう誤用は、年齢と共に減少していることが分かる。
- II. 助動詞使役動詞の代わりに、語彙的使役動詞を発話してしまう誤用：6 歳児の中には、未だに *pāre kærden'rigged do- to tear'* や *xurd kærden'small do = chop, mince, make small'* の代わりに *boriden'cut'* を発話してしまう幼児がいる。つまり、6 歳児であっても、未だに動詞の意味は非常に幅広く、未だに対象物や他の意味要素に基づいて、動詞に制約をかけていないことが分かる。
- III. 「場」に相応しくない助動詞使役動詞を発話してしまう誤用：この種の誤用パターンは、5 歳児と同じく、6 歳児でも I～III の誤用パターンの中で未だに上位を独占している。

以上、2～6 歳児 98 人の助動詞使役動詞の発話の有無及び誤用パターンを考察してきた。年齢ごとの助動詞使役動詞の誤用パターンをまとめると、以下のとおりになる。

- (72) I. 自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærð* や *injuri kærð* などと発話する誤用(2;0.12～2;8.7)：語彙的使役動詞や形態的使役動詞と比べ、もっと長くこのような発話はなされている。
- II. 助動詞使役動詞の代わりに、自動詞形をそのまま発話してしまう誤用(2;6.18～6;9.15)：誤用パターンの中、一番少なく観察されたのは、このタイプの誤用である。
- III. 助動詞使役動詞の代わりに、語彙的使役動詞を発話してしまう誤用：(2;0.12～6;11.19)
- IV. 助動詞使役動詞の代わりに、形態的使役動詞を発話してしまう誤用(2;6.14)：98 人の中、幼児 1 人でしか観察されなかった。従って、この種の誤用パターンは、決して一般的な誤用パターンであると呼べない。
- V. 「場」に相応しい助動詞使役動詞の代わりに「場」に相応しくない大人の言語に存在する別の助動詞使役動詞や助動詞使役動詞のスキーマの過剰一般化のせいで出来上がった新奇な助動詞使役動詞を発話してしまう誤用(2;0.12～6;11.19)：I～V の中で、一番多く観察された誤用パターンである。

4.4. 考察

上述したように、2 歳児は、3 つの使役動詞を描写する時は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærð* や *injuri kærð* などと発話する。しかしながら、このようなストラテジーは、他の年齢グループにおいては、観察されなかった。考えられる 1 つの理由としては、幼児は全ての対象物の名前を獲得すれば、それに *kærðæn 'do'* や *dāðæn'give'* を結合することによって、大人の言語にも存在しない新奇な助動詞使役動詞を発話するが、2 歳児は、まだ全ての物体の名前を完全に獲得しておらず、それで、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に「こうした」と発話してしまう。しかしながら、年齢が上がるにつれ、物体の名前を獲得し、それまたは自分特有の擬態語等に *kærðæn 'do'* や *dāðæn'give'* を結合することによって、使役行為を描写する。

3 つの使役動詞の誤用パターンの中で一番多く観察された誤用パターンは、適切な使役動詞の代わりに、「場」に相応しくない大人の言語に存在する別の助動詞使役動詞や助動詞使役動詞のスキーマの過剰一般化のせいで出来上がった新奇な助動詞使役動詞を発話してしまう誤用であった。他の誤用パターンを大きく分けると、2 つの種類に分けられる。

- (73) i: *boridæn'cut'* といった非常に幅広い対象物で適応可能な動詞をさらに様々な「場」に過剰一般化する。つまり、「手で紙を 2 つに破る」などといった使役道具の性質によって、本来ならば別の動詞が発話される「場」においても、*boridæn'cut'* を発話してしまう。この場合は、幼児は使役動詞の「道具」つまり佐治(2010)が言う「モノ」より使役動詞の様態の方を重視していて、過ちを犯してしまう。
- ii: i と同時に逆方向の誤用が犯され、使役動詞の様態より使役動詞で使用する「道具」、佐治(2010)の「モノ」の方が重視されてしまう。つまり、ペルシャ語児は、「ハンマー」を見ると、被使役物「くぎ」の状態変化を無視し、すぐにも「割る」という動詞にアクセスしてしまう。

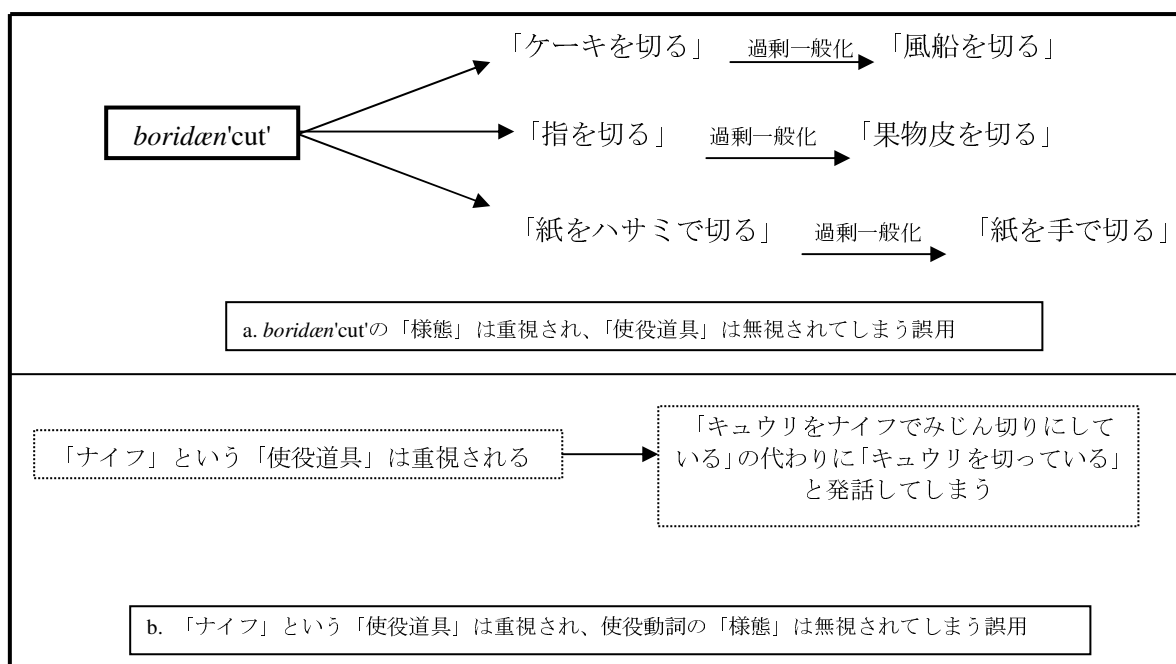


図 31 : 2 つの大きな誤用パターン

図 31 の a は、対象物の性質にルーズな動詞を更に様々な場面に過剰一般化するタイプの誤用である。このタイプの誤用は、幼児は、適切な競合相手（先取り相手）を周りの大人から聞くことによって、自分の今までの過剰一般化に気づき、*boriden'cut* に様々な制約を変えることによって、誤用を無くす。つまり、子どもが即時マッピングにて大まかに *boriden'cut* の参照行為を掴んだ後、様々な他の動詞の運用に触れながら、*boriden'cut* の意味を再編成(Reorganization)していく。その一方、b の方は、幼児は、「様態」より「使役道具」を重視、例えば、「ナイフ」を見ると、すぐにも「切る」という動詞を発話してしまう。佐治(2010)は、b の方について議論しているが、a の方について議論していない。大人には、「下着を頭に被っている女の子」という道具を見せ、その状態を描写してもらうと、「下着」というモノの方ではなく、「様態」の方を重視するから、「履く」ではなく、「被る」を発話してしまう。しかしながら、一見単純に見えるこのような即時マッピングは、小さい幼児には不可能である。本論で主張していきたいのは、幼児は、常に「様態」より「モノ」の方を重視しているわけではなく、その逆の過ちもしばしば起こされているということである。つまり、「手で紙を半分」にすれば、「切る」ではなく、「破る」という動詞は発話されるべきであるが、言語獲得初期にいるペルシャ語児は、「使役動詞のモノ」を無視し、「半分になる」という様態だけを重視し、誤用を犯してしまう。

幼児は、新しい動詞を獲得する場合は、既に獲得している動詞と対比しなければならない。Tomasello(1992a)は、自分の娘が動詞 *share* を学習したときには、既にもっと一般的な状況でモノを要求するときに使われる *give* や *have* を知っていたと述べている。実際には、動詞 *have* の所有権の要素はそれが後に学習された動詞 *share* と対比した結果としてのものも生ずる。Tomasello(2003,80)は、「より特定の語の詳細な使い方を子供が理解するには、まず話し手が使ったかもしれないのに実際には使わなかった一般的な語と対比した状況で経験しなければならないのである。(中略)Clark(1987,1988)は、全ての語はある点において互いに意味的に対立しているという原則は『ある人が今の状況で『あの』語ではなく『この』語を使っているということは、それなりの理由が必ずある』ということと主旨を同じくする、人間の合理的な行動原則であると述べている。その際、子供は、例えば大人が *share* と言った今の状況と自分も大人も普通であれば *give* や *have* と言うであろう、より一般的な状況とを区別する何かを発見しようと今の状況をよく調べてみるのである。」と述べている。従って、幼児は、常に、動詞の意味を対比し、適用範囲が広すぎた動詞の意味に制約を与え、やがてある動詞の正確な意味を理解するようになると言える。

3 つの使役動詞の種類の中で、一番良く見られた誤用パターンは、適切な語彙的、形態的や助動詞使役動詞の代わりに、助動詞使役動詞のスキーマを過剰一般化し誤用を犯してしまうというタイプである。ここで考えられる 1 つの理由は、助動詞使役動詞の使用頻度の高さ、ゆえに定着度の高さである。次章においては、ペルシャ語児の使役動詞の獲得における「描写的ジェスチャー/擬態語」と「DPT 属性(dynamicity, punctuality, telicity)」に基づく「使役」概念のカテゴリー化について論じる。

第5章：発達段階ごとのストラテジー及び「使役」概念のカテゴリー化

5.1. 発達段階ごとのストラテジー

以下においては、前章までの分析をもとに、ペルシャ語児が「使役」という概念を言葉によって描写するときは、どのようなストラテジーを取るのかについて論じる。注意したいのは、全てのペルシャ語児が以下の全ての段階を経過するわけではなく、幼児によってまた動詞によって一つまたそれ以上の段階を経過しない場合もある。これは、正に使用依拠アプローチの考え方と一致し、全ての動詞は項目依拠的に獲得されるという証でもある。

5.1.1. 描写的ジェスチャー+*intori kærden* 'like this do =do like this' 及び新規な擬態語+*kærden* 'do'

CHILDES 及び実験対象の2歳児全員(1;11~2;8.7)に見られたストラテジーは、対比する言語形態を知らない使役動詞の場合、必ず自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærden* と発話しているということである。更に、ある動詞の場合は、このようなストラテジーを使用していると同時に、同じ意味グループの使役動詞に属する他の動詞を適切に発話している。従って、このことに基づいて、使役動詞の習得は、ある年齢、つまり2歳が終わるころまでには、項目依拠的に進んでいくことが言える。例えば、ある2歳児は、実験で使った全ての助動詞使役動詞を発話出来たが、特定の訊かれた動詞を知らないか、質問されたそのときに、コミュニケーションのプレッシャーの下で、その動詞が思い出せない場合は、自ら表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærden* 'like this' と発話している。しかしながら、このストラテジーは、他の年齢グループには、見られなかった。つまり、知らないときも、その場面に相応しくない同じグループの使役動詞を発話するか、自動詞形を発話するか、又は別の意味グループに属する使役動詞を発話する。つまり、2歳児の使役動詞の使用は、非常に保守的で、知らない使役動詞がある場合や使役動詞が思い出せない場合は「とにかく『ジェスチャー+*intori kærden*』を発話すれば、聞き手もなんとなく自分の意図は分かるだろう」と推測し、このような発話をしている。しかしながら、2歳を超えると、全ての使役動詞のグループのスキーマはもう既に完成しており、使役動詞の形態を知らない場合やコミュニケーションの際にその動詞にアクセスできなくなる場合は、「とにかく別の使役動詞やその動詞の自動詞形を使えば、自分の意図が聞き手に伝わるだろう」と推測し、誤用を起こす。

ペルシャ語児が「描写的ジェスチャー+*kærden*'do」で置き換える用例は、語彙的使役動詞の場合は、2;6を境に無くなり、形態的使役動詞や助動詞使役動詞の場合は、2;8を境に無くなる。従って、幼児の動詞の辞書に入っている動詞の数が増加することによって、描写的ジェスチャーの必要性も無くなると言える。そして、3歳を超えると、既に知っている使役動詞を過剰一般化し、誤用を起こすようになる。同時に、抽象度が大人ほど高くない使役動詞のスキーマを過剰一般化し、大人の言語にも存在しない新奇な使役動詞を発話してしまう。

ペルシャ語児の中には、「描写的ジェスチャー+*intori kærden* 'like this'」の代わりに、大人の発話者の言語にも存在しない新規な擬態語を発話し、それに軽動詞 *kærden*'do'を結合することによって、使役行為を描写している幼児もいる。例をあげると、Amir-Ali(3;3.17) は、*čærxāndaen*'turn'の代わりに、新奇な擬態語 *kix-kix* を発話し、それに *kærden* を結合している。

描写的ジェスチャーと擬態語は非常に密接な関係にあり、両方も恣意的でシンボリック的な動

詞より人間の感覚に近く、記憶の負担が少ないと考えられる。以下においては、描写的ジェスチャー及び擬態語の関連研究について見たのち、ペルシャ語児の習得プロセスについて論じる。

桐谷(1999)は、日本語母語話者の母子の言語を 5 つのカテゴリーに分類している。桐谷(1999:82)の 5 つのカテゴリーは、以下のとおりである。本節の考察ではⅣが関係する。

(74) Ⅰ. 事物名称：物事の名称を示す語（マンマ、オチャ、ボールなど）

Ⅱ. 指示語：指示代名詞（コレ、アレなど）のように多様な事物を指し示すために用いることができるもの

Ⅲ. 擬音/擬態語：幼児語で名称で示す名詞的なものや「...スル」をつけて動詞化して用いられる場合等あいまいなものもあるが、前者については、名称として固定された用法の場合には、「事物名詞」とし、後者については擬音/擬態語の部分は「擬音/擬態語」のカテゴリーに分類し、「...スル」と発話されていればこの部分については、「動作語」にもカテゴリー化

Ⅳ. 動作語：動作を表す語（トッテ、マゼルノ、ミヨウなど）

Ⅴ. その他：上記のカテゴリーに該当しない形容詞、副詞、返事（ハイ）、注意喚起（ホラ）、挨拶語など

桐谷(1999:100)は、1 人の日本語児（H 児）の発話を 1;3～2;2 にかけて記録し、1;9 の時点で、H 児は、「ボールを取り、投げる」という動作をやりながら、「ポーンテンノ」⁵²と発話し、「母親の髪をとかす」動作をやりながら、「キレキレーテーノ」と発話していることを示唆している。

日本語児は、様々な場面において「擬態語+スル」という構文を、使役行為を描写するために使用する。この傾向の 1 つの理由として考えられるのは、周りの養育者も幼児に対して数多くの擬態語を発話しているということである。日本語発話者が擬態語を多用する一つの動機づけは、日本語の動詞における包含パターン(conflation Pattern)(Talmy(1985,1991)、松本 (2003))である。一つの動詞の中にはどのような意味要素が含まれるのかは極めて重要である。このプロセスは語彙化(lexicalization)あるいは包含(conflation)と呼ばれている(Talmy(1985))。タルミーは移動の表現に基づいて、世界の諸言語において動詞にどのような意味要素が語彙化されるのかを考察し、その類型化を試みている。松本 (2003:275-279)は、「タルミーは世界の諸言語における移動表現を比較して、これらのうちどの要素⁵³が移動の動詞（語根）に語彙化されるかを考察し、主に 3 つのパタンを見出している。1 つは、様態、原因が動詞に語彙化されるというものである。英語、ドイツ語などがその例である。（中略）もう 1 つの語彙化パタンは経路が動詞に語彙化されるというものである。スペイン語や日本語がその例である。（中略）日本語に豊富な擬態語で様態が表されることもある。（中略）3 つ目のパタンは、図（移動物）が動詞に語彙化される例である。これは、アツゲヴィ語（北カリフォルニアのホッカン語族）に見られる。」と述べている。従って、日本語母語話者は、使役行為の様態を描写する時も、動詞というより擬態語の方に頼る傾向がある。ペルシャ語の包含パターンについて考えて見ると、タルミーの 2 つ目のパターンであることが分かる。しかしながら、日本語と違いペルシャ語では擬態語の代わりに様態要素を副詞によって表す。

⁵² 「テンノ」は、「するの」の幼児語である。

⁵³ 移動物（図）、移動の経路（経路）、経路を規定する参照物（地）、移動の際の移動物の様（様態）のこと。

ペルシャ語は、擬声語が豊富な言語である一方、擬態語の数は非常に少ない言語でもある。ほんの僅かな擬態語も、*kærdæn'do'*と結語すれば、常に自動詞となり、被使役者（物）に力を及ぼし、状態変化をさせる構文にならない。ペルシャ語の大人の母語話者は、ペルシャ語児を相手に擬態語を全く口に出していないため、ペルシャ語児のデータにも「擬態語+*kærdæn'do'*」といった発話は、出現しないと推測される。しかしながら、この予測とは裏腹に、ペルシャ語児のデータを観察してみると、ペルシャ語児は新奇な擬態語を作り出し、それに *kærdæn'do'*を結語することによって、使役行為を生産的に描写している。従って、養育者の擬態語の産出の有無に関わらず、擬態語は、動詞の獲得を容易にし、更に、それに *kærdæn* を結語することによって、自分の意図を話し相手に伝えるために、幅広く使用されているように見える。

ペルシャ語の擬声語・擬態語のシステムについての唯一の研究は、吉枝 (1992)である。吉枝 (1992: 101-102)は、「擬声語・擬態語に見られる音節上の形式は6種類に分けられる。それぞれは、1音節型(A, AB)、2音節型(AA(A-o⁵⁴A), AA'(A-oA'/A-oB)), 3音節型(AAA)、4音節型(ABAB(AB-oAB), ABA'B(AB-oAB'/AB-oAB'), AABA(AAA'A)(AA-oBB)、5音節型(AABAA)、6音節型(ABCABC)である。」と述べている。吉枝(1992:104)は、A(CVC)A(CVC)の1つの例として、*gez gez* (ひりひり痛む) や *men men* (もじもじ) などを示している。吉枝は、提案している全てのタイプの擬態語を考察することによって、ペルシャ語の数少ない擬態語は *kærdæn* に結語すると常に自動詞となり、被使役物（者）の状態に力を及ぼし、その状態に変化をもたらす使役動詞は作られないことを示している。吉枝(1992:116)は、「人間の動作（話す、泣く、歩くなど）に関する擬態語は多い反面、触覚、味覚や心理状態に関する擬態語は殆どないといってよい。」と述べている。

桐谷(1999:248)は、「一般に日本人は発話に関しても、欧米人に比べてジェスチャーに乏しいといわれている。実際、Kita (1997)が観察した限り、通常の言語表現では指摘されてきた事実は裏付けられる結果となった。ただし、ミメティックス⁵⁵はその範疇に属さないことが明らかとなった。具体的に、『自動車がバアーンとぶつかった』という文を発話する時、『バアーン』という表現を口にする状況下では、例え日本人であっても例外的に高い確率で、自発的ジェスチャーと同期することが、見出されたのだった。」と述べている。この観察はペルシャ語児の動詞習得を理解する上でも重要である。

発話に伴うジェスチャーはまず自発的ジェスチャー（能動的なジェスチャー）と受動的なジェスチャーに分けられる。自発的ジェスチャーとは、発話者自身がその発話時に行うジェスチャーのことで、受動的なジェスチャーとは被発話者（視聴者、聞き手）がその発話に対して行うジェスチャーのことである。McNeill(1992)は、自発的ジェスチャーを大きく2種類のジェスチャーに分けている。McNeill(1992)の自発的ジェスチャーの種類を示すと、(75)のとおりになる。

- (75) 自発的ジェスチャー
- リズムを取るジェスチャー（拍子）
 - 表象的ジェスチャー
 - 映像的（描写的）ジェスチャー
 - 暗喩的（隠喩的）ジェスチャー
 - 直示的ジェスチャー

⁵⁴ 「o」は、等位接続語である/o/が文字表記されていることを示す。

⁵⁵ ここでの「mimetics」は、擬態語のことである。

描写的ジェスチャーとは、身体の動きと指示対象との間の類似性に基づいて表現をするジェスチャーであり、指示対象が動作または空間的な出来事や状態の場合に用いられる表現手法である。描写的ジェスチャーによる表現法の一つに、会話の中にある動作に関する発話（動詞など）があった場合、その動作を演じるように身体を動かす表現法(enactment mode) がある。例をあげると、「走る」という単語に対して実際に走っているような腕の振りを行うことによって表現するジェスチャーである。Kita(1997)が言う自発的ジェスチャーというのは、McNeill(1992)の描写的(映像的) ジェスチャーのことである。

この意味で、擬声語/擬態語は、ジェスチャーと非常に密接な関係にある。日本語児の場合は、データの観察から、2歳児の段階では、「おもちゃの路線を繋げる」という場面を描写する時には、描写的ジェスチャーをやりながら、「こうして」と言う場合もあるし、もし「ガチャン」という擬態語を既に知っているならば、母親に「ガチャンして」と発話することが報告されている(Ghiace & 鈴木, 2009)。従って、日本語の2歳児は、使役動詞を描写するときには、描写的ジェスチャーも利用しながら、擬態語にアクセスできる場合は、「擬態語+スル」を発話する。日本語には数多くの擬態語が存在するので、日本語児が自ら表現したい動詞が表す行為を描写的ジェスチャーでやって見せ、同時に「こうして」と発話する確率は、「擬態語+スル」を発話する確率より遥かに少ない。日本語は、ペルシャ語と比べ、擬態語の数が圧倒的に多いため、日本語児は、まだ全ての使役動詞を獲得していない段階では、周りの大人も多用する擬態語に「スル」を追加することによって、様々な使役行為を描写できる。一方、ペルシャ語児は、周りの養育者から「擬態語+*kærdæn'do*」を耳にしていないにもかかわらず、動詞の過去分詞形の反復形や全く大人の観点から見ると意味のない新奇擬態語を作成し、それに *kærdæn'do* を結合することによって、使役行為を描写する。日本語児とペルシャ語児の初期段階の使役行為の描写の異なる点は、ペルシャ語児は、日本語児と比べ、描写的ジェスチャーをよく利用するという点である。擬態語については、大人の言語にも存在しない擬態語をペルシャ語児は生産的に発話するので、擬態語は、動詞の獲得を助ける役割を担っていることが確かである。

一方、ペルシャ語児にとっては、利用できる擬態語が非常に少ない状態にある。従って、「擬態語+スル」を自ら作り出すか、表現したい動詞が表す行為をジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærð* や *injuri kærð* などと発話するようになる。描写的ジェスチャーと擬態語の他には、「形容詞（その反復形）+スル」というストラテジーが日本語児で見られる。その例は、日本語の「キレイキレイスル」という発話である。この発話に非常に似ているパターンは、ペルシャ語児の場合も観察されている。「寝る」、「横になる」という意味は、ペルシャ語では、*derāz kešīdæn'long pull = lie down'* と言われる。ペルシャ語児は、「寝かせる」という意味で、*derāz'long'* を反復し、それに *kærdæn'do* や *dādən'give* を結合することによって、大人の言語にも存在しない新奇な使役動詞 *derāz derāz dādən (derāz derāz kærdæn) 'long long do(give)'* を発話する。

まとめると、動詞の獲得の最初の段階では、描写的ジェスチャーも擬態語も動詞の獲得を促すし、また、周りの養育者の擬態語の発話の有無に関係なく、ペルシャ語児も日本語児も、名前を知らない使役動詞を描写する時、「擬態語+スル」を発話してしまう。今井と針生(2007)は、日本語ほど豊かな擬態語を持たない言語の子供はどのように擬態語の促進的な役割なしで動詞を覚え、

正しく使いこなせるようになっていくかという疑問を投げかけている。その一つの手がかりとして、彼らは、「擬態語がない言語では大人は動詞を使うときに擬態語に代わる何か別の手がかり（例えばジャスチャーなど）を与えているのだろうか。」と述べている。ペルシャ語児は、生産的に新奇な擬態語を作成し、それに *kærdæn* を結語することによって、自分の意図を聞き手に伝える。この事実は、今井と針生(2007)への一つの回答である。

動詞の意味を理解するためには、イベントを分解し、ある特定の部分（つまり行為）のみの類似性に注目し、変数（事物）の類似性の有無は無視しなければならない。つまり、動詞の学習には高次の（関係にもとづいた）類推（アナロジー）が要求されるから、名詞の習得と比べ、動詞の獲得の方が幼児にとって困難であると言える。初期段階においては、日本語児とペルシャ語児の動詞の意味の推論の助けとなるものは、描写的ジェスチャーと擬態語である。描写的ジェスチャーは、擬態語と同じ役割を果たしていることが言える。

今井と針生(2007:141,142) は、「日本語には、‘ホクホク’や‘シャキシャキ’など、対象の状態を音でなぞって表現していると感じられる語（擬態語）があり、これらの語は、われわれの感覚に直接訴えかけてくる。（中略）このように擬態語は、一般の語と違って、体の感覚になじむ感じがするためか、大人は子供に向かってモノを言うとき、擬態語は子供にも良く分かるだろうという思い込みのもと、これを多用しているのではないだろうか。例えば、子供とボール遊びをしていて、こちらにボールを投げるよう大人が子供に要求する言葉は、「ボールを投げて」よりは「ボールをポンして」だろう。実際、子供向けの絵本にも擬態語はふんだんに用いられているし、テレビ番組の擬態語のコーナーが子供に受けているという話もよく耳にする。とすれば、大人がそのように思い込んでいるだけでなく、やはり子供にとって擬態語は理解しやすいのではないだろうか。」と述べている。このように、擬態語とそのイメージのマッピングは、即座に行われ、母語に影響されない。

ある言語に擬態語が存在すれば、動詞の獲得はもっと簡単にされるが、なければ子供は困らないという程度のものではなく、大人の言語にも存在しない擬態語を幼児は生産的に発話し、使役行為を描写するにあたって、幅広く利用する。つまり、擬態語は、動詞と比べ、「音とイメージのマッピング」が簡単に行われるため、まだ全ての動詞を獲得していない子供は、大人の言語にある擬態語、それもなければ、持っている音に対する感覚を利用し、新奇擬態語を生産し、それに *kærdæn'do* を結合することによって、使役行為を描写する。音象徴が感覚経験と抽象度の高い言語シンボルの間の橋渡しの役割を果たしていると考えられる。

Arata *et al.*(2009) は、言葉の意味を音からのインプットなしで獲得している聴覚障害者を被験者として研究を行い、聴覚障害者にとって擬態語はどのような存在で、その脳内表象はどのようなものであるかについて調査を行っている。彼らは、音というシンボル接地のない聴覚障害者においても擬態語は、意味が音と結びついていないことばと感覚経験の架け橋となるのか、擬態語がどのように脳内で処理されているのか、そしてどのように聴者の脳内処理と異なるのかを調査した。調査の結果、以下のような図が示されている。

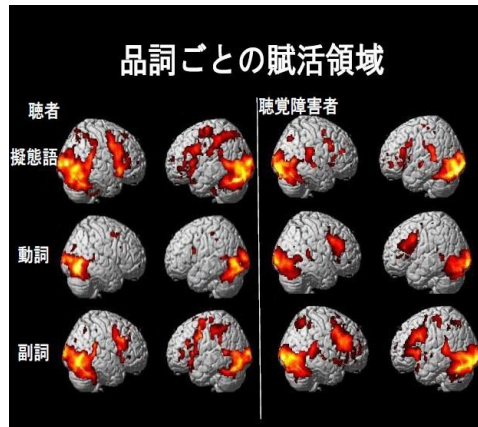


図 32：聴者と聴覚障害者の品詞ごとの賦活領域：(Arata *et al.*(2009：図 1))

Arata *et al.*は、「それぞれの品詞が呈示されている際の賦活領域を聴者と聴覚障害者で比較した。聴覚障害者は両半球の視覚野付近を中心に、聴者に比べて賦活範囲が大きく、これはNeville らの先行研究の見解と一致した。また品詞の違いに関わらず聴覚障害者の場合、聴覚野の賦活が聴者よりも大きかった。聴者の場合、擬態語が呈示されている際と他の品詞の場合を比べると、擬態語呈示の際の賦活範囲の大きさが確認できる。しかし聴覚障害者の場合、擬態語に際立った賦活が見られなかった。（中略）今回の実験結果から、聴覚障害者は聴者に比べて両半球での大きな脳賦活を確認されているが、それぞれの種類の語の具体的なイメージを想起する際において、それぞれの語に対する特異的な領域を確認することが出来なかった。つまり音を知覚しない聴覚障害者にとっては、擬態語は感覚と言語の橋渡しの役割は果たしていないことがわかった。この結果は、聴者の結果と合わせて、擬態語に限らず、音象徴を持つことばが感覚と言語の間に存在し、橋渡しの役割を果たすことを強く支持する結果となった。」と述べている。

Arata *et al.*の調査から分かるように、擬態語は、人間の感覚と言語の間に置かれ、橋渡しの役割を担っている。従って、幼児も、まだ動詞を完全に獲得していない段階で、感覚と完全に恣意的な言葉の間に存在する擬態語に「スル」を結合することによって、様々な使役行為を描写できるようになると言える。動詞は、完全に恣意的なものである。例をあげると、「na-ge-ru」という音の連鎖とそれが指す概念の間の関係はあくまでも恣意的であり、別に「na-ge-ru」ではなくても良い。その一方、擬態語「pon」は、人間の感覚に近く、擬声語ほど完全に音をそのままなぞっているものではないが、「na-ge-ru」といった動詞のように完全にも恣意的なものでもない。擬態語が置かれている位置を図で示すと、以下のようになる。

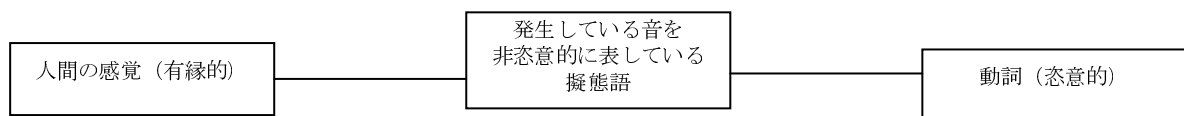


図 33：擬態語の位置

従って、日本語児は、自分の感覚に一番近く、記憶の負担の少ない擬態語を初期段階において、多用する。ペルシャ語児は、日本語児のように数多くの擬態語を耳にしないうえ、動作を描写するためには、「描写的ジェスチャー+injuri kaerdæn'do like this'」を多用してしまう一方、幼児の中

には、日本語ほどではないが、新奇な擬態語を発話し、それに *kærdæn'do* を結合することによって、使役行為を描写する児もいる。

5.1.2. (使役構文の道具/形容詞/語彙的使役動詞の過去分詞形)+*kærdæn 'do'*

このストラテジーは、日本語児では見られず、ペルシャ語児独特の使役行為の描写方法である。例をあげると、ペルシャ語児は、「紙を切る道具」の名前を獲得すれば、次の段階で、今まで、「描写的ジェスチャー+*injuri kærdæn'like this do = do like this*」で表していた「切る」という動作を今度は、「ハサミする」かその反復形の「ハサミハサミする」と発話してしまう。日本語には、「チョキン」という擬態語が存在するため、幼児は、わざわざ「ハサミする」を発話する必要性がない。幼児の「聴覚」にアクセスしやすい「チョキン」に「スル」を結合することによって、「切る」と言う動作は描写できる。ペルシャ語児の「使役道具+*kærdæn'do*」といった誤用数は、非常に多く、例えば、*keik-o bā cāqu boridæn 'cake-DO with knife cut* 「ケーキをナイフで切る」のことを **keik-o cāqu zædæn 'cake-DO knife stab(stick)* 「ケーキをナイフする」と発話し、*kærdæn'do* の他に、初期段階で獲得される *zædæn'hit,stick,stab* というペルシャ語の別の軽動詞を獲得すれば、今度は、「ケーキをナイフで切る」の代わりに、「ケーキをナイフ（で）刺す」と発話してしまう。

更に、モノの性質を描写する形容詞、例えば、「小さい」を獲得すれば、今度は、「風船を爆発させた⁵⁶」の代わりに、*bādkonæk-o kučik mi-kon-e 'balloon-DO small DUR-do-3SG* 「風船を小さくする」と発話してしまう。日本語は、「する」の直前の形容詞の形態素を変えないといけない、つまり、「*čii-sa-i*」ではなく、「*čii-sa-ku*」に変換といけないが、ペルシャ語の場合は、このような困難な変換も要らない。従って、ペルシャ語児にとっては、非常に発話しやすい。つまり、日本語の擬態語の役割をペルシャ語では、初期段階では（一歳の終わりのころから2歳半にかけて）、「描写的ジェスチャー」が担い、その後（2;6から）、「使役行為で使われる道具」及び「形容詞」が担っていると言える。

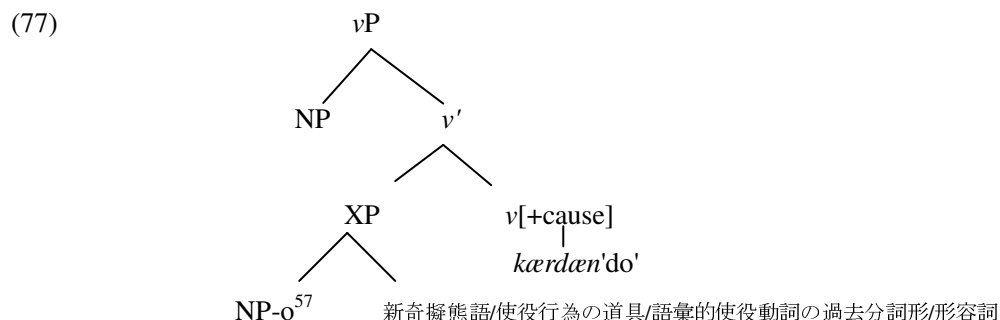
「語彙的使役動詞の過去分詞形+*kærdæn'do*」の例を挙げると、語彙的使役動詞 *bæstæn 'close* の過去分詞形 *bæste 'closed* に *kærdæn'do* を結合し、* *bæste kærdæn 'closed do = make closed* と二重使役化というプロセスを実行している。ペルシャ語児のこの種の使役行為の描写方法は、第1章で示したトルコ語児の二重使役化パターンに非常に似ている。

ペルシャ語の場合は、軽動詞 *kærdæn'do* は、非常に早く獲得され、まだ全てのモノの名前を知らない段階では、やむを得ず、動作を描写するために、*kærdæn'do* に描写的ジェスチャーを結合し、年齢が上がるにつれ、獲得した他の恣意的な言葉を描写的ジェスチャーの代わりに、*kærdæn'do* に結合し、使役行為を描写する。つまり、ペルシャ語児は、*kærdæn'do* を中心とした様々な使役動詞を発話してしまう。これは、Ninio(1996,1999)の仮説と一致する。Ninio(1996,1999)は、他の動詞がパターン化して使用されはじまるまでの間、軽動詞は言語習得を導くと提案している。ペルシャ語児に一番多く観察された誤用のスキーマは、以下のとおりである。

⁵⁶ ペルシャ語の直訳。日本語は、「風船を割る」である。

- (76) a. 1;11~2;8: 描写的ジェスチャーをやりながら *injuri/intori* 'like this' を発話する + *kærdæn'do'*
- b. 2 歳児~6 歳児:
(非常に幅広い年齢) 新奇擬態語/使役行為の道具/
語彙的使役動詞の過去分詞形
/形容詞 + *kærdæn'do'*

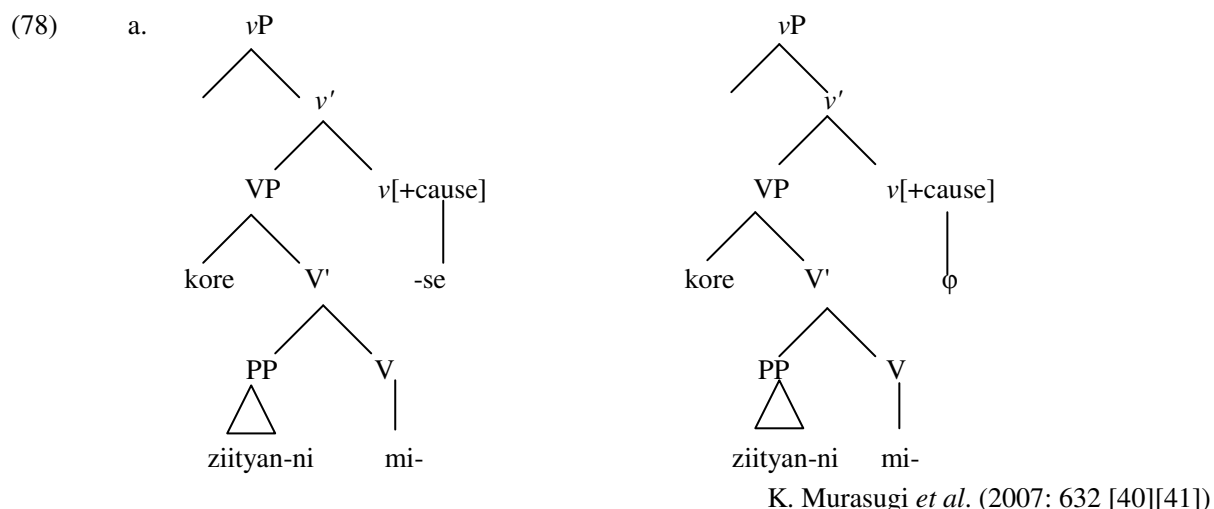
つまり、ペルシャ語児は、前章の(48)で示したように、*kærdæn'do'*を $v[+cause]$ として捉えている。
つまり、ペルシャ語児の誤用に対して以下のような樹形図が考えられる。



5.1.3.使役動詞の代わりに自動詞そのままの発話

使役動詞の代わりに自動詞がそのまま発話されてしまう誤用は、他の言語と同様にペルシャ語児の場合でも観察された。この種の誤用パターンが一番多く観察されたのは、2 歳児(2;0.12~2;9.18)で、年齢の増加と共にこの種の誤用パターンも減少していく。日本語児とペルシャ語児のこの種の誤用の相違点は、日本語児の場合は、対格「を」は、子供の発話では生じないが、ペルシャ語児の場合は、直接目的語の発話の次に対格 *ro/o* を発話していながらも、動詞を使役動詞ではなく、自動詞のままで発話してしまうという事実である。更に、もう一つの相違点は、前章で参照した K. Murasugi *et al.* が提案しているように、日本語児の使役動詞の第 II ステージ、つまり使役動詞の代わりに自動詞をそのまま発話してしまうステージは、2;9 から始まり 4;8 まで続くが、ペルシャ語児の場合は、この種の誤用パターンは、より若年の幼児でも観察されたという点である。詳しく年齢を述べると、語彙的使役動詞に対応する誤用は、2;0 から始まり、5;4 まで観察され、形態的使役動詞の場合は、2;0.12 から始まり、6;11.1 まで続いており、助動詞使役動詞の場合は、2;6.18 から観察され始め、6;9.15 で減少し、無くなった。つまり、この種の使役行為の描写方法は、日本語児と比べ、ペルシャ語児の場合は、長く多く観察されたことが言える。K. Murasugi *et al.* (2007) は、日本語児が使役性他動詞 *miseru* の代わりに、自動詞 *miru* を発話してしまう理由を、日本語児は、 v の音形をゼロだと捉えているからだとして述べている。K. Murasugi *et al.* は、他動詞文「これじいちゃんに見せる」の図形を(78a)のように示し、誤用である「これじいちゃんにみる」の図形図も(78b)のように示している。

⁵⁷ 口語における対格。文語における対格は、*rā* である。



つまり、日本語児は、 $[+cause]_v$ の値としてゼロを割り当ててしまうから、他動詞の意味を表現したがるが、結局大人の目から見ると間違いである自動詞が発話されている。この主張は、日本語のような膠着語の場合は、適切であっても、ペルシャ語のように、使役動詞と自動詞が全く別の語根を持つような言語の場合は、適切ではないと思われる。例をあげると、使役性他動詞 *miseru* はペルシャ語で *nešān dādān* 'look give = show' になるが、それに対応する自動詞は、*didān* 'look' となる。従って、ペルシャ語児の場合も、簡単に、 $[+cause]_v$ の値としてゼロを割り当ててしまうから、他動詞の意味を表現したがるが、結局大人の目から見ると間違いである自動詞は、発話されてしまうと言いきれない。従って、幼児がその母語を問わず、使役動詞の代わりに自動詞を発話してしまうのは、 $[+cause]_v$ の値としてゼロを割り当ててしまうからではなく、使役動詞は発話されないといけないことは知っていても、使役動詞はまだ知らないため、とりあえず使役行為を描写するために自動詞を発話してしまうからではないか。つまり、幼児は、「使役動詞は、自動詞に **CAUSE** という意味要素が加わることによって、出来上がるモノだ」と既に承知しているため、使役動詞を知らない、又はコミュニケーションのプレッシャーで使役動詞に会話の時にアクセス出来ない場合は、「とりあえず自動詞を発話すれば、自分の発話意図が聞き手に伝わっていくだろう」と判断し、自動詞を発話してしまう。自動詞によって、描写される項の数は、使役動詞より少ないし、必要となる格の数も使役動詞より少ない。事実、獲得の順序で言うと自動詞は使役動詞より先に獲得される。例えば、*didān* 'see' は 2;1 で現れ、これに対応する使役動詞 *nešān dādān* 'sign give = show' は 2;6 で現れる。従って、まだ使役動詞を獲得していない幼児には、使役動詞の代わりに自動詞をそのまま発話することは、容易であると考えられる。ペルシャ語児のデータを観察した結果、使役動詞の代わりに自動詞が発話されてしまったケースは、数多く存在するが、その逆は、観察されなかった。幼児は、母語を習得していくとき、外国語を習得していく大人と同様に、最初は自動詞を習得し、その次にそれに対応する他動詞を盲目的に習得していくわけではない。幼児は、動詞を自動詞か使役動詞かを問わず、最初の段階では、一つずつ獲得していく。しかしながら、自動詞の項は使役動詞より少ないため、初期段階、つまり認知能力もまだ完全に発達していない段階では、自動詞の方が幼児にとって、獲得しやすい。

5.1.4.適切な語彙的使役動詞や助動詞使役動詞の生産的な発話

CHILDES のペルシャ語児 5 人の中、一番年齢的に小さかった幼児は、Shahzad(1;8~1;10, 女児)である。Shahzad の場合は全ての使役動詞は発話不可能であった。

CHILDES のデータで一番最初かつ生産的に発話されてきた使役動詞のグループは、助動詞使役動詞である。この種の使役動詞の生産的な発話は、かなり早く観察された。実際、この種の使役動詞の生産的な発話は、1;11 から観察された。

語彙的使役動詞の発話も 1;11 の時点で観察されたが、あくまでも生産的な発話ではなく、数個の語彙的使役動詞に止まった。その理由を考えると、助動詞使役動詞は、既に獲得している名詞/形容詞などに非常に獲得年齢が早い *kærdæn'do* を結合するだけという単純なプロセスによって使役行為を描写することが出来るが、語彙的使役動詞の場合は、自動詞とまったく違う動詞をゼロから獲得しなければいけない。つまり、語彙的使役動詞の獲得は、助動詞使役動詞と比べると、幼児にとっては困難である。

助動詞使役動詞の場合は、ある程度の助動詞使役動詞が獲得された段階で、スキーマ化のプロセスが生じ、大人の発話者ほど抽象的ではないスキーマが形成し、新規な場面を描写するとき、幼児は、自分特有のスキーマにアクセスし、新規な助動詞使役動詞を発話する。その一方、語彙的使役動詞の場合は、助動詞使役動詞のような構文的スキーマが元々存在しないゆえに、それぞれの語彙的使役動詞を一個ずつ記憶しないとといけないから、記憶の負担が大きい。だが一方で、形態的使役動詞と違って、語彙的使役動詞は大人の母語話者の発話に数多く出現するので、つまりインプット量が形態的使役動詞より多いので、習得は徐々にではあるが、2;3 になるごろから観察される。

5.1.5.形態的使役動詞の代わりに語彙的使役動詞や助動詞使役動詞の発話

3 つの使役動詞の中で最後に獲得されるのは、形態的使役動詞である。実験対象 98 人の発話データの分析から、ペルシャ語児が形態的使役動詞を生産的に発話できるのは、2;8 後であることが分かった。年齢が上がっても、形態的使役動詞の発話に顕著な上達が見られておらず、就学前の幼児の多くも、形態的使役動詞が必要とされる場面でも語彙的使役動詞や助動詞使役動詞を発話してしまう。形態的使役動詞は、自動詞形あるいは使役の意味を持たない普通の他動詞形の語根に *-ān(i)dæn* を結合することによって出来上がるので、自動詞形と使役形が全く異なる形を取る語彙的使役動詞と比べ、記憶の負担が少ないと予測され、獲得しやすいと考えられる。しかしながら、この種の使役動詞の発話頻度は大人の母語話者の言語にも少なく、インプット量が少ないので、獲得年齢が遅く、またこの種の使役動詞のスキーマが形成する年齢も他の 2 種類の使役動詞と比べ遅い。一つの例を挙げると、「風船を爆発させた」の代わりに、Amir-Mahdi(2;3.12, 男児)は、*bādkonæk-o borid-Θ* ‘balloon-DO cut-3SG’ 「風船を切った」と発話してしまった。また Fateme(2;8.7, 女児)は、「風船を爆発させた」の代わりに、*bādkonæk-o surāx kærd-Θ* ‘balloon-DO perforated did-3SG’ 「風船を穴が開いている状態にした」と発話してしまった。この場合は、形容詞 *surāx* ‘pierced, perforated’ に *kærdæn'do* を結合することによって *terekāndæn* ‘cause to burst, explode’ が描写されている。

今井と針生(2007: 197)が言うとおりの、「破る」、「割る」、「砕く」、「潰す」、「曲げる」、「折る」などのいわゆるモノに力を加えてモノの形状を変化させる一連の動詞は、動作の対象になるモノ（つまり

項になれる名詞) を強く限定する。しかしながら、ペルシャ語の2歳児にとっては、被使役物の性質に関係なく、1つの動詞の適用範囲が広い。よく考えてみると、日本語においても「ガラスを割る」と「風船を割る」という全く違う性質の被使役物に力を加え、一瞬でその被使役物の形が変えられる場面が同一の動詞「割る」によって描写されている。一方、ペルシャ語の成人語母語話者にとっては、「風船を爆発させる」の方が自然に聞こえる。つまり、日本語とペルシャ語の概念の切り方は、2つの異なる性質を持つ対象物(風船、ガラス)では異なる。今井と針生(2007: 231,232) は、言葉が先か概念が先かという問題について、「モノ同士の関係を指示する概念は、基礎レベルのカテゴリのような強力な知覚的よりどころがなく、カテゴリの認識に言語(ラベル) が及ぼす影響も大きくならざるを得ない。(中略) しかし、いずれの場合も、言葉の学習には何らかの普遍的かつ原始的概念は前提として必要であると思われる。この場合の『概念』とは、世界から与えられる『概念』ではなく、子供の側でもつ、内的な概念である。」と述べている。ペルシャ語の2歳児が「風船を爆発させる」のではなく、ペルシャ語の大人の発話者の観点から見て、誤用である「風船を割る」と発話してしまった例が見られる。これは、日本語児とペルシャ語児の内的な概念は元々一緒であったが、ペルシャ語母語話者は、対象物の性質や使役行為の後の対象物の状態によって、2つの違う動詞を使い、区別をしているので、そもそも1つであった概念も区別されるようになるということだろうか。ここで、問題となってくるのは、なぜペルシャ語児は、日本語母語話者から見て、適切であるような発話をしてしまうかという問題である。つまり、幼児は母語を問わず、動詞を獲得していく上で、どんな基準に基づいて動詞を獲得していくかという問題である。このことについて次節において論じる。

5.1.6. 場面に適した形態的使役動詞の発話

2;8を超えると、様々な形態的使役動詞がペルシャ語児の発話の中には出現してくる。しかしながら、その後もこの種の使役動詞の誤用数は、年齢の増加とともに減らずに、就学前まで続いている。

以下においては、子供がその母語を問わず、使役の概念を獲得する時に手がかりとして使う手段について論じる。

5.2. 語彙的アスペクトの定義及び動詞の獲得におけるその必要性

白井(2002: 165,166) は、「アスペクトは、三つの異なったレベルで考察する必要がある。まず、言語によって表すアスペクトとして、①内在アスペクト(*inherent Aspect*)と②文法的アスペクト(*grammatical aspect*)がある。内在アスペクトは、しばしば「状況アスペクト(*situation aspect*)」(Smith 1991)とも呼ばれるが、動詞(句)のもつ、意味的特長である。ベンドラー(Vendler 1957)の指示した4分類が、最も一般的である。それは、State (状態): 動的でないもの (例: *know, love, Exist*)、Activity (活動): 動的、かつ持続的なもの (例: *run, walk, play the guitar*)、Accomplishment (達成): 動的、かつ持続的、またそれ以上先へ進めない動作の終結点(限界性)があるもの(例: *run a mile, make a chair, walk to school*)とAchievement (到達): 持続的でなく、動的で、限界性があるもの (例: *reach the summit, win the race, explode, lose*)である。」と述べている。内在アスペクトの別名は、語彙アスペクトである。Taylor(2002)によると、以上の4つの分類の最も基本的な区別点は、限界的

(bounded:telic)であるか、それとも非限界的(unbounded:atelic)であるかという点である。言い換えれば、時間的な終点を持っているかどうかなのである。4つの種類の中、活動と状態は、均質な事象として捉えられる。というのは、これらの事象は複数の時間的な断片(temporal slices)に切り分けられても、同じ種類の断片(slice)が得られるからである。例えば、*ran for ten seconds*という文が表現する事象では、十秒のうち、どの一秒間を切り取ってみても、同じく*running*であるということには変わらない。しかし、達成は均質な事象とは考えられない。Smith(1997)は、Vendlerの動詞4分類に、一回相動詞(semelfactive verbs)を追加した。一回相動詞は、到達相動詞に非常に似ている。なぜなら、一回相動詞は、到達相動詞と同じく瞬間的動作を表すからである。しかしながら、到達相動詞と違い、決まった到着点を持っていない。その例は、英語の、*cough, tap, knock*である。これらの分類をまとめるものとして、Comrie(1976)が有用である。彼は全ての動詞を3つの性質によって、分類している。Comrieの動詞の分類基準となる「stative/dynamic」、「telic/atelic」、「punctual/durative」という意味素性を上述した5つの動詞の分類に追加すると、以下のような表が出来上がる。

表 42 : 「 Li & Shirai(2000:16, Table(2.1.))」

意味素性	状態相 (states)	活動相 (activities)	達成相 (accomplishments)	一回相 (semelfactives)	到達相 (achievements)
動的(dynamic)	-	+	+	+	+
限界的 (punctual)	-	-	-	+	+
瞬間的 (telic)	-	-	+	-	+

白井(2002 : 167) は、文法的アスペクトを、「一般的に文法化された形式（例えば、助動詞、拘束形態素など）によって表され、スミス(Smith 1991) が「視点アスペクト(viewpoint aspect)と呼ぶ、完結相(perfective aspect)、非完結相(imperfective aspect)、進行相(progressive aspect)などを示す。これらは、描写されるべき状況を話者がどのように捉えているかを表し、たとえば、完結相はある状況をひとまとまりのものとして差し出し、しばしば『外側からの視点(external view)』を表す、とされる。」と述べている。

白井は、語彙的アスペクトと文法的アスペクトを言語的アスペクトとして捉え、アスペクトの3つ目のレベルとして「現実世界の状況」のもつアスペクトというものを提示している。白井(2002:167) は、「現実世界の状況」のもつアスペクトを、「言語によって描写されるべき対象としての状況のもつ特徴である。」と定義している。白井は、「現実世界の状況」のもつアスペクトの例として、英語の*know*と日本語の「知る」という動詞の例を挙げ、「英語の*know*という動詞の内在アスペクトは、「状態」で、現実世界の状況も「状態」である。一方、日本語の「知る」という動詞の内在アスペクトは、「到達」であるが、現実世界の状況は「状態」である。「知る」という動詞は知らない状態から知っている状態への瞬間的状态変化を表し、日本語では、*A knows B*という状態を、「知る」という到達動詞に非完結相を示す文法アスペクト形式「てい(る)」をつけて描写するからである。」と述べている。

白井(2002) は、Bickerton(1981,1984,1989,1999)の「言語習得」に関する主張のうち、時制・ア

スペクトに焦点を絞り、批判的に検討し、バイオプログラムに関わる代案を提示している。白井は、ビッカートンがバイオプログラムでしか説明できない、と主張した時制・アスペクト習得に関する現象をインプットに内在する偏りによって説明している。白井(2002:175) は、「初期における形式と意味の特殊な関係の背後にあるのは、インプットに基づいてプロトタイプ形式をする、という文法形式習得のメカニズムであろう。ここで取り上げたいのは、時制・アスペクト、人称代名詞、使役、条件文、という文法項目だが、これらに共通していえるのは、インプットには実際にデータを見てみないと分からないような偏りがあり、その偏ったインプットをデータとして、幼児は大人のもつ意味知識とは異なったプロトタイプの意味をある形式に与える、ということである。(中略) 時制・アスペクトに関して言えば、子供は限界性、瞬間性、などの意味成分に注目し、プロトタイプを形成する。所有格・目的格の1人称代名詞については他動性に、使役辞については間接使役という意味成分に、そして、条件文については、D条件文、という特性をそれぞれプロトタイプとしてこれらの形式の初期使用の足掛かりとするのである。このプロトタイプが大人のモデルと一致しないため、過去形、進行形、I、使役辞のケースのように過剰限定になったり、me/myのケースのように、過剰般用になったりすることが多いのである。」と述べている。

白井(2002)の3つのアスペクトについて考えると、全ての言語に共通するのは、「現実世界の状況のもつアスペクト」の種類であると言える。しかしながら、白井は、この種のアスペクトの定義などについて一切説明していない。更に、このような「現実世界の状況のもつアスペクト」というのは、生得的な知識かそれともインプットに基づいて完成する知識であるかについて説明がなされていない。また、白井(2002:175) は、「時制・アスペクトに関して言えば、子供は限界性、瞬間性、などの意味成分に注目し、プロトタイプを形成する」と述べているが、なぜ幼児は、限界性や瞬間性などといった意味成分に注目するようになるのかについて論じていない。幼児は、限界性や瞬間性などといった意味成分に生まれたときから敏感であるのだろうか、それとも、この意味成分に敏感になるまでに、ある程度周りの人間からインプットを受け、そこからこのような意味成分としてのある種のスキーマにたどり着き、そこまでには幼児自身の認知能力の発達も必要されるのだろうか。

本論で主張していきたいのは、幼児は、母語とする言語を問わず、また時間表現の有無に関係なく、新規動詞を獲得するに当たって、アスペクト知識を利用するということである。前章で示したように、ペルシャ語児は、*terekāndaen* 'cause to burst, explode' という形態的使役動詞の代わりに、*šekaestæn* 'break' という語彙的使役動詞を発話してしまう。さらに、もう1人の幼児は、*terekāndaen* という形態的使役動詞の代わりに場面に相応しくない語彙的使役動詞 *boridaen* 'cut' を発話してしまう。この場合は、一見したところ *terekāndaen* 'cause to burst, explode' の使用範囲が狭いために、*terekāndaen* 'cause to burst, explode' の方が、後者の2つの動詞と比べ、獲得されやすいと推測される。しかし、ペルシャ語児が「風船を爆発させる」の代わりに、「風船を割る」と発話してしまったのは、ペルシャ語の母語話者の観点から見ると、過ちに見えるが、日本語母語話者にとっては、むしろ「風船を割る」の方が適切に聞えるという事実にも注目したい。言語が不自由なく話せる段階に達するまでに、幼児の認知能力は、徐々に発達していき、初期段階では、自分自身の行動が限界のか非限界のか、瞬間的かそれとも連続的か、動的かそれとも静的かを認知的に区別できるようになる。つまり、最初段階では、3つの意味素性に非言語的に敏感になり、その後、言葉を獲得し始める時も、動作を言葉によって表すときに、これらの意味素性に基づいて新規動詞を獲

得していく。アスペクト情報は、全ての言語に存在し、共通する。異なるのは、ある言語では、ある動詞はどの語彙アスペクトに属するかという違いである。ペルシャ語児は、瞬間的、動的かつ限界的状态変化動詞（Vendler の到達相動詞）を獲得する時、最初の段階では、同じ語彙アスペクトに属する 2 つの全く違う動詞（例えば、*terekāndaen* 'cause to burst, explode' と *šekaštaen* 'break'）の間では、如何なる違いも想定せず、「風船を割る」という状況を描写する時に、*terekāndaen* 'cause to burst' という動詞にアクセスできない場合又は未だにこの動詞を周りの大人から 1 度も耳にしたことがない場合は、直ちに全く同じ意味素性をもつ *šekaštaen* 'break' を発話してしまう。注目したいのは、ペルシャ語児は、決して、*terekāndaen* 'cause to burst' の代わりに、「状態」や「活動」に属する動詞を発話していないということである⁵⁸。幼児の年齢が上がるにつれ、幼児は、ペルシャ語の大人の言語の *terekāndaen* 'cause' と *šekaštaen* 'break' の間に想定される違いに気づき、*terekāndaen* 'cause to burst, explode' が求められる状況では、*šekaštaen* 'break' を発話しなくなる。割れた風船は使役行為が行われた後にはその前の状況へ戻れないが、割れた花瓶は接着剤を使えば元の状態に戻すことが出来る。更に、花瓶を割るためには、ハンマーなどの使役道具は数回にわたり花瓶に力を及ぼすことがしばしばあるが、風船を割るためには 1 回だけ、使役道具（例えば針）が被使役物と接触することで結果に到達する。ペルシャ語では、このような被使役物の元の状態への可逆性に基づいて、2 つの異なる動詞が使われる。初期段階では語彙アスペクトに基づいてカテゴリー化するが、競合する動詞に接すると、自分の作ったカテゴリーに様々な制約を与えることを学習し、徐々に過剰一般化も減少し、やがて無くなる。つまり、競合相手が出現するから、幼児は自分のスキーマ（白井が言うプロトタイプ）は、幅が広すぎたことに気づき、徐々に過剰一般化も減少し、やがて無くなる。

乳児には発達の非常に早い段階から、事物の間に類似性を認め、類似したものをひとつのまとまりとしてカテゴリーを形成する能力が備わっている。Nazzi & Gopnik(2001) のグループは、20 ヶ月児が音声による言語的情報のみで新しいカテゴリーを形成する能力を持つことを示唆する実験を行っている。この実験では、色、形状、材質、テクスチャなどがすべて異なる 2 つのオブジェクトに同じ名称（無意味語）を付与し、同一のカテゴリーとみなせるかをみた。このタスクを 20 ヶ月児はほぼ正しくこなすことができたが、16 ヶ月児の正答率は偶然の域を出なかったとなった。つまり、生後およそ 20 ヶ月を過ぎると、知覚レベルで完全に相違している対象でも同じ名称を付与すると同一のカテゴリーに属すると判断するようになるということを示している。これらの事例をもとに、乳幼児は言語を習得する前の段階から、対象をカテゴリー化する能力を身に付けており、この能力が急速な語彙増加の一因となって、語意学習における大きな役割を担っているという可能性が示唆される。

従って、幼児は、動詞を獲得する場合でも、同じような動作を描写する動詞のグループをカテゴリー化できると言える。幼児は、あるイベントは、瞬間的か持続的か、動的か静的か、限界の或非限界のとかという 3 つの意味素性に非常に早い段階から注目し、この 3 つの意味素性に基づき、動作をカテゴリー化していく。

今井と針生(2007:235) は、「色の名前を想定するときには実際に色が提示されなくても視覚野が、道具の名前を想定する場合には実際そのとき運動をしていなくても運動野が賦活する(Martin,

⁵⁸ 第 3 章の表 15、21、27、33 と 39 を参照。

Haxby, Lalonde, Wiggs & Ungerleider, 1995)。この研究は、語の意味が視覚や触覚、運動などの感覚と直接にリンクしていることを示唆するものであり、語は、一般的な概念知識や感覚とは別のところに言語用に作られた限定的な辞書 (Katz & Fodor, 1963) としか結びついていない、といった以前の考え方 (古典的意味論) に異を唱えるものである。」と述べている。

幼児期から、子供はひとりで動き出す物体と、押される等、力を加えられることによって動かされる物体との区別に敏感であることが報告されている (Leslie(1988))。幼児は非常に早い段階から自分自身の行動に興味を示し、自分がある物体にどんな変化をさせることが出来るのかに興味深く観察する。次の段階においては、幼児は周りの人間の行動などに注目をするようになる。その時、周りの人間やペットなどの行為が、持続的であるか一瞬で終わってしまうか、動的であるかそれとも静的であるか、更に有限的であるかという視覚によって得られる情報に注目する。そしてこのような根本的な情報に基づき、周りの人間の動作を最初に非言語的にカテゴリー化していく。次に周りの大人はそのような動作をどのような動詞によって描写しているかに注目するようになる。つまり、幼児は、初期段階においては、自分自身の行動の動性、瞬時性、限界性に注目をするが、首がしっかりすわり、寝返りやおすわりができるころになると、今度周りの人間やペットや物体に注目を向けるようになり、初期段階ではそれぞれの行動を非言語的にカテゴリー化していく。しかしながら、動詞のカテゴリーは、モノの名前と違い、必ずしも基礎レベル、下位レベルと上位レベルを持っていない。幼児がモノの名前を獲得していくとき、最初に獲得し、発話するモノは、概ね基礎レベルに属している。動詞的概念の場合、幼児は知覚的な情報によりある行為の動性、瞬時性、限界性に注目し、これらの意味素性に基づき、動作をカテゴリー化していくが、その際直ちには基礎レベル (中心的メンバー)、下位レベルと上位レベルにカテゴリー化しない。従って、語彙アスペクトが同じである動詞のグループの中で、どの動詞が最初に獲得され、それが過剰般用されていくかを決めるのは、周りの養育者からのインプットにおけるその動詞の使用頻度、その動詞の日常生活における重要性及び顕著性、当該の動詞が表す事象や生じる変化の具象性・抽象性の度合いなどである。要するに、これから幼児がどの使役動詞を発話するのかを予測するのは、大人には無理なことであり、様々な要因が関連する。つまり、1つの語彙アスペクトに属する全ての動詞が Tomasello が言うように項目依拠的に獲得される。非常に使用される範囲が限定され、具象性の度合いが高い *rænde kærden'grater do = grate* を使用範囲が非常に広く、抽象性の度合いが高い *boriden'cut'* よりも先に獲得し、*boriden'cut'* が必要とされる文脈でも *rænde kærden'grater do = grate* を発話してしまい、誤用を犯してしまう場合もあるし、生じる変化の具象性が高い形態的使役動詞 *terekāndæn 'cause to burst'* の代わりに生じる変化の抽象性が高い語彙的使役動詞 *boriden'cut'* を発話してしまう場合もある。従って、幼児の使役動詞の誤用を推測するには、1つの要因のみではなく、数多くの要因を知る必要がある。幼児の年齢が上がるにつれ、周りの人間が同一の場面で *rænde kærden'grater do = grate* ではなく *boriden'cut'* を発話するのを耳にすると、語彙アスペクトが同じ「状態変化＝到達」動詞に属しても、様々な制約が働いていることに気づき、自分の誤用を修正していく。つまり *rænde kærden'grater do = grate* の意味の再編成が行なわれる。語彙アスペクトに基づいたカテゴリーの更なる習得に必要とされる制約は、言語ごとに異なる。つまり、日本語の場合は、「状態変化＝到達」という語彙アスペクトのグループに属する「割る」という動詞は、被使役物は、「風船」であれ「花瓶」であれ使われるが、ペルシャ語の場合は、「使役行為が行われた後、被使役物の可逆性」という基準に基づき、「風船」の場合は、

「割る」ではなく、「爆発させる」という形態的使役動詞が使われる。

幼児は、非常に早い段階から、「状態」動詞と「到達」や「活動」動詞の違いに敏感であり、決して、使役動詞が必要とされる「場」においては、「状態」動詞を発話しない。しかしながら、動詞の語彙アスペクトの違いを理解しても、実際、1つの語彙アスペクトに属する動詞にも様々な意味的な制約がかかることに気づいていないため、様々な誤用を犯す。例えば、*boridæn'cut*も *pāre kærden'ragged do = tear*も両方「到達」という語彙アスペクトに属するが、実際、大人の母語話者は、「瞬時性」、「使役行為で使用される道具」、「使役行為が行われた後の被使役物の結果状態」などに基づいて、この2つの動詞を全く違う2つの動詞として捉え、*boridæn'cut*という使用範囲が広い動詞の意味に、「使役行為で使われる道具は、「ハサミ」ではなく、「手」であり、一瞬で紙が破れた状態になる場合は、*boridæn'cut*ではなく、*pāre kærden'ragged do = tear*が使われるべきである。」というような制約を加え、従って、*boridæn'cut*の使用範囲が狭くなり、*pāre kærden'ragged do = tear*が必要とされる「場」においては、決して *boridæn'cut*は発話されなくなる。しかしながら、幼児の場合は、1つの語彙アスペクトに属する全ての動詞を同じように捉え、動詞に如何なる意味制約もかけていない。それゆえに、様々な誤用が出現してしまう。

言語習得の初期段階の子供が特に意識を集中させる事象は、ある程度、特定の場面に限られている。その中でも、人間の生活にとって基本的な事象である、「人が物体に何らかの変化を加える場面」や「ある物体がある場所から別の場所へ移動する場面」の存在が重視されている(Slobin(1985))。子供は、言語獲得の初期には不十分な形態ながらも、これらの場面と対応する特定の言語形式を経験に基づいて獲得する。言語は、まさに大人と子供の間で成り立つ相互行為の手段であり、その産物でもある。次の段階では、幼児は徐々に動詞を項目依拠的に獲得していき、前段階で形成された語彙アスペクトというカテゴリーの中に徐々に獲得した動詞を蓄積していく。このモデルのことを、「DPT 属性（動性、瞬時性、限界性）による新動詞の獲得」と呼ぶことにする。

Bowerman(1974) は、英語を母語とする子供が最初に習得する使役のタイプは語彙的使役であると述べている。英語を母語とする子供の使役に関する誤用例は、生産的使役（迂言的使役：productive causative:例：make, getなど）を習得した段階で急に増加する。この段階で、子供はdirect causationをmanipulative又はdirectiveを問わず、とにかく語彙的使役に割り当てたがる。従って、子供は通常 ‘make’で表されるdirective causativesを語彙的使役(English zero derivation)によって表す。その一方で、Lin(2008)は、TSM (Taiwan Southern Min)の場合は、形態的使役と分析的使役（迂言的使役）の誤用が多いと述べている。TSMは分析的言語なので、使役状態を形態的や迂言的使役動詞によって表すことが望まれる。TSMの場合は、語彙的使役動詞の中にCAUSEの意味要素が存在し、習得が非常に遅い。

ペルシャ語児の場合は、使役動詞の3つの種類の中で発話時期が一番早い使役動詞は、助動詞使役動詞である。更に、3つの種類の中で一番早く誤用が消滅された使役動詞もまた助動詞使役動詞である。この種の使役動詞は大人のインプット量が非常に多く、定着率が高いゆえに、スキーマも早く形成され、他の種類の使役動詞の代わりにも使用されるし、様々な制約も早く子供のスキーマにかかるため、誤用も他の種類と比べ、早く消滅していく。

まとめると、ペルシャ語児は、使役の概念を最初にDPT属性に基づいて、非言語的に理解し、次に言葉を周りの養育者から聞くことによって、動詞を獲得し、3歳を超えると、それぞれの使役

動詞のスキーマを形成し、そのスキーマを過剰般用し、やがて形成したスキーマに様々な制約をかけることによって、誤用が消えていく。以下においては、子供の使役動詞の誤用を制限する制約に関して論じていく。

5.3. 幼児の動詞の誤用を除去する制約

本節においては、幼児の誤用がどのようなメカニズムで排除され、大人の文法に近づくかを考察する。特に、Pinker (1989) の意味的な動詞のクラス仮説(semantic verb class hypothesis: Pinker: 1989)と Braine & Brooks(1995)や Brooks *et al.*(1999) が提案した定着仮説(Entrenchment hypothesis)という 2 つの仮説を中心に考察していく。

Pinker(1984) は、子供が項構造交替について持っている生得的な規則の幅は広すぎるため、使役交替の過剰一般化の過ちが起こってしまうという。子供の過剰一般化が除去されるためには、子供は獲得していく個々の動詞に注釈を付け加える必要があり、全ての注釈が付加されると、過剰一般化も除去されるとしている。Bowerman(1988)や Pinker(1989) が示唆しているように、上述した説明は言語習得の場合、妥当ではない。なぜなら、全ての交替において、全ての基準を満たしているにもかかわらず、交替できない動詞が存在するからである。(例: She said/told/whispered something to her mother. 対 She *said/told/*whispered her mother something.)。では子供は、どのようにこれらの制約を習得していくのだろうか。更に、なぜ項構造規則には、そもそも恣意的に見える注釈を初期段階から付け加える必要があるのだろうか。子供の生得的な規則があらゆる動詞に対応し、インプットの中の動詞全てを分析し、理解するための知識が全部生得的な文法に入っているのであれば、なぜ項構造規則に様々な注釈を付け加えることで、自分を困らせる必要があるのだろうか。

Pinker(1984) は、動詞の項構造を変える規則を動詞の項構造に単なる統語的影響を及ぼす規則として考える。しかしながら、Pinker(1989:166) は、Levin & Rappaport(1988) に従い、動詞の項構造交替の規則を、動詞の意味を変える語彙規則として定義している。Pinker(1989)のアプローチでは、使役交替の規則を「変化」を表す述語(an event of acting or moving in some way)を取り、それを(by acting on, cause to change(in the specified way))の述語に変える規則として捉えている。使役交替規則は、双方向的な規則である。したがって、使役交替で使用できる動詞の数が一気に減少する。例えば、使役交替で"be"や"ache"などといった状態自動詞が使用できなくなる(Pinker, 1989; 223)。なぜなら、これらの動詞の意味の中には、「変化」が存在しないからである。この仮説は、Pinker(1984)より適切である。なぜなら、ある交替に参加できる動詞を決めるのは、その動詞の意味であって、その動詞に恣意的に付け加わる制約(注釈)ではないからである。しかしながら、この仮説にも弱点が存在する。それは、動詞の意味が交替に参加できる他の動詞に類似しているにもかかわらず、交替には使用できないということである。その例は、"disappear"である。この動詞は「ある変化」を具体的に挙げるが、使役化されない。この問題を解決するために、Pinker(1989:130-133) は、交替するための規則に 2 つのレベルを提案した。それは、広域規則(Broad-Range Rules)と 1 つ又はそれ以上の狭域規則(Narrow Range Rules) (意味的により具体的である)の規則である。広域規則は、ある動詞が交替できるかどうかを決める必要条件であり、狭域規則は、十分条件である。広域規則は、特定の動詞の意味を定める意味要素の合成から成る 2 つの"thematic cores"を関連付ける規則である。使役交替の広域規則は以下のとおりである(Pinker,

(79) a.Y <+dynamic> event: ACT/GO (e.g., The ball rolls)

b.X ACT on Y, thereby CAUSing Y ACT/GO (e.g., John rolled the ball)

ところが *go*, *fall*, *disappear* などは、上述した広域規則に矛盾しないにもかかわらず、語彙的に使役化されない。これらの動詞は、迂言的に使役化される。それは、使役交替に参加するための狭域規則が満たされていないからである。ある動詞は、ある交替に利用可能であると広域規則によって許可された場合、その動詞は同時にいくつかの狭域規則(意味的により具体的である)の制限も満たさなければならない。使役交替に参加できる動詞のグループは、「外面的働きかけによる物理的な状態変化を表す動詞:*melt*, *open*, *break*, *shrink*」と「特別な方法(やり方)で生じる移動動詞:*slide*, *skid*, *float*, *roll*, *bounce*」である(Pinker 1989:130, 303)。使役交替に参加できない動詞のクラスは、①「語彙的に特定の方向で生じる移動動詞:*go*, *come*, *rise*」②「出現/消滅の意味を持つ動詞:*die*, *appear*, *disappear*」③「光、音、物質、匂いの放射(放出)の動詞:*glow*, *glisten*, *buzz*, *bubble*, *smell*」④「内面的な働きかけによって生じる状態変化動詞:*bloom*, *blossom*, *blush*」⑤「意思的又は内面的働きかけを表す動作の動詞:*jump*, *walk*, *talk*」⑥「心理的運動を表す動詞:*think*, *hesitate*」⑦「感情表現の殆どの動詞:*smile*, *cry*」である(Pinker, 1989: 303, 131-133)。Pinker(1989:130-133)は、これらの動詞は、使役交替に参加するための広域規則(直接的動作)にも違反していると主張している。つまり、④～⑦の動詞は、全て内面的働きかけを示している。Pinker(1989:74)は、全ての動詞に含まれる意味要素(CAUSE, GO, BE, ACT)とその意味要素を統語役割に写像するための連結規則を、子供が生まれたときから既に持っているとして主張している。したがって、子供はある動詞の意味を知っていれば、その動詞にどのように項構造を割り当てるか、も知っているはずである。子供は、広域規則を正確に作り上げても、いくつかの狭域規則も広域規則に付け加える必要がある。子供は、どのように狭域規則を把握し、その広域規則に付け加えるのだろうか。Pinker(1989:292 ff., 350-351)は、幼児の過剰般用を、「一度きりの新奇な使い方」と「動詞の意味の誤り」のせいだと考えている。「一度きりの新奇な使い方」というのは、大人と同様に、適切な動詞を知らなかったり、会話のプレッシャーで正確な動詞にアクセスできない場合、子供は一度きりの新奇な使い方をしてしまうという提案である。つまり、幼児は会話のプレッシャーで狭域規則を無視し、広域規則を使用してしまう。「動詞の意味の誤り」というのは、子供はまだ動詞の意味を正確に理解しておらず、そのため、ある状況の下で、間違った意味を本来ならば使用できない交替で使用してしまう。しかしながら、後になって動詞の正しい意味を知ることによって、過剰一般化も除去されるとPinkerは主張している。

しかしながら、実際には幼児は生得的な連結規則を持っていないという主張が最近の研究ではなされている(Bowerman & Croft, 2008)。最近の実験として紹介できるのは、Brooks&Tomasello(1999b)である。彼らは、2歳半、4歳半、6-7歳の子供に自動詞か他動詞(使役動詞)かどちらかの構文で臨時語(新しい動詞)を教え、教わらなかった方の構文に子供が(使役交替のように)一般化するように仕向けた。すると、4歳半以上の子供は、"spin"「特別な方法(やり方)で生じる移動動詞」の意味に近い動詞を、"ascend"「語彙的に特定の方向で生じる移動

動詞」の意味に近い動詞より多く、別の構文で使用した。これは、4歳半以上になってから **Pinker** が提案した動詞の意味クラスの中、2種類の意味クラスに敏感になることを証明している。つまり、**Pinker** が提案した狭域規則（動詞の意味分類）は子供の一般化傾向に制約を与えるのに効果があるが、それは4歳半を超えた後である。これは、**ピンカー(1989)**の主張、つまり子供が生まれたときから独自の動詞の全ての狭域規則を既に知っているという主張に違反している。**Brooks&Tomasello (1999b)** は、動詞の意味制約がゆっくりとかつ不均等に進歩していくと示唆している。

本論で主張していきたいのは、ペルシャ語児は、動詞にかかる制約について生得的な知識を持っているのではなく、初期段階では、周りで実行中である動作の **dynamicity**、**punctuality**、**telicity** に非言語的に敏感になり、この3つの意味素性に基づいて、周りの人間の行為や周りの物体の動作をカテゴリー化していき、次の段階においては、周りの人間が発話する動詞を耳にし、各動詞をゆっくりとかつ不均等に獲得していくということである。幼児は、生まれつき連結規則も持っていないし、狭域規則も広域規則も持っていない。周りの人間から動詞を聞くことによって、パターン発見スキルに基づいて、ゆっくりかつ不均等にスキーマを形成する。本論で主張していきたいのは、次のようなシナリオである。幼児は、生まれつきの広域規則を持っておらず、その一方で言語を発する前の段階から周りの物体の動きや養育者の行為に注目をするようになり、認知能力の発展のゆえ、動作を最初に非言語的に **dynamicity**、**punctuality**、**telicity** という3つの基準に基づいて現実世界の事象をカテゴリー化し、2歳近くになると、今度は周りの大人から高頻度で耳にした動詞を発話するようになる。

幼児は、他者（物）の行動に注目をするようになる生後4ヶ月（**Spelke et al., 1994** や **Baillargeon, 1995** を参照）の前段階でも、自分自身の行動を注意深く観察しているから、非言語的事象についても自分自身の行動の **dynamicity**、**punctuality**、**telicity** という3つの意味素性に注目をする。大人の発話者のスキーマと違って、これらのカテゴリーから出発する幼児のスキーマの幅は広すぎるため、つまり如何なる制約もスキーマにかかっていないため、誤用が生じる。幼児の誤用を除去する制約は、先取り (**preemption**)、動詞の意味上の下位分類形成（意味カテゴリーの形成）と反復を通して慣習的に使われる構文の定着 (**entrenchment**) である。以下においては、それぞれの制約メカニズムについて論じる。

5.3.1. Preemption (先取り)

幼児は、もしある動詞が自分の考えられ得る一般化と同じ伝達機能を果たす構文で使われているのを聞いたとしたら、その一般化が慣習的ではない、つまり周りの人間から聞いた動詞の用法が考えられる一般化に優先することを、推測するであろう。例えば、もし子供が使役動詞 *kill* の代わりに、*die* を使用してしまった時に、周りの大人から *kill* という語彙的使役動詞（同じ伝達意図を持つ動詞）を聞いたとしたら、自分の一般化が間違っていたことに気づく。つまり、大人の言い直しは子供に大人の言い方の見本を示すとともに子供が今言ったばかりの不適切な構造を排除する。これは「対比」による正用の教示であり、その結果「先取り」によって特定の使役交替が排除されるということである。

ペルシャ語児の場合は、例えば助動詞使役動詞のスキーマが完成した時に、*bæstæn'close'* という語彙的使役動詞が必要とされる「場」においては、*bæstæn'close'* の過去分詞形 *bæste'closed'* に

*kærdæn'do'*を結合し、大人の言語には存在しない新奇な助動詞使役動詞**bæste kærdæn*を発話してしまう。しかしながら、今度は、このような間違いをしてしまった幼児は、周りの養育者が全く同じ場面を描写する時に**bæste kærdæn*ではなく *bæstæn'close'*を発話するのを耳にすれば、自分の一般化の幅が広すぎていたことに気づき、**bæste kærdæn* という形式は、消えていく。幼児が**bæste kærdæn*を発話してしまったのは、決してピンカーが言う「一度きりの新奇な使い方」と「動詞の意味の誤り」によって説明できなく、幼児のパターン発見スキルによって形成したスキーマ（一般化）の過剰般用のせいで出来上がった過ちである。

幼児は、どれぐらい「周りの養育者は自分と同じ伝達意図を表現するためにはある動詞ではなく別の動詞を発話している (Tomasello, 2003; 135)」のを耳にすれば、過ちがなくなるのかは、定かではない。つまり、幼児の過剰般用が無くなる一つの大きな理由は、周りの養育者からのインプット量であるが、ある動詞に関しては、幼児は一回だけ、周りの養育者から適切な動詞を耳にすることによって自分の過ちに気づき、過剰般用が無くなる一方、数百回も正しい言い方を耳にしても自分の過ちを犯し続ける場合もある。従って、ある動詞のトークン量の他にその動詞の「際立ち度合い」や「幼児の日常生活での必要性の度合い」等によって過剰般用の消える時間は、違ってくると思定される。

ここで注目したいのは、先取りというメカニズムは、生得的なものではないということである。もし、幼児が初期段階から自分で形成したスキーマに基づいて発話する動詞の「対比相手」を知っていれば、元々過ちを犯さない。しかしながら、幼児は、過ちを実際起こしてしまうので、「対比」と「先取り」というメカニズムは、徐々にかつ部分的にしか制約の役割を果たすようにならないのである。

5.3.2. 動詞の意味上の下位分類形成（意味カテゴリーの形成）

Pinker(1984)の項構造交替の獲得に関する最初の仮説では、子供は特定の交替に参加できる動詞の意味カテゴリーを徐々に獲得していくとされている。動詞の意味カテゴリーを学習するまでにはある程度の時間、努力、経験が必要なので、子供がある程度の誤りを犯してしまうのは仕方がないとされていた。しかしながら、Pinker(1989)は、上述した仮説を妥当ではないという理由で捨て、その代わりに、ある動詞が交替できるかどうかを決めるのは、その動詞の生得的な広域規則であると主張した。

上述した Brooks & Tomasello (1999b)は、実験に使った動詞のあるものはPinker(1989)の動詞の分類を支配している意味尺度に一致したが、あるものは一致しなかったと報告している。この研究で分かった重要な点の一つは、動詞の意味下位分類の形成は子供の一般化傾向に制約を与えるのに効果があるが、それは4歳6ヶ月を超えた後である、ということである。

本論で主張していきたいのは、幼児は、使役動詞の概念をDPT属性に基づいて獲得するが、一つの語彙アスペクトに属する各使役動詞の下位分類を徐々にかつ部分的にしか獲得していかないということである。例をあげると、「風船を割る」という場面をペルシャ語児は、大人の発話者と同じく *terekāndæn'cause to burst'*という形態的使役動詞ではなく、日本語の母語話者と同じく *šekæstæn'break'*と発話してしまうが、周りの養育者が同一の発話意図を *šekæstæn'break'*ではなく *terekāndæn'cause to burst'*によって表現することを耳にすると、この2つの動詞の意味的差異点に徐々に気づき、「被使役物の元の状態への可逆性」や「瞬時性の度合い」等といった補足的な意味

素性に敏感になり、やがてこのような過剰般用は、消えていく。

しかしながら、このような補足的な意味素性は、生得的ではなく、時間の経過とともにまた幼児の発達に伴い、幼児のスキーマに加えられる。

5.3.3. Entrenchment (定着)

子供はある動詞がある構文で使われているのを頻繁に聞けば聞くほど(その使い方が定着すればするほど)、一緒に使われているのを聞いたことがない構文にその動詞を当てはめて拡張することはますますなくなるであろう。もちろん、多くの場合では、定着と先取りは共に働く。例えば、子供は常に"disappear"を"make disappear"のような迂言的構文で聞けば、その動詞の迂言的使い方が定着すると同時に「大人の言語では、語彙的使役動詞の"disappear"の代わりに、迂言的使役を使われるのだ」ということを子供は把握し、先取りによって自分の一般化が間違っていたことが分かる。

Brooks *et al.*(1999) は、3;5 から 8 歳の子供に自他の区別がはっきりした英語の動詞の使用例を聞かせてみた。すると、過剰一般化を引き出そうとする大人の問題に対してどの年齢層の子供も定着度の低い動詞より定着度の高い動詞を一般化する傾向は低いということが分かった。

幼児の初期段階の保守的な使役動詞の使用を考察することによって、「定着」というメカニズムは、「動詞の意味カテゴリー」や「先取り」と違って、初期段階から有効であることが分かる。ペルシャ語児の語彙的使役動詞の中では、*dær āvardæn' take off one's clothes'*という動詞の誤用は、非常に早い時期から他の動詞と比べ、少ないことが分かる。考えられる一つの理由は、この動詞の「日常生活」での使用頻度の高さである。養育者は、この動詞を毎日口にするし、また幼児自身もこの動詞を発話する必要性が非常に高いので、この動詞の正しい使い方が定着し、誤用はされなくなる。つまり、初期段階で機能する唯一のメカニズムは、「定着」である。なぜなら、初期段階の幼児は「先取り」を働かすほどの交替可能な「対比相手」をそれほど持っておらず、更に動詞の意味分類を学習する時間もまだないからである。

進化論的なルーツの観点からは、定着は、学習理論者によって研究された動物のいくつかの学習の基本プロセスで習慣形成(habit-formation)とも言われるものととてもよく似ており、また認知科学者たちによって研究された日常化(routinization)や自動化(automatization)と呼ばれるプロセスとも類似している。

以上から、ペルシャ語児の使役動詞の誤用に制約を与えるのは、「先取り」、「動詞の下位分類」、「定着」であると考えられる。しかしながら、この 3 つのメカニズムの利用可能な時期にはずれがある。初期段階では、「定着」のみがペルシャ語児の使役動詞の誤用に制約を与えるが、時間の経過と共に、後者の 2 つのメカニズムも利用可能になり、徐々にかつ部分的にペルシャ語児の使役動詞の誤用は、除去されていく。

5.4. まとめ

ペルシャ語児は、使役動詞の概念を最初は、非言語的に DPT 属性に基づいて獲得し、徐々に周りの養育者から使役動詞を耳にすることによって、使役動詞を獲得していく。2 歳以下のペルシャ語児は、使役行為を描写する時は、自ら表現したい動詞が表す行為を描写的ジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kærd* や *injuri kærd* などと発話する。同時に、ペルシャ語には存在しない

新奇な擬態語を形成し、それに *kærdæn'do* を結合することによって、自分の発話意図を聞き手に伝える。

日本語児とペルシャ語児の初期段階の使役行為の表現の仕方を比較すると、日本語児は、ペルシャ語児より「擬態語＋スル」を利用する一方、ペルシャ語児は、「描写的ジェスチャー＋*injuri* (*inotori*)*kærdæn'like this do = do like this*'」を利用することが分かる。ペルシャ語の大人の母語話者は、「擬態語＋*kærdæn'do*」を多用しないから、ペルシャ語児のデータにもこのような発話が存在しないとの予測と裏腹に、実際ペルシャ語児の自然発話データの中には、このような発話が存在した。日本語児は、自分の感覚に一番近く、記憶の負担の少ない擬態語を初期段階において多用する。幼児の認知能力は、7 歳まで発達していき、それに伴い擬態語の数も減少していく。ペルシャ語児には、新奇な擬態語を発話し、それに *kærdæn'do* を結合することによって、使役行為を描写する幼児もいるが、日本語児ほどではない。一方、日本語児は、数多くの擬態を初期段階から周りの養育者から聞いているので、動作を描写する時に、不自由なく、「擬態語＋スル」によって、様々な使役行為を描写できる。つまり、擬態語が存在するからこそ、日本語児は、動作を描写する時には、描写的ジェスチャーの助けなしで動作を描写できると言える。

ペルシャ語児の習得初期に見られる「描写的ジェスチャー＋*injuri* (*intori*) *kærdæn'like this do = do like this*'」は、語彙的使役動詞の場合は、2;6 を境に無くなり、形態的使役動詞や助動詞使役動詞の場合は、2;8 を境に無くなる。従って、幼児の動詞の辞書に入っている動詞の数が増加することによって、描写的ジェスチャーの必要性も無くなると言える。つまり、3 歳を超えると、それまでの段階で知っている使役動詞を過剰一般化し、誤用を起こすようになる。さらに、抽象度が大人ほど高くない使役動詞のスキーマを過剰一般化し、大人の言語にも存在しない新奇な使役動詞を発話してしまう。

最後に、幼児の過剰般用の過ちを制限する 3 つのメカニズム「先取り」、「動詞の下位分類」、「定着」を紹介し、この 3 つのメカニズムの中、「定着」だけは初期段階から幼児の過ちに制約を与えていることについて述べた。残りの 2 つのメカニズムは、徐々にかつ部分的にしか制約の役割を果たすようにならないのである。

第6章：結論

本研究は冒頭で述べたように、ペルシャ語児はどのように「使役」概念を獲得し、どのようにそれをカテゴリー化していくのかを明らかにすることを目的とした。更に、ペルシャ語児にとっては、どの使役動詞のグループが一番獲得しにくく、獲得にはより時間がかかるのかを明白にするのも本論文の目的であった。

具体的には、本論においては、CHILDES のペルシャ語児 5 人及び実験対象 98 人のペルシャ語児(2;0.12~6;11.19)の 29 個の使役動詞の発話を考察し、ペルシャ語児は、使役行為を言葉によって描写するに当たっては、以下のような発達段階を経過することが分かった。

(80) I. 描写的ジェスチャー+*injuri kaerden* 'do like this'及び新規な擬態語+*kaerden* 'do'

II. (使役構文の道具/形容詞/語彙的使役動詞の過去分詞形)+*kaerden* 'do'

III. 使役動詞の代わりに自動詞そのままの発話

IV. 適切な語彙的使役動詞や助動詞使役動詞の生産的な発話

V. 形態的使役動詞の代わりに語彙的使役動詞や助動詞使役動詞の発話

VI. 場面に適した形態的使役動詞の発話

本研究を通じて分かったもう一つの事実は、次のとおりである。幼児は他者の行為や物体の自己移動や使役移動を注意深く観察し、行為の *dynamicity* (動性)、*punctuality* (瞬時性)、*telicity* (限界性(DPT 属性))という 3 つの素性に初期段階から敏感であり、前言語的段階においては、他者の行為や物体の自己移動や使役移動をカテゴリー化していき、Vendler の 4 種類の語彙アスペクトに相当するカテゴリーを形成する。しかしながら、1 つの語彙アスペクトに属する動詞の間では、区別を想定しないため、誤用が犯されてしまう。本稿においては、幼児は、新動詞の意味を DPT 属性により理解できると主張した。更に、このモデルのことを、「DPT 属性による新動詞の獲得」と呼ぶことにした。

ペルシャ語児は、使役動詞の概念をDPT属性に基づいて、獲得していくが、「到達 = 状態変化」動詞という語彙アスペクトに属する3つの使役動詞のグループの獲得時期にずれがある。ペルシャ語児は、初期段階においては、「到達=状態変化」動詞を描写する時は、自ら表現したい動詞が表す行為を描写的ジェスチャーでやって見せ、同時に*intori kaerd*や*injuri kaerd*などと発話する。描写的ジェスチャーとは、身体の動きと指示対象との間の類似性に基づいて表現をするジェスチャーであり、指示対象が動作または空間的な出来事や状態の場合に用いられる表現手法である。描写的ジェスチャーとをすることによって、身体の動きと指示対象、この場合は動作との間の類似性が非常に密着な関係にあるから、ペルシャ語児も描写的ジェスチャーを利用することによって、自分の意図を簡単に聞き手に伝えることが出来る。*kaerden*'do'という軽動詞も非常に早い時期から獲得されるため、「描写的ジェスチャー+ *injuri kaerden*」という戦略は、ペルシャ語児にとって、自分の発話意図を聞き手に伝える非常に単純な方法だと考えられる。従って、2歳8ヶ月以下のペルシャ語児は、様々な使役動詞を描写する時は、非常に幅広くこのような発話をしてしまう。一方、日本語児において「描写的ジェスチャー」の役割を担うモノは、「擬態語」であるため、まだ様々な動詞を不自由なく使えるようになっていない幼児は、非常に幅広く、「擬態語+する」を使ってしまう。勿論、日本語児も、自ら表現したい動詞が表す行為を描写的ジェスチャー

でやって見せ、同時に「こうする」や「こうして」などと発話するが、その割合は、ペルシャ語児と比べ物にならない。同様に、ペルシャ語には、擬態語の数がそもそも指の数に収まるような数であるが、3歳以下の幼児は、自分の発話意図を聞き手に伝えるためには、大人の言語にも存在しない「新奇な擬態語」を形成し、それに*kaerdæn*を結合することによって、話し相手に自分の意図を伝えようとするが、その割合は、日本語児と比べ物にならない。従って、新規動詞を獲得するに当たって、ペルシャ語児は、非常に幅広く「描写的ジェスチャー」を利用する一方、日本語児は、「擬態語」を利用することが言える。

ジェスチャーや擬態語は語彙獲得が増大する前段階でも見られることから、幼児が観察する事象の DPT 属性を把握する補助あるいは一種の *bootstrapping* になっているのではないかと考えられる。今井と針生(2007)の音象徴ブートストラッピング仮説は、ペルシャ語児の場合でも当てはまると言える。ペルシャ語児と日本語児のジェスチャーや擬態語の DPT 属性の把握における補助の役割は、両方の言語でも見られているが、その割合は異なる。日本語児の場合は、事象の DPT 属性を把握する大きな役割を担うのは、擬態語である一方、ペルシャ語児の場合は、その役割を担うものは、描写的ジェスチャーであると考えられる。

「描写的ジェスチャー+こう*linjuri* ‘like this’+する*kaerdæn*」という使役行為の描写方法は、日本語児でもペルシャ語児でも見られる。幼児は、その母語を問わず記号的な言葉を獲得する前に、身振りを自分の意図を聞き手に伝えるために利用する。幼児は、言葉を獲得し始めると、今まで自分の意図を相手に伝えるために使用してきた主な手段つまり身振りを完全に見捨てるわけではないが、その重要性は減少してくる。軽動詞の獲得年齢も指示代名詞の獲得年齢も日本語児の場合でもペルシャ語児の場合でも大体同じ時期に行われ、「描写的ジェスチャー+指示代名詞」+「軽動詞」という組み合わせがあるならば、理論上、「描写的ジェスチャー+軽動詞」のみの発話も十分考えられる。しかしながら、実際ペルシャ語児あるいは日本語児の発話データを考察することによってこのような発話例が見当たらない。このような発話が見当たらない理由について今後考えていきたい。描写的ジェスチャーと指示代名詞の相互作用について今後詳しく研究する必要があると考えられる。

更に、今後の課題として残っているのは、擬態語にも *dynamicity*、*punctuality*、*telicity* という 3 つの意味素性があるかどうかという問題である。本論文で詳しく考察できなかったペルシャ語児の擬態語の種類及びその意味素性についても考察する必要があると思われる。

これらの問題は今後検討していくべき、興味深い問題であろう。

参考文献

- Akhtar, N., Tomasello, M. 1997. Young children's productivity with word order and verb morphology. *Developmental Psychology* 33, 952-965.
- Akhtar, Nameera .2004. Contexts of early word learning. In D. Geoff rey Hall and Sandra R. Waxman(ed.) *Weaving a lexicon*, 485-507. Cambridge, MA: MIT Press.
- Aksu-Koç, D.Slobin, The Acquisition of Turkish. In D. Slobin (ed.), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition 1*, Hillsdale, NJ: Erlbaum. 848.
- Allen, Shanley. E.M. 1995. Acquisition of causatives in Inuktitut. *Proceedings of the Twenty-seventh Annual Child Language Research Forum* (ed.) , E. V. Clark, 51-60. Stanford: CSLI.
- Allen, S. E. M. 1996. Acquisition of causatives in Inuktitut. In E. Clark (ed.) . *Proceedings of the 27th Annual Child Language Research Forum*, 51-60.
- Allen, Shanley. E.M. 1998. Categories within the verb category: Learning the causative in Inuktitut. *Linguistics* 36: 633-677.
- Ameel, E., Malt, B.C., and Storms, G. 2008. Object naming and later lexical development: From baby bottle to beer bottle. *Journal of Memory and Language* 58, 262-285.
- Arata. M., Imai, M., Namatame, M., Okuda, J., Okada, H., & Matsuda,T. 2009. 「シンボル接地のない擬態語の意味処理－fMRIによる検討－」
- Baillargeon, R. 1995. Physical reasoning in infancy. In M. Gazzaniga (ed.) *The cognitive neurosciences*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Bates, E. MacWhinney, B. 1987. Competition, variation, and language learning. In B. MacWhinney (ed.) *Mechanisms of language acquisition*. Hillsdale, NJ:Erlbaum.
- Bickerton, Derek. 1981. *Roots of Language*. Ann Arbor. MI: Karoma.
- Bickerton, Derek. 1984. The language bioprogram hypothesis. *Behavioral and Brain Sciences* 7. 173-188.
- Bickerton, Derek. 1989. The child, the bioprogram and the input data: A commentary on Cziko. *First Language* 9. 33-37.
- Bickerton, Derek. 1999. Creole language., the Language Bioprogram Hypothesis, and language acquisition. In William C. Ritchie and Tej K. Bhattia(ed.) *Hanbook of Child Language Acquisition*. San Diego. CA: Academic Press.
- Bowerman, Melissa .1974. Learning the structure of causative verbs: A study in the relationship of cognitive, semantic, and syntactic development. *Papers and Report on Child Language Development* 8, 142-178.
- Bowerman, M. 2005. Why can't you "open" a nut or "break" a cooked noodle?: Laerning covert object categories in action word meanings. In L. Gershkoff-Stowe & D. H. Rakison (ed.) *Building Object Categories in Developmental Time*. 209-243. Lawrence Erlbaum.
- Bowerman, M. & Croft, W.2008. The Acquisition of the English Causative Alternation, Workshop on Cross-linguistic Perspectives on Argument Structure: Implications for Learnability. Nijmegen.
- Braine, M., and Brooks, P. 1995. Verb- argument structure and the problem of avoiding an overgeneral grammar. In M. Tomasello &W. E. Merriman (Eds.), *Beyond names for things: Children's*

- acquisition of verbs* .353–376 . Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Brooks, P., and Tomasello, M. 1999a. Young children learn to produce passives with noun verbs. *Developmental Psychology* 35, 29-44.
- Brooks, P. and Tomasello, M. 1999b. How young children constrain their argument structure constructions. *Language* 75. 720-738.
- Brooks, P., Tomasello, M., Lewis, L., and Dodson, K. 1999. Children's overgeneralization of fixed transitivity verbs: The entrenchment hypothesis. *Child Development* 70, 1325-37.
- Bunger, A. & J. Lidz. 2004. Syntactic Bootstrapping and the Internal Structure of Causative Events. *Proceedings of the Annual Boston University Conference on Language Development*. Cascadia Press. Cambridge.
- Bunger, A. & J. Lidz. 2006. Constrained Flexibility in the Acquisition of causative Verbs. *Proceedings of the 32 nd Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Berkeley. CA: BLS.
- Casasola, M. & Cohen, L. B. 2000. Infants' association of language labels with causal actions. *Developmental Psychology* 36. 155-168.
- Clark, E.V. 1973a. What's in a word?: On the child's acquisition of semantics in his first language. In T. E. Moore (Ed.), *Cognitive development and the acquisition of language* . 65-110. New York: Academic Press.
- Clark, E. 1978. Discovering what word can do. In D. Farkas, W. M. Jacobsen., & K. W. Todrys(ed.) *Parsession on the lexicon*. 34-57. Chicago: Chicago Linguistic society.
- Clark, E.V. & H.H. Clark. 1979. When nouns surface as verbs. *Language* 55. 767-811.
- Clark, E. 1987. The principle of contrast: A constraint on language acquisition. In B. MacWhinney, (ed.), *Mechanism of language acquisition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Clark, E. 1988. *The Want Makers: Lifting the Lid off the World Advertising Industry*. London: Hodder & Stoughton.
- Comrie, B. 1976. *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dale, Philip & Catherine Crain- Toreson. 1993. Pronoun reversals: Who, when, and why? *Journal of child language* 20. 573-589.
- Diesendruck, Gil (2007) Mechanisms of word learning. In Erika Hoff and Marilyn Shatz (ed.) *Blackwell Handbook of Language Development*, 257–276. Malden, MA: Blackwell.
- Dromi, E. 1987. *Early lexical development*. London: Cambridge University Press.
- Eimas, P.D., & Quinn, P.C. 1994. Studies on the formation of perceptually based basic-level categories in young infants. *Child development* 65. 903-917.
- Gentner, Dedre. 1982. Why nouns are learned before verbs: Linguistic relativity versus natural partitioning. In Stan A. Kuczaj (ed.) *Language development, vol. 2: Language, thought, and culture*. 301–334. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Gentner, Dedre and Lera Boroditsky .2001. Individuation, relativity and early word learning. In Melissa Bowerman and Stephen Levinson (ed.) *Language acquisition and conceptual development*. 215–256. Cambridge: Cambridge University Press.

- Ghiaee, Leyla. 2009. 「ペルシャ語の助動詞使役構文における *kardan* ‘to make’ 及び軽動詞としての *kardan* ‘to do’ の相違点」 *言語情報科学* 7. 15-31.
- Ghiaee, L., 鈴木陽子. 2009. 「ペルシャ語児の「形容詞+*kardæn*」使役と日本語児の『～する』使役の習得の比較－使用依拠アプローチの観点から－」 *日本言語学会第 139 回大会予稿集*. 156-161.
- Ghiaee, Leyla. 2011. 「ペルシャ語児の使役動詞の獲得における『描写的ジェスチャー/擬態語』と『動性、瞬時性、有限性』に基づく『使役』概念のカテゴリー化」 *日本言語学会第 142 回大会予稿集*. 278-283.
- Givón, T. 1973. The time-axis phenomenon. *Language* 49, 4: 890-925.
- Givón, T. 1975. Serial verbs and syntactic change: Niger-Congo. In C.N. Li (ed.), *Word order and word order change*. Austin, TX. 47-112.
- Givón, T. 1980. The Binding Hierarchy and the Typology of Complements. *Studies in Language* 4:3, 333-377.
- Goldberg, A. 1995. *Constructions : A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E., Casenhiser, D., & Sethuraman, N. 2004. Learning argument structure generalizations. *Cognitive Linguistics*, 14(3). 289-316.
- Goldin-Meadow, S. 1997. When gesture and words speak differently. *Current Directions in Psychological Science* 6. 138-143.
- Goodluck, Helen. 1991. *Language acquisition: a linguistic introduction*. Oxford: Blackwell.
- 萩原裕子. 2002. 「脳におけるレキシコンと統語の接点」. 伊藤たかね(編)『文法理論：レキシコンと統語』東京大学出版会. 193-223.
- 針生悦子. 2006. 「子どもの効率よい語彙獲得を可能にしているもの—即時マッピングを可能にしているメタ知識とその構築にかかわる要因について—」『心理学評論』49(1). 78-90.
- Hollich, George J., Kathy Hirsh-Pasek and Roberta Michnick Golinkoff .2000. Breaking the language barrier: An emergentist coalition model for the origins of word learning. *Monographs of the Society for Research in Child Development* 65:3. 262. 1-29.
- Imai, M., Haryu, E., and Okada, H. 2005. Mapping novel nouns and verbs onto dynamic action events: Are verb meanings easier to learn than noun meanings for Japanese children? *Child Development* 76, 340-355.
- 今井と針生. 2007. 『レキシコンの構築』岩波書店.
- Imai, M., Li, L., Haryu, E., Okada, H., Hirsh-Pasek, K., Golinkoff, R. and Shigematsu, J. 2008. Novel noun and verb learning in Chinese-, English-, and Japanese-speaking children. *Child Development* 79, 979-1000.
- Imai, M., Kita, S., Nagumo, M. and Okada, H. 2008 Sound symbolism facilitates early verb learning. *Cognition* 109, 54-65.
- 伊藤克敏. 1990. 『こどものことば：習得と創造』勁草書房.
- Jespersen, O. 1965. *A Modern English Grammar on Historical Principle*. London: George & Unwin.

- Cattell, R. 1984). *Syntax and Semantics: Composite Predicates in English*. London: Academic Press.
- Kageyama, T. 1997. Denominal verbs and relative salience in Lexical Conceptual Structure. In T. Kageyama (ed.) *Verb Semantics and Syntactic Structure*. 45-96. Kurosio Publishers.
- 影山太郎. 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- Karimi-Doostan, Gh. 1997. *Light Verb Constructions in Persian*. Unpublished Ph.D. Dissertation. University of Essex.
- Karimi-Doostan, Gh. 2001. N + V complex predicates in Persian. In Dehe, Nicole, Wanner (ed.) *Structural aspects of semantically complex verbs*. Peterlang, Frankfurt. 277-292.
- Karimi, Simin .1997. Persian complex verbs: Idiomatic or compositional? *Lexicology* 3(1). 273-318.
- Karttunen, L. 1971. Implicative verbs. *Language* 47: 340-358.
- Katz, J.J. Fodor, J.A. 1963. The structure of a Semantic Theory, *Language* 39, 170-210.
- 桐谷滋. 1999. 『ことばの獲得』ミネルヴァ書房.
- Kita, S. 1997. Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics. *Linguistics* 35. 379-415.
- Leslie, A.M. 1988. The necessity of illusion: Perception and thought in infancy. In L. Weiskrantz (ed.). *Thought without language*. 185–210. Oxford: Clarendon Press/Oxford University Press.
- Levin, B., Rappaport Hovav, M. 1995. *Unaccusativity*. MIT Press. Cambridge. MA.
- Li, P. & Shirai, Y. 2000. *The acquisition of lexical and grammatical aspect*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lin, H.L., TSAY, J. 2005. Acquiring causatives in Taiwan Southern Min. *Child languages* 35, 2008. 467-487.
- Lotfi, A.R. 2008. Causative constructions in modern Persian. *California Linguistic Notes* Vol. XXXIII, No.2.
- Maguire, M.J., Hirsh-Pasek, K., & Golinkoff, R.M .2006. A unified theory of verb learning: Putting verbs in context. In K. Hirsh-Pasek and R. M. Golinkoff (ed.), *Action meets word: How children learn verbs* .364-391. New York: Oxford University Press.
- Martin, A., Haxby, J. V., Lalonde, F. M., Wiggs, C. L., & Ungerleider, L. G. 1995. Discrete cortical regions associated with knowledge of color and knowledge of action. *Science* 270, 102 -105.
- Matsumoto, Y. 2000. On the Crosslinguistic Parameterization of Causative Predicates: Implications from Japanese and Other Languages. In M. Butt and T. H. King, (ed.), *Argument Realization*. CSLI Publications, Stanford, 135-169.
- 松本曜. 2003. 『認知意味論』シリーズ認知言語学入門第3巻、大修館書店.
- McNeill, D. 1992. *Hand and mind*. Chicago: Chicago University Press.
- Megerdooonian, K. 2000. *Beyond words and Phrases: A unified Theory of Predicate Composition*. Unpublished Ph.D. Dissertation. University of Southern California.
- Megerdooonian, Karine. 2001. Event structure and complex predicates in Persian. *Canadian Journal of Linguistics/Revue canadienne de linguistique* 46(1/2). 97-125.
- Mervis, C. B. 1987. Child-basic object categories and early lexical development. In U. Neisser (ed.), *Concepts and conceptual development* .201-233. New York: Cambridge.
- Mohammad, J., Karim, S. 1992. Light verbs are taking over: Complex verbs in Persian. *Proceedings of WECOL*, 195-212.

- Murasugi, K., Hashimoto, T., Kato, S., 2003. On the Acquisition of causatives in Japanese. *Nanzan Linguistics* 2.
- Murasugi, K., Hashimoto, T., & Fuji, C. 2007. VP-shell analysis for the acquisition of Japanese intransitive verbs, transitive verbs, and causatives. *Linguistics*, 45, 615-651.
- 中右実・西村義樹. 1998. 『構文と事象構造』研究社出版. 119-132.
- Nazzi, T., Gopnik, A. 2001. Linguistic and cognitive abilities in infancy: when does language become a tool for categorization? *Cognition* 80 .B11-B20.
- Nelson, K. 1974. Concept, word, and sentence: Interrelations in acquisition and development. *Psychological Review* 81, 267-285.
- Neville H.J., Bavelier, D., Corina, D., Rauschecker, J., Karni, A., Lalwani, A., Braun, A., Clark, V., Jezzard, P., Turner, R. 1998. Cerebral organization for language in deaf and hearing subjects: Biological constraints and effects of experience, *Proc Natl Acad Sci. U.S.A.*, 95, 922-929.
- Nomura, Masami, & Yasuhiro Shirai. 1997. Overextension of intransitive verbs in the acquisition of Japanese. *Proceedings of the Twenty-eighth Annual Child Language Research Forum*, (ed.), E. V. Clark, 233-42. Stanford: CSLI.
- 小椋たみ子. 2007. 「日本の子どもの初期の語彙発達」 *言語研究* 132: 29-53.
- 大堀壽夫. 2002. 『認知言語学』東京大学出版会
- Payne, J. R. 1987. Iranian Languages. In Comrie, B. 1987. *The World's Major Languages*. London: Croon Helm. 514-522.
- Piaget, J. 1935/1952. *The origins of intelligence in the child*. New York: Norton. 波多野完治・竜沢武久 [訳] 1960. 『知能の認知学』みみず書房.
- Pinker, S. 1984. *Language learnability and language development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Pinker, S. 1989. *Learnability and cognition: The acquisition of verb-argument structure*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Pouline-Dubois, Dianne and Susan, A. Graham .2007. Cognitive process in early word learning. In Erika Hoff and Marilyn Shatz (ed.) *Blackwell Handbook of Language Development*, 191–211. Malden, MA: Blackwell.
- Ruhbakhsh-Tayarani, Z. 1991. *Barresi-ye marahel-e roshd-e dasturi-ye goftar-e kudakan-e pish-dabestani*, Unpublished M.A. Thesis . Ferdowsi University.
- 佐治伸郎. 2010. 「母語及び第二言語の習得における語意の再編成過程に関する研究」慶應義塾大学政策・メディア研究科、博士論文.
- Shibatani, M. 1976. The Grammar of Causative Constructions: A *Colnspectus*. *Syntax and semantics* 6: 1-40.
- Shibatani, M. 2002. The grammar of causation and interpersonal manipulation. John Benjamins Publishing Company.
- Shirai, Y., Miyata, S., Naka, N. and Sakazaki, Y. 2001. The Acquisition of Causative Morphology in Japanese: A Prototype Account. In: M. Nakayama, *Issues in East Asian Language Acquisition*, Kurosio Publishers. 183-203.

- 白井恭弘.2002.「動詞の意味特性と動詞形態素の習得」大堀壽夫編『シリーズ言語科学3 認知言語学Ⅱ カテゴリー化』東京大学出版会. 163-184.
- Slobin, D.I. 1985.Crosslinguistic evidence for the Language-Making Capacity. In D.I. Slobin (ed.), *The cross linguistic study of language acquisition.Vol.2:Theoretical issues*. 1157-1256. Hillsdale. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Smith, C. S. 1997. *The parameter of Aspect*. Second Edition. Dordrecht: Kluwer.
- Smith, C. S. 1991. *The parameter of Aspect*. Dordrecht: Kluwer.
- Song, J.J. 1996. *Causatives and causation: A universal-typological perspective*. London and New York: Addison Wesley Longman.
- Spelke, E. S. 1979. Perceiving bimodally specified events in infants.*Developmental Psychology* 15, 626-636.
- Spelke, E. S., Katz, G., Purcell, S. E., Ehrlich, S. M., and Breinlinger, K. 1994. Early knowledge of object motion: Continuity and inertia. *Cognition* 51, 131-176.
- 杉岡洋子. 1999. 「状態変化動詞の派生をめぐる予備的考察」慶應義塾大学.
- 鈴木猛. 2002. 「日本語の使役構文の習得に関するケーススタディ：使役命令仮説」*英学論考* 33、21-50.
- 鈴木陽子. 2008. 「大人と子供の談話における『ねんね（する）』構文と『ないない（する）』構文の形式と意味—verbal noun（する）構文の習得研究に向けて—」東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻. 修士論文. 未出版.
- Talmy, L., 1985. Lexicalization patterns. Semantic structure in lexical form. In T. Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description*, Vol. 3. Cambridge: CUP, 36-149.
- Talmy, L. 1988. Force Dynamics in Language and Cognition. *Cognitive Science* 12, 49-10.
- Talmy, L. 1991. Path to realization. In *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting, Berkeley Linguistics Society*, Berkeley Linguistics Society University of California, Berkeley, California, 480-519.
- Talmy, L., 2000. Lexicalization patterns. In L. Talmy, *Toward a cognitive semantics 2: Typology and process in concept structuring*. Cambridge: The MIT Press, 21-146.
- Taylor, J. R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press.
- Theakston, A. L., Lieven, E. V. M., Pine, J.M. & Rowland, C.F. 2002. Going, going, gone: The Acquisition of the verb 'go'. *Journal of child language* 29. 783-811.
- Tomasello, M, 1992a. *First Verbs: A case study of early grammatical development*. New York: Cambridge University Press.
- Tomasello, M. 1992b. The social bases of language acquisition. *Social Development* 1, 67-87.
- Tomasello, M. 2003. *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge: Harvard University Press.
- Vahedi-Langrudi, M. M. 1996. *The syntax, semantics, and argument structure of complex predicates in Modern Farsi*. Unpublished Ph.D. Dissertation. University of Ottawa.
- Vendler, Z. 1957. Verbs and times. *The Philosophical Review* 66. 143-160.
- Windfuhr, G. L. 1987. Persian. In Comrie, B. 1987. *The World's Major Languages*, New York:

Oxford University Press. 523-546.

吉枝聡子. 1992. 「ペルシャ語の擬態語と擬声語」 *アジア・アフリカ言語文化研究* 44. 95-117.

付録Ⅰ：実験で使ったムービーサンプル



「靴を履かせる」のムービー

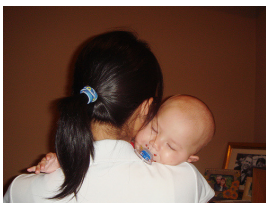

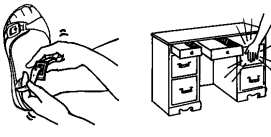







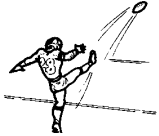



「風船を割る」のムービー

付録Ⅱ：実験方法のサンプル



付録Ⅲ：絵のサンプル⁵⁹

 <p><i>bidār kærðæn</i> 'awake make = awaken'</p>	 <p><i>xāmuš kærðæn</i> 'silent, off make = blow out'</p>	 <p><i>boridæn</i> 'cut, slice'</p>	 <p><i>kick a ball</i></p> <p><i>pært kærðæn</i> 'thrown down make = to throw'</p>
 <p><i>xābāndæn</i> 'put to sleep'</p>	 <p>1: <i>šekæstæn</i> 'break' 2: <i>xurd kærðæn</i> 'small make = shatter'</p>	 <p><i>koštæn</i> 'kill'</p>	 <p><i>tæmiz kærðæn</i> 'clean make = to clean'</p>
 <p><i>bæstæn</i> 'close'</p>	 <p><i>tærsundæn</i> 'scare'</p>	 <p><i>pære kærðæn</i> 'piece make = to tear'</p>	 <p><i>pust kærðæn</i> 'skin peel = peel, pare'</p>
 <p><i>dæ rā vordæn</i> 'clothes take off = take off one's clothes'</p>	 <p><i>dæ vāndæn</i> 'make run'</p>	 <p><i>xorūndæn</i> 'feed'</p>	 <p><i>terekāndæn</i> 'cause to burst, explode'</p>
 <p><i>hol dādæn</i> 'push give = to push'</p>	 <p><i>bolēnd kærðæn</i> 'high make = to lift; raise'</p>	 <p><i>xoš k kærðæn</i> 'dry make = make dry'</p>	 <p><i>suzāndæn</i> 'burn'</p>
 <p><i>šut kærðæn</i> 'shoot do = shoot, to kick a ball'</p>	 <p><i>kubidæn</i> 'to knock, hammer'</p>	 <p><i>kešidæn</i> 'pull'</p>	 <p><i>bāz kærðæn</i> 'open do = open'</p>

⁵⁹ 白黒の画像は、International Picture Naming Project から。

謝辞

本研究を遂行し、まとめるにあたって、実に多くの方にお世話になりました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきたいと思います。本論文をまとめるにあたり、終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻を頂いた東京大学総合文化研究科言語情報科学、大堀壽夫准教授に心より感謝申し上げます。大堀先生には、同学修士課程の研究生の時より、研究方法に関してご指導をいただきました。学部の専攻は、言語学ではなく、文学であった私のような凡庸な学生が、博士課程に進学できましたのも、大堀先生の懇切丁寧な御指導のお蔭に他なりません。学位論文執筆において、貴重なご指導とご助言を頂いた東京大学総合文化研究科言語情報科学、坂原 茂教授、坪井栄治郎准教授に心より感謝申しあげます。博士論文の副査を引きうけて頂きました、東京大学総合文化研究科言語情報科学、近藤安月子教授に深く感謝致します。博士論文の副査を引きうけて頂きました、東京外国大学大学院総合国際学研究院、佐々木あや乃准教授に深く感謝致します。母語習得研究に興味を持つようになったのは、東京大学総合文化研究科言語情報科学の藤井聖子准教授担当の授業のおかげです。藤井聖子先生に心より感謝申し上げます。テヘラン大学日本語・日本文学科に在学中、日本語を教えていただいた矢田侑三先生に心より感謝申し上げます。同先生に大堀研究室を紹介して頂きました。実験の実施にあたり、テヘランの Tika 幼稚園の先生方特に校長先生に感謝申し上げます。修士課程の研究生の時より、研究方法に関してご指導をいただきました東京大学総合文化研究科情報科学博士課程在学中の片山舞氏に心より感謝申し上げます。片山氏には、修士論文や本論文の日本語のチェックも頂きました。研究を進めるにあたり、常にご協力を頂いた東京大学総合文化研究科情報科学博士課程在学中の鈴木陽子氏に心より感謝申し上げます。研究のテーマ及び興味分野は非常に似ており、同氏と日本言語学会第 139 回大会においても、共同研究を発表させて頂きました。学位論文の 1 つの参考文献をイランの Ferdowsi Mashhad 大学から送って下さった Nader Jahangiri 教授に心より感謝申し上げます。また、研究を進めるにあたり、ご支援、ご協力を頂きながら、ここにお名前を記すことが出来なかった多くの方々に心より感謝申しあげます。

最後になりますが、2003 年に永眠した母にこの論文を捧げるとともに、いつも心の支えになってくれたテヘランに住む父 Parviz、兄 Reza、兄 Salar に心から感謝します。そして、どのような状況においても応援してくれた夫 A. Amani Eilanlou に心から感謝します。

Ghiaee Leyla

平成 23 年 10 月 19 日